# 出作遺跡 I

出作圃場整備事業
埋蔵文化財調査報告書

平成5年
(1993)

松前町教育委員会

# 出作遺跡 I

出作圃場整備事業
埋蔵文化財調査報告書

平成５年
（１９９３）

松前町教育委員会

出作遺跡周辺の航空写真

昭和48年撮影　縮尺≒1／7,500

# 序　　文

この報告書は、伊予郡松前町における、圃場設備事業に伴う工事中に偶然発見された埋蔵文化財の発掘調査を松前町教育委員会が実施した報告書であります。

発掘調査を開始以来十余年を経過して本報告書を作成できましたことは、遺跡の複雑な構成及び多量な出土遺物によるもので、調査にあたり、関係機関や地元の方々の多大なご協力を得たことに対して、ここに厚く御礼申し上げますとともに、調査関係各位の御苦労に感謝申し上げる次第であります。

本報告書は、皆様のご期待に十分沿い得ない面もあるかと存じますが、古代文化の解明の一助にご活用いただければ幸いに存じます。併せて、今後の埋蔵文化の保存保護について、一層のご協力をお願いします。

平成 5 年 3 月

松前町教育委員会

教育長　満　田　泰　三

# 例　　言

1．本書は、愛媛県伊予郡松前町大字出作に所在する出作遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、松前町教育委員会が出作遺跡調査団を組織し、約3,000㎡を対象として、昭和52年12月１日から昭和53年１月17日の間に実施した。

3．整理作業は、昭和53～54年度、平成２～３年度の間に断続的に実施した。

4．遺構図の縮尺は全体測量図を１／300、祭祀遺構を１／40で掲載し、SX01～SX03については１／20の付図を添付した。その他の縮尺のものについてはそれぞれ図中に明記している。

5．遺物図の縮尺は原則として、土師器・須恵器を１／４。土製品を１／３。鉄製品を１／２。石製模造品を１／２と２／３。その他の石器を１／４で掲載した。

なお、遺物の実測では、執筆担当者以外に、多田　仁、渡邉　豊、越智友紀子各氏の協力を得た。

6．本書中の遺物番号は便宜上、下記のように付けた。

土師器を1001～、　須恵器を2001～、　土製模造品を3001～（土師器と一部重複）

鉄製品を4001～、　石製品を5001～　6001～　7001～

7．写真撮影は、現地における遺構撮影を相田則美が、遺物撮影を野口光比古が主に行い、原畑善人がこれを助けた。

8．本文は、相田則美，光江　章，森　　毅，宮崎泰好，井出耕二，谷若倫郎が分担・執筆し、文責は目次及び章あるいは節・項の末尾に明記している。

9．付論では、須恵器及び陶質土器については、京都文化博物館の定森秀夫先生、鉄器については徳島大学の東　潮先生、須恵器及び陶質土器の胎土分析については奈良教育大学の三辻利一先生に、それぞれ専門的見地から貴重なご所見を頂いた。記して感謝いたします。

10．本書の編集は、相田則美の指導のもと谷若倫郎が実施した。

# 本 文 目 次


Ⅰ．緒　言

1．調査経緯 …… 相田則美 …… 1

2．調査経過 …… 相田則美 …… 3

3．謝　辞 …… 相田則美 …… 4

Ⅱ　環　境

1．地理環境 …… 相田則美 …… 5

2．歴史環境 …… 相田則美 …… 6

Ⅲ．遺　構

1．遺跡概要 …… 相田則美 …… 11

2．層　序 …… 相田則美 …… 14

3．自然流路 …… 相田則美 …… 15

4．祭祀遺構 …… 相田則美 …… 15

5．焚 火 跡 …… 相田則美 …… 20

6．竪穴住居 …… 相田則美 …… 21

7．木 棺 墓 …… 宮崎泰好 …… 21

Ⅳ　遺　物

1．土 師 器 …… 光江　章 …… 35

2．土 製 品 …… 宮崎泰好 …… 95

3．須 恵 器 …… 森　毅 …… 105

4．鉄 製 品 …… 谷若倫郎 …… 123

5．石 製 品 …… 谷若倫郎・井出耕二 …… 137

Ⅴ．付　論

1．出作遺跡の鉄鋌をめぐって …… 東　潮 …… 185

2．出作遺跡の陶質土器をめぐって …… 定森秀夫 …… 191

3．出作遺跡出土須恵器の胎土分析 …… 三辻利一 …… 199

Ⅵ．結　語

1．問題と課題 …… 相田則美 …… 203

2．おわりに …… 相田則美 …… 204

# 図　目　次


図１　出作遺跡の位置 …… 1
図２　松山平野河川変遷図 …… 5
図３　出作遺跡周辺の主要遺跡分布 …… 7
図４　出作遺跡の範囲と調査地 …… 11
図５　出作遺跡の遺構配置 …… 12・13
図６　出作遺跡の層序模式 …… 14
図７　祭祀遺構１（ＳＸ01） …… 16・17
図８　祭祀遺構２（ＳＸ02） …… 18
図９　祭祀遺構３（ＳＸ03） …… 19
図10　木棺墓（ＳＫ01） …… 21
図11　祭祀遺構の配置見取図 …… 22・23
図12　祭祀遺構４（Ｋ－８） …… 24
図13　祭祀遺構５（Ｌ－７） …… 25
図14　祭祀遺構６（Ｌ－６，Ｌ－５） …… 26
図15　祭祀遺構７（Ｍ－６，Ｍ－５） …… 27
図16　祭祀遺構８（Ｉ－２） …… 28
図17　祭祀遺構９（Ｍ－２） …… 28
図18　祭祀遺構10（Ｋ－２，Ｊ－２） …… 29
図19　祭祀遺構11（Ｌ－３，Ｌ－２） …… 30
図20　祭祀遺構12（Ｑ－８，Ｑ－７） …… 31
図21　祭祀遺構13（Ｑ－５） …… 32
図22　祭祀遺構14（Ｐ－４） …… 32
図23　祭祀遺構15（Ｑ－４，Ｑ－３） …… 33
図24　祭祀遺構16（Ｐ－３，Ｏ－3，Ｏ－２） …… 34
図25　土師器の各部名称 …… 35
図26　甕口縁端部の形態分類 …… 36
図27　高杯杯部・脚部の接合法分類 …… 37
図28　土師器の器種分類 …… 38・39
図29　小型丸底壺法量比較 …… 47
図30　ＳＸ01出土の土師器（１） …… 48
図31　遺構の先後関係 …… 49
図32　ＳＸ01黒色土師器出土位置 …… 51

図33　ＳＸ01出土の土師器（２）…… 57
図34　ＳＸ01出土の土師器（３）…… 58
図35　ＳＸ01出土の土師器（４）…… 59
図36　ＳＸ01出土の土師器（５）…… 60
図37　ＳＸ01出土の土師器（６）…… 61
図38　ＳＸ01出土の土師器（７）…… 62
図39　ＳＸ01出土の土師器（８）…… 63
図40　ＳＸ03出土の土師器（１）…… 64
図41　ＳＸ03出土の土師器（２）…… 65
図42　ＳＸ03出土の土師器（３）…… 66
図43　ＳＸ03出土の土師器（４）…… 67
図44　ＳＸ03出土の土師器（５）…… 68
図45　ＳＸ03出土の土師器（６）…… 69
図46　ＳＢ01出土の土師器 …… 70
図47　Ｎ６区下層出土の土師器 …… 71
図48　グリッド出土の土師器（１） …… 72
図49　グリッド出土の土師器（２） …… 73
図50　道後平野の土師器の編年 …… 75・76
図51　ＳＸ01出土の土製模造土器 …… 97
図52　ＳＸ03出土の土製模造土器と土製紡錘車・土製円盤 …… 99
図53　ＳＸ01出土の土製品分布 …… 101
図54　ＳＸ01出土の須恵器分布 …… 101
図55　須恵器（１） …… 110
図56　須恵器（２） …… 111
図57　須恵器（３） …… 112
図58　須恵器（４） …… 113
図59　須恵器（５） …… 114
図60　ＳＸ01出土の鉄製品分布 …… 123
図61　鉄製品（１） …… 126
図62　鉄製品（２） …… 127
図63　鉄製品（３） …… 130
図64　鉄製品（４） …… 131
図65　出作遺跡における鍛造工程概念 …… 133
図66　ＳＸ01出土の石製模造品分布 …… 137

図67　石製品（１）　…… 138
図68　石製品（２）　…… 140
図69　石製品（３）　…… 146
図70　石製品（４）　…… 147
図71　石製品（５）　…… 148
図72　石製品（６）　…… 149
図73　石製品（７）　…… 150
図74　石製品（８）　…… 151
図75　石製品（９）　…… 152
図76　石製品（10）　…… 153
図77　石製品（11）　…… 154
図78　石製品（12）　…… 155
図79　石製品（13）　…… 157
図80　ＳＸ01出土の臼玉分布　…… 159
図81　石製品（14）　…… 162
図82　石製品（15）　…… 163
図83　石製品（16）　…… 170
図84　石製品（17）　…… 171
図85　出作遺跡出土の鉄鋌と農具　…… 186
図86　出作遺跡出土の鉄鋌・鉄片　…… 188
図87　出作遺跡出土の非陶邑系須恵器・陶質土器（１）　…… 191
図88　出作遺跡出土の非陶邑系須恵器・陶質土器（２）　…… 192
図89　出作遺跡出土の非陶邑系須恵器・陶質土器（３）　…… 193
図90　愛媛県出土の非陶邑系須恵器・陶質土器　…… 195
図91　Ｒｂ－Ｓｒ分布図　…… 201
図92　大阪陶邑群の相互識別（Ｋ・Ｃａ・Ｒｂ・Ｓｒ因子使用）　…… 202
図93　出作遺跡出土須恵器の産地推定（Ｋ・Ｃａ・Ｒｂ・Ｓｒ因子使用）　…… 202

付図１　ＳＸ01の遺物出土状況
付図２　ＳＸ02・ＳＸ03の遺物出土状況

# 表　目　次

表１　出作遺跡発掘調査団組織一覧 …… 2
表２　出作遺跡関係行政当局変遷一覧 …… 2
表３　出作遺跡発掘調査日誌抄 …… 3
表４　出作遺跡出土土師器観察表 …… 77～94
表５　土製品の組成比較表 …… 101
表６　出作遺跡出土の土製品観察表 …… 102～104
表７　出作遺跡出土の須恵器観察表 …… 115～122
表８　鉄製品の器種組成 …… 123
表９　出作遺跡出土の鉄製品一覧 …… 135～136
表10　石製模造品の統計 …… 144
表11　臼玉完形品の直径と厚さ …… 160
表12　出作遺跡出土の石製模造品一覧 …… 174～179
表13　出作遺跡出土の臼玉観察表 …… 180～181
表14　出作遺跡出土の臼玉未製品観察表 …… 182～183
表15　出作遺跡出土の砥石類一覧 …… 184
表16　出作遺跡出土の鉄鋌 …… 185
表17　出作遺跡出土須恵器の分析データ …… 201

# 本文挿入写真

写真１　発掘作業風景 …… 3
写真２　遺跡説明会風景 …… 4

# 図　版　目　次


| | | |
|---|---|---|
| 巻頭原色図版 | | （昭和48年撮影，　　縮尺＝約１／7,500） |
| 図版１ | 遺跡周辺の航空写真 | （昭和23年撮影，　　縮尺＝約１／50,000） |
| 図版２ | 発掘調査前の風景 | （上：西から，　下：東から） |
| 図版３ | 自然流路の検出状況 | （上：東から，　下：北東から） |
| 図版４ | ＳＸ01遠景 | （上：北西から，　下：北東から） |
| 図版５ | ＳＸ01近景 | （上下：南東から） |
| 図版６ | ＳＸ01遺物出土状況１ | （上：中央部西側） |
| 図版７ | ＳＸ01遺物出土状況２ | （上下：南西部） |
| 図版８ | ＳＸ01遺物出土状況３ | （上：ＳＸ01－37区，　下：ＳＸ01－06区） |
| 図版９ | ＳＸ01遺物出土状況４ | （上：ＳＸ01－63区，　下：作業風景） |
| 図版10 | ＳＸ02遺物出土状況１ | （上：北西から，　下：南東から） |
| 図版11 | ＳＸ02遺物出土状況２ | （上下：北西から） |
| 図版12 | ＳＸ02遺物出土状況３ | （上：南西から，　下：東から） |
| 図版13 | ＳＸ03近景１ | （上：東から，　下：西から） |
| 図版14 | ＳＸ03近景２ | （上：北から，　下：東から） |
| 図版15 | ＳＸ03遺物出土状況１ | （上：中央部・東から，　下：中央部・西から） |
| 図版16 | ＳＸ03遺物出土状況２ | （上：南西部・南西から，　下：北西端・西から） |
| 図版17 | ＳＸ03遺物出土状況３ | （上：北部・北東から，　下：西部・西から） |
| 図版18 | その他の祭祀遺構１ | （上：調査区南西部・北東から，下：調査区西北部・北東から） |
| 図版19 | その他の祭祀遺構２ | （上：調査区西部・南から，　下：Ｇ－４・東から） |
| 図版20 | その他の祭祀遺構３ | （上：Ｈ－6，　下：Ｉ－２・南から） |
| 図版21 | その他の祭祀遺構４ | （上：Ｋ－２・南から，　下：Ｋ－８・南西から） |
| 図版22 | その他の祭祀遺構５ | （上：Ｌ－５・南から，　下：Ｌ－６・南西から） |
| 図版23 | その他の祭祀遺構６ | （上：Ｑ－３・北東から，　下：Ｑ－８・南東から） |
| 図版24 | その他の祭祀遺構７ | （上：Ｒ－４・南西から，　下：Ｌ－７ｂ・西から） |
| 図版25 | その他の祭祀遺構８ | （上：Ｍ－６・南東から，　下：Ｎ－６下層・東から） |
| 図版26 | その他の祭祀遺構９ | |
| 図版27 | その他の祭祀遺構10 | （下：焚火跡） |
| 図版28 | 木棺墓１ | （上：遠景・北東から，　下：近景・北から） |
| 図版29 | 木棺墓２ | （上下：取り上げ状況ａ・ｂ） |
| 図版30 | 調査普及 | （上：現地説明風景，　下：調査関係者） |

図版31　土師器１　（ＳＸ01出土－１）
図版32　土師器２　（ＳＸ01出土－２）
図版33　土師器３　（ＳＸ01出土－３）
図版34　土師器４　（ＳＸ01出土－４）
図版35　土師器５　（ＳＸ01出土－５）
図版36　土師器６　（ＳＸ01出土－６）
図版37　土師器７　（ＳＸ01出土－７）
図版38　土師器８　（ＳＸ01出土－８）
図版39　土師器９　（ＳＸ01出土－９）
図版40　土師器10　（ＳＸ01出土－10）
図版41　土師器11　（ＳＸ01出土－11）
図版42　土師器12　（ＳＸ01出土－12）
図版43　土師器13　（ＳＸ01出土－13）
図版44　土師器14　（ＳＸ03出土－１）
図版45　土師器15　（ＳＸ03出土－２）
図版46　土師器16　（ＳＸ03出土－３）
図版47　土師器17　（ＳＸ03出土－４）
図版48　土師器18　（ＳＸ03出土－５）
図版49　土師器19　（ＳＸ03出土－６）
図版50　土師器20　（ＳＸ03出土－７）
図版51　土師器21　（ＳＸ03出土－８）
図版52　土師器22　（ＳＸ03出土－９）
図版53　土師器23　（ＳＸ03出土－10）
図版54　土師器24　（ＳＸ03出土－11）
図版55　土師器25　（ＳＸ03出土－12・ＳＢ01出土）
図版56　土師器26　（その他のグリッド出土－１）
図版57　土師器27　（その他のグリッド出土－２）
図版58　土師器28　（その他のグリッド出土－３）
図版59　土師器29　（その他のグリッド出土－４）
図版60　土師器30　（その他のグリッド出土－５）
図版61　土師器31　（その他のグリッド出土－６）
図版62　須恵器１
図版63　須恵器２
図版64　須恵器３

図版65　須恵器４
図版66　須恵器５
図版67　須恵器６
図版68　須恵器７
図版69　須恵器８
図版70　鉄製品１
図版71　鉄製品２
図版72　鉄製品３
図版73　鉄製品４
図版74　鉄製品５
図版75　鉄製品６
図版76　鉄製品７　（アップ写真１）
図版77　鉄製品８　（アップ写真２）
図版78　鉄製品９　（レントゲン写真１）
図版79　鉄製品10　（レントゲン写真２）
図版80　石製品１　（模造品類１）
図版81　石製品２　（模造品類２）
図版82　石製品３　（模造品類３）
図版83　石製品４　（模造品類４）
図版84　石製品５　（模造品類５）
図版85　石製品６　（模造品類６）
図版86　石製品７　（模造品類７）
図版87　石製品８　（模造品類８）
図版88　石製品９　（模造品類９）
図版89　石製品10　（模造品類10）
図版90　石製品11　（臼玉類１）
図版91　石製品12　（臼玉類２）
図版92　石製品13　（砥石類１）
図版93　石製品14　（砥石類２）

# Ⅰ．緒　　言

## 1．調査経緯

図１．出作遺跡の位置

### A　発　見

愛媛県伊予郡松前町出作遺跡の発掘調査は、昭和52年度圃場整備事業の工事中、同年11月12日、同町大字出作478－１番地～同481番地周辺で大量の遺物（土器類）が、地元住民によって発見されたのを契機とする。

### B　対　策

直ちに、松前町教育委員会（以下、「町教委」と言う。）は松前町文化財保護委員会に諮問するなど対策を検討し、愛媛県教育委員会文化課（当時、以下、「県教委」と言う。）の指導を得ることにした。

### C　確　認

この連絡を受けた県教委は、昭和52年11月15日～16日に現地の確認調査を実施した。その結果、土師器・須恵器・石製模造品などの多量の遺物と焼土が集中して出土し、その散布範囲から大規模な古墳時代の祭祀遺跡であることが明かとなった。そこで、今後、圃場整備事業で全面的に破壊される遺物集中地点（後のSX01）を中心とする約3,000㎡を対象として、緊急発掘調査をすることが妥当との判断を町教委に示した。

### D　組　織

県教委の指導を受けて町教委は、出作遺跡調査団（以下、「調査団」と言う。）を組織し、県教委から相田則美の派遣を得て発掘調査を実施することとなった。昭和52年11月29日の調査団会議で町教委から、約3,000㎡を12月中の約１ヶ月で調査を実施するとの基本方針が示された。会議では、発掘面積に対する調査期間の延長を中心に協議された結果、昭和52年度の圃場整備施工地域（26.6ha）で、遺跡を発見した時点で事業は１／３しか終了していないため今後の事業予定、なかんずく来年の耕作に影響を及ぼすこと、調査経費稔出の問題、土地所有者の了解が取れないなど、諸般の事情から調査期間の延長は困難となり、当初予定の方針（約3,000㎡を約１ヶ月で発掘）で臨むこととなった。

## E　発掘調査団

出作遺跡の発掘調査団の構成は下記の通りである。

表１　出作遺跡発掘調査団組織一覧

| 調　査　団 | 職　　氏　　名　　（役職・肩書等）内は当時 |
|---|---|
| 団　　長 | 住田幸正…（松前町教育委員会・教育長） |
| 副　団　長 | 後藤正健…（松前町文化財保護審議会・委員長） |
| 団　　員 | 仲田　茂…（松前町教育委員会・教育課長） |
| | 仙場　貢…（松前町文化財保護審議会・委員） |
| | 友田秀謙…（松前町教育委員会・社会教育主事） |
| 調　査　員 | 相田則美…（愛媛県教育委員会文化課・発掘調査補助員） |
| 補　助　員 | 片岡芳彦、篠原友子、豊田由加子、辻　正道…（愛媛大学生） |
| | 森　　毅、伊野近富、丸　嘉樹、松崎俊郎…（龍谷大学生） |
| | 池田　健…（立命館大学生） |
| | 光江　章…（東洋大学生） |
| 指　導　員 | 長井数秋…（愛媛県教育委員会文化課・教育専門員） |
| | 坂本安光…（愛媛県教育委員会文化課・教育専門員） |
| 作　業　員 | 大西シズエ、片岡　昇、加藤武子、　門屋アサミ、門屋アヤコ、 |
| | 門屋大作、　門屋光子、串宮ユリ子、神野清子、　神野久子、 |
| | 神野正子、　神野義夫、神野義之、　玉谷鉄雄、　土居歳恵、 |
| | 永井末広、　永井正春、中野梅香、　中野カズミ、中野美津子、 |
| | 西井正春、　西村一之、西村一好、　西村千代子、西村和喜子、 |
| | 野本広高、　水口富子、八城秀男、　八束　哲、　八束玉男、 |
| | 弓立春子、　弓立正之、渡部正雄　　〔50音順〕 |

## F　行政当局

発掘調査から整理報告までは、断続的・長期にわたるが、その間行政当局にも変動があり、各年次の担当者を一覧すると下表の通りである。

表２　出作遺跡関係行政当局変遷一覧

| 役　　職 | 氏　　名 | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | Ｓ５２ | Ｓ５３ | Ｓ５４ | Ｈ０２ | Ｈ０３ | Ｈ０４ |
| 教育長 | 住田　幸正 | 住田　幸正 | 住田　幸正 | 満田　泰三 | 満田　泰三 | 満田　泰三 |
| (社会)教育課長 | 仲田　　茂 | 仲田　　茂 | 仲田　　茂 | 仙波　　勲 | 仙波　　勲 | 国田　竹孝 |
| 社会教育主事 | 友田　秀謙 | 友田　秀謙 | 友田　秀謙 | 大政　哲志 | 大政　哲志 | 大政　哲志 |
| 文化財保護審議会委員長 | 後藤　正健 | 後藤　正健 | 後藤　正健 | 仙波　文治 | 仙波　文治 | 仙波　文治 |

## 2．調査経過

写真１　発掘作業風景

### A　発　掘

発掘は、昭和52年12月１日から昭和53年１月17日にかけて実施し、ほぼ当初の予定で終了した。ただ、調査期間の割に、広範囲の調査面積と膨大な出土遺物を抱え、過酷な条件下にあって十分な調査・検討が加えられなかった点も少なくない。ともあれ、遺跡発見以来、多くの問題を抱えながら慌しく実施された今回の調査ではあったが、松山平野における大規模な古墳時代の祭祀遺跡の一端が明らかになった。

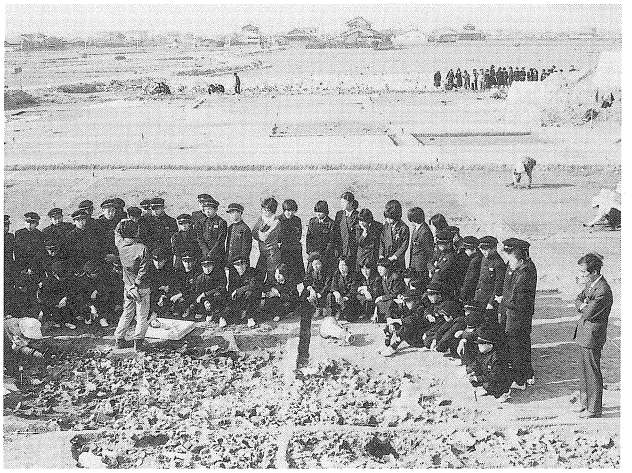
### B　日誌抄

発掘の経過については、下記日誌抄の通りである。

表３　出作遺跡発掘調査日誌抄

| 年　月　日 | 内　　容 |
|---|---|
| S52.12／01 | 神事。調査開始。北側自然流路の一部と木棺墓を検出。 |
| 12／02 | 南側自然流路を確認。 |
| 12／03 | 基準杭（５ｍメッシュ）の設定。SX01の検出。 |
| 12／04 | SX01の南で小規模なSX02を確認。 |
| 12／07 | SX01から双孔円板や臼玉などが出土。 |
| 12／09 | 調査区西側でSX03を確認。 |
| 12／13 | SX01の北西隅から須恵器群を検出。 |
| 12／16 | SX01を完掘。SX03の検出。両土器群とも掘り方なし。 |
| 12／18 | 順次、遺物出土状況の実測・写真撮影を開始。 |
| 12／19 | 各土器群の掘下げと精査を続行。 |
| 12／26 | 調査区中央北側で方形竪穴住居跡を確認。 |
| S53.01／07 | 各土器群の遺物取り上げ開始。 |
| 01／17 | 調査終了。 |

写真２　遺跡説明会風景



### C　啓　蒙

発掘期間中、地元住民をはじめ小・中学生など多数の来訪を得、現地説明会を開催し、町公報を含め調査概報を公表するなど、埋蔵文化財に対する意識の高揚が計られた。

また調査後、遺跡には遺跡解説板を設置した。

### D　整　理

整理は、当初、昭和53年３月１日から同年度内に実施する予定であったが、出土遺物が膨大な量であり、基本的な洗浄・注記・復元に多大な労力を費さざるを得ないこともあって、その期間を延長し、昭和54年度から平成２年度、平成３年度の一部を断続的にこれに当てた。この間、発掘関係者も各自の職務などにより、決して十分な整理体制ではなかったが、不備ながら今回、報告書刊行の運びとなった。

## 3　謝　辞

調査を進める上での条件整備等では、町教育委員会の積極的な援助を受けたほか、町産業経済課、徳丸圃場整備委員会の方々に御協力を頂いた。

発掘では、町文化財保護委員会の方々をはじめ、岡本健児（高知女子大学）、岡田敏彦（愛媛県埋蔵文化財調査センター）、土居睦子（愛媛県教育委員会文化課）、森　光晴（松山市教育委員会）、田坂敏政（駒沢大学卒）、大黒至正、大都千鶴子ら各氏の御助言を得た。

整理は、西岡周子、藤田千代子、重松トク子、直樹茂、大政忠久、金子晃、大西多美子、喜安浩子、野崎智代、渡瀬紀代、井出耕二（松山商科大学学生）各氏の参加を得て実施し、その間、亀井正道（東京国立博物館）、松本豊胤（四国学院大学）、松本敏三（瀬戸内海歴史民俗資料館）、椙山林継（国学院大学）、植野浩三（奈良大学）、東潮（橿原考古学研究所）、定森秀夫（京都平安博物館）、亀田修一（岡山理科大学）の諸先生から専門的な御教示を頂いた。

発掘調査から報告書刊行までの14年間、上記以外にも松前町史談会のほか、多数の人々から各種の御援助を得た。ここに深甚の謝意を表したい。　　（　）内は当時

〔相田則美〕

# II．環　　境

## 1．地理的環境

出作遺跡の発掘地域は、愛媛県伊予郡松前町大字出作478－1番～同481番地で、東西90m、南北40mの範囲である。国鉄北伊予駅から北東約600mの地点に位置する。出作遺跡のある松前町は、県都松山市と接し、松山平野の西南部に当たる。西は伊予灘に面し、東は砥部町、南は伊予市に接し、県内屈指の穀倉地帯である。

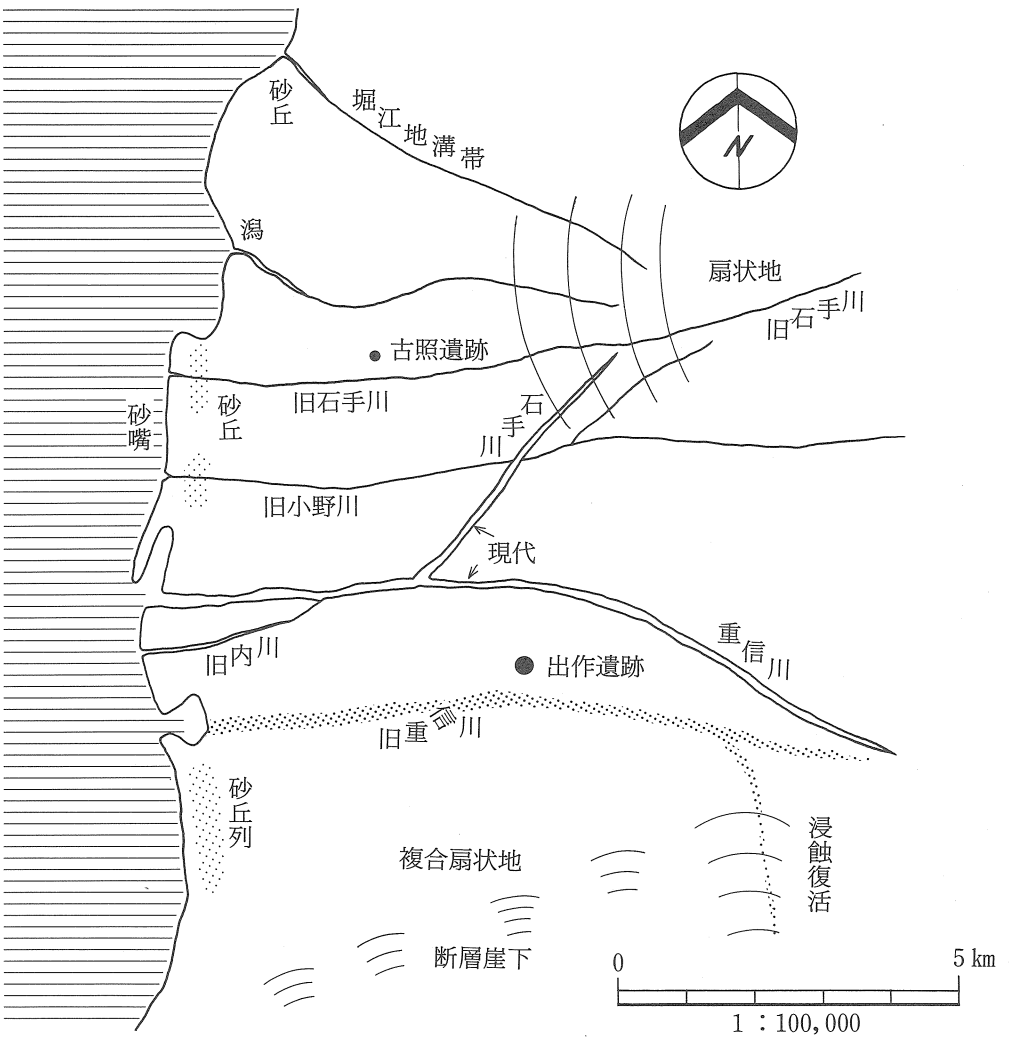



図2　松山平野河川変遷図
（西岡文献『古照遺跡』1974を加筆・トレース）

松山平野は、北方の高縄山地と南方の石鎚山系間の三角州状の地を、主に重信川が堆積涵養した扇状地と三角州状の沖積平野である。西部では重信川を挟んで南北に広大な低地帯を展開し、松前町はその南部を占め、その南縁は、伊予市の山麓線におよんでおり、出作遺跡はその松前町の東部に位置する。

出作遺跡の周辺の地形は、沖積低地ではあるが勾配や河道形態などの特徴から重信川氾濫源と呼ばれ、海抜20m あたりの扇状地末端から海抜５m 以下の重信川の河口三角州に至る地帯をなす地域である。勾配は沖積低地としては大きく1,000分の６～７である。またこの地区は、重信川左岸から国近川・長尾谷川筋にかけて、数列の豊富な伏流水帯が存在し、かつては多数の湧水がみられ、今日では揚水池にとってかわられている。

その重信川は、愛媛では肱川に次いで大きな河川ではあるが、石鎚山系に源を発し、砥部川、小野川など大小35河川を合わせたもので、流路は紆余曲折し、その長さ35.8kmに及び松前町の塩屋で海に注いでいる。しかし、現重信川は、慶長年間、松山藩主加藤嘉明が足立重信に命じて改修したものに端を発しており、旧河道については、県道八倉松前線あたりを流れ、現在の長尾谷川付近と推定されている。したがって、出作遺跡は、重信川旧河道の北に位置するものであり、調査結果や周囲の観察結果とも符合する。①

## ２．歴史的環境

出作遺跡周辺の歴史的環境を、律令体制下の伊予郡に当たる現在の伊予市、伊予郡松前町を中心に概観しておこう。

松前町内の埋蔵文化財は、伊予神社五輪塔出土の経塚遺品や有柄式磨製石剣を出土したと伝える出作宝剣田遺跡、また出作出土の弥生時代後期終末と考えられている大型壺（ともに二名神社蔵）などが知られているのみである。したがって、伊予市を中心とした概観になるが、これまで発掘調査されたのは伊予市市場瓦窯と猪の窪古墳のみで、埋蔵文化財の豊富にみられるわりには詳細については不明な点が多い。

先土器・縄文時代の遺跡は、現在まで発見されていない。しかし松山平野南部の松山市上野や伊予郡砥部町にまたがる洪積台地には縄文時代の遺跡が近年豊富に発見されているので、今後分布調査が進めば、伊予市の扇状地周辺では発見される可能性が高い。

弥生時代の遺跡は、前期まで遡るものは見つかっていないが、中・後期になると扇状地上に集落遺跡が多数分布する。その中でも、近年「倭国大乱」との関連で注目を集めている高地性集落遺跡の行道山遺跡・屋倉山遺跡などがある。行道山遺跡は、標高403m の高地に位置し、弥生時代中期後半の弥生土器や石器が多数出土している。②

後期には富田池遺跡のように扇状地端部に大規模な集落を形成するようになる。また上野

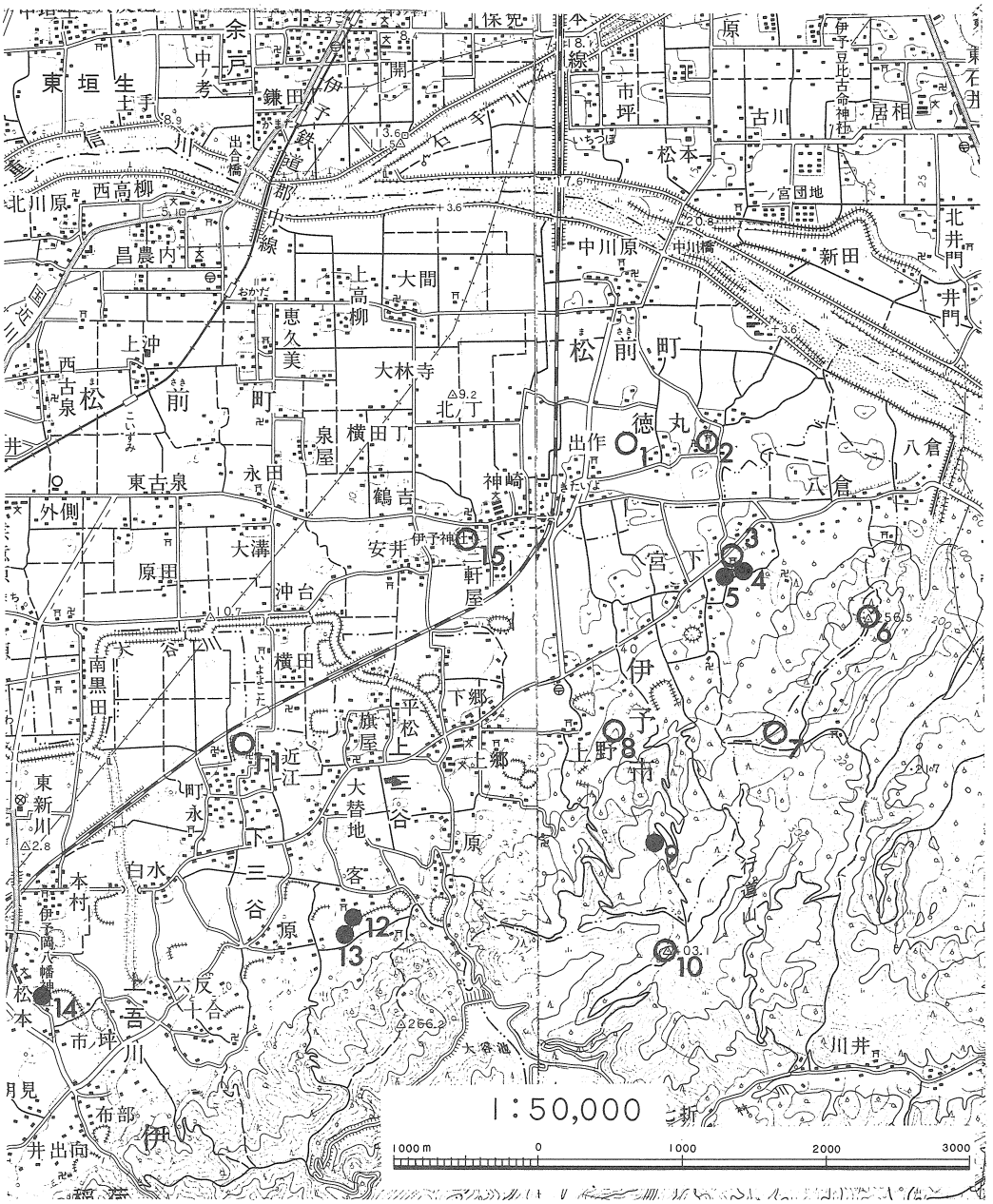



図３　出作遺跡周辺の主要遺跡分布

1．出作遺跡　　2．高忍日売神社　3．伊曽能神社　4．吹上の森１号墳

5．吹上の森２号墳　6．八倉山遺跡　7．田ノ浦遺跡　8．上野東原遺跡

9．桜山古墳　　10．行道山遺跡　11．富田池遺跡　12．客池古墳

13．嶺昌寺古墳　14．伊予岡八幡神社古墳群　15．伊予神社

向山遺跡では、後期の青銅祭器と考えられている広形銅矛が大正年間に１口出土している。[3]

なお、精巧なスレート製の有柄式磨製石剣が出た宝剣田遺跡・東谷雨が森遺跡・寺山富田山遺跡・砥部町田ノ浦遺跡の比較的近接した地域から１口ずつ出土し、伊予市を中心に特異な分布を形づくっている。松岡文一氏は、精巧なこと、石材が付近から出土しないことなどから他地方からの搬入品と考えている。[4]

古墳時代の集落遺跡は、弥生時代に引続き扇状地上に分布するだけでなく、出作遺跡のように沖積低地にも進出していくものと考えられる。[5]前期古墳については、僅かではあるが最近明らかになりつつある。

嶺昌寺古墳は、1969年西田栄・鎌木義昌両氏によって、天王日月・獣文帯四神四獣鏡が出土したことが明らかにされ、注目を浴びた。残念なことに古墳そのものの詳細は明らかでない。鏡は舶載鏡で、京都府相楽郡山城町椿井大塚山古墳と同笵鏡である。[6]

宮ノ下吹上ノ森古墳は、延喜式内社伊曽能神社南、通称吹上ノ森と呼ばれている標高約50mの丘陵上にある。後円部墳頂と前方部端は農業用貯水槽で、西側墳丘端は農道などで破壊されているが、低平な前方部を北に向けた約40mの前方後円墳である。墳丘は丘陵を削平しており河原石積みの葺石と埴輪列が認められる。主体部は竪穴石室と考えられ、副葬品は仿製鏡１、筒形銅器２、碧玉製紡錘車３が出土している。なお、筒形銅器は県内において初見である。[7]

桜山古墳は、行道山から平野に向かって北に派生する標高約300mの稜線上の高位置にある。古墳は短小な前方部を北に向けた約50mの帆立貝式前方後円墳と考えられ、墳丘は封土で葺石、埴輪列が認められる。未掘で、主体部などは不明である。[8]

後期の前方後円墳は、客池１号墳に接して、標高約50mの洪積台地端部に立地する客池２号墳のみが知られている。前方部を西に向けた約30mの前方後円墳である。墳丘は封土で、須恵器埴輪が認められ、葺石はない。主体部は後円部に主軸と斜行して横穴式石室と考えられ、かつて石室内から小形鏡が出土したと伝えられるが不明である。なお、前方部にも埋葬施設があるようである。[9]

伊予岡八幡神社がある上吾川の独立丘陵には、伊予市で最も著名な伊予岡古墳群がある。現在でも、１部には前方後円墳をふくむ前期古墳群ととらえるむきもあるが、正岡睦夫氏などによって否定されている。現状では、小規模な小竪穴式石室を主体とする直径10～20mの規模の円墳を中心とする10数基で構成された６世紀後半頃の後期群集墳ととらえるべきであろう。[10]

また、扇状地へ張り出した丘陵上に横穴式石室を主体とする多数の群集墳がみられる。例えば、西原古墳群、北谷古墳群、猿ヶ谷古墳群、新池古墳群、来山古墳群などがあり、その中には仿製鏡を出土したものも知られているが、柑園の開墾などで破壊されているものが多い。また、人物埴輪を出土した米湊の大角古墳のように扇状地上にもみられ、後世の開発で

僅かに痕跡をとどめる古墳群も上三谷客周辺などでは認められる。そのほか、子持勾玉が横田１・南伊予付近２の計３点出土している。⑪

律令体制下の伊予郡は、和名抄によれば、神崎・吾川・石田・岡田・神戸・余部の６郷が知られており、このうち神崎・吾川・岡田・余部は現在でも地名として残っている。それによれば、神崎郷は、松前町神崎を中心にした地域、吾川郷は伊予郡上吾川・下吾川に、岡田郷は松前町恵久美周辺に、また余吾郷は現在の松山市余戸に、石田郷と神崎郷については、いまだ確定されていない。

延喜式内社は、伊予郡には四社あり、明神大社である伊予神社のほか、小社として伊予豆比古命神社、高忍日売神社、伊曽能神社がある。ただし、伊予豆比古命神社は伊予郡ではなく、久米郡の小社とする考えもある。⑫いずれにしても道後平野には伊予郡のほか、和気、温泉、久米、浮内郡の５郡あるなかで、伊予郡に延喜式内社が集中するのは注目される。

古代寺院は、延喜式内社とは反対に、現在のところ全く確認されておらず、久米、温泉、浮内郡に集中して分布する。ただ、伊予市市場瓦窯跡が知られ登窯２基が調査された。その四重孤軒平瓦は、最近国指定史跡となった松山市来住廃寺に供給されていることが大山正風氏によって明らかにされている。⑬

〔相田則美〕

（昭和55年12月10日稿了）

**註**

① 松前町誌編集委員会「第二章地形」『松前町誌』松前町　1979.

② 山本雅夫「伊予市の弥生時代の文化」『愛媛の文化』13　1973.

③ 西田　栄「銅剣、銅鉾についての若干の考察」『愛媛大学歴史学紀要』２　1953.

④ 松岡文一「愛媛県下の磨製石剣」　伊予史談175・176合併号　1965.
ただし、出作宝剣田遺跡出土の有柄式磨製石剣は、1978年度に行われた圃場整備中には弥生時代の遺物は１点も出土していないことから、二次的な埋納の可能性がある。

⑤ 県立歴史民俗資料館、吉本拡氏の教示によれば、松前町・東古泉で古式須恵器や土師器が出土しているとのことで、分布調査が進めば、松前町でも弥生遺跡も含めて豊富に発見されるだろう。

⑥ 小林行雄「三角縁神獣鏡の研究」　京都大学文学部紀要13　1971.

⑦ 後藤正健氏の教示をえて、1974年４月、光江　章氏とともに確認したものである。公表することを快諾されたことに謝意を表したい。

⑧ ②論旨に掲載された円筒埴輪の写真を見て、1973年８月に確認したものである。ただ前方部が不明瞭で円墳の可能性もあるが後述するように円墳であったとしてもその歴史的位置は変わらないと考える。

⑨ 拙稿「客池古墳調査に関する覚書」　『遺跡』６　1970.
かつては竪穴式石室を想定したが横穴式石室の可能性が強い。

⑩ 正岡壌夫「愛媛県前期古墳集成」　1986.
松岡文一「各地域の後期古墳―伊予―」『古代学研究』30　1962.

⑪ 瀬戸内海歴史民俗資料館編「瀬戸内海地方祭祀遺跡地名表」　1978.

⑫ 景浦勉「伊予の歴史上」　愛媛文化双書19　1974.

なお、伊予神社は、重信川旧河道上に立地しており、重信川改修後でなければ伊予神社の鎮座には疑問とせざるを得ない。また、明治以来伊予市上野の伊予神社との間に正閏論争が存在する。池内文雄編「志んのぶ」『御由緒特集号』通巻集10号　1959年で、京都学芸大学教授志賀剛氏は神崎伊予神社が延喜式内社であると断定されている。

⑬ 大山正風『長隆寺跡調査報告書』松山市教育委員会　1974.

# Ⅲ．遺　　構

## 1．遺構概要

発掘調査は、遺跡確認の契機となったＳＸ01地点を中心に約3,000㎡を対象に実施した。調査方法は、対象地を磁北を基準として、５ｍのメッシュで分割し、東西ラインをアルファベット（A～R）、南北ラインをアラビア数字（１～８）で表し、各交点にはアラビア数字とアルファベットの組合せで杭を設定した。なお、各５ｍグリッドの呼称は、該当グリッドの南東杭の名称を採用した。また、SX01については、Ｆ－５・６、Ｇ－５・６区を１ｍメッシュで100分割（SX01－01～SX01－100）した。

調査の結果、祭祀遺構３基以上（SX01～SX03ほか）のほか、自然流路２条（SD01,SD02)、竪穴住居１棟（SB01)、焚火跡多数、木棺墓１基（SK01）が検出された。ただ、調査期間の制約から完掘できなかった遺構やグリッドも多数存在し、調査の実施概況は、図5.出作遺跡の遺構配置で色分けしている。

なお、出作遺跡の推定範囲は、発掘調査の成果とともに表面踏査実施した結果、東は高忍日売神社から、西はJR予讃本線の路線付近に想定され、北は伊予鉄バスの小松原停留所から南は恵依弥二名神社付近となり、東西約1.0km、南北約0.3kmの東西に長い大規模な遺跡と推定される。

〔相田則美〕

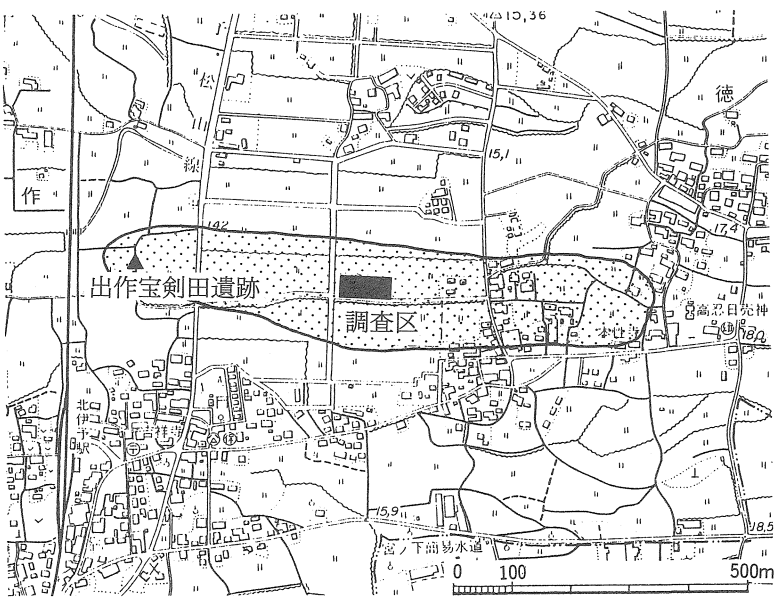
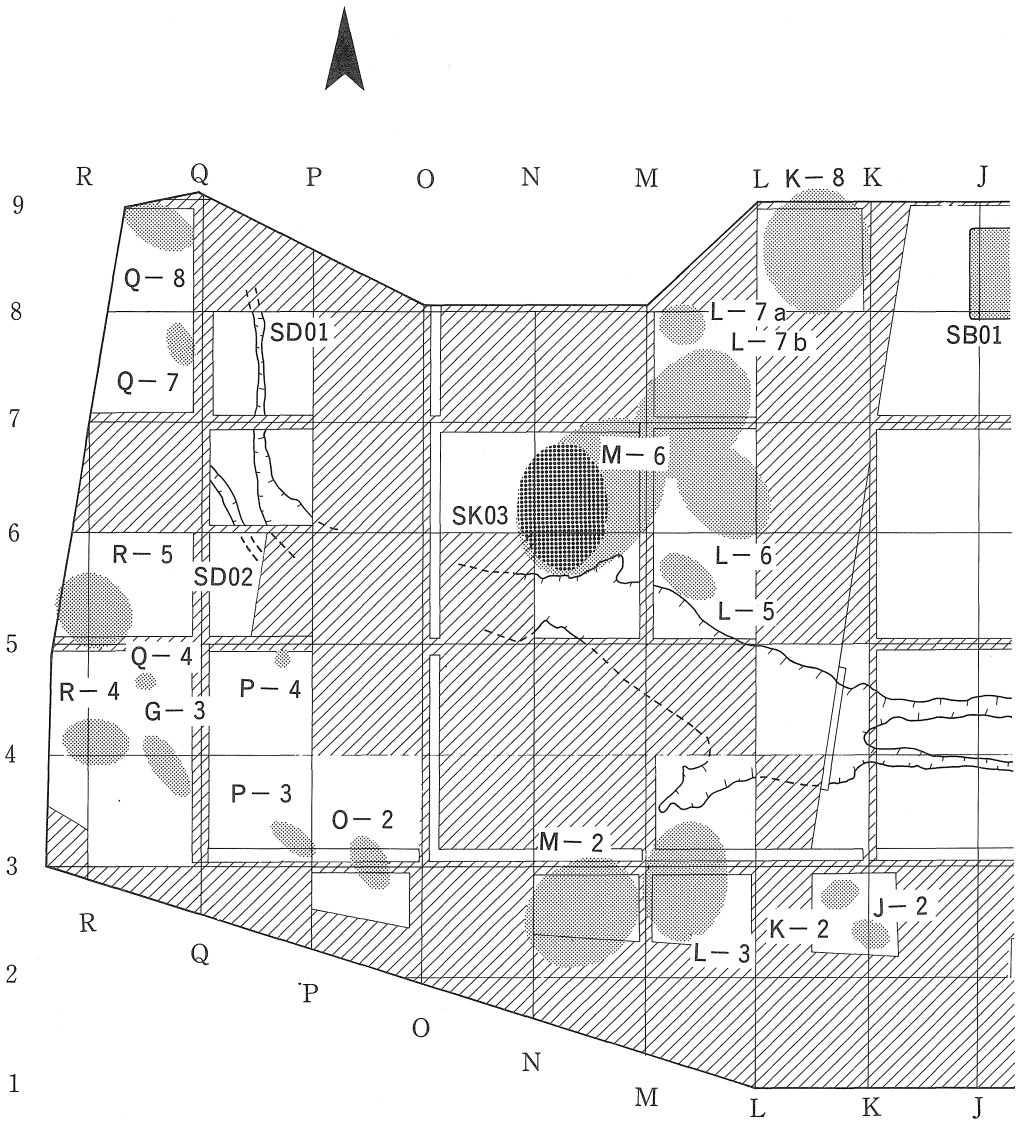



図４　出作遺跡の範囲と調査地　　１：12,500


R
Q
P
O
N
M
L
K－8
K
J
9
8
7
6
5
4
3
2
1
Q－8
SD01
Q－7
L－7a
L－7b
SB01
M－6
SK03
R－5
SD02
L－6
L－5
Q－4
R－4
P－4
G－3
P－3
O－2
M－2
J－2
K－2
L－3

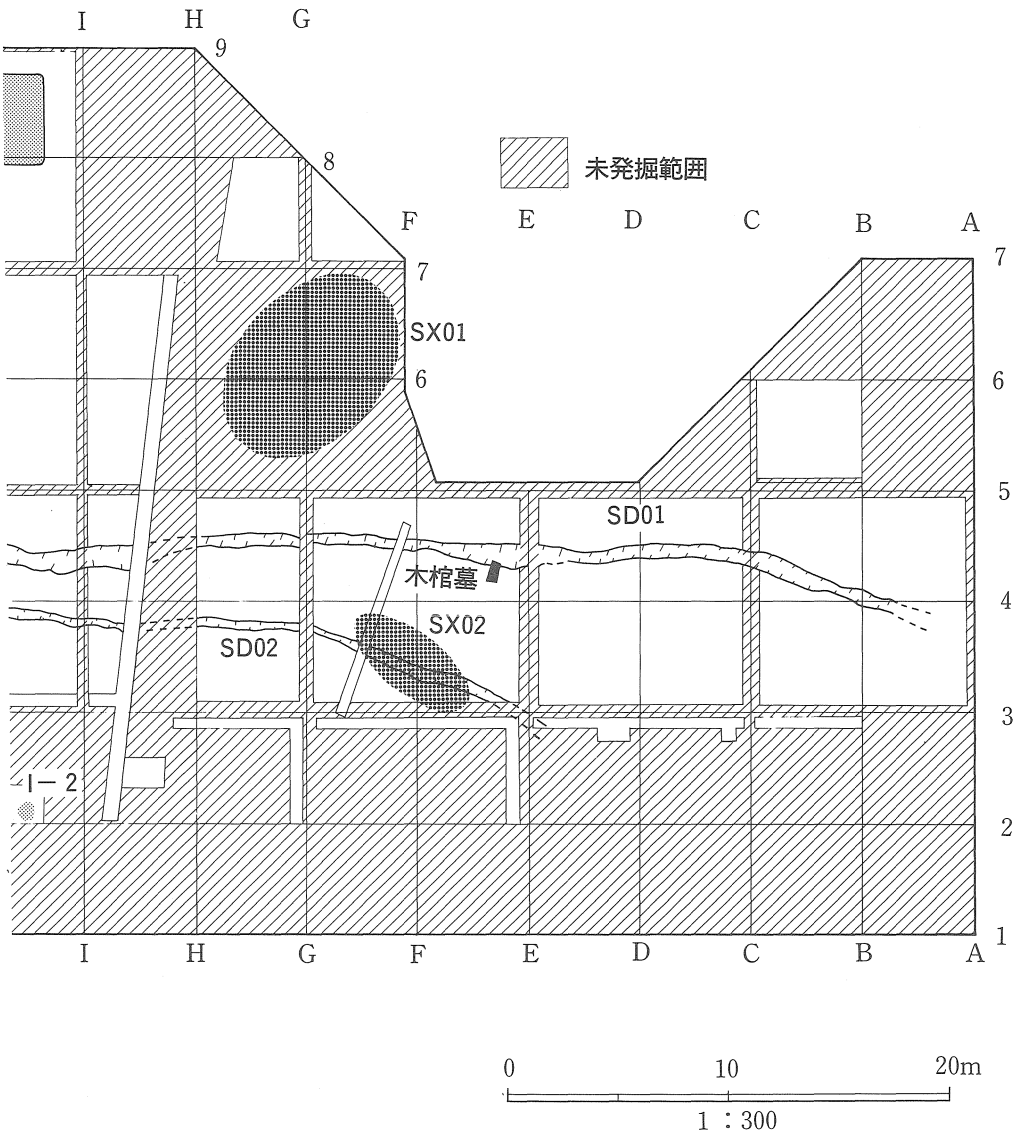



図5　出作遺跡の遺構配置

## 2．層　　序

発掘調査地の基本層序は、Ⅰ層：耕作土・床土の直下に遺物包含層であるⅡ層：灰褐色粘土層が堆積する。調査区全体は安定的な土層を示すが、調査区南東部については灰褐色粘土層の上面に20～30cmの礫層の堆積が認められ、南側に河川の存在が予想される。SX03の検出されたM－6区の一部を深掘りした所見では、Ⅱ層：灰褐色粘土層の直下にⅢ層：青灰色砂質粘土層が存在し、この土層からも遺物を検出している。さらに、その下層には、Ⅳ層：青灰色無遺物のⅣ層：青灰色粘質土層（植物遺体を含む）があり湧水が伴う。

以上、調査地には2層の遺物包含層が見られ、Ⅱ層からは今回調査した主要遺構が検出された。なお、ＳＸ03付近についてみると、須恵器を伴わないSX03（図9，付図2）がより下位で検出され、その上位に須恵器を伴う小規模な土器群が検出（図14）されており、Ⅱ層内の上下に時間幅が認められる。

また、Ⅲ層は遺跡の形成時期を考える上で重要な土層と思われる。

〔相田則美〕

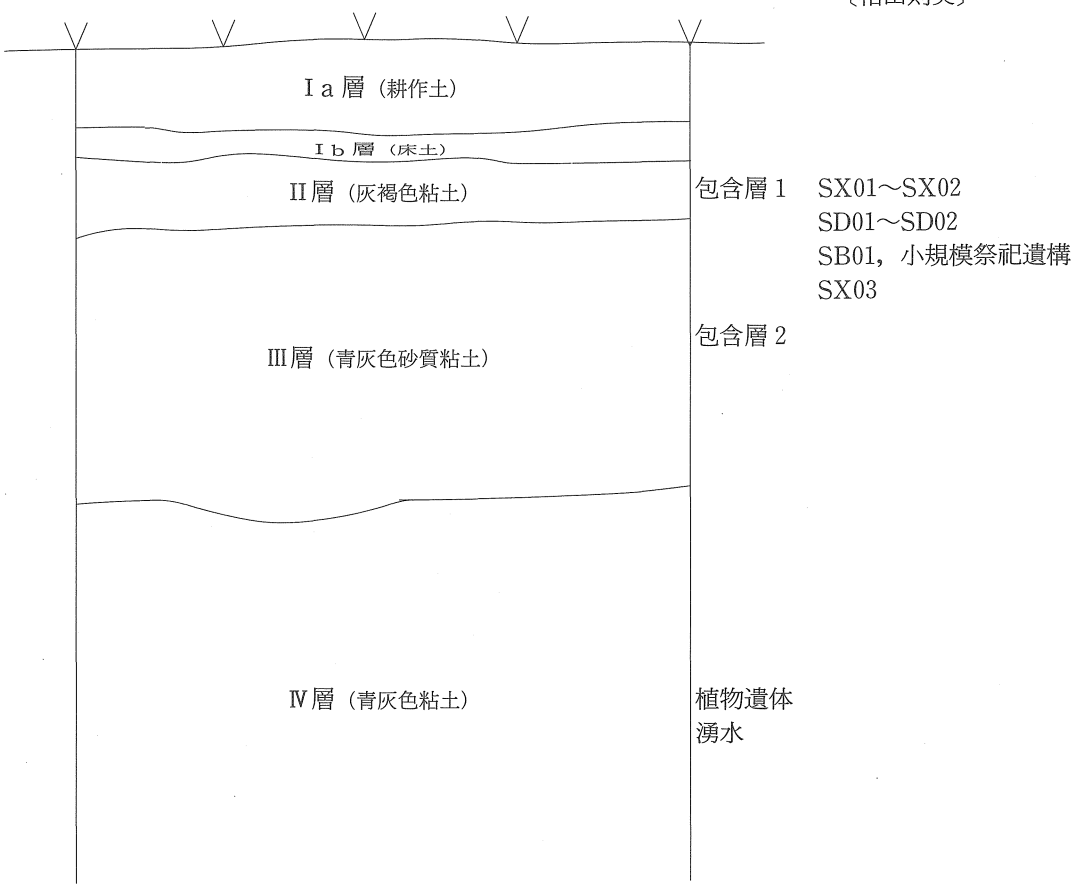



図6　出作遺跡の層序模式

## 3．自然流路

自然流路（SD01とSD02）は、調査区のほぼ中央（3～4ライン）を東から西へ約5m間隔で並走する流路で、北側をSD01、南側をSD02と仮称する。規模は、SD01・02とも幅約50cm、深さ50cm程である。両自然流路は中央部（K－4～L－4区付近）で合流し、北西の方向へ角度を変える。合流した地点は7m×7mの規模をなし、細砂が充満している。SD01の延長は、沼状を呈するあたりから、幅約4mの規模で15mあまり西流した後、約90°北へ流れている。また、このSD01に接してもう1本の流路がP－6区で確認されており、SD02の延長とも考えられる。

これらの自然流路については、全面発掘を実施できていないため、その詳細は不明であるが、一部を断ち割った堆積土の観察によれば、深さ50cmで細砂と粘土が互層をなし、2回の水の流れが確認された。いずれも礫を含まず粗砂のみであることなどから、極めて緩やかな流れと考えられる。また、SD01とSD02の合流地点は、湧水的な機能が想定される。

なお、遺構の時期については、SD02の時期をSX02そのものの時期とすれば、5世紀末～6世紀初頭頃に位置づけられる。SD01については、時期判断の材料はないが、SD02との配置関係から前後する近い時期と判断しておきたい。

〔相田則美〕

## 4．祭祀遺構

### A　SX01

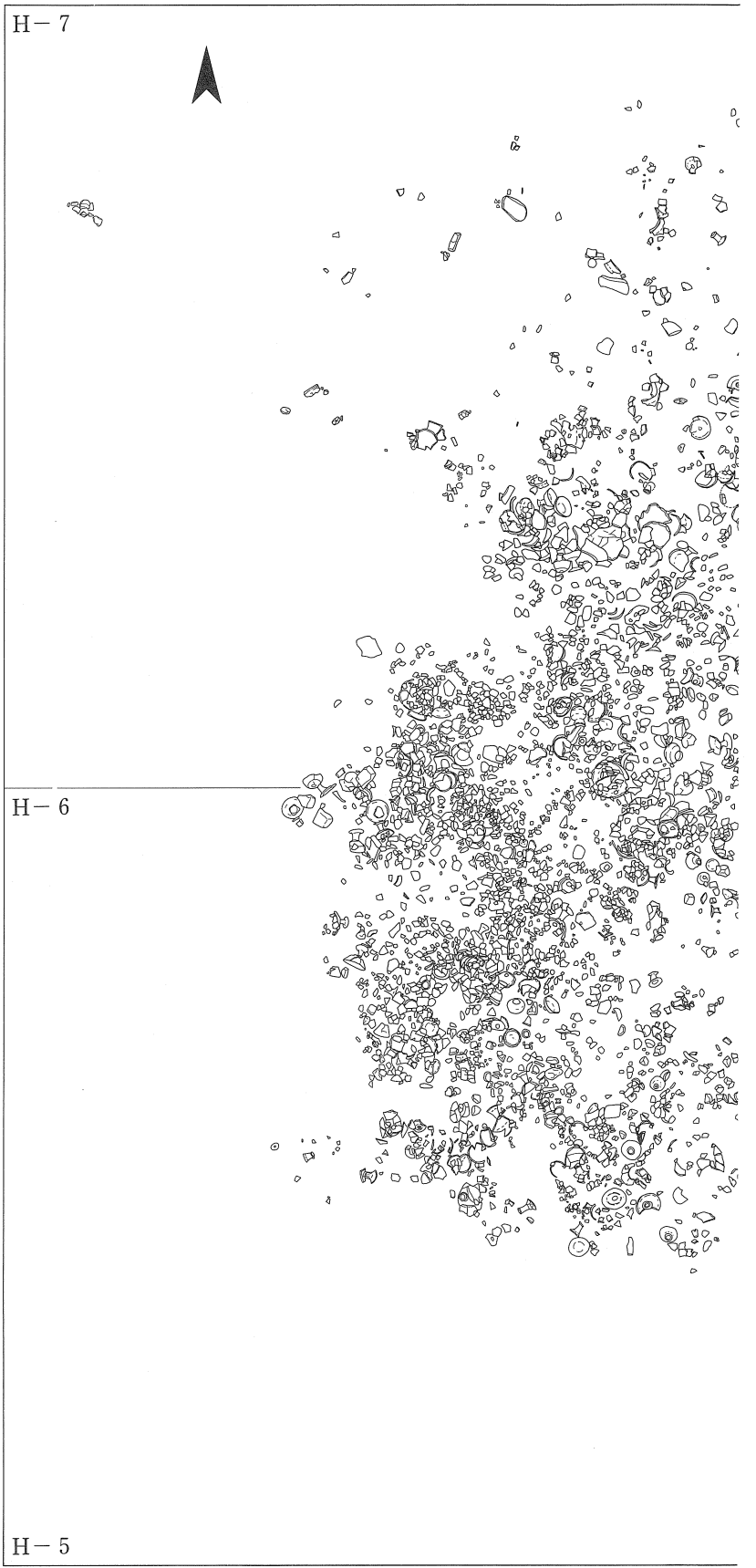
調査区中央からやや北東部（F－5・6、G－5・6区）で、自然流路（SD01）の北側6～7m付近に所在する祭祀遺構である。

主軸は北東方向を取り、全長9m、幅4mの大規模なものである。

出土遺物は多数の土師器のほか各種の須恵器を含む。これらの土器群に混在して数千個の臼玉や勾玉・剣形・紡錘車などの石製模造品や鉄製品と土製品や砥石など膨大な遺物で構成される。ただ、この土器群は、厳密には数群に分別され、各小群による遺物の組成に違いがあると考えられるが、調査期間の制約から大ざっぱな取り上げ方式を採用した関係上、現段階では追求できないのが実情である。

SX01の時期については、出土須恵器からTK208～TK23期併行と考えられ、土師器各器種の形態の諸特徴からすれば、さらに時期幅が存在するものと考えられ、ある程度の時間幅をもって継続的に営まれた祭祀遺構であると考えられる。

〔相田則美〕


H－7
H－6
H－5

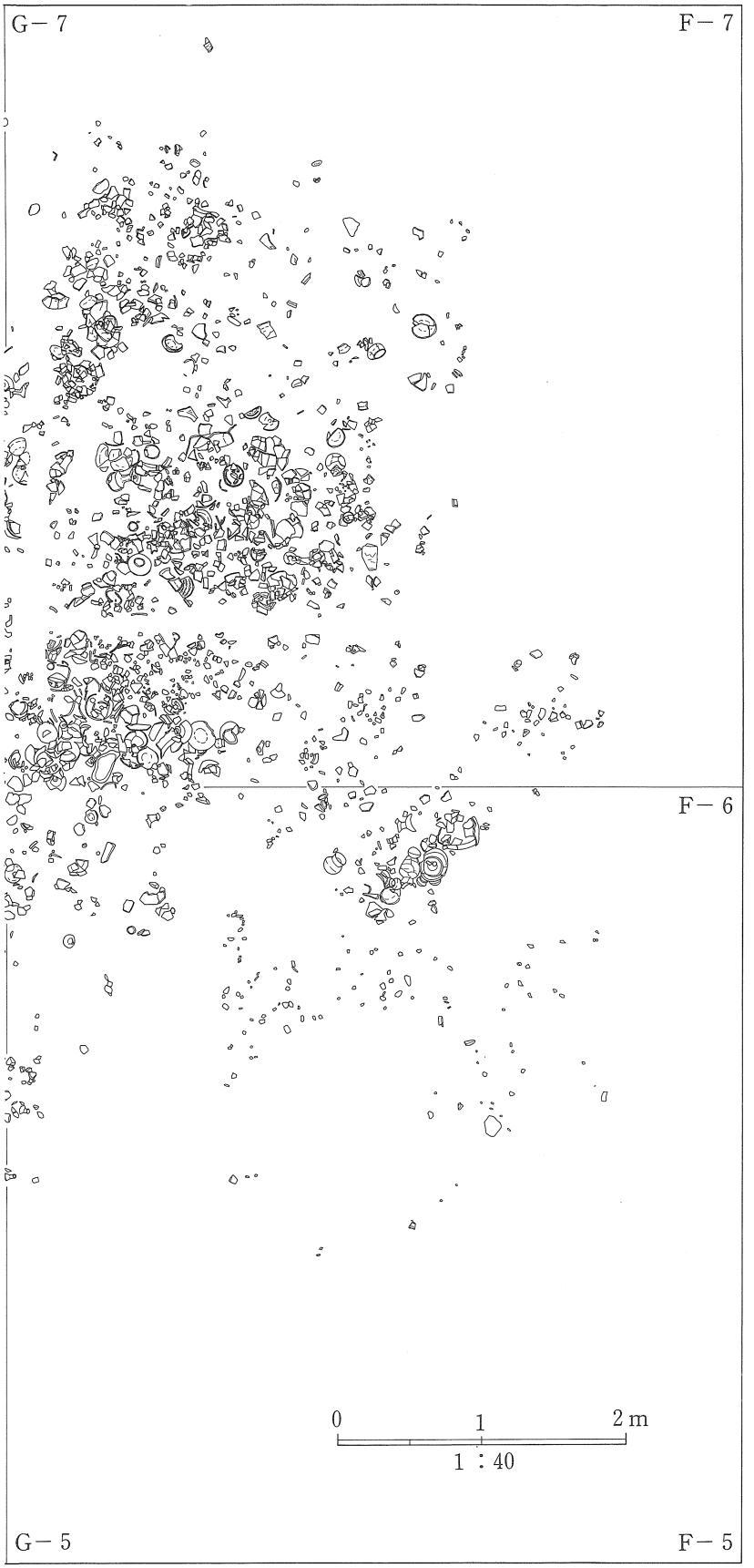



図7　祭祀遺構1（SX01）

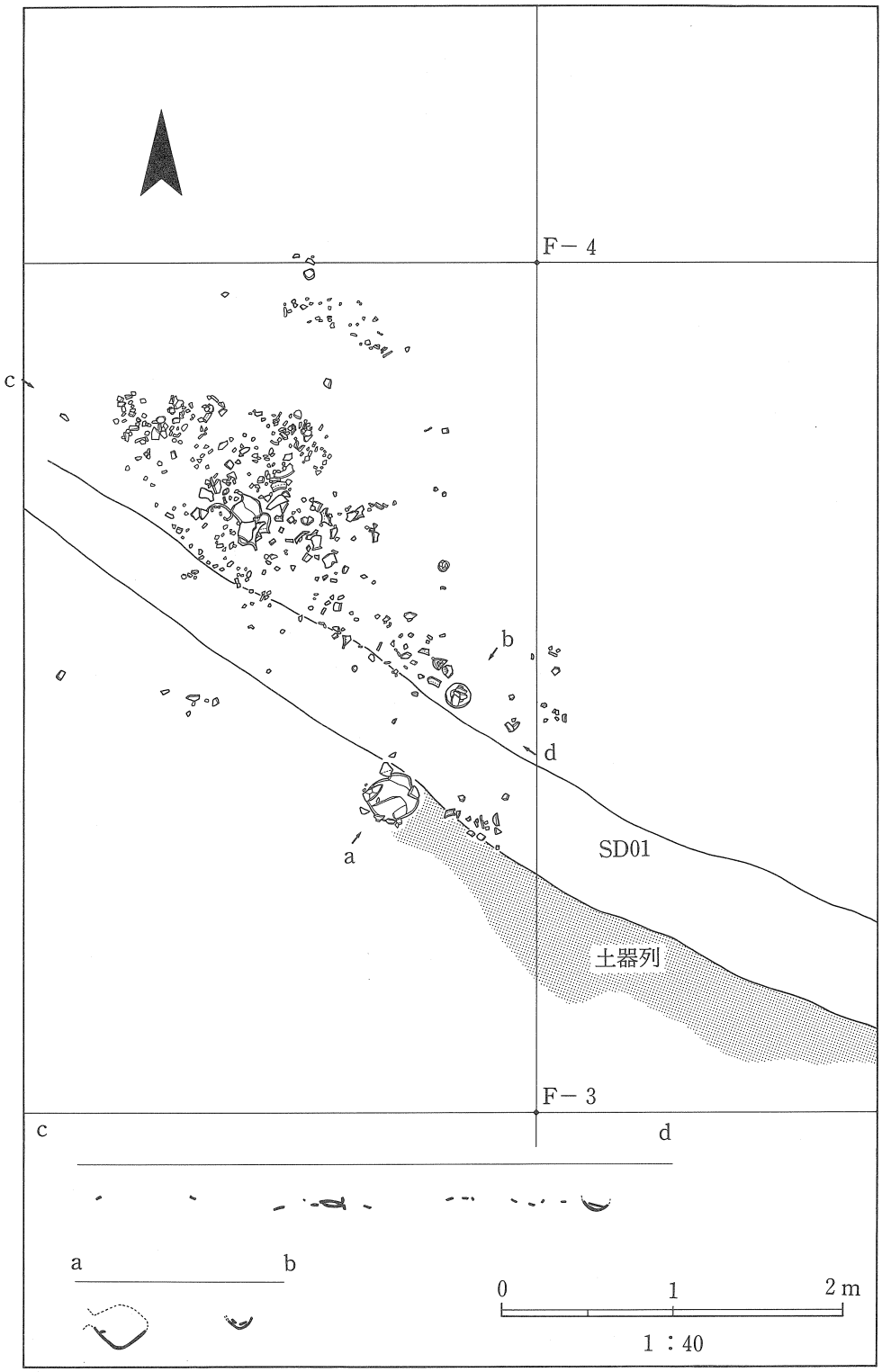



図 8　祭祀遺構 2 （SX02）

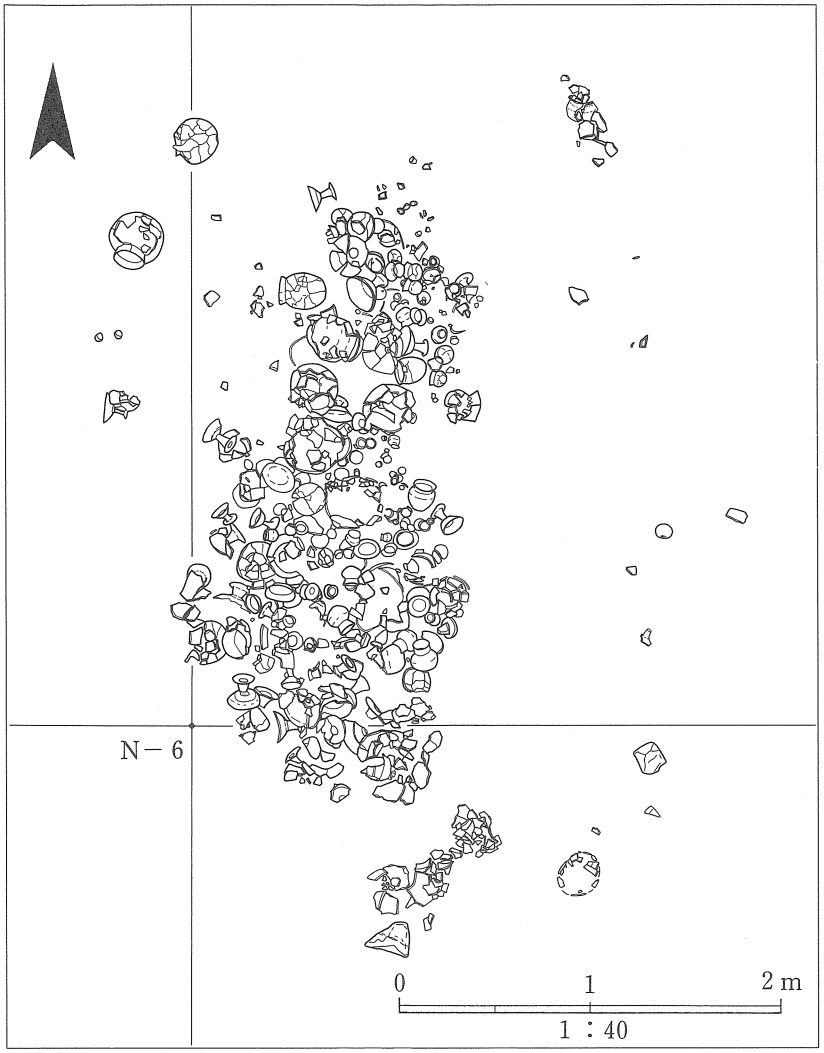



図 9　祭祀遺構 3 （SX03）

B　SX02

自然流路（SX02）に沿って帯状に形成されている。全長約 2 m、幅0.5m の規模で、数点の完形の須恵器以外は、土師器や須恵器の破片と若干の石製模造品や鉄製品で構成されている。

本遺構は、SX01あるいはSX03と比較して、遺物の遺存が悪く、あたかも破砕したかのような状況である。

SX02の時期については、出土須恵器から判断してSX01より若干新しい時期（MT75期併行）に下るものと考えられる。

〔相田則美〕

C　SX03

調査区中央からやや西側(M－5・6区）で、自然流路(SX01）の北側に近接して所在する祭祀遺構である。主軸はほぼ南北方向をとり、規模は、全長3m、幅1.5mと、SX01に比べると小振りであるが、遺物の集中密度が高くコンパクトなまとまりを示している。

出土遺物は、土師器約2,000個体と、若干の碧玉勾玉、石製模造品類、鉄製品で構成されている。問題はこの土器群が、厳密には数群に分別されるか否かといったところであるが、一括で取り上げた関係上、現在その検討はできない。

SX03の時期については、須恵器が全く出土しない点と、土師器自体の形態的特徴から、SX01に先行する時期と考えておきたい。

〔相田則美〕

D　その他の祭祀遺構

SX01とSX03の主要な祭祀遺構以外に、数点の土師器や須恵器で構成される土器群が、あたかもSX01やSX03を取り囲むように存在する。これらについては、発掘調査の段階では祭祀遺構と認定していなかったものであるが、小規模な祭祀遺構と考え、グリッド名で呼称する。

時期については、概ねSX01とほぼ平行する段階のものと考えられる。

〔相田則美〕

## 5．焚　火　跡

自然流路(SD01）北側の、SX01とSX03の間で、炭化物を含む焼土範囲が多数発見された。各焼土の範囲は、いずれも約50cm程度の円形ないし楕円形で堀り方は存在しない。なお、遺物は基本的には出土していない。

こうした焼土範囲は、いずれも焚火の痕跡と考えられ、祭祀遺構と何らかの関係があるように思われる。ただ、これらの焚火跡は、調査の終盤になって、住居の検出を契機に精査したために明らかとなったものである。調査当時は、多量の遺物を出土する祭祀遺構に手間・神経ともとられ、その分布状況などの記録は取れずじまいであり、今、詳細を述べることができないことを遺憾に思う。

〔相田則美〕

## 6．住　居　跡

調査区の中央北部（H－8区周辺）で調査区終了段階に検出した唯一の建物遺構である。

一辺約4mの方形を呈し、深さは約30cmであった。完掘していないため、柱構造をはじめとする内部施設については不明であるが、住居内から焼土や炭化物が検出され、火災家屋の可能性がある。

出土遺物は、若干の土師器・須恵器や石製模造品が出土した。

時期は、完掘していないため断言はできないが、出土土器から概ねSX01と同時期と考えられる。

## 7．木　棺　墓

調査区東側（E－4区）から検出した木棺土坑墓で、自然流路（SD01）より後出する。

木棺は、長辺が南北91.5cm、短辺南側46.7cm、北側36.8cmをそれぞれ測る。北側が狭い長方形を呈し、長軸がN－14°－E方向である。掘り方は棺が丁度入る大きさに堀りこまれている。

木棺材や人骨は、土質の関係で遺存が悪いが、木棺の板材は厚さ1cm弱であった。人骨の遺存状況や歯の配置から、頭位が幅の広い南側中央で、背骨が中位西側であり、東向きの横臥屈葬と思われる。

副葬品としての出土遺物は、土師器の細片3点が出土したのみで、ほかに鉄釘2点を出土した。

時期は、木棺の状況から中世以降の鉄釘を用いた木棺墓と思われる。

〔宮崎泰好〕

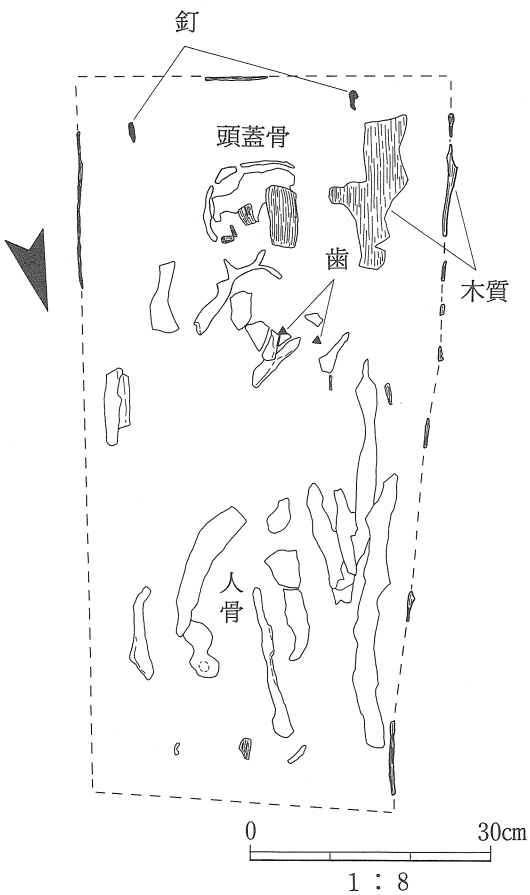
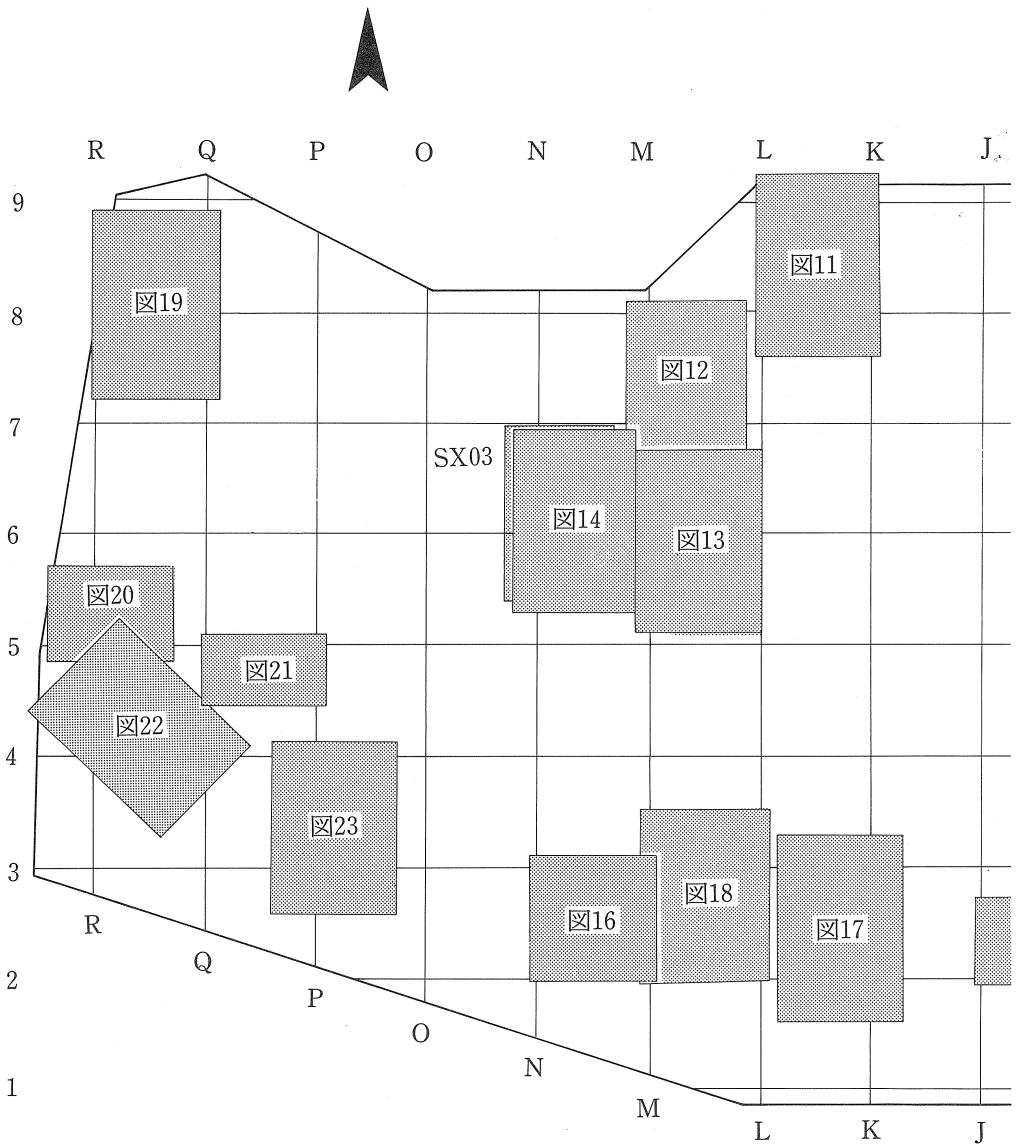



図10　木棺墓


R
Q
P
O
N
M
L
K
J
9
8
7
6
5
4
3
2
1
図19
図11
図12
SX03
図14
図13
図20
図21
図22
図23
図16
図18
図17

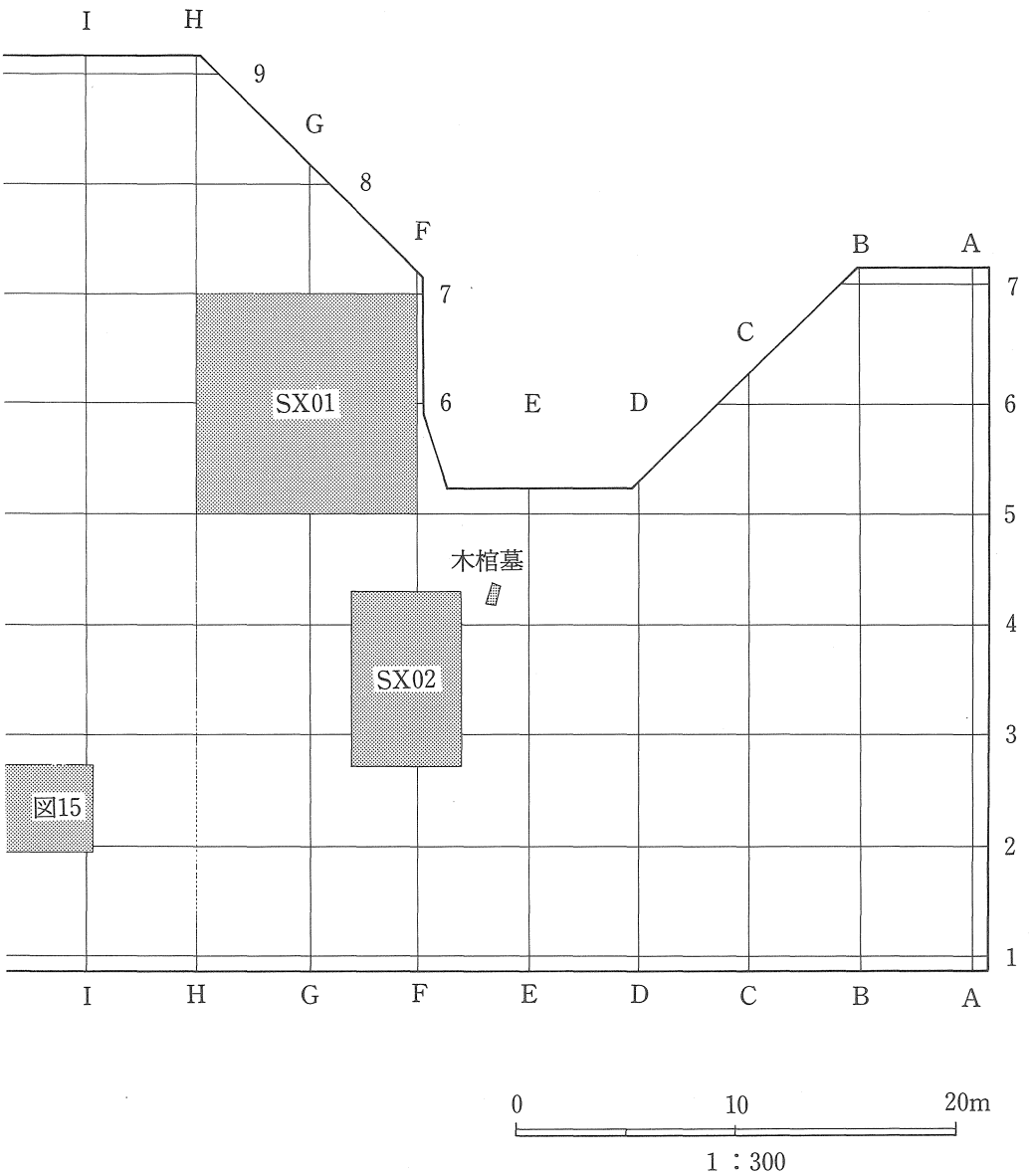



図11　祭祀遺構の配置見取図

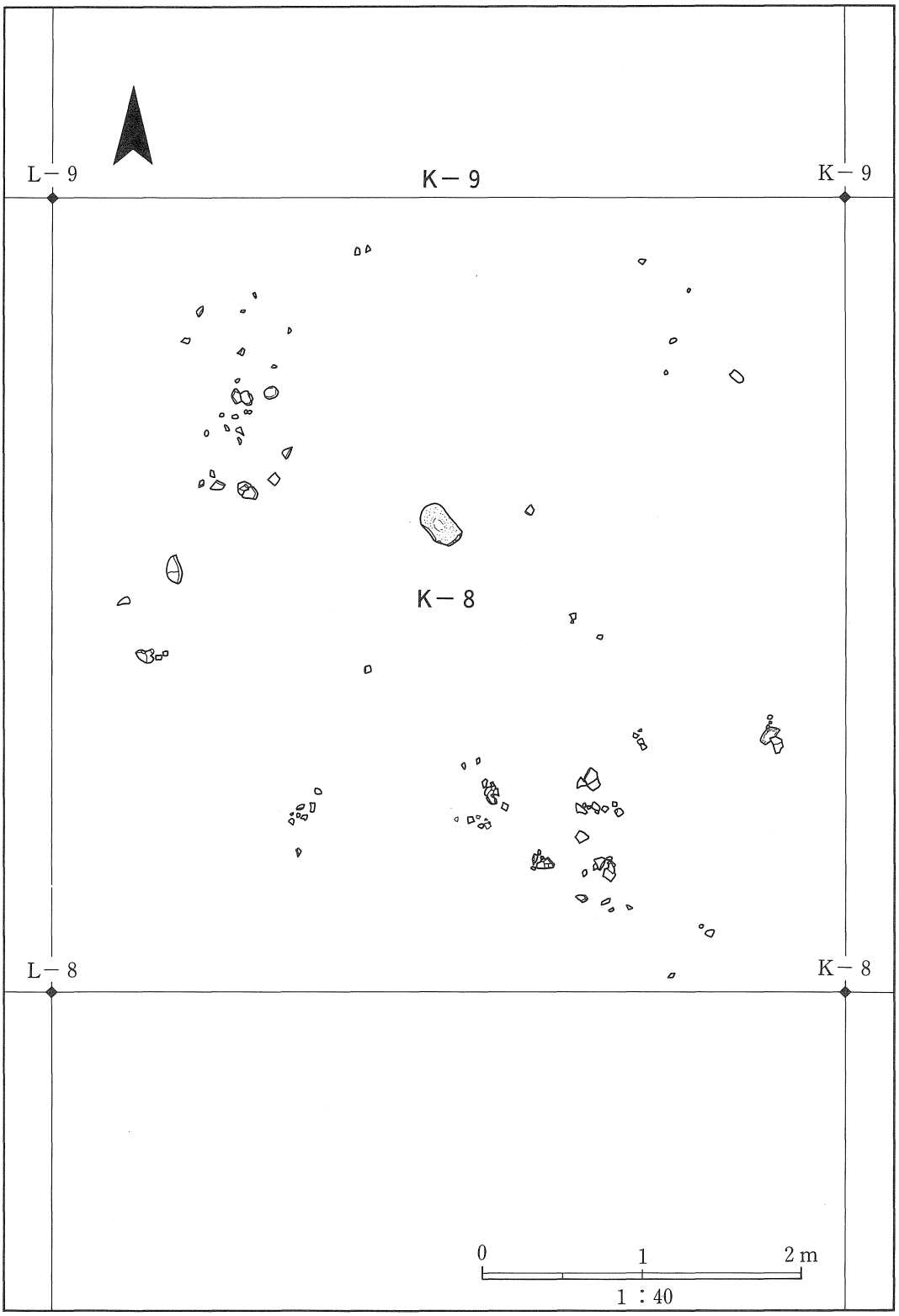



図12　祭祀遺構４（K－８）

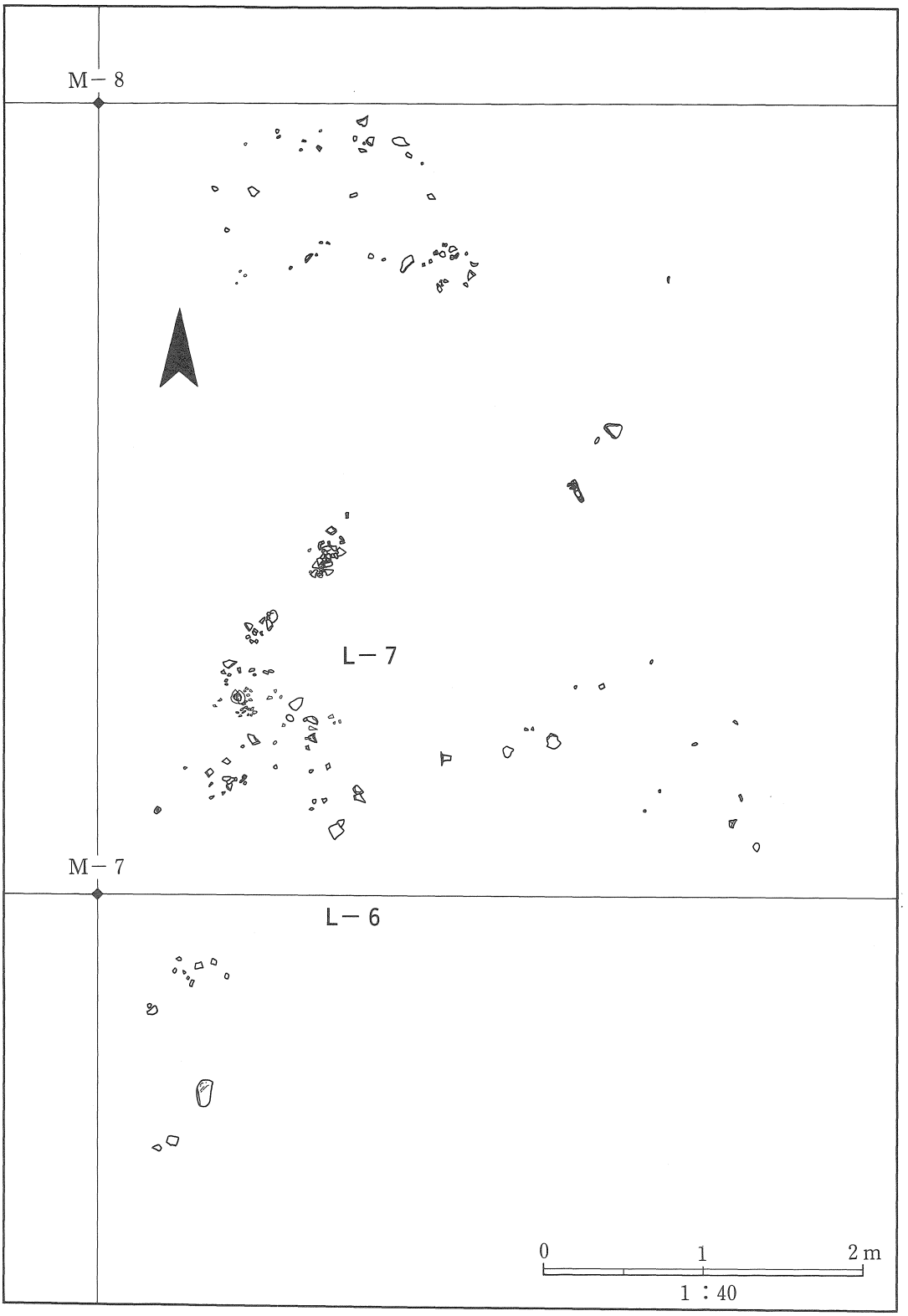



図13　祭祀遺構5（L－7）

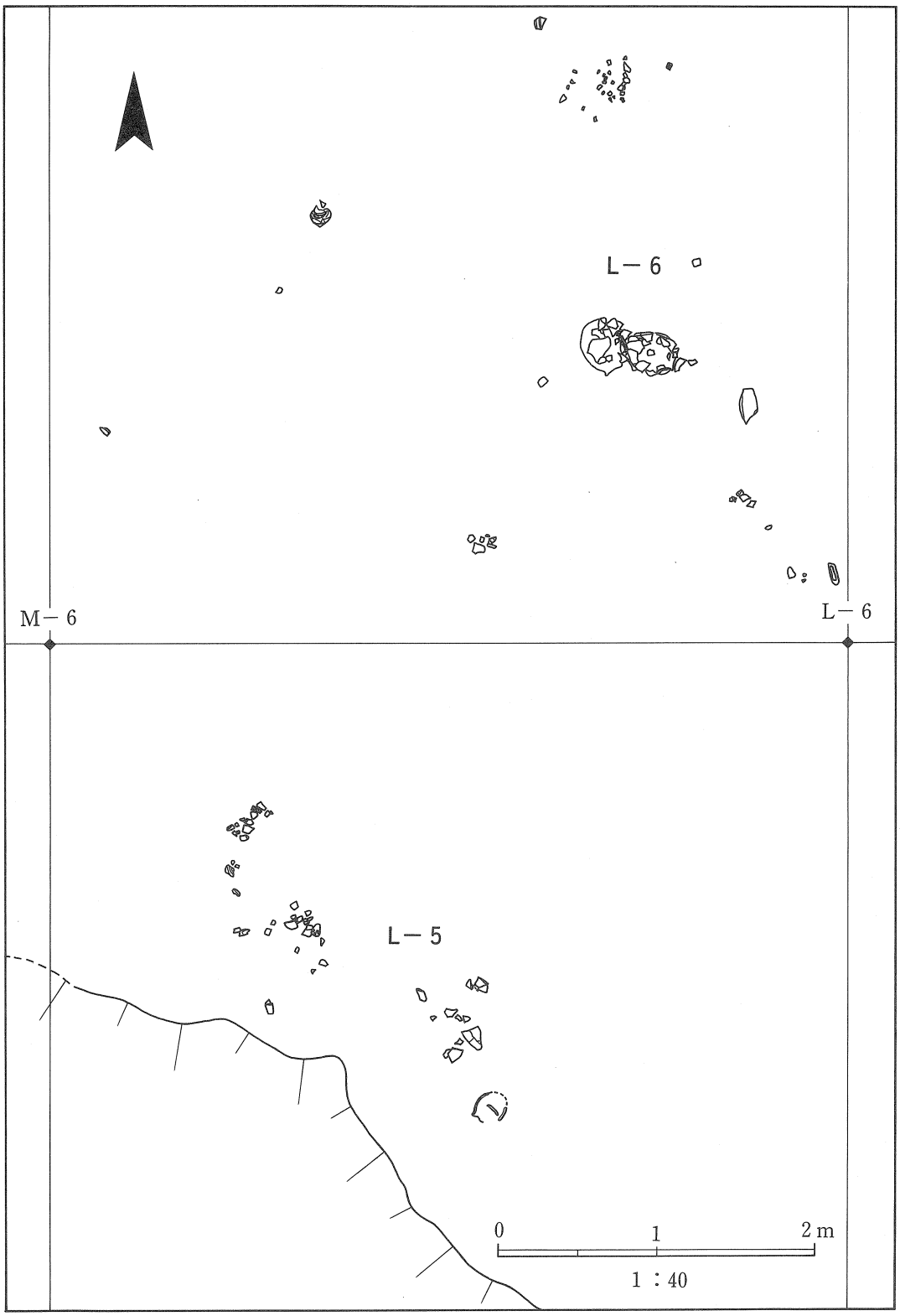



図14　祭祀遺構6（L－6、L－5）

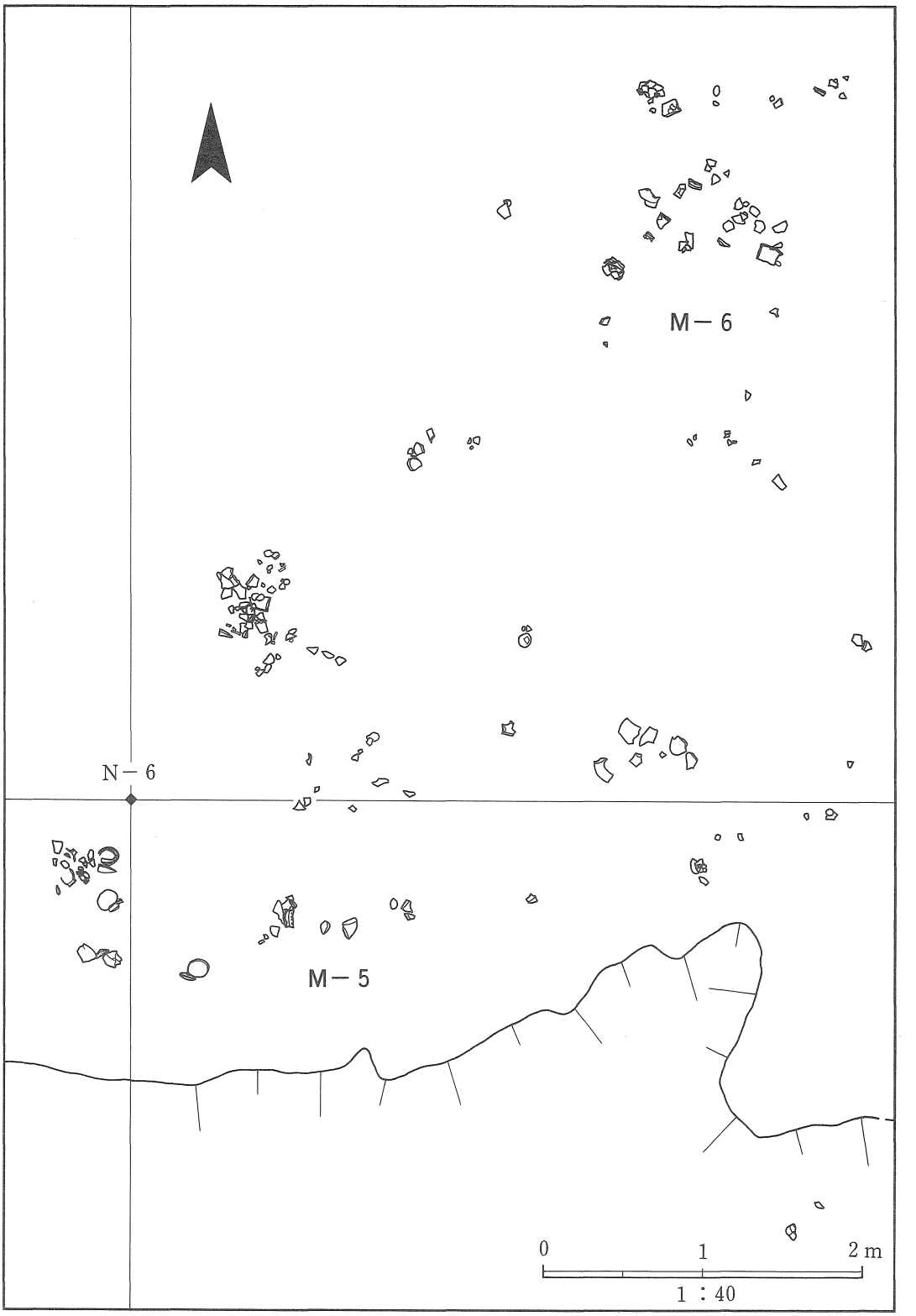



図15　祭祀遺構７（M－６、M－５）

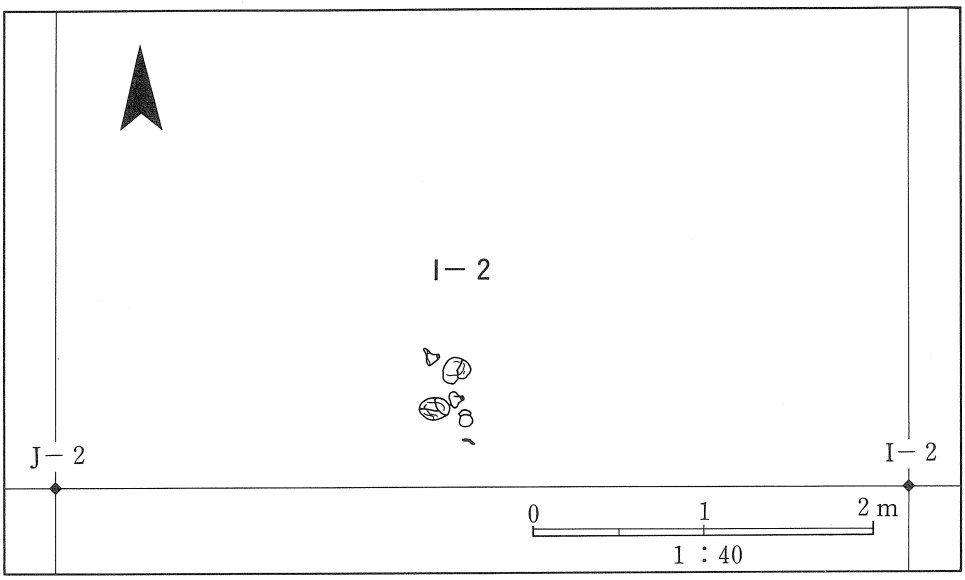



図16　祭祀遺構８（I－２）

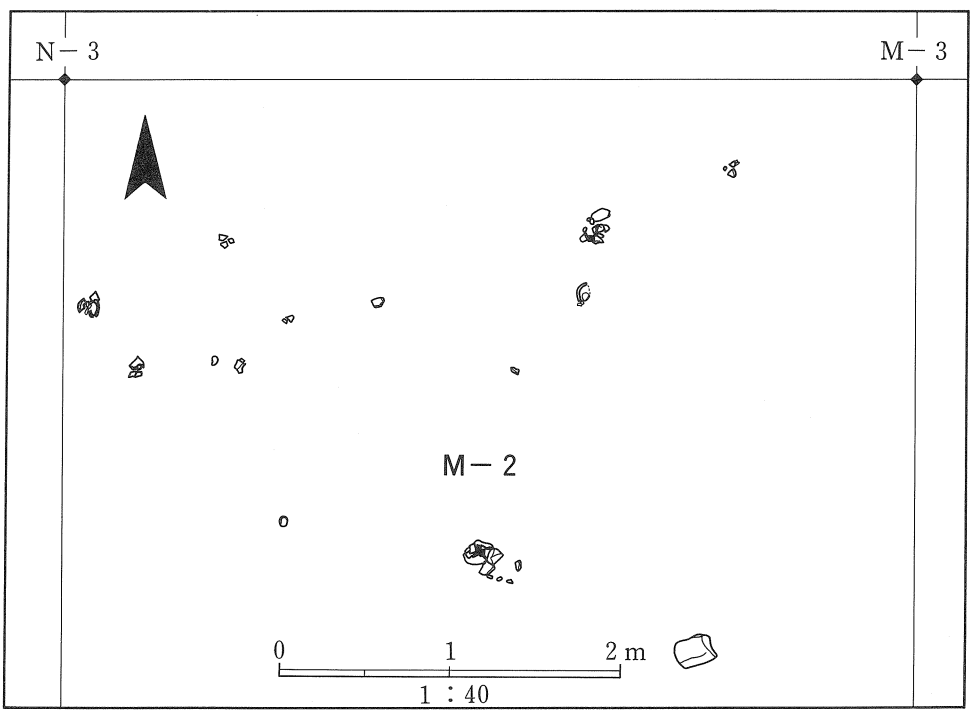



図17　祭祀遺構９（M－２）

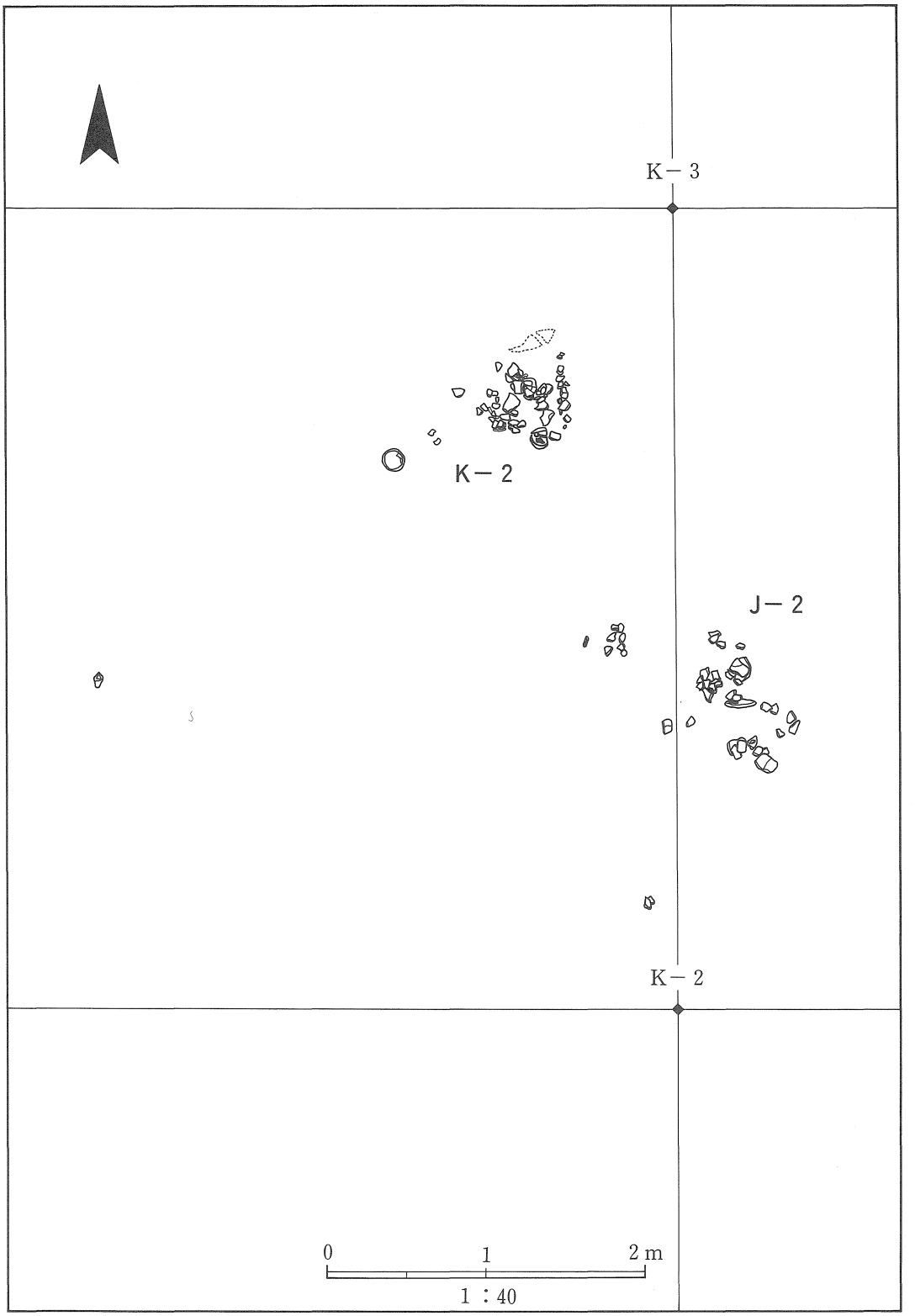



図18　祭祀遺構10（K－2、J－2）

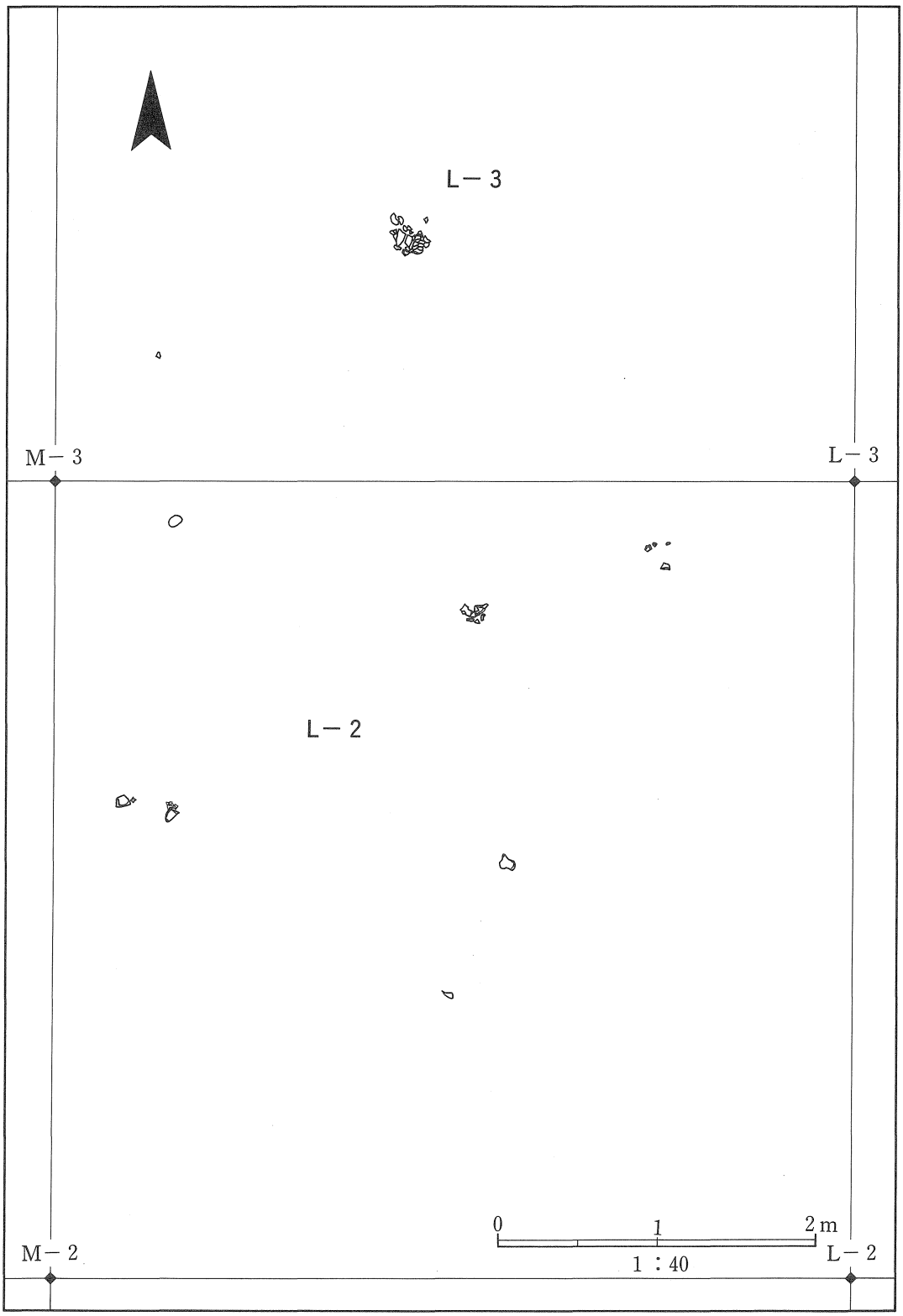



図19　祭祀遺構11（L－3、L－2）

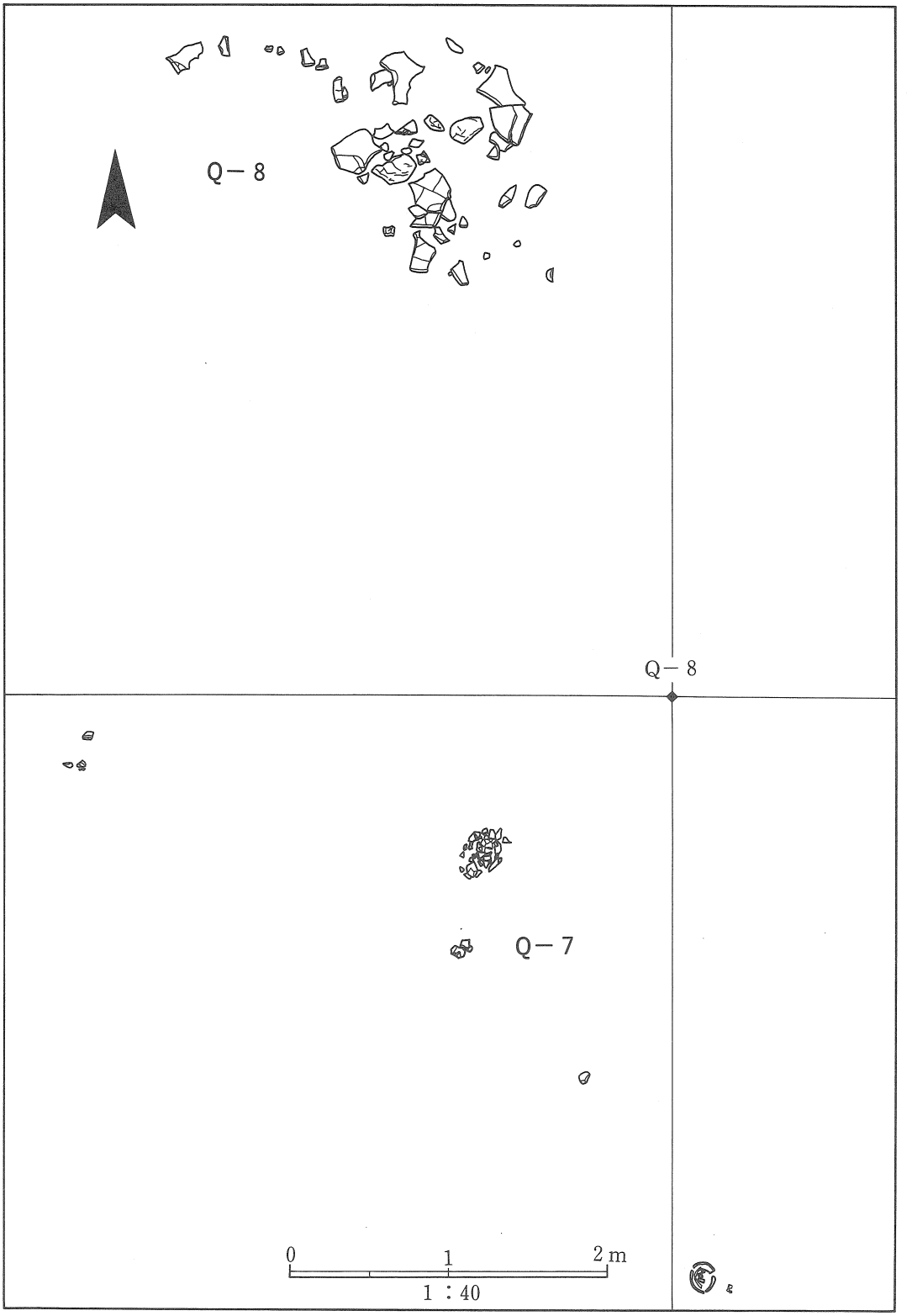



図20　祭祀遺構12（Q－8、Q－7）

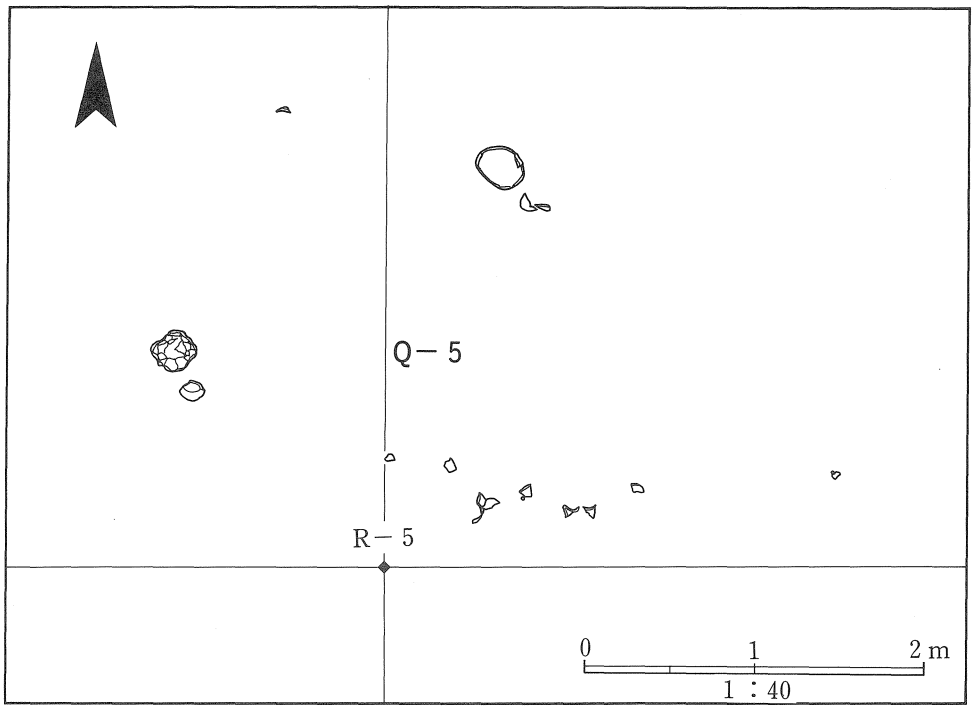



図21　祭祀遺構13（Q－5）

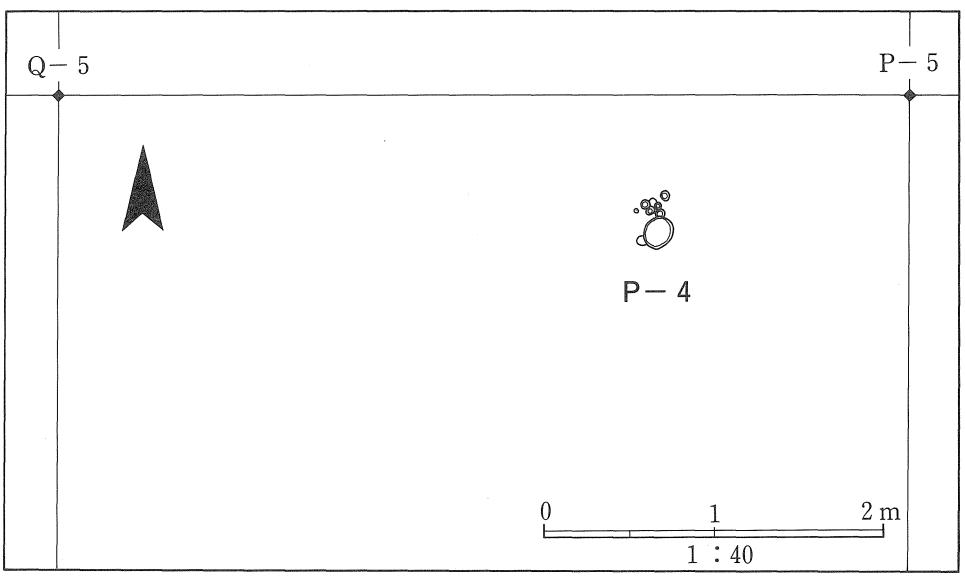



図22　祭祀遺構14（P－4）

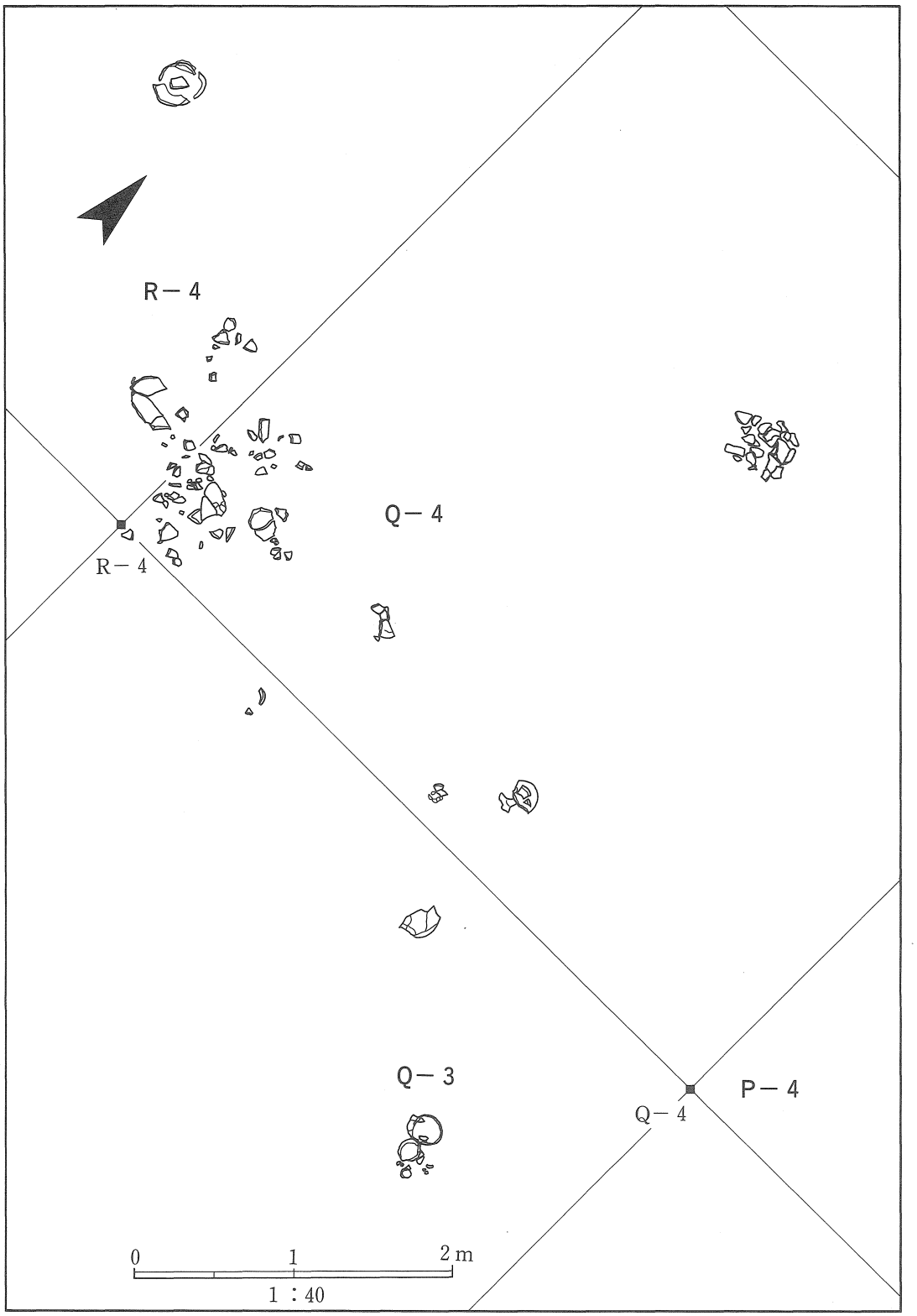



図23　祭祀遺構15（Q－4、Q－3）

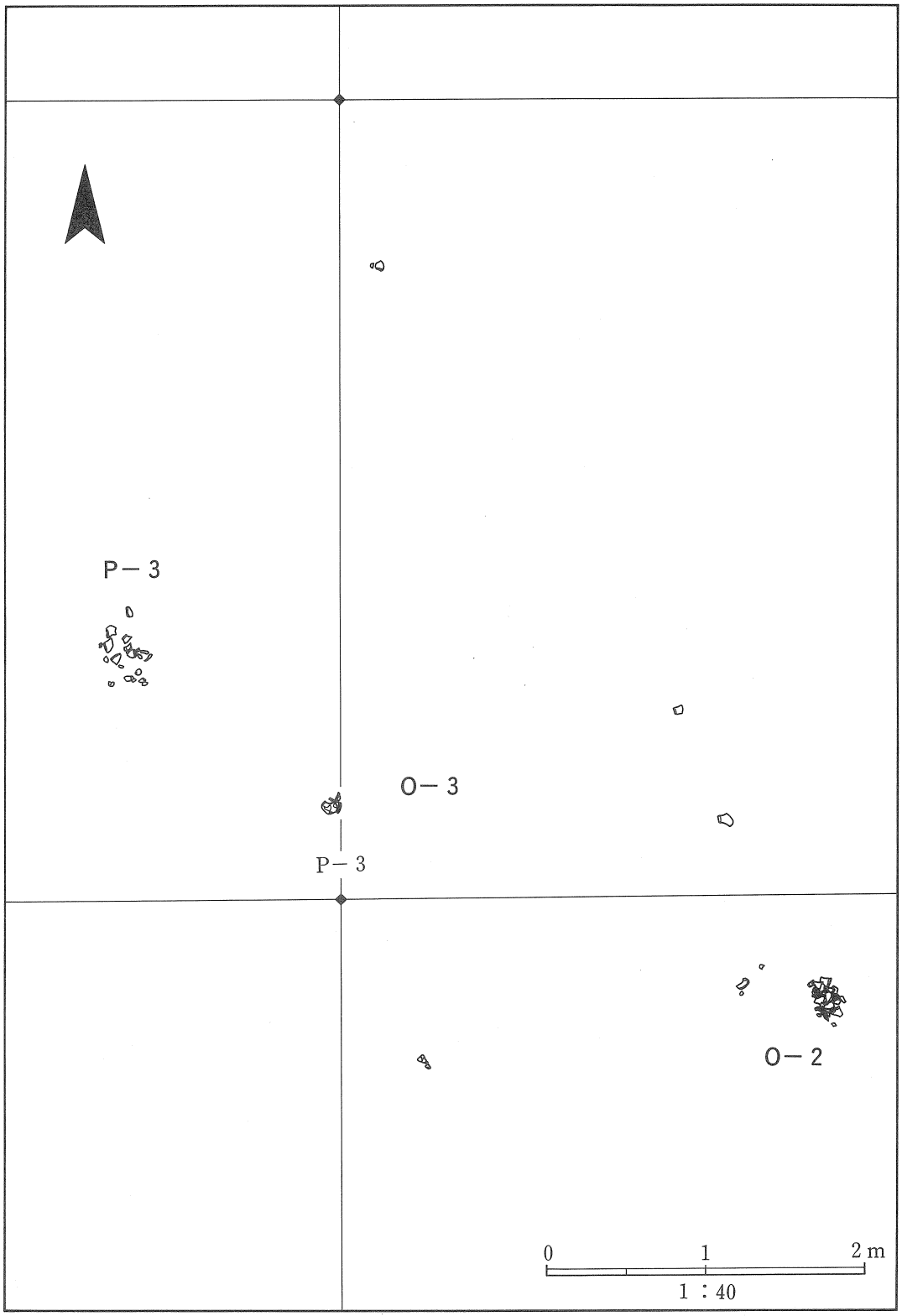



図24　祭祀遺構16（P－3，O－3，O－2）

# Ⅳ．遺　　物

## 1．土　師　器

出作遺跡では、多数の完形品や破片で構成される大規模な土器群（ＳＸ01～04）やこれらの周囲に点在している数個体の土器によって構成される小規模な土器群から、大量の土師器が出土した。これらの出土土師器のうち実測図を掲載し得たものは、出土個体数のごく僅かである。特に、ＳＸ03を除いては、整理作業の関係上全体の状況を把握するに至っていないことを予め断わって置きたい。なお、本節における土師器各部の名称は、図25に示したとおりである。法量ならびに形態の特徴・調整技法等については、土師器観察表に記した(表４)。

### Ａ　器種分類

甕・壺・小型丸底壺・鍋・高坏・坏・埦・短脚付坏・手捏土器について、形態・法量及び調整技法により分類基準を設定した。

**甕**　法量及び口縁端部の形態を分類基準とした。

法　量

Ａ類　器高30cm前後を測る大型のもの。

Ｂ類　器高25cm前後で、Ａ類を下回る大型のもの。

Ｃ類　器高18cm前後を測る中型のもの。

Ｄ類　器高14cm前後を測る小型のもの。

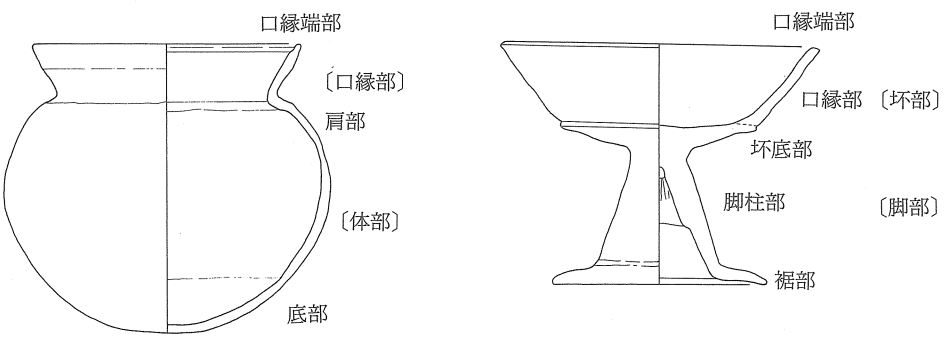



図25　土師器各部の名称

口縁端部形態　(図26)

a類　端部が肥厚するもの。

a類には、肥厚した上面が内傾する面をなすものも認められる。

b類　端部が丸くおさまるもの。

c類　端部が面をなすもの。

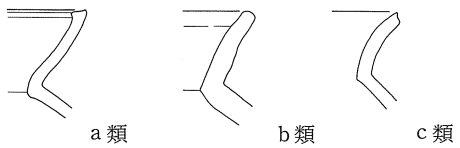


図26　甕口縁端部形態分類

**壺**　壺は、器高30～40cmを測る大型のA類と器高15cm前後のB類が認められる。A類は、個体数が少なく細分が不可能なため、B類のみ口縁部形態と体部形態を基準に分類した。

口縁部形態

a類　口縁部が直線的に立ち上がるもの。

b類　口縁部に僅かに稜を残し、屈曲して立ち上がるもの。

体部形態

1類　球形を呈するもの。

2類　最大径を上位にもち、肩部が張る形態を呈するもの。

3類　扁球形を呈するもの。

**小型丸底壺**　器高に占める口縁部高の比率を分類基準とした。

A類　口縁部高／器高が、0.5以上を示すもの。

B類　口縁部高／器高が、0.4～0.5を示すもの。

C類　口縁部高／器高が、0.3～0.4を示すもの。

D類　口縁部高／器高が、0.2～0.3を示すもの。

**鉢**　口縁部形態を分類基準とした。

A類　口縁部に稜が認められるもの。

B類　口縁部に稜が認められず、小型丸底壺的な形態を呈するもの。

**高　坏**　坏部及び脚部の形態、坏部と脚部の接合法を分類基準とした。(図27)

坏部形態

A類　水平に伸びる坏底部に口縁部を継ぎ足したもので、坏底部端が擬口縁状を呈し、明瞭な稜となって残るもの。

B類　内弯気味に立ち上がる坏底部に口縁部を継ぎ足したもので、坏底部端が僅かに稜となって残るもの。

C類　坏底部は内弯し、外上方へと立ち上がる口縁部へと続くもの。

D類　坏底部から口縁部にかけて内弯して立ち上がり、塊状を呈するもの。

脚部形態

a類　脚柱部から鋭く屈曲して、水平に伸びる裾部へと続くもの。

b類　脚柱部から緩く屈曲して裾部へと続き、裾部が比較的明瞭であるもの。

c類　脚柱部が外反気味に開き、裾部がほとんど認められないもの。

接合法

1類　脚柱部内面に突起が認められ、坏底部に枘（ほぞ）を作り出しているもの。　「枘法」

2類　円孔の穿たれている円盤状の坏底部に脚柱部を接合し、その後この円孔に上方から円錐状ないし円筒状の粘土塊を挿入しており、1類と同様に脚柱部内面に突起が認められるもの。　「粘土塊挿入法」

3類　円筒状の脚柱部を坏底部に挿入しているもの。　「脚柱挿入法」

4類　脚柱部内面の突起を下方より充塡した粘土塊や指頭によってつぶしたもの。　「下方充塡法」

**坏**　口縁部の形態を分類基準とした。

A類　口縁部が、内弯して立ち上がるもの。

B類　口縁部が、屈曲して立ち上がるもの。

C類　口縁部が、外傾して立ち上がるもの。

**埦**　口縁部及び底部の形態を分類基準とした。

A類　丸底の底部から内弯して立ち上がるもの。
口縁部は、僅かに屈曲して立ち上がる例が見受けられる。

B類　平底の底部から内弯して立ち上がるもの。

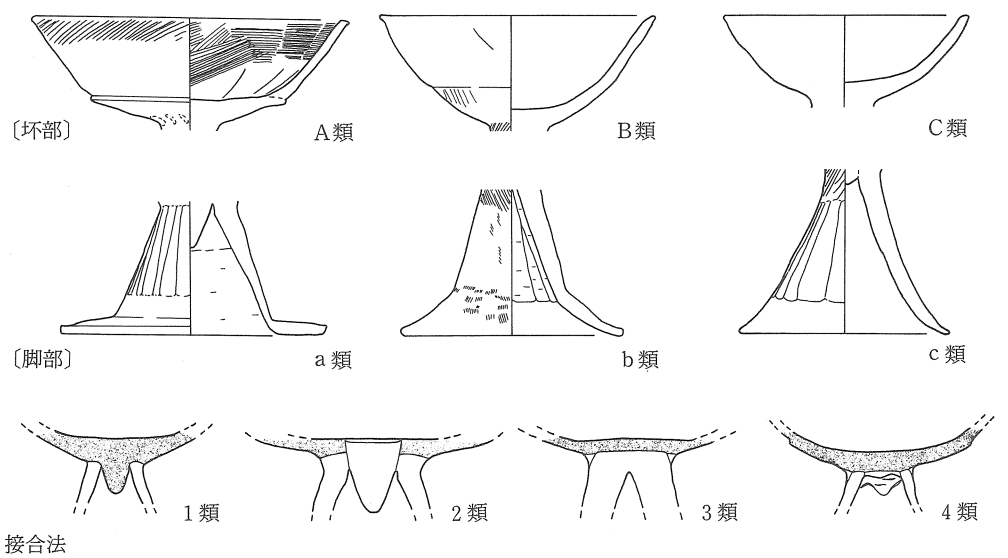



図27　高坏　坏部・脚部・接合法分類

**短脚付坏**　坏部の形態を分類基準とした。

A類　坏部が、内弯して立ち上がるもの。

B類　坏部が、屈曲して立ち上がるもの。

**手捏土器**　形態を分類基準とした。

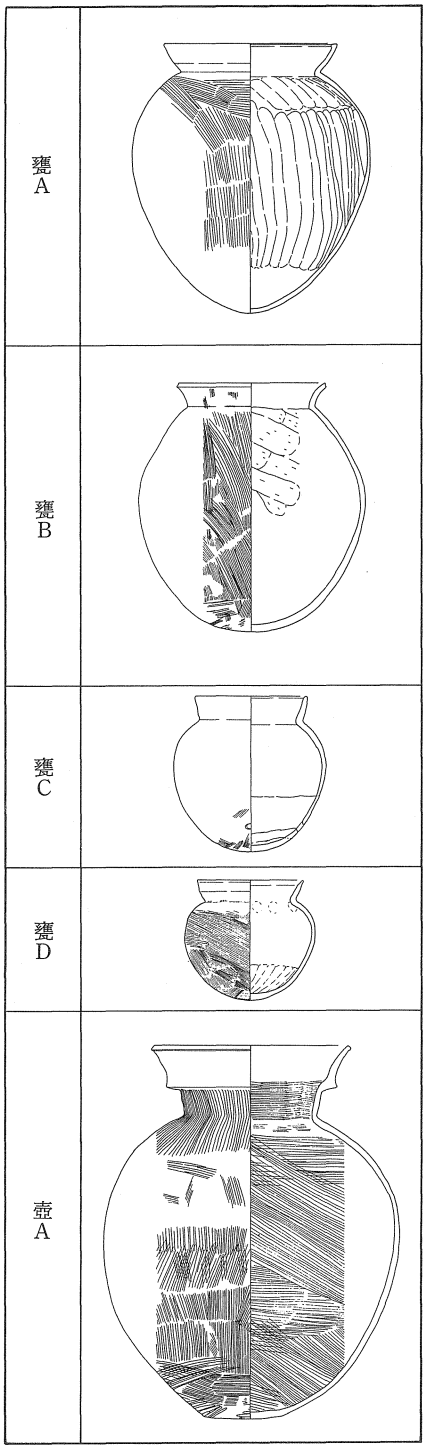
A類　壺形を呈するもの。

B類　埦形を呈し、丸底のもの。

C類　埦形を呈し、平底のもの。

D類　埦形を呈し、脚台部を持つもの。

E類　高坏形を呈するもの。



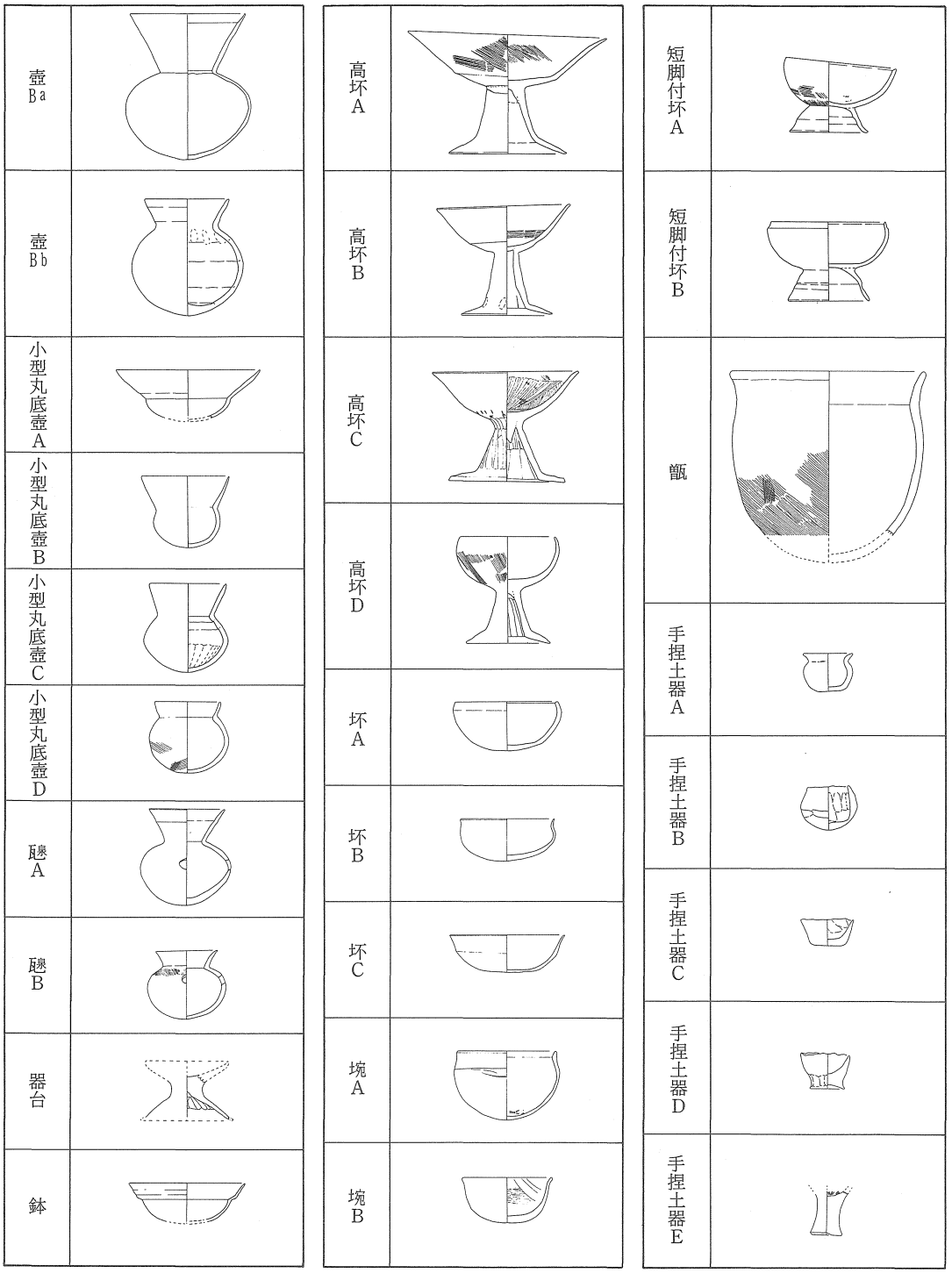

壺Ba
壺Bb
小型丸底壺A
小型丸底壺B
小型丸底壺C
小型丸底壺D
甕A
甕B
器台
鉢
高坏A
高坏B
高坏C
高坏D
坏A
坏B
坏C
埦A
埦B
短脚付坏A
短脚付坏B
甑
手捏土器A
手捏土器B
手捏土器C
手捏土器D
手捏土器E

図28　器種分類

## B　各遺構出土の土器（図30・33～49）

ここでは、ＳＸ01・ＳＸ02・ＳＸ03・ＳＢ01及びＮ－６区下層で出土した土師器を中心に述べることとしたい。

### ＳＸ01（図30・33～図38）

器種には、甕・壺・小型丸底壺・鉢・高坏・坏・埦・甑・手捏土器がある。このほかに黒色を呈する土器の一群が認められる。

甕（1001～1010）

甕には、Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ類がある。体部の形態は、肩部のはるもの（1001）と体部が長いもの（1004・1005）に分けられる。口縁端部の形態には、端部が肥厚する面をなすａ類（1001・1002・1006・1009）、丸くおさまるｂ類（1005・1007・1008・1010）、面をなすＣ類（1003・1004）がある。調整は、口縁部がヨコナデ、体部は外面がハケメ、内面がヘラケズリのものがほとんどである。色調は、茶褐色ないし赤褐色を呈するものが多い。胎土は砂粒を多量に含み粗い。焼成は、軟質である。

壺（1011～1018）

壺は、Ａ類（1110）が１点認められるほかは、全てＢ類である。Ｂ類では、口縁部が直線的に立ち上がるａ類が大半を占め、口縁部が屈曲するｂ類は僅かである。体部形態は、球形を呈する１類（1014～1016）、肩部が張る２類（1011～1013）、扁球形を呈する３類（1017・1018）がある。調整は、口縁部がヨコナデものが多く、体部は（1011・1014）の外面にハケメが僅かに認められる。（1012・1018）の内面には指ケズリが施されている。色調は、赤褐色ないし灰白色を呈するものがほとんどである。胎土は精良で、焼成は概して良好である。

小型丸底壺（1019）

小型丸底壺は、Ｄ類１点のみである。口縁部は短く外傾して立ち上がり、体部は球形を呈す。口縁部はヨコナデで、体部外面には僅かにハケメが認められる。

鉢（1020～1022）

鉢は、Ａ類が１点、Ｂ類が２点認められる。何れも焼成前に穿孔が行われている。調整は、Ａ類にはヘラミガキ、Ｂ類にはハケメが顕著である。色調は、赤褐色を呈す。胎土・焼成ともに良好である。

高坏（1023～1041）

高坏には、口径20cm以上・器高15cm前後の（1023～1025、1037・1038）と口径13～16cm・器高12cm前後の（1026～1036・1039～1041）が存在する。坏部形態はＡ・Ｂ・Ｃ類がほぼ同数であるのに対し、脚部形態はｂ類が多い。接合法では、４類が多用されている。調整は、坏部にヨコナデが多用されており、ハケメやヘラミガキが施されているものも僅かに認められる。脚部は外面にナデ、内面にヘラケズリ後ヨコナデが施されているものがほとんどである。穿孔は、脚柱部の中位に三方向から行われている（1037）。色調は、赤褐色ないし灰白

色を呈す。胎土は、砂粒を含み粗いものが多い。

坏（1042～1047）

坏は、口縁部が内弯して立ち上がるA類（1042～1044）、屈曲して立ち上がるB類（1045）、外傾して立ち上がるC類（1046・1047）に分類される。A類には、口縁端部が丸くおさまるA（1042・1043）と面をなす（1044）が認められる。調整は、ヨコナデないしヘラケズリ後ヨコナデが施されている（1043・1044）。色調は灰白色で、焼成は軟質であるものが多い。

埦（1048～1051）

埦は、丸底を呈しやや深めのA類（1051）、平底を呈し外傾して立ち上がるB類（1048～1050）がある。口縁端部は、いずれも丸くおさまる。調整は、（1051）の外面及び（1050）の内面がヘラケズリ後ヨコナデである。（1049）の内面にはヘラ状痕が認められる。色調は、暗赤褐色を呈するものが多く、胎土・焼成ともに良好である。

短脚付坏（1052・1053）

いずれもB類に分類される。脚部は屈曲して開き、端部は丸くおさまる。調整は坏部外面がハケメ及びヨコナデ、内面はナデによって平滑に仕上げられている。脚部はヨコナデである。色調は赤褐色を呈し、胎土・焼成ともにやや粗い。

器台（1054・1055）

調整は、受部外面がヨコハケ後ナデ、内面はヘラケズリ後ヘラミガキである。脚部内面にはヨコハケが放射状に施されている。色調は灰白色を呈し、胎土は精良である。

甑（1056）

体部は内弯気味に立ち上がり、外反する口縁部へと続く。底部は、丸底を呈すると考えられ、把手は不明である。調整は、体部下半にハケメが認められる。胎土は粗く、器厚も厚い。体部下半には煤が付着している。

粗製土器（1058）

体部は中位が張り、屈曲して外上方へと伸びる口縁部へと続く。底部は、平底を呈す。調整は、口縁部がヨコナデ、頸部にハケメが認められる。このほかにも丸底を呈するものが数点存在する。焼成は軟質で、胎土も粗い。

手捏土器（1059～1089）

壺形のA類（1059・1060）、埦形で丸底のB類（1061～1075）、埦形で平底のC類（1076～1083）、脚台部をもつD類（1084～1086）、高坏形のE類（1087～1089）がある。（1086）は、平底の埦形を呈するが、底部に脚台部が付くものと考えられる。

上記以外には、把手付埦の把手部分や（1057）のような甑ないし鍋の把手と考えられるものが数点出土している。また、（1055）は小型器台を倒置したような形態を呈す。類例は、松山市雄新中学校保管遺物中に認められる（正岡1980）。同例は、（1055）よりも一回り小さく、調整は外面に粗いヘラケズリが施されている①。

**黒色土師器**（図39）

器種には、壺・高坏・短脚付坏・坏がある。

壺（1091～1093）

（1091）は、複合口縁を呈す。外反して開く頸部から屈折し、外上方へ伸びる口縁部へと続く。端部は丸くおさまる。体部は、最大径を中位に持つ球形と考えられる。調整は、体部外面にヘラミガキとタテハケが施されており、内面は指ケズリである。頸部内面には、しぼり目が認められる。B類の（1092・1093）は、口縁部が外上方へと直線的に伸び、端部は丸くおさまる。調整は、（1092）の体部外面にはヘラミガキ、（1093）には僅かにハケメが認められる。体部内面は、指ケズリが行われている。

高坏（1094）

坏部は、内弯気味に立ち上がり埦状を呈するD類である。口縁端部は、丸くおさまる。脚部は、直線的に広がる脚柱部から緩く屈折し、裾部へと続く。脚端部は、丸くおさまる。調整は、坏部外面がタテハケ、内面は平滑に仕上げられている。脚柱部内面は、ヘラケズリ後ヨコナデ。

短脚付坏（1095・1096）

何れもA類である。端部は、僅かに内傾する面をなす。脚部は外反して開き、端部は薄く尖り気味におさまる。調整は、坏部外面がタテハケ、内面は平滑である。

埦（1097）

体部が内弯して立ち上がり、口縁部は外方へ屈曲する。調整は、外面にハケメが認められる。

坏（1098・1099）

何れもA類に分類される。端部は、丸くおさまる。調整は、ともにナデである。

**ＳＸ03**（図40～45）

器種には、甕・壺・小型丸底壺・鉢・高坏・粗製土器・手捏土器がある。

甕（1101～1109）

甕には、A・B・C・D類がある。体部の形態は、A類の場合（1106）を除いて、やや長めの球形である。B・C・D類は、最大径を体部上半に持ち、肩の張る器形である。口縁端部の形態には、a類（1105～1107）、b類（1101・1102・1104・1108・1109）、c類（1103）がある。さらにa類は、内傾する面をなすａ１類(1106・1107)と丸く肥厚するａ２類(1105)とに細分される。調整は、口縁部がヨコナデ、体部外面がハケメである。体部内面は、(1101・1105）にはヘラケズリ、(1106・1109）には指ケズリ、(1104）にはヘラ状工具痕と思われるものが認められる。色調は、灰白色ないし明赤褐色を呈す。胎土は精良で、焼成は概して良好である。なかでも（1102・1104）は、胎土が極めて精緻である。(1108）の体部下半には、焼成後の穿孔が認められる。

壺（1110～1117）

A類は、（1110）の１点のみである。体部は、最大径をほぼ中位に持ち、球形を呈す。口縁部は外面に僅かに稜を残して外傾し、端部は面をなす。調整は、体部外面がハケメ後ナデそのほかはナデである。胎土・焼成は、ともに良好である。B類には、ａ類（1111～1113・1115）、ｂ類（1114）、ｃ類（1116・1117）がある。体部形態では、球形を呈する１類（1111・1112・1115・1116）、肩部がはる２類（1113・1114・1117）のみで、3類は認められない。調整は、口縁部及び体部外面にハケメが施されるものが多い。体部内面は、（1112～1114）に指ケズリが認められるほかは不明である。色調は、赤褐色ないし灰白色を呈す。胎土・焼成は、ともに良好である。

小型丸底壺（1118～1121・1123）

小型丸底壺は、C類（1118・1119・1123）とD類（1120・1121）がある。調整は、口縁部がヨコナデ、体部外面は（1118・1119）の底部がヘラケズリ後ヨコナデ、そのほかの部分はヨコナデである。（1118）の体部内面には、指ケズリが認められる。色調は、淡赤褐色ないし灰白色を呈す。胎土は細砂粒を含むものが多く、焼成は良好である。このほかに平底を呈する（1122）や、複合口縁を呈し外面にハケメを施した（1124）などが認められる。（1124）は、口縁部に手捏土器がはめ込まれた状態で出土し、中から臼玉２個が出土している。その口縁部外面には、籾痕が認められる。

甕（1125）

A類の甕である。調整は、口縁部がヨコナデ、体部外面がヘラミガキである。体部の上半には、指頭圧痕が顕著である。穿孔は、焼成前に外方より行われている。

高坏（1126～1152）

坏部形態はA・C類、脚部形態はａ・ｂ類、接合法では１・２類が多い。調整は、坏部の場合ヨコナデを施したものが多く、ハケメやヘラミガキの認められるものもある。脚柱部は、外面がヘラナデ、内面がヘラケズリ後ヨコナデである。裾部はヨコナデを施したものがほとんどである。色調は、明赤褐色ないし灰白色のものが多い。胎土はやや粗いが、焼成は良好である。（1142・1143）の脚柱部中位には、穿孔が認められる。

粗製土器（1153～1166）

体部最大径が口径を上回るものと、そうでないものとに分類される。調整は、口縁部がヨコナデ、体部外面はハケメないしヘラナデ、内面は指ケズリの施されているものが多い。色調は、灰白色もしくは明赤褐色を呈す。胎土・焼成ともに粗い。

手捏土器（1167～1182）

手捏土器には、A類とB類がある。何れも指頭圧痕が顕著である。胎土はやや粗いが、焼成は良好である。

ＳＢ01（図46）

器種には、甕・小型壺・高坏・坏・甑・手捏土器がある。

甕（1183～1185）

甕は、全体の器形を窺えるものは少ないが、Ａ類とＤ類がある。口縁部形態は、（1183）がａ類、（1184・1185）がｂ類である。調整は、口縁部が何れもヨコナデ、体部外面は（1184・1185）がハケメ、内面は（1184）が指ケズリである。

小型壺（1187）

口縁部は外傾して開き、端部は丸くおさまる。体部はやや肩の張る器形で、底部は平底を呈す。調整は、口縁部及び体部内面がナデで、指頭圧痕も内面上半に認められる。

坏（1188・1189）

坏には、Ａ類とＢ類がある。口縁端部の形態は、（1188）が内傾する面をなし、（1189）は丸くおさまる。調整は、口縁部にヨコナデの認められるほかは不明瞭である。

甑（1186）

外傾して立ち上がり、口縁部はゆるく外反する。口縁端部は面をなして、内側へ僅かに肥厚する。その端面は僅かにくぼんでいる。調整は、体部外面の上半にハケメが施されている。器壁は薄く、焼成は堅緻である。把手は、不明である。

手捏土器（1190）

埦形のＡ類が１個体出土している。口縁端部は、薄く尖り気味で、指頭圧痕が顕著である。

このほかの器種には、高坏がある。全体の器形が窺えるものは少ないが、坏部の形態はＡ類が多く認められる。胎土は、ほとんどのものが砂粒を多く含み、焼成は軟質である。

高坏は、実測不可能な小片であるが、口縁部と坏底部の境に明瞭な稜を残すＡ類が認められる。

Ｎ－６区下層（図47）

ＳＸ03西側で出土した土器群である。器種には、壺・甕・高坏・器台・粗製土器がある。

壺（1191・1193）

（1193）は、複合口縁を呈するＡ類である。頸部は外傾して立ち上がり、屈折して外反する口縁部へと続く。屈折部外面は、鋭い稜となる。端部は面をなし、外側へ僅かに肥厚する。体部は、最大径をほぼ中位にもち、長胴を呈す。底部は、平底である。調整は、口縁部がヨコナデ、体部外面は頸部から体部下半にかけてタテハケ、底部付近にはヨコハケのほか、僅かにタタキ目が認められる。内面は頸部から底部にかけて、横ないし斜め方向のハケメが施されている。Ｂ類の（1191）は、口縁部が屈曲して立ち上がり、端部は丸くおさまる。体部は、球形を呈す。調整は、口縁部がヨコナデ、体部外面がナデである。底部は、ヘラケズリ後ナデである。

甕（1192）

甕（1192）

甕は、C類のみである。口縁部は緩く外反し、端部は丸くおさまる。調整は、口縁端部がヨコナデ、体部外面はナデ、内面はヘラケズリ後ナデである。内面上半には、指頭圧痕が認められる。

高坏（1194）

坏部は、稜を残し、外反して開く。脚柱部と裾部との境は比較的明瞭である。接合法は、下方から粘土の充塡が認められる4類である。調整は、坏部にハケメ、脚柱部外面にヘラミガキ、内面にはヘラケズリ後ヨコナデが施されている。裾部は、ヨコナデである。

器台（1195）

受部の形態は不明である。脚部は直線的に伸び、端部は外方へ屈曲すると思われる。調整は、脚部外面にヘラミガキ、内面はヘラケズリ後ヨコナデを施している。

粗製土器（1196）

平底の底部から、内弯して立ち上がる粗製の埦である。調整は、内面にナデが認められるほかは不明である。底部外面に、黒斑が認められる。

## C　出土土師器の編年的位置

### a　出土土師器の概要

ここでは、前項の各遺構のなかで、器種構成が明瞭なＳＸ01とＳＸ03を中心に検討を行いたい。

ＳＸ01は、甕Ａ～Ｄ類、壺Ｂ類、小型丸底壺Ｄ類、𤭯Ａ・Ｂ類、高坏Ａ～Ｄ類、坏Ａ～Ｃ類、埦Ａ・Ｂ類、短脚付坏Ｂ類、器台、甑、粗製土器、手捏土器Ａ～Ｅ類と黒色土師器で構成される。甕は、Ａ・Ｂ類が主体を占める。口縁端部は、肥厚する形態のａ類が多く見受けられる。調整は、体部外面ハケメ・内面ヘラケズリが行われている。壺Ｂ類は、形態・法量ともに個体差が著しく、調整も一様ではない。小型丸底壺は、Ｄ類のみである。𤭯は、口縁部に稜が認められるＡ類１点、稜が認められないＢ類２点を数える。高坏は、器高10～13cmと器高14～17cmの２種がある。坏部の形態は、Ａ～Ｄ類のうちＡ・Ｂ類が主体を占める。脚部はｂ類が多く、接合法は脚部内面に残る突起をつぶした４類の方法が多用されている。調整は、坏部ではＣ類にヘラミガキが施されるほかは、ヨコナデないしハケメのものが多い。坏はＡ類、埦はＢ類が多い。短脚付坏は、Ａ・Ｂ類があり、Ｂ類は黒色土師器である。手捏土器は、Ｂ・Ｃ類が主体を占める。

ＳＸ03は、甕Ａ～Ｄ類、壺Ａ・Ｂ類、小型丸底壺Ｃ・Ｄ類、𤭯Ａ類、高坏Ａ～Ｃ類、粗製土器、手捏土器Ｂ・Ｃ類で構成される。甕は、Ｂ類が主体を占める。調整は、体部外面がハケメ、内面がヘラケズリ後にヨコナデが行われている例が多い。壺は、Ａ類が１点認められるほかはすべてＢ類である。形態・法量は、ほぼ同様である。調整は、ハケメが主体であ

る。小型丸底壺は、C類が主体を占める。口縁部が屈曲し、複合口縁状を呈するものも見受けられる。調整は、ヨコナデを主体とする。鬶は、A類1点のみである。高坏は、坏部形態がA・C類、脚部形態がa・b類、接合法では1・2類が顕著である。粗製土器は、個体毎に形態・法量が一様ではなく、調整も異なる。手捏土器は、B類が主体である。

以上のように、SX01・SX03の土師器には、器種構成・調整・形態等様々な点で相違点が認められる。両遺構の先後関係は、須恵器の共伴の有無から、SX03がSX01に先行する時期に位置づけられる。この関係に即して両遺構を比較すると、SX01ではSX03に認められた壺A類・小型丸底壺C類・鬶A類が消滅し、新たに坏・埦・甑・短脚付坏等の器種が加わる。甕は、両遺構ともにA～D類の各形式が認められるが、SX01ではA類の比率が高い。調整は、SX03では体部内面をヘラケズリ後ヨコナデしているものが多いのに対し、SX01では内面ヘラケズリ後に調整を加える例は少ない。また、SX01はSX03に比して、胎土が粗く、焼成も軟質である。壺B類は、SX03では口径と体部最大径及び口径と器高との関係にある程度のまとまりをみせているのに対し、SX01では、法量が近い数値を示すものも認められるが、全体的にはばらつきが大きい。調整もSX03はハケメが多用されているが、SX01は各個体毎に異なる。小型丸底壺は、両遺構に認められるが、SX03ではC・D類が存在するのに対し、SX01ではD類のみとなり、SX03からSX01にかけて消滅化の傾向を示している。調整は、ヘラミガキの多用から、次第にナデやハケメへと推移する。小型丸底壺は、時期が新しくなるにつれて器高に占める口縁部高の比率が減少する傾向があり、SX03からSX01に見られる推移は、これを示すものである。鬶は、須恵器の特徴を残すA類が両遺構に認められるが、SX01では小型丸底壺に近い形態のB類が加わる。高坏は、SX03ではCb類が最も多く、次いでAb・Aa類が多い。SX01では、Bb類が最も多い。調整は、SX03では坏部内面及び脚柱部外面にヘラミガキが施されているものが顕著であるのに対し、SX01ではヘラミガキが施されているものはほとんどない。胎土・焼成の面においてもSX01は砂粒を多く含み、軟質である。全体的にSX03に比べて、粗製である感を受ける。また、SX03では、黒斑が認められるものが多いのに対し、SX01には認められないという差異も存在する。粗製土器は、SX03では数多く出土しているが、その個体差は著しい。SX01ではその数は減少する。手捏土器は、SX03ではB類が主体であったものが、SX01では種類が増しB・C類が主体となる。

以上のように、SX03からSX01にかけての変化は、器種構成の面に顕著に現れ、調整の簡略化、焼成・胎土等の粗質化の傾向が窺える。

**b　編年的位置**

本遺跡出土の土師器は、小型丸底壺の存在から、奈良県布留遺跡出土遺物を標識とする布留式土器に比定されるものである。布留式土器は、その設定に際して、「従来知られていた藤原宮址や平城宮址出土の土師器と比較した場合に古い様相を示す土師器」として認識され

た（末永1938）。その後、坪井清足氏による岡山県高島王泊遺跡の検討の結果、布留式に比定される第５層出土土器に対比し得る良好な資料として、大阪府小若江北遺跡の資料が提示された（坪井1956）。また、大阪府船橋遺跡の調査では、器種構成・技法等の推移が、層位的に捉えられ、土師器と須恵器との共伴関係、両者の技法の交流や機能の分化が明らかにされた（原口他1962）。その後安達厚三・木下正史氏により、飛鳥地域の土師器について、器種の消長・器形・調整手法等に基づいた編年案が示された（安達・木下1974）。

ここでは、これまでの研究史をふまえて、器種の消長・調整の変化や須恵器の共伴関係が明らかな船橋遺跡と飛鳥地域の諸遺跡出土の資料との比較を中心に、本遺跡出土の土師器の編年的位置づけを行いたい。この中で注目したいのは、小型丸底壺に見られる器高に占める口縁部高の比率である。これは、小型丸底壺にみられる盛行－崩壊－消滅の過程を最も端的に表しており、時期が新しくなるにつれて器高に占める口縁部高の比率が減少する傾向を示している。

ＳＸ03では、小形丸底壺Ｃ・Ｄ類が認められる。これらは形態的に、船橋遺跡Ｏ地区包含層第Ⅰ層出土遺物（以下、船橋Ｏ－Ⅰと略す）ないし奈良県上ノ井手遺跡ＳＥ030上層出土遺物に近い特徴を示している。しかし、調整の面では、ヨコナデが多用されている点が、上ノ井手例に近い。その時期は、須恵器出現後の所産であるか否かという点が問題となるが、これは𤭯Ａ類（1125）から考えることとしたい。（1125）は、口縁部の特徴などから、須恵器𤭯の形態を模倣したものと考えられる。体部の穿孔は、焼成前に行われており、製作当初より𤭯としての用途を意識していたことが窺える。このような模倣𤭯の存在については、以前から指摘されているところであり、その時期は模倣坏と同様に須恵器と土師器が共伴を始める段階の所産と考えられていた（藤沢1958・横山1959）。しかし、各地の土師器𤭯の出土

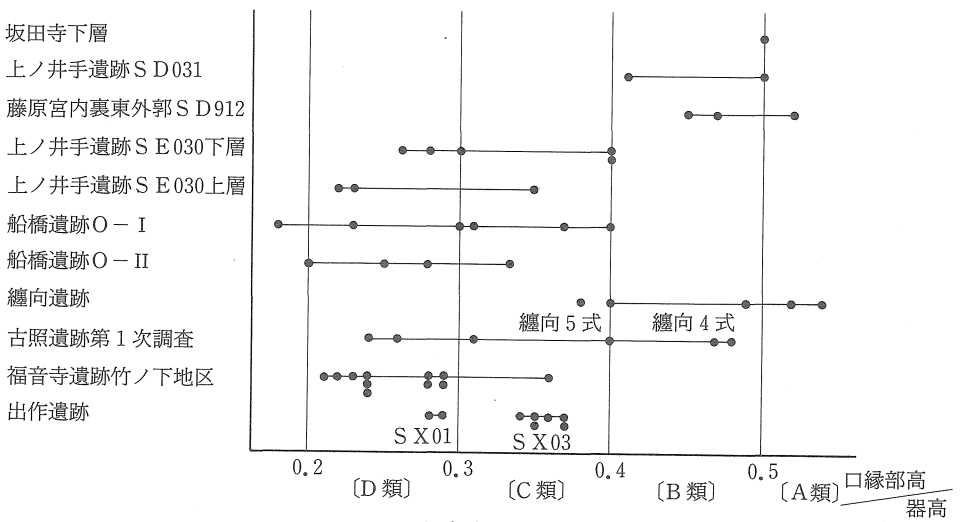



図29　小型丸底壺法量比較

例を検討すると必ずしも須恵器が共伴を始める段階以降ではなく、むしろその地域において須恵器の導入に先駆けて出土する例が多いように見受けられる②。これは、甑の持つ祭祀的な意味合いが、坏等の器種と異なることから、他種に先駆けて模倣が行われたものと考えられる。これらの点から、ＳＸ03の時期は、須恵器出現後であり、ＴＫ73型式ないしＴＫ216型式の須恵器が共伴するものと想定される。

ＳＸ01出土遺物は、小型丸底壺の消滅化や坏・埦・甑等の新たな器種の出現・調整の簡略化などの点が、船橋Ｈ－Ⅱ段階にも認められることから、該期に併行するものと考える。さらに、ＳＸ01出土の須恵器は、大阪府陶邑古窯址群の編年（田辺1966）のＴＫ208型式からＴＫ23型式に比定されており、この点においても船橋Ｈ－Ⅱとの併行関係が辿れる。

また、ＳＸ03の西側に位置するＮ－６区出土の一群（図47）は、ＳＸ03よりも下層の青灰色粘質土層中から出土している。(1193）とＳＸ03出土の壺Ａ類（1110）とを比較した場合、（1193）は複合口縁を呈するのに対し、（1110）は口縁部に僅かに稜をのこすものの直線的に立ち上がる。調整の面では、(1193）はハケメが多用され、底部付近にタタキ目が残っているが、(1110）はヘラミガキとナデが主体となる。底部も（1193）では平底のものが（1110）では完全な丸底となっているなどの特徴があげられる。小型器台（1195）の存在などからもＮ６区下層の土器群は、ＳＸ03に先行するものと考えられる。時期的には、(1193）は口縁端部の処理や屈折部が鋭く突出して擬口縁状を呈する点など、船橋遺跡Ｏ－Ｉ出土の壺Ａ２や岡山県上東遺跡亀川地区東斜面上層（伊藤・柳瀬他1974）及び川入遺跡法万寺地区Ｐ－２（柳瀬他1977）、上ノ井手遺跡ＳＤ031出土の壺Ａ類に似た特徴を示している。しかし、（1193）は、底部が平底で、タタキ目が認められるなど船橋Ｏ－Ｉ例よりもむしろ上東・川入・上ノ井手例に類似点が見い出される。小型器台（1195）は、古照遺跡例のように受部がほぼ水平で端部が上方へ突出する形態を呈すると思われる（松山市教委1974）。以上の点から、Ｎ－６区下層の一群は資料的に貧弱であるが、小若江北式併行とすることができよう。

さらに、本遺跡の上限を考える上で、(1231）と（1232）の存在がある（図30）。(1231）

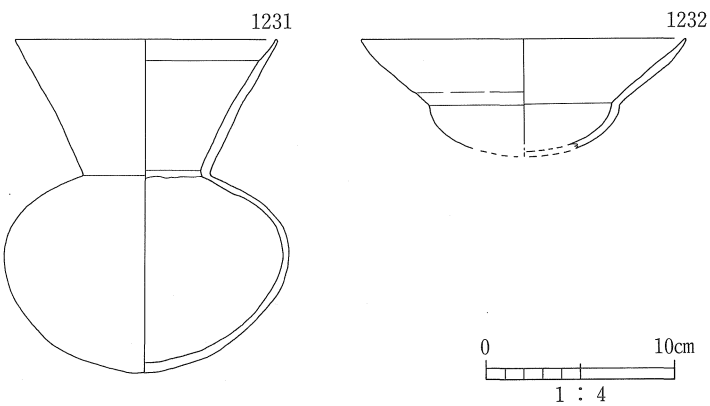



図30　ＳＸ01出土の土師器(1)

は、ＳＸ01－55区の下部から出土した。形態は、最大径を中位に持つ扁球形状の体部から鋭く屈折し、外上方へと直線的に伸びる口縁部へと続く。端部は、ヨコナデによって内面がくぼみ、内側へ丸く肥厚する。調整は、口縁部内外面ともにヨコナデ、体部外面の上半はヘラミガキ、下半はヘラケズリ後に入念なヘラミガキが施されている。体部内面は、全面ヘラミガキである。また、内面は口縁部と体部との接合痕が顕著である。（1231）は、口縁端部の処理やヘラミガキの多用など平城宮址下層（安達1969）や坂田寺下層（安達・木下1974）、船橋Ｈ－Ｉに類例が認められる。これらは、焼成・胎土ともに良好で、器壁は薄く、入念な調整が施されている。また、小若江北遺跡・藤原宮内裏東外郭ＳＤ912（安達・木下1974）にも類例が認められるが、調整はヨコナデのみである。以上の点から、（1231）は先に掲げた平城宮址下層や坂田寺下層出土例にほぼ併行する時期の所産とすることができよう。（1232）は、表採資料である。体部は、内弯して立ち上がり、外上方へ開く口縁部へと続く。また、端部は薄く尖り気味である。調整は、ヘラミガキが顕著であり、特に体部外面はヘラケズリ後ヘラミガキが施されている。（1232）は、類例に乏しいが、焼成・胎土・色調とともに入念な調整なども（1231）と同様であり、（1231）と同時期の所産として捉えておきたい。

ＳＸ02では、（1193）と同様に口縁部が肥厚し、屈折部が擬口縁状を呈す壺Ａ類（1202）が出土している。いずれも頸部内面にヨコハケを施している点は同様であるが、（1202）は底部が丸底を呈し、内面ヘラケズリを施している点から、（1193）よりもやや後出する感がある。さらに、ＳＸ02では、脚部に４方透かしをもつ高坏・縄蓆文のタタキ目の認められる甕等の須恵器や黒色土師器の存在から、ＳＸ03からＳＸ01に併行する年代幅が想定される。しかし、ＳＸ02については、整理が進んでおらず、器種構成等の詳細が不明であることから、今後の検討により細分される可能性がある。

ＳＢ01は、甑や坏の存在と須恵器の共伴から、ＳＸ01に併行する時期に位置づけられる。

以上の出作遺跡において検出された各遺構の時期は、次に示したような関係が想定される。

（須恵器の共伴）

ＳＸ01下層　→　Ｎ－６区下層　→〔　　〕→　ＳＸ03　→　ＳＸ01
ＳＢ01

ＳＸ02古相→〔　　〕→　ＳＸ02新相

図31　遺構の先後関係

ここまで述べた出作遺跡の土師器は、広義の布留式土器として捉えられよう。しかし、布留式土器は、1938年に小林行雄氏らによる提唱以来その実態について解明されつつあるものの、なお問題点も数多く残されている。その一つに、布留式土器を須恵器が共伴するものとして捉えるか否かという布留式土器の概念自体に関する問題がある。須恵器の共伴を考える場合は、初期須恵器の共伴をもってその下限としている。けれども近年各地でＴＫ208型式

以前、即ち初期須恵器段階の窯址の検出が報告されている[9]。このように陶邑での一元的供給体制が崩れ、地方窯の成立する時期が、従来考えられていたよりも古く想定されつつあり、それに伴って各地における須恵器受容のありかたも考え直す必要がある。本遺跡においても、土師器の変遷の中で、須恵器が共伴するＳＸ03とＮ－６区下層の間よりもむしろＳＸ03とＳＸ01との間に画期が認められる。この点から、須恵器の出現の段階をもってするよりもむしろ須恵器の共伴の増加の段階を布留式土器の下限の指標とする方が適切ではあるまいか。よって、本遺跡の土師器は、Ｎ－６区下層を布留式の中段階、ＳＸ03を新段階、ＳＸ01を布留式以降の型式として位置づけることが可能である。また、(1231・1232) は、布留式古段階に位置づけておきたい。

### Ｄ　出作遺跡の土師器から得られた諸問題

#### ａ　道後平野における古式土師器の様相

愛媛県では、これまで土師器に対しての研究は、その資料的な制約もあって、ほとんど行われていなかった。しかし、近年の急速な開発に伴う発掘調査の増加によって、良好な資料の出土も報告されており、それを契機として土師器研究の機運も高まりつつある段階といえる。そこで、本稿では出作遺跡出土の土師器を中心に、道後平野の古式土師器についての検討を行うこととしたい。

道後平野でこれまでに古式土師器が出土した遺跡には、古照遺跡(工楽1974・大山他1976)、福音寺遺跡竹ノ下地区及び北下・常堰地区（大山他1975）などがあげられる。

古照遺跡では、古墳時代の堰が検出されており、そこに堆積したような状態で、縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・木製品等の遺物が出土している。土師器の器種には、甕・壺・高坏・小型丸底壺・器台・鉢等がある。これらは、少なくとも２時期に細分が可能であり、このうちの古相は、小型丸底壺Ａ類・小型器台・鉢のいわゆる小型精製三種を含む。この小型丸底壺Ａ類と（1232）の調整を比較した場合、(1232) はヘラミガキが施されているのに対し、古照遺跡の小型丸底壺はヨコナデであることから、やや後出的な感を受ける。よって、古照遺跡の古相は、出作遺跡Ｎ－６区下層に併行する時期として位置づけておきたい。新相は、小型丸底壺Ｂ・Ｃ・Ｄ類と長胴の甕を含む。ＴＫ208～ＴＫ23型式の須恵器も認められるが、新相との共伴関係は不明である。このことから、新相の時期は、出作遺跡ＳＸ03からＳＸ01にかけてと考えられる。福音寺遺跡竹ノ下地区では、護岸施設及び自然河道周辺から土師器・須恵器・木製品等の遺物が出土している。土師器の器種には、甕・壺・高坏・小形丸底壺・坏等がある。時期は、小型丸底壺Ｃ・Ｄ類や坏の存在ならびに須恵器の共伴から、出作遺跡ＳＸ01に併行するものと考えられる。

以上のような各遺跡の様相から、道後平野の古式土師器は，次のⅠ～Ⅳ期に分けることができる。

Ⅰ期　出作遺跡ＳＸ01下層の土器をもって、Ⅰ期とした。道後平野だけでなく県内においてもこの時期に平行すると考えられる資料はほとんど出土していない。器種構成は不明であるが、和田廃寺下層出土の一群に併行する時期として位置づけられる。

Ⅱ期　出作遺跡Ｎ－６区下層・古照遺跡古相がこれに相当する。小型丸底壺・小型器台・鉢の小型精製三種が盛行する時期である。甕には、Ａ・Ｃ類がある。体部は球形を呈し、口縁端部が肥厚するものが多い。他に、壺Ａ・Ｂ類、高坏Ａ類が存在する。小若江北式に併行する時期に位置づけられる。

Ⅲ期　出作遺跡ＳＸ03がこれにあたる。器種には、甕Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ類、壺Ａ・Ｂ類、小型丸底壺Ｃ・Ｄ類、高坏Ａ・Ｂ・Ｃ類がある。壺Ａ類は、消滅化の傾向が認められ、小型精製三種は崩壊する。

Ⅳ期　出作遺跡ＳＸ01がこれにあたる。器種には、甕Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ類、壺Ｂ類、高坏Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ類、小型丸底壺Ｄ類がある。壺Ａ類は認められず、小型丸底壺が消滅化へと向かう。新たに坏・埦・甑といった器種が現れる。

以上のうち、Ⅰ～Ⅲ期はいわゆる布留式土器の範疇に含まれるものであり、布留式の古～新段階に位置づけられる。しかし、このうちでⅡ期とⅢ期の間に間隙が存在する。これを埋めるものとしては、(1202) を含むＳＸ02古相の一群が想定される。ＳＸ02は、整理が進展していないこともあり、その内容については不明の点も多いが、Ⅱ期が細分される可能性を考慮して、Ｎ－６区下層をⅡａ期、ＳＸ02古相をⅡｂ期とした。また、須恵器の出現は、Ⅲ期段階と考えられる。

**ｂ　黒色土師器について**

黒色を呈する土師器は、ＳＸ01・02から出土している。ＳＸ01での出土地点は、図32に示したように、36・45・52・55・56・64・73・74・75区であり、特に集中する箇所は認められない。

本遺跡出土の黒色土師器の成因は、口縁部内面が赤褐色を呈する壺（1093）や坏部や脚柱部の内面だけ黒色を呈する高坏の存在を考えれば、胎土の違いではなく焼成方法の違いによるものと理解される。このような黒色を呈する土師器について、小笠原好彦氏は“黒色土師器”と総称し[4]その分布ならびに時期・出現の背景について論考されている（小笠原1971）。同氏によれば、黒色土師器は東日本では６世紀に出現し、この段階では東北南部から関東及び中部地

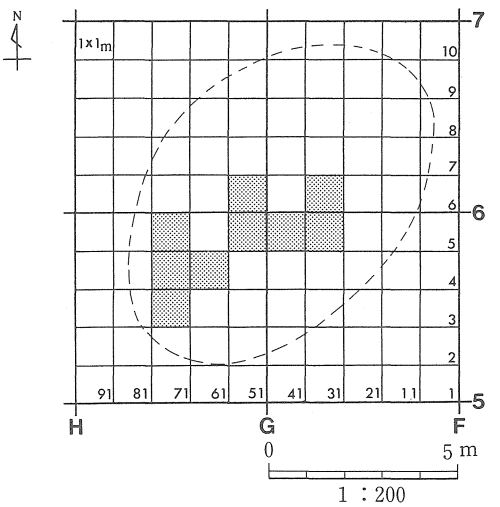


図32　ＳＸ01黒色土師器出土位置

域にかけて分布するのに対し、西日本では8世紀後半に畿内において出現し、9世紀以降もその分布圏は畿内周辺の北九州に限られるとしている。その出現の背景については、「須恵器の普及の遅れた地域において、須恵器の不透水性及び汚れにくいという長所を土師器に求めた結果、丹塗土師器とともに生じたものである」としている。さらに、畿内において黒色土師器の出現が遅れる理由として、大阪府泉北丘陵の陶邑窯址群における供給体制との関連を考えている。これに対し、本遺跡の黒色土師器の時期は、ＳＸ01出土の須恵器がＴＫ208～ＴＫ23型式に比定されることから、5世紀後半に位置づけられるものであり、管見の及ぶ限りでは、西日本において最も古い例とすることができよう。東日本においてもその出現の時期は千葉県船橋市外原遺跡（船橋市教委1972）の資料が示すように、5世紀後半にまで遡るようである。

また、ＳＸ01では、多量の須恵器が出土しており、全体に占める黒色土師器の割合は、ごく僅かであることから、必ずしも小笠原氏の指適したような須恵器の代用品的性格を備えているとは言い難い。しかし、坏や埦が多くみられる点は、供膳形態に顕著であるという黒色土師器の特徴の一端を示しているものと言えよう。製作技法の点では、本遺跡の黒色土師器の内面は平滑に仕上げられているが、黒色化する技術の前提条件としてあげられているヘラミガキは認められない。この点については、炭素の吸着そのものが光沢を生じるとする考え方も示されている（安田1975）。

以上のように、本遺跡出土の黒色土師器は、現在のところ全国的にみても古く位置づけられるものである。また、西日本では、道後平野を含め出作例に時期的に後出する例は知られておらず、その姿を見せるのは8世紀以降畿内を中心とした地域である。このように本遺跡出土の黒色土師器は、一地域において忽然と現れ、短期間でその姿を消してしまうという状況から、本遺跡の祭祀行為での使用を目的としてのみ製作されたものである感が強い。今後、製作技法についても解明して行かなければならないが、技術的な系譜や出現の背景、その後の展開等について検討する必要がある。

**ｃ　高坏の製作技法について**

高坏製作技法のなかでも脚部と坏部の接合法については、佐原真氏が弥生時代の高坏について、脚台部と坏部とを連続して成形し円盤を充填して仕上げる「連続成形手法」と、別つくりの脚台部と坏部とを組み合わせてつくる「組合せ成形手法」に分類している。さらに、弥生時代中期には「連続成形手法」が畿内・瀬戸内地域に多くみられ、後期には「組合せ成形手法」へと移行するとしている（佐原1964）。古墳時代の高坏の接合法は、長野県平出遺跡の報告のなかで、ほぞによるものとほぞをつぶしたものの二種類に分類されたのが最初であろう（大場他1955）。その後いくつかの報告にも散見されるが、詳細に検討されているものとして、長野県市道遺跡があげられる（佐久市教委1976）。同遺跡では、和泉期の高坏について成形・調整より細分を行っている。接合法については、本遺跡の分類（図27参照）の

1類に相当する接合法をさらに三つに細分している。坏部の成形法は、坏底部の場合円盤状の粘土板を用いるものと脚柱部から巻き上げ法により作り出す方法がみられる。脚柱部の巻き上げ→溝切り→絞りという順序で作られているものが多い。このほかには、飛鳥地域出土の高坏に挿入法が認められている[5]。また、大阪府船橋遺跡では、高坏の接合法についての詳細な記載はなされていないが、実測図からの検討では、O－Iに1・4類が認められる。

出作遺跡の接合法には、器種分類の項でも述べたように、1類－柄法・2類－粘土塊挿入法・3類－脚柱挿入法・4類－下方充塡法の4種が認められる。これらは、別作りの脚部と坏部を接合している点から、「組み合せ成形手法」とすることができる。しかし、本遺跡では、市道遺跡に見られるような、坏底部や脚柱部の巻き上げ痕・溝切り痕は確認することはできなかった。坏底部は、明らかに円盤状を呈するものが認められており、この手法が多用されていた可能性がある。なかでもA類の場合は、脚部に円盤状の坏底部を接合し、それに口縁部を継ぎ足す方法であったものといえよう。

この「組み合せ成形手法」は、別作りの脚部と坏部とを接合するものであり、何個体同時に製作するかにもよるが、完全に乾ききった状態で接合するよりもある程度の湿り気を帯びている方が接合に際してもなじみやすく、接合の度合においても強いはずである。この点を考慮するならば、一度に多量に製作する際には脚部を製作し、適度な乾き具合いで、なおかつ坏部を支え得るだけの強度になったものから坏底部を接合したものと考えられる。このような方法に対しては、奈良県纒向遺跡の報告のなかで、「坏部を単独に製作することで製作の際、坏部下半が平底になる再調整を必要とすること及び製作の後改めて脚部と接合せねばならぬことなど脚部より連続して製作して行く方法に対して、時間的ロスが生ずるわけである。従って、この方法であえて高坏を製作を行ったとは考えがたい。」とする見解もある（関川1974）。しかし、高坏を伏せた状態にしておけば再調整の必要性はなく、複数の人間が製作に関与し、坏部と脚部とを平行して製作し、ある程度の乾燥状態となったものから接合して行くような分業を想定するならば、時間的ロスは問題ではあるまい。

ＳＸ03とＳＸ01の高坏の相違点は先にも述べたが、ＳＸ03では坏部がＡ・Ｃ類が多く、ＳＸ01ではＡ～Ｃ類がほぼ同数である。さらに、ＳＸ01はＳＸ03に比べ、焼成・胎土を含めて全体的に粗質である。接合法は、ＳＸ03では1・2類、ＳＸ01では4類が多用されている。この接合法のなかで、最も多くの工程及び時間を要する接合法が2類であり、逆に工程がもっと簡略で、短時間で製作が容易なものが3・4類であろう。

以上のように、高坏製作技法の点から考えると、ＳＸ03からＳＸ01にかけて認められる接合法ならびに調整の簡略化、焼成・胎土の粗質化は、祭祀規模の拡大に伴う需要の拡大と無縁ではあるまい。さらに、ＳＸ01が短期間に形成されたと想定するならば、祭祀を行う際にのみ土器作りに携わるような専従の集団の存在が、祭祀用土器の製作に従事していたことも考えられる。

## E　まとめにかえて　－今後への課題－

本遺跡の土師器について述べる場合、祭祀遺跡という遺跡の特殊性を避けて考えることはできない。各遺構に対してその器種構成や出土状態、継続期間等の様々の面からの子細な分析が必要であろう。整理の過程で得られた二、三の問題点を述べることとしたい。

まず、器種構成の上で、高坏と手捏土器の個体数がかなりの比率を占めている点が注目される。ＳＸ03では、高坏が約２割、手捏土器及び粗製土器が約５割である。岡山県笠岡市走出遺跡（間壁1966）では、50cm×140cmを測る楕円形のピットから、甕・鉢・高坏・坏・小型丸底壺・手捏土器が出土しており、高坏が約２割、手捏土器が約４割である。このように、高坏ならびに手捏土器等の占める割合が多い傾向は、ＳＸ01でも認められ、これが祭祀遺跡に通有なものか時期的なものか否か各遺跡での検討を要する。この傾向は、ＳＸ01でも認められ、祭祀遺構を考える上で器種構成とその比率は、祭祀の内容を復元する上で、必要である。

高坏は、その接合法から考察を行った。即ち、高坏にみられる技法の簡略化は需要の増大によるものであり、ＳＸ01が短期間で形成された遺構であると仮定するならば、それに使用される土師器の製作に関与した集団が存在したのではないかという想定である（多くの人が従事した、携わった）。また、模倣甑の存在や体部外面に格子タタキの施された土師器が認められることは、これらの集団と須恵器生産に携わった集団との間に技術的な交流が存在したことを物語るものであろう。

手捏土器及び粗製土器は、ＳＸ01とＳＸ03との間に大きな相違点は認められない。手捏土器は、Ａ～Ｅ類に分類したが、そのほとんどは通常認められる器形である。県内においても祭祀遺跡である新居浜市魚島神ノ市遺跡（長井1975、瀬戸内海歴史民俗資料館1979）でＡ・Ｂ類、福音寺遺跡（松山市教委1975）でＡ～Ｃ類の出土が知られるほか、今治市五軒屋町遺跡・松山市道後姫塚遺跡など多くの遺跡で出土している。Ｅ類は類例に乏しいが、佐賀県伊勢山遺跡（佐賀県教委1970）や福岡県大曲り遺跡（福岡県教委1971）で出土している手捏器台と考えられる⑥（1087・1088）などは全体の器形が不明であるが、山口県波雁が浜遺跡（中野1970）において、手捏土器の高坏形品として分類されているものとも考えられる。

黒色土師器は、前述のとおり管見の及ぶ限りでは、西日本で最も古い例とすることができよう。しかし、道後平野においては他に類例がないことから、祭祀遺跡という特殊性や須恵器生産における技術的な影響など様々な要因が考えられる。今後その性格や系譜について解明が問題となろう。

本遺跡出土資料を中心として、道後平野の古式土師器の編年と様々な問題点について述べたが、祭祀遺跡という遺跡の性格を考慮するならば、編年の指標とするには多少問題あり、そのほかの点についても、今後集落址出土資料との比較を行って検証が必要であろう。

**註**

① 同例は、器高6.4cm・口径10.0cm・底径7.8cmを測る。正岡氏は，時期について、5世紀の所産とされている。

② 長野県丸子町鳥羽洞窟遺跡（関1967）、同松代町四ツ屋古墳（岩崎1963）、同中野市大ロフ遺跡（金井1971）、香川県直島町荒神島遺跡（瀬戸内海歴史民俗資料館1979）、千葉県船橋市外原遺跡（船橋市教委1972）などがあげられる。

③ 愛知県東山218号窯址（荒木ほか1978）ほか数箇所で報告されている。

④ 小笠原氏は、「土師器の表面をいぶすことにより、炭素を吸着させたとみられるもの」を黒色土師器としている（小笠原1971）。

⑤ 飛鳥地域で多用されているような心棒をつけたまま挿入した際の小孔がみとめられず、同地域での挿入方法とは若干異なるようである（安達・木下1974）。

⑥ 楯山林継氏によれば、九州地方以外では茨城県鹿島宮域内において類似のものが出土しているとのことである。このほかには、佐賀県多久市東多久町納所・天山遺跡に類例が認められる（小田1972）。

**文献**


安達厚三　1969　「古墳時代溝出土の遺物」『奈良国立文化財研究所年報』

安達厚三・木下正史　1974　「飛鳥地域出土の古式土師器」『考古学雑誌』第60巻２号

荒木実・増子康真・大井智晴　1978　「東山218号窯の古式須恵器について」『古代人』33

伊藤晃・柳瀬昭彦他　1974　「上東遺跡の調査」『岡山県埋蔵文化財調査報告書』２

岩崎卓也　1963　「古式土師器考」『考古学雑誌』第48巻３号

大山正風　1976　「第三堰出土の遺物　土師器」『古照遺跡』II松山市教育委員会

大山正風・森光晴・黒崎直　1975　『埋蔵文化財発掘調査概報』松山市教育委員会

小笠原好彦　1971　「丹塗土師器と黒色土師器」『考古学研究』第18巻２・３号

工楽善通　1974　「出土遺物　土師器」『古照遺跡』松山市教育委員会

小田富士雄　1972　「九州　祭祀遺跡発見地と遺物」『神道考古学講座』第２巻

佐賀県教育委員会　1970　『基山町伊勢山遺跡・鳥栖市永吉遺跡』

佐久市教育委員会　1976　『市道』

佐原真　1964　「土器製作技術の変遷」『紫出山』

末永雅雄・小林行雄・中村春寿　1938　「大和に於ける土師器住居址の新例」『考古学』第９巻10号

関川尚功　1974　「畿内地方の古式土師器」『纏向』

関孝一　1967　「東信濃鳥羽洞穴における古代祭祀遺跡」『考古学雑誌』第52巻第３号

瀬戸内海歴史民俗資料館　1979　「備讃瀬戸の祭祀遺跡」『瀬戸内の海上信仰調査報告（東部地域）』

田辺昭三　1966　『陶邑古窯址群』Ⅰ

| | | |
|---|---|---|
| 坪井清足 | 1956 | 『岡山県高島遺跡調査報告』 |
| 長井数秋 | 1975 | 「愛媛県魚島の遺跡・遺物について」『ソーシアル・リサーチ』第4号 |
| 中野一人 | 1968 | 「東岐波波雁が浜遺跡発見の祭祀遺物」『宇部の遺跡』宇部市教育委員会 |
| 原口正三・田中琢・田辺昭三他 | 1962 | 『船橋』II |
| 福岡県教育員会 | 1971 | 『大曲り遺跡－筑紫郡筑紫野町所在住居址群の調査』 |
| 藤沢一夫 | 1958 | 「土師器とその性格」『世界陶磁全集』1 |
| 船橋市教育員会 | 1972 | 『外原』 |
| 間壁忠彦 | 1966 | 「岡山県笠岡市走出の祭祀遺跡」『倉敷考古館研究集報』第2号 |
| 正岡睦夫 | 1980 | 「愛媛県下の考古資料報告四題」『遺跡』第18号 |
| 安田光二 | 1975 | 「土師式土器内黒の焼成法の考察とその焼成実験の結果について」『福島考古』第16号 |
| 柳瀬昭彦・江見正己・中野雅美 | 1977 | 「川入・上東」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』 |
| 横山浩一 | 1959 | 「手工業生産の発展－土師器と須恵器－」『世界考古学大系』3 |


【付記】

本稿は、1982年3月段階のものであり、今回の報告にあたっては、文章構成の変更と字句の訂正にとどめ、新たな資料・知見は加えていない。脱稿後およそ10年を経て、布留式土器の研究を概観すると、各地域での良好な資料の出土もあり、その進展には目を見張るものがある。現在では、これらの資料に基づき、布留式土器の細分と併行して、在地の土器との対比による地域毎の編年観が確立されつつあるのが現状である。この点では、愛媛県の場合大きく立ち後れている感があり、今回の編年も現在の研究の水準には及ぶべくもない。しかし、出作遺跡の調査以降、愛媛県においても1983年の松山市宮前川遺跡の調査をはじめとして、1989年には同市福音小学校遺跡等の注目される遺跡が調査され、良好な資料が蓄積されつつあり、今後これらの資料を含めて、出作遺跡の土師器についての再検討を行い、併せて道後平野の土師器についての再考を期することとしたい。

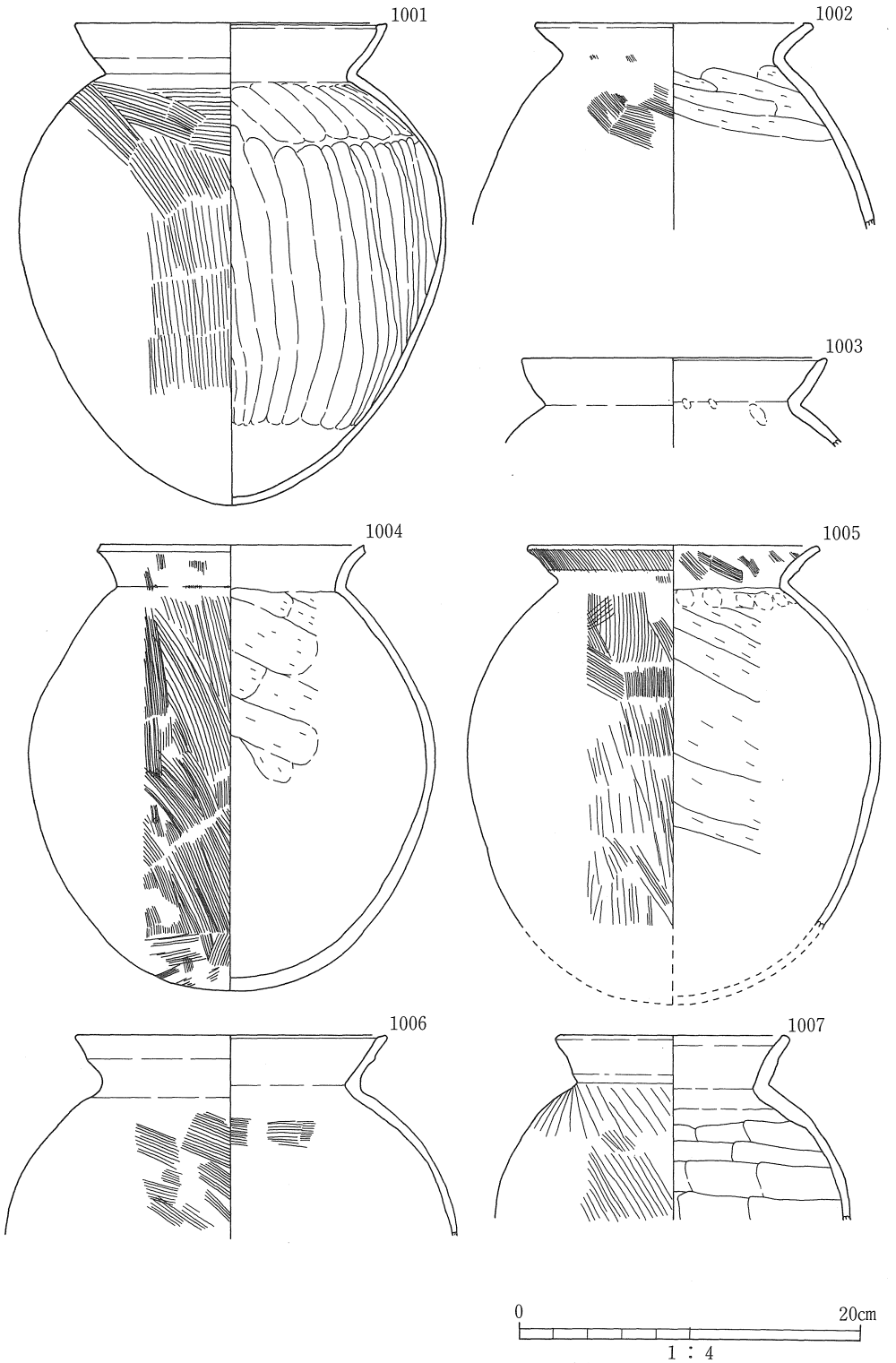



図33　ＳＸ01出土の土師器(2)

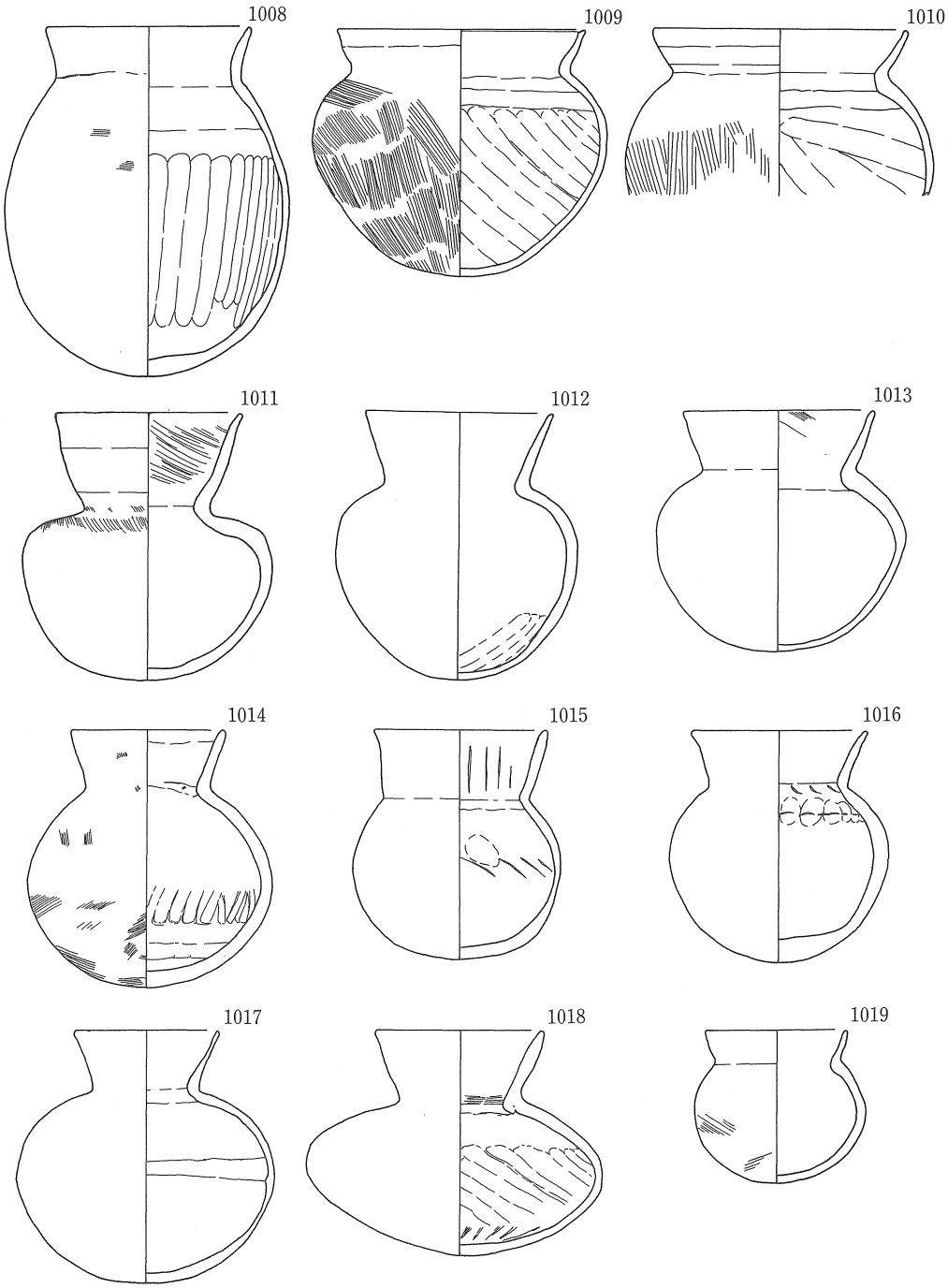



図34　ＳＸ01出土の土師器(3)

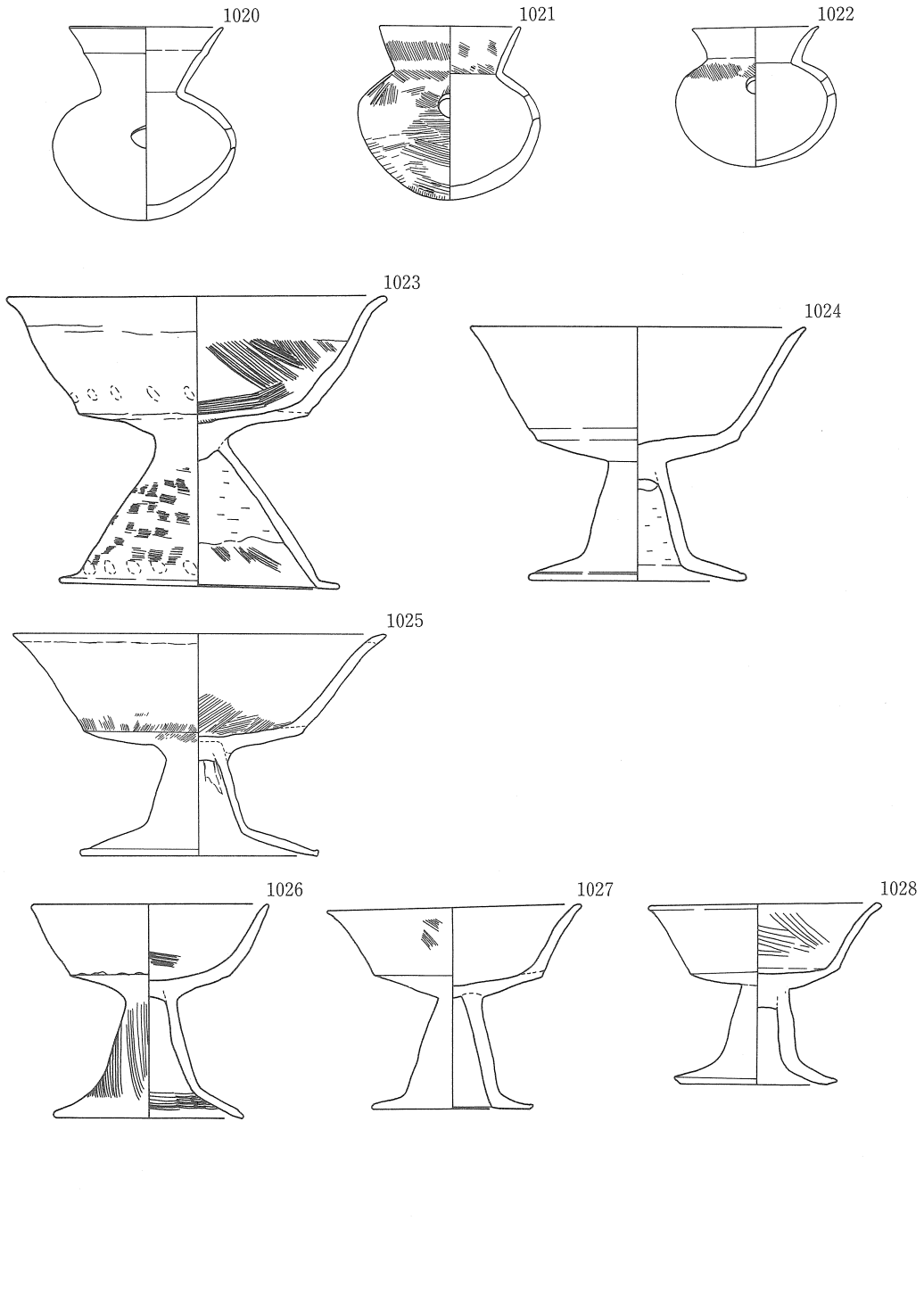
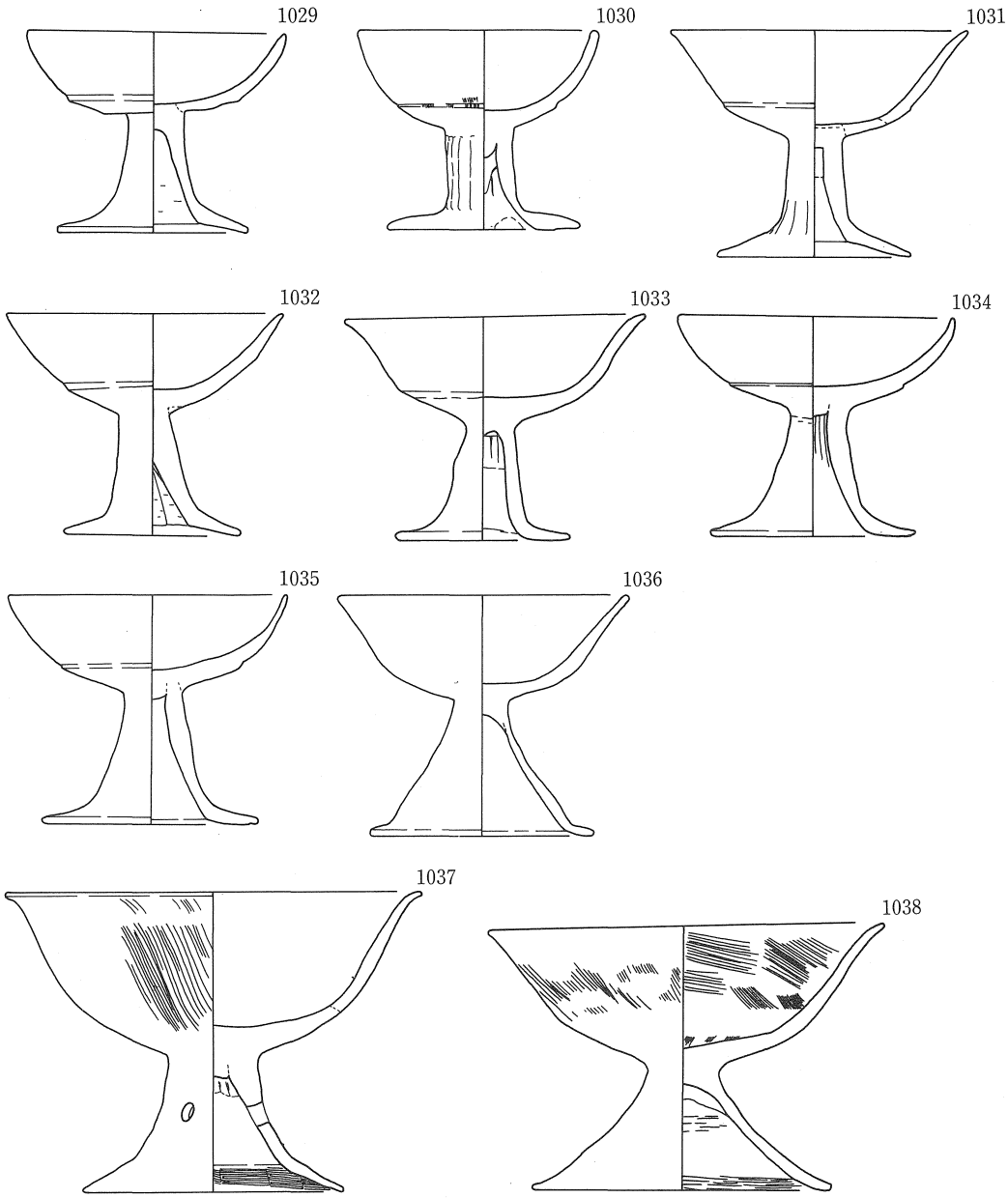



図35　ＳＸ01出土の土師器(4)




0 20cm

1 : 4

図36　ＳＸ01出土の土師器(5)

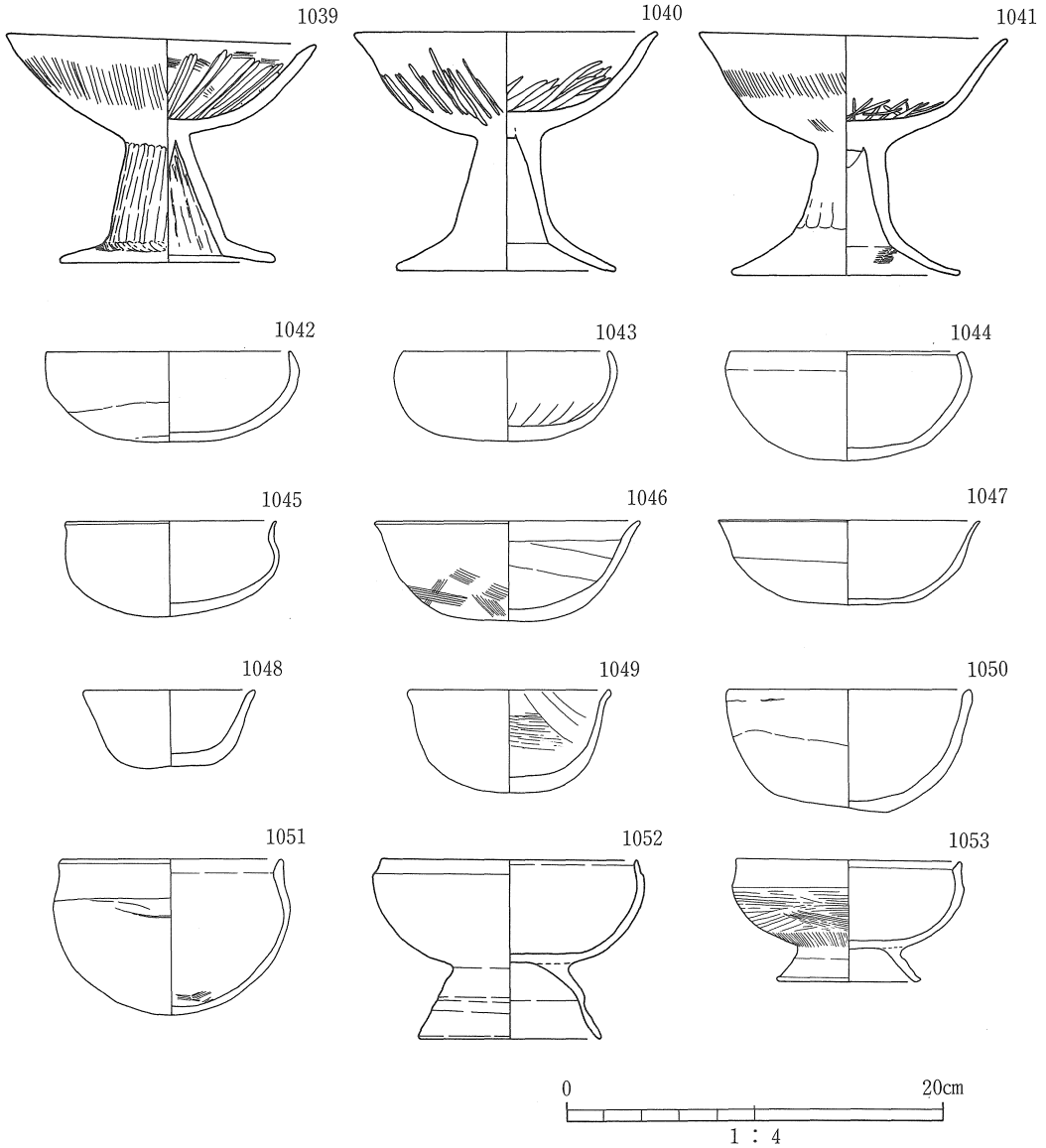



図37　ＳＸ01出土の土師器(6)

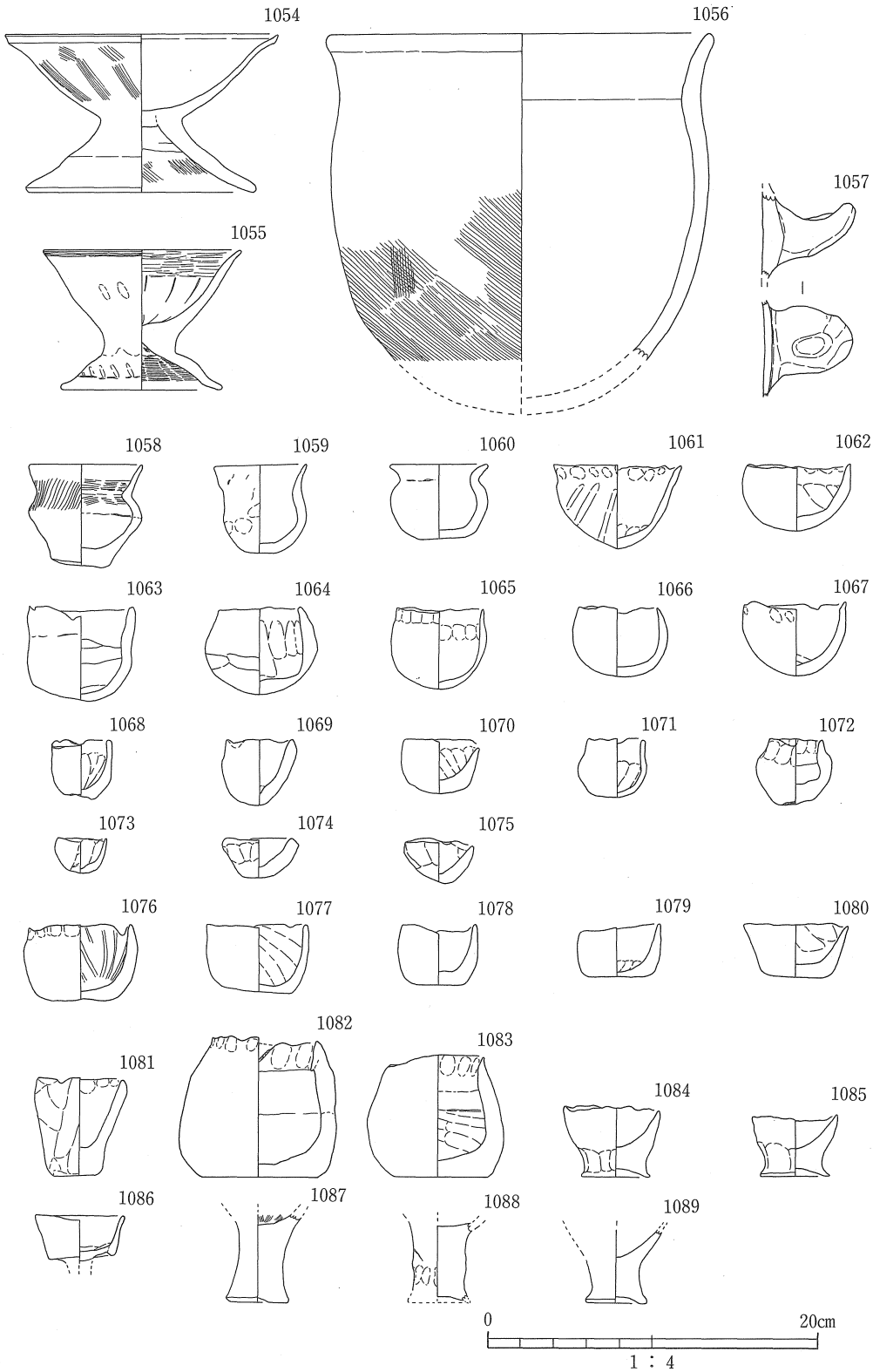



図38　ＳＸ01出土の土師器(7)

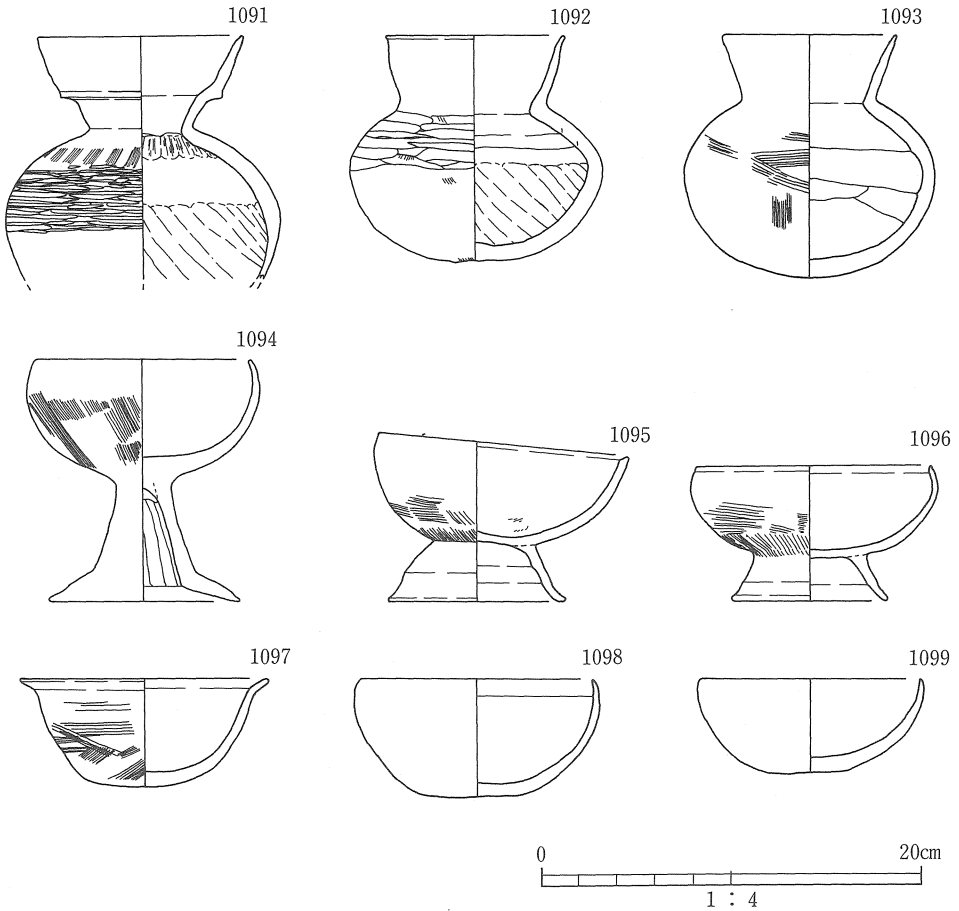



図39　ＳＸ01出土の土師器(8)

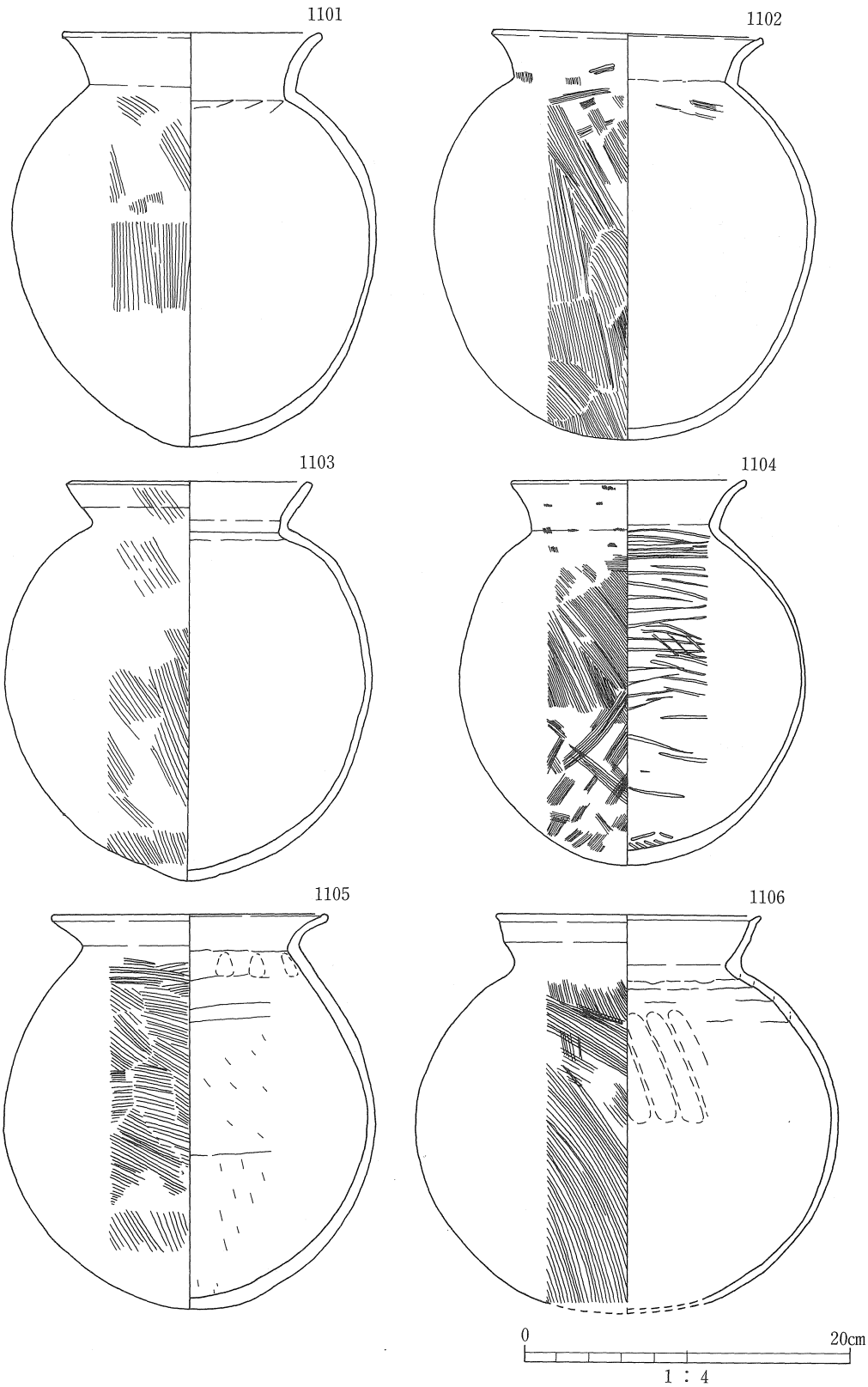



図40　ＳＸ03出土の土師器(1)

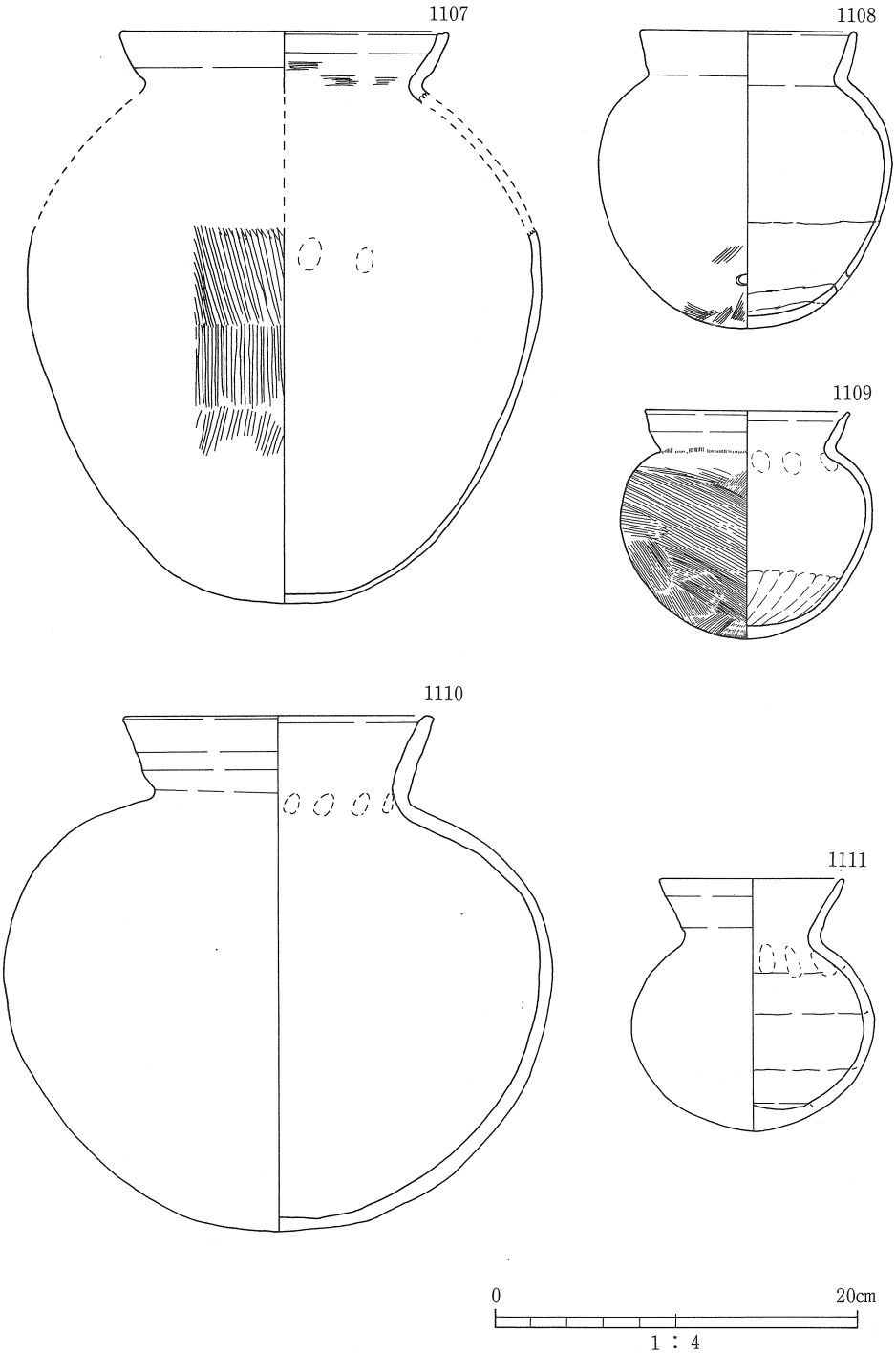



図41　ＳＸ03出土の土師器(2)

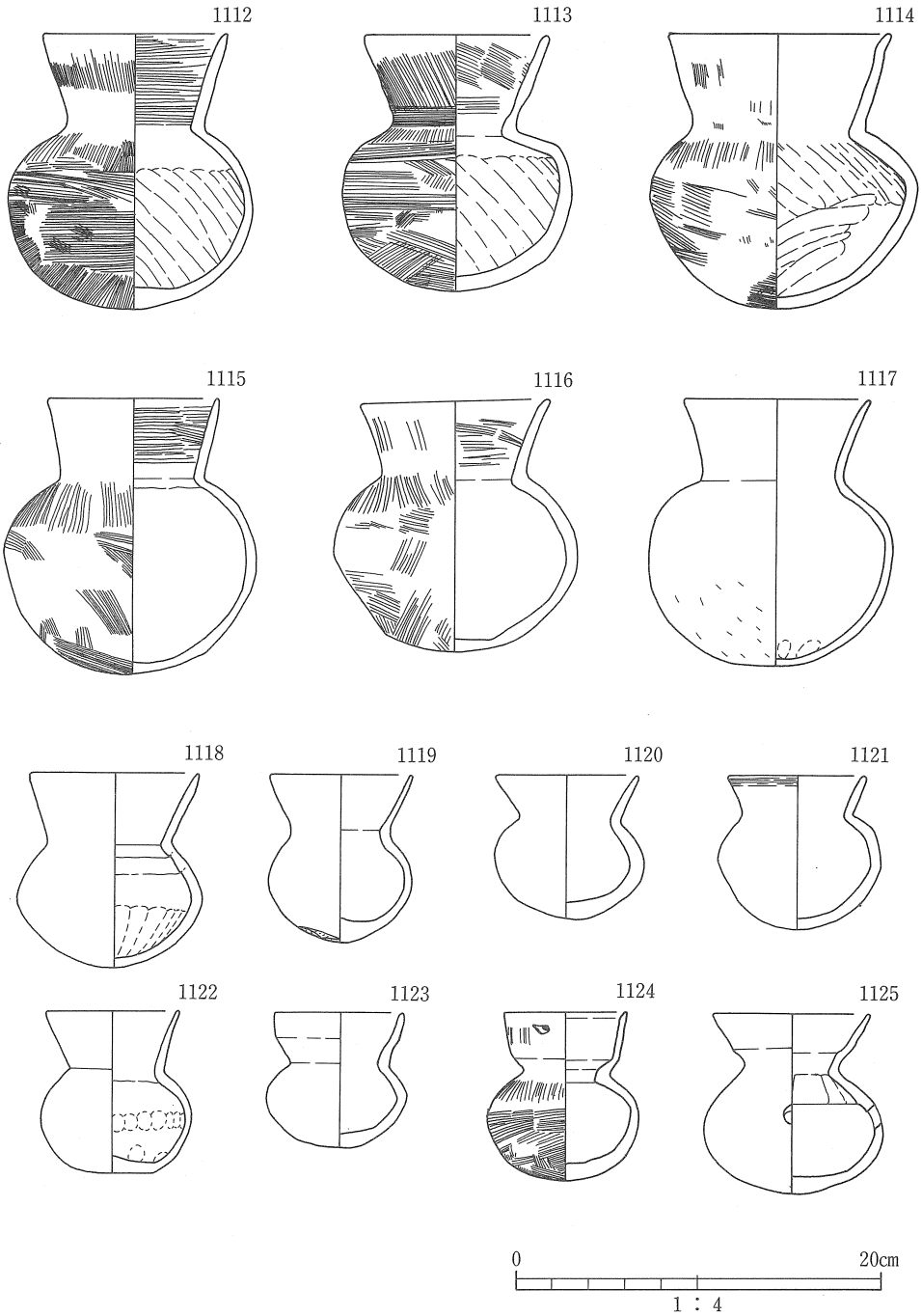



図42　ＳＸ03出土の土師器(3)

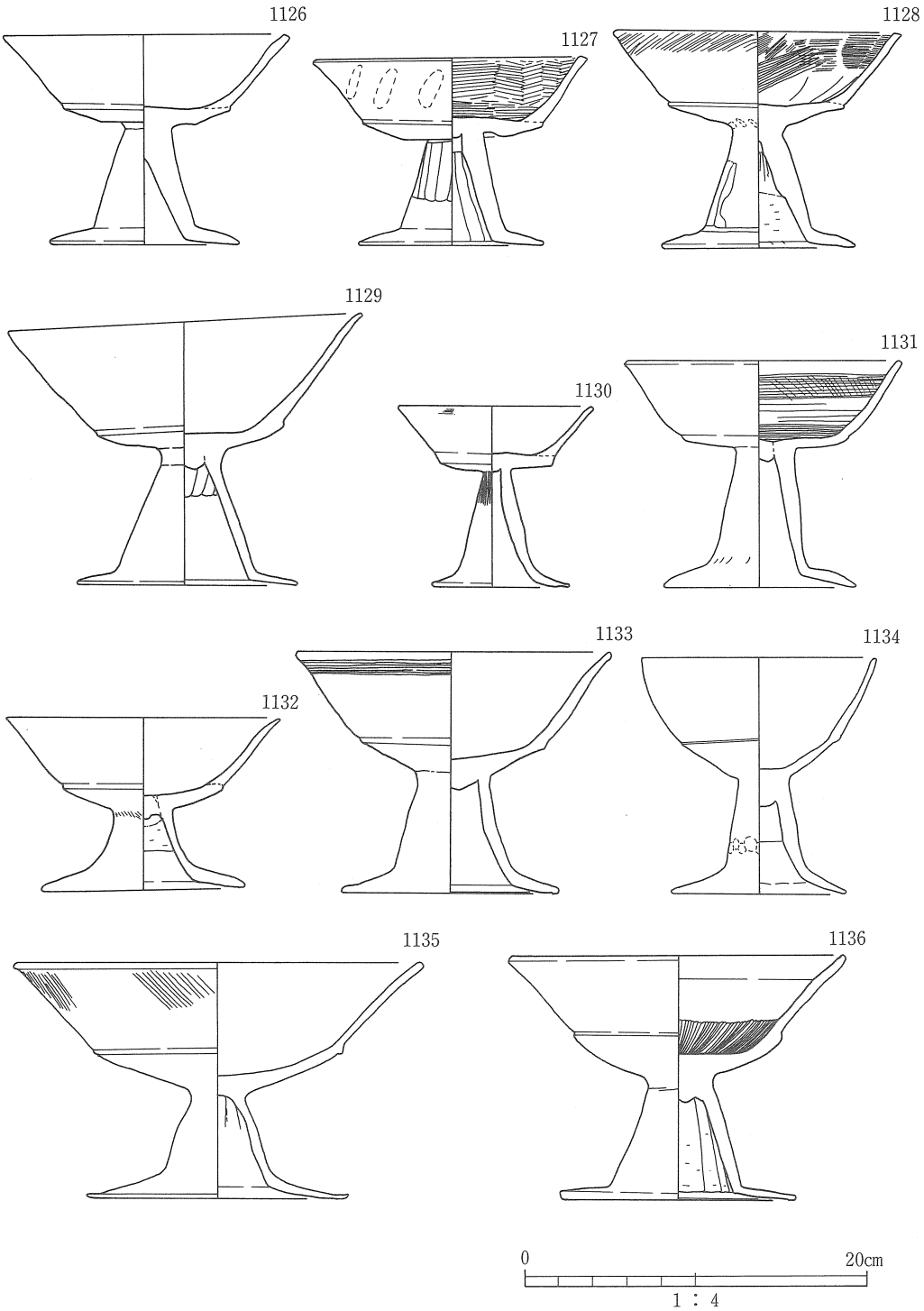



図43　ＳＸ03出土の土師器(4)

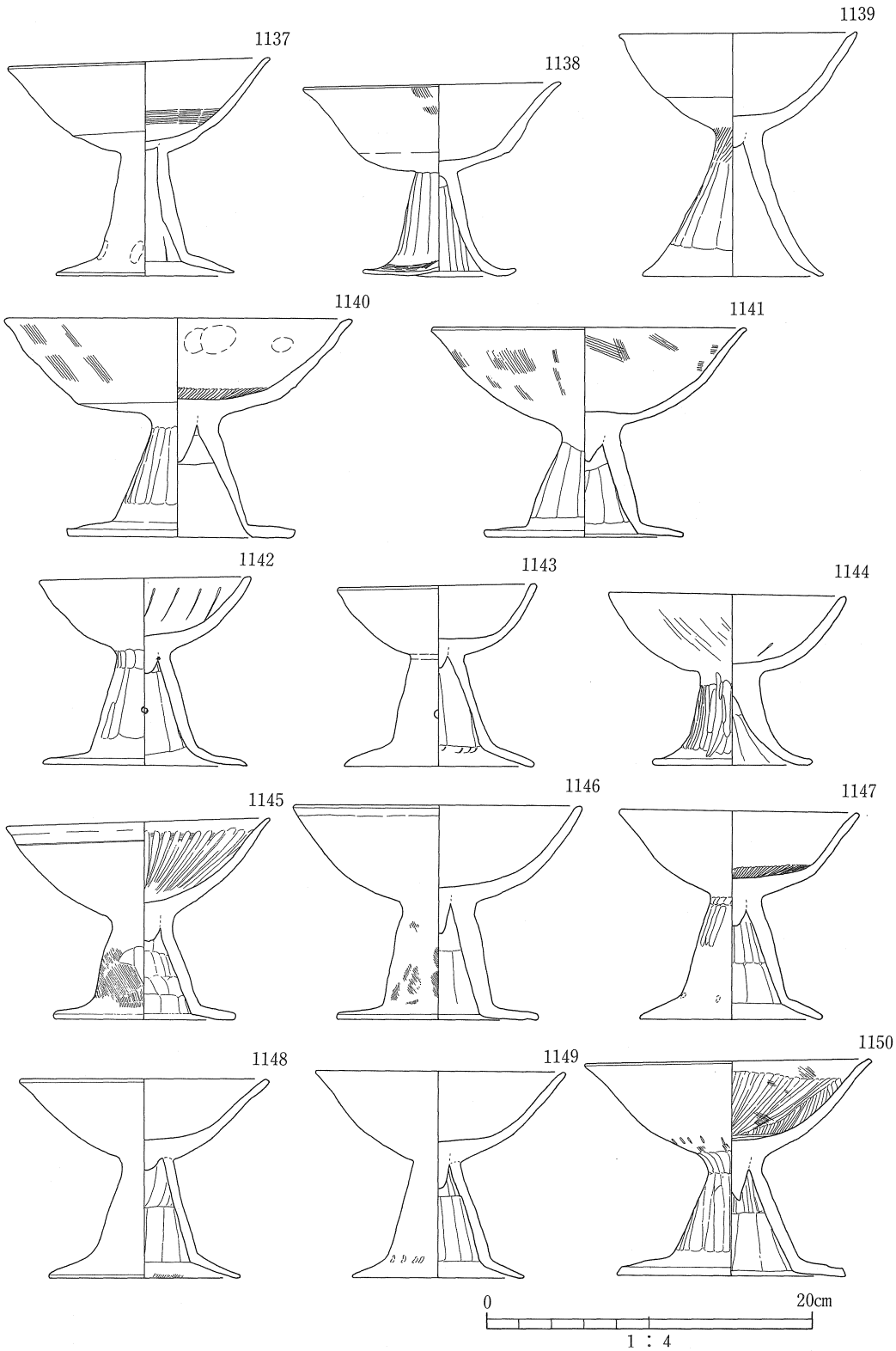



図44　ＳＸ03出土の土師器(5)

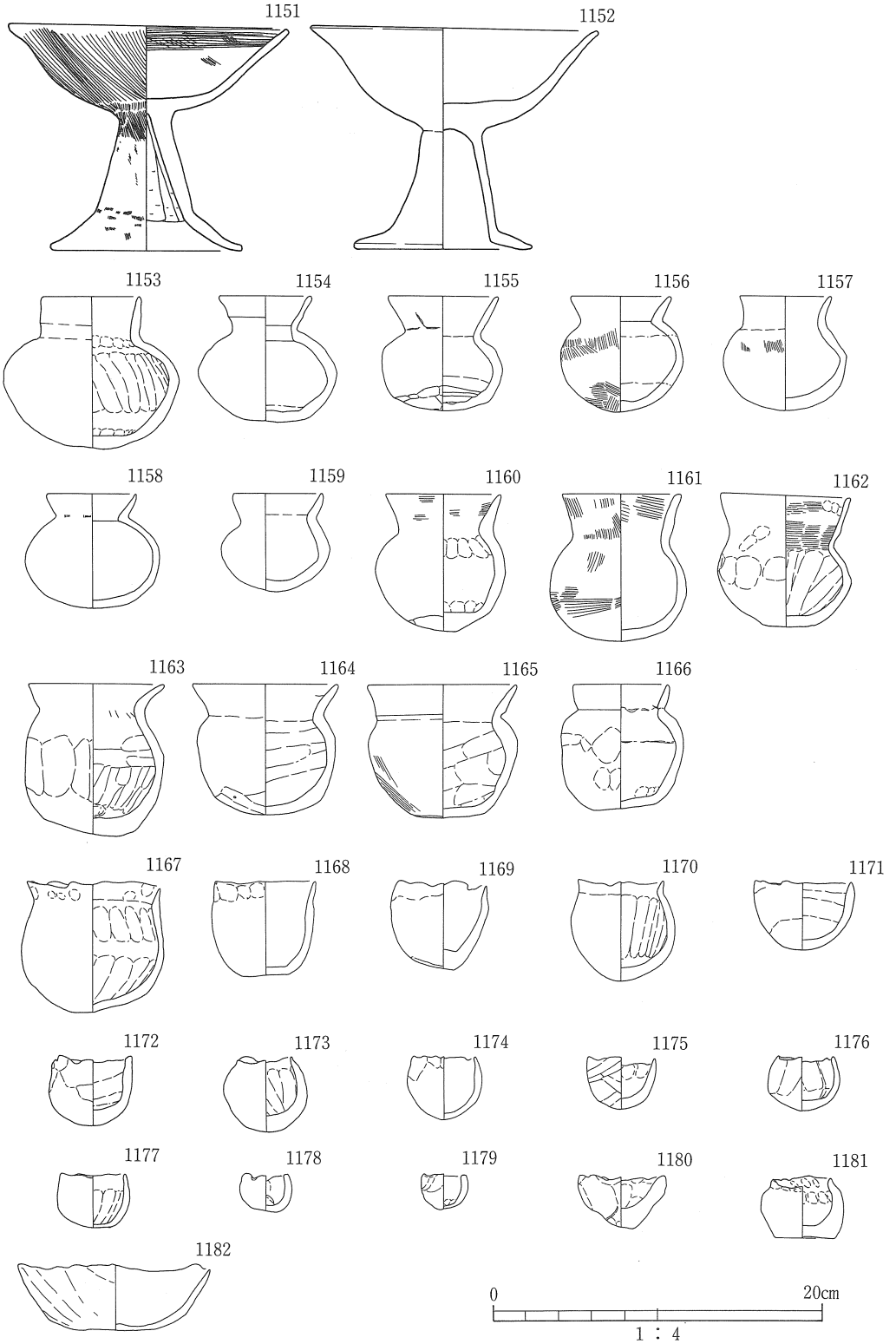



図45　ＳＸ03出土の土師器(6)

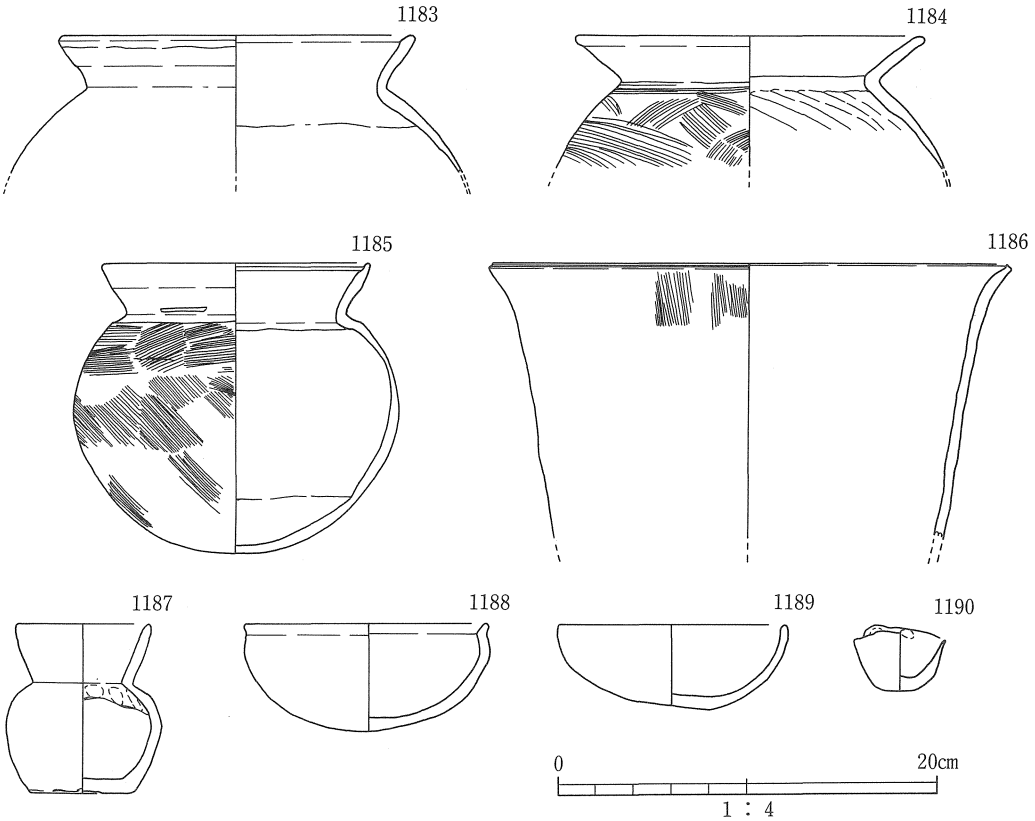



図46　ＳＢ01出土の土師器

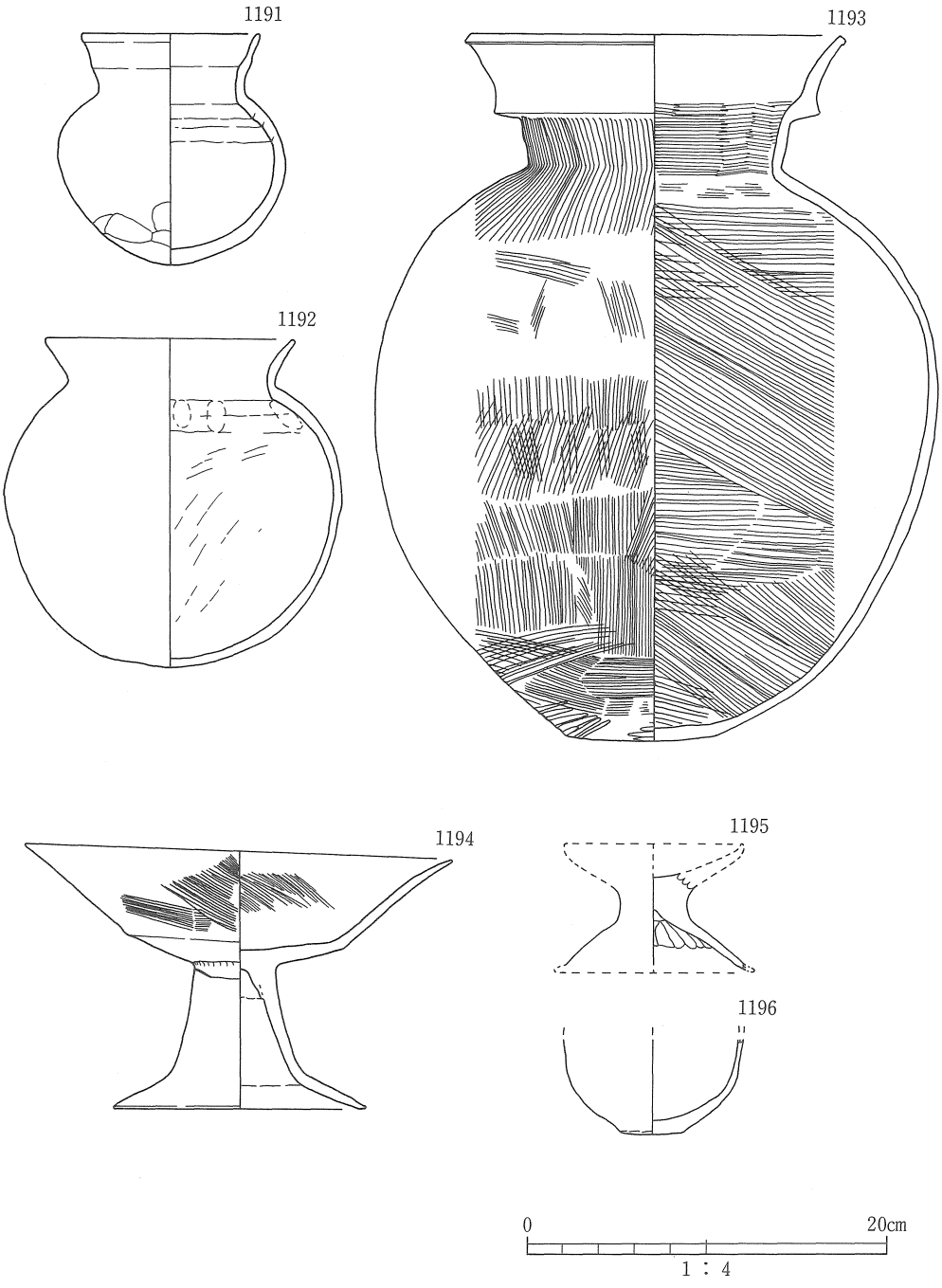



図47　N－6区下層出土の土師器

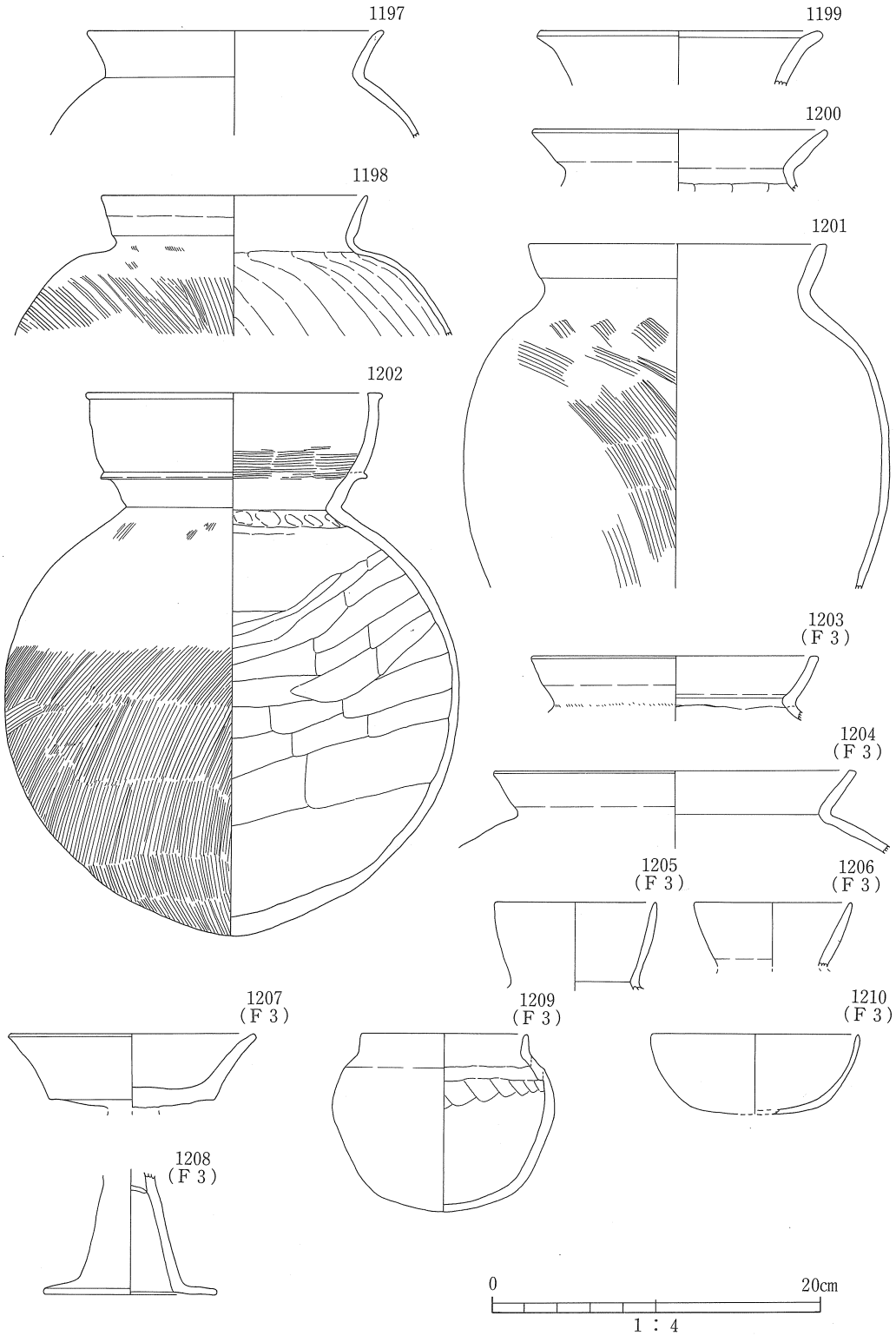



図48　グリッド出土の土師器(1)

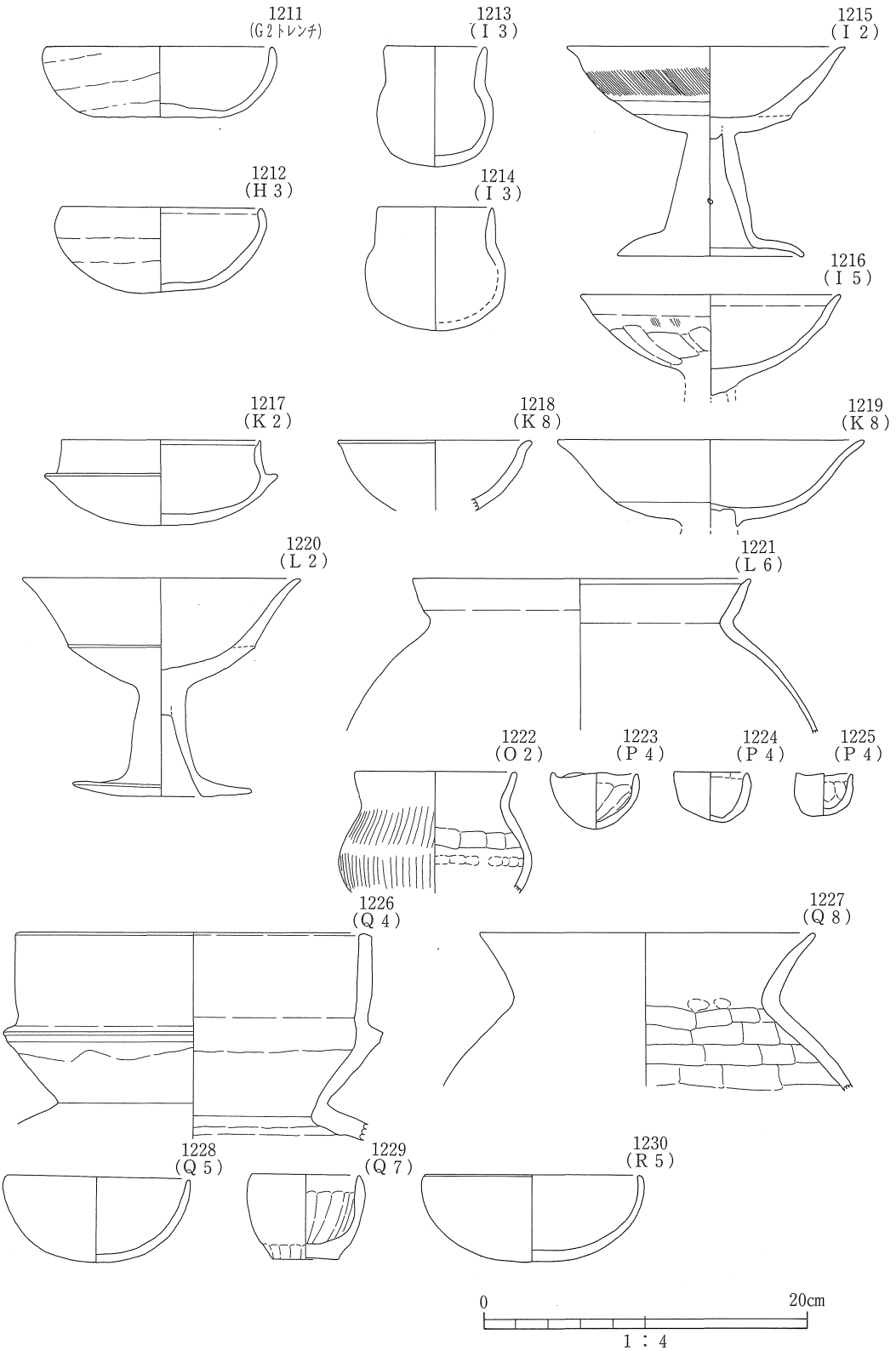



図49　グリッド出土の土師器(2)

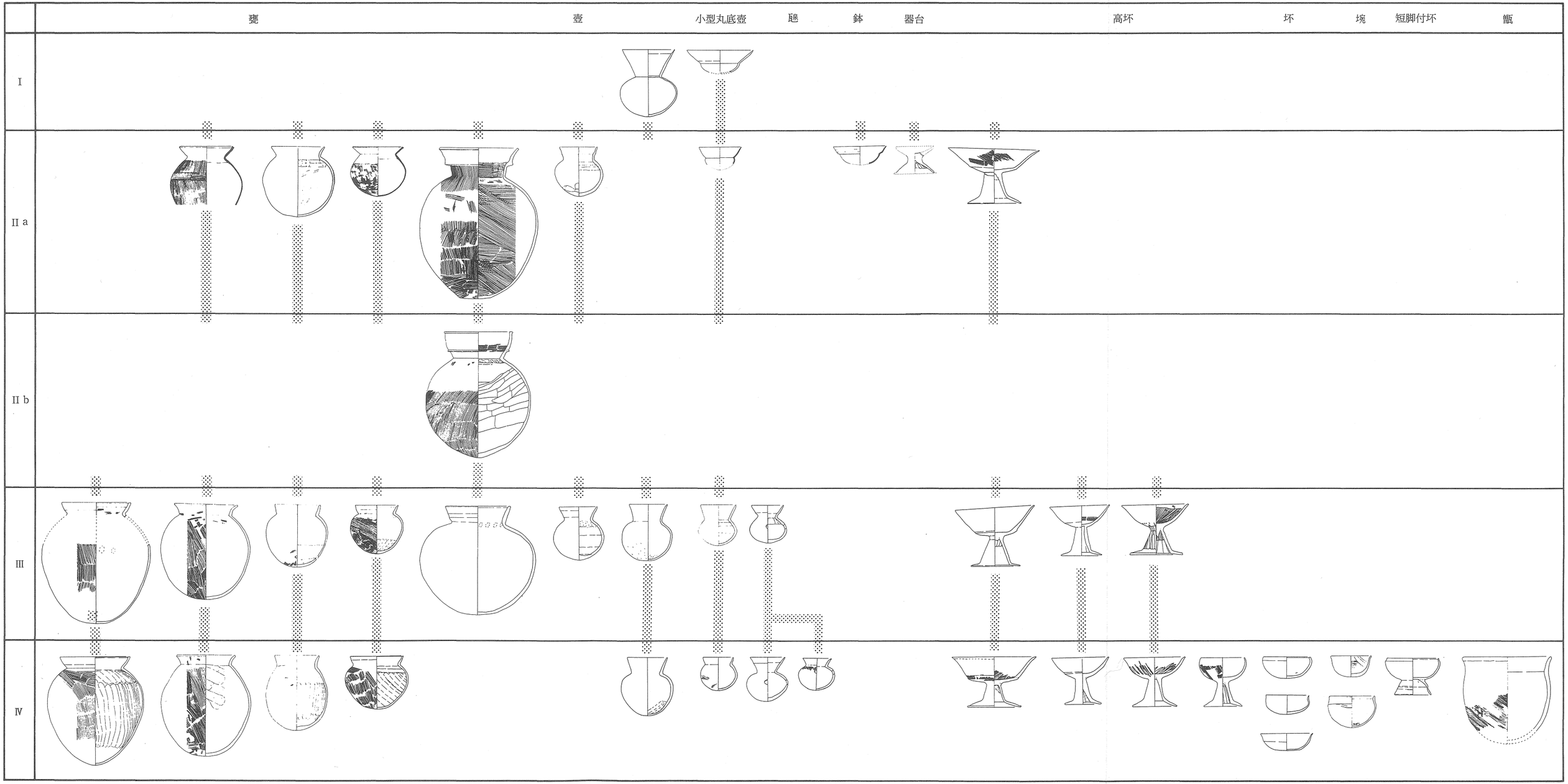



図50　道後平野の土師器の編年

表4　出作遺跡出土土師器観察表

※法量は、上から順に口径・器高・最大径を示す。高坏は、口径・器高・裾部径、手捏土器の一部は口径・器高・底径である。また、（　）内の数値は残存値を示す。

| 番　号 | 器　種 | 法量 | 形　態　の　特　徴 | 調整技法の特徴 | 色　調 | 胎　土 | 焼　成 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| １００１ | 甕Aa | 18.4<br>28.4<br>25.2 | 口縁部は「く」の字状に屈曲し、内彎して立ち上がる。端部は内側に肥厚し、内傾する面をなす。体部は、最大径をやや上位に持ち、肩の張る器形である。 | 口縁部―ヨコナデ<br>体部―外面ハケメ・内面指ケズリ | 茶褐色（底部外面黒色） | 砂粒を若干含む精良 | 良好 | 76区 |
| １００２ | 甕Ba | 16.4<br>(11.8)<br>(23.6) | 口縁部はゆるく屈曲し、直線的に伸びる。端部の上端は平坦な面をなし、わずかに肥厚する。体部は、やや長目の球形を呈すと思われる。 | 口縁部―ヨコナデ<br>体部―外面ハケメ<br>〃　―内面上半ヘラケズリ、下半ヨコナデ | 暗褐色 | 砂粒を含む | 良好 | 65区 |
| １００３ | 甕Bc | 17.8<br>(5.0)<br>(19.6) | 口縁部は「く」の字状に屈曲し、内彎気味に立ち上がる。端部は、内傾する面をなす。 | 口縁部―ヨコナデ<br>体部―外面不明<br>〃　―内面指頭圧痕が認められる | 茶褐色 | 砂粒を多く含む | やや軟質 | 77区 |
| １００４ | 甕Bc | 15.2<br>26.4<br>23.6 | 口縁部は「く」の字状に屈曲し、外反して立ち上がる。端部は、外傾する面をなし、わずかに上方へ拡張する。体部は、最大径をほぼ中位に持つやや長目の球形を呈す。 | 口縁部―ヨコナデ、外面に一部ハケメが残る<br>体部―外面ハケメ<br>〃　―内面上半ヘラケズリ、下半ヨコナデ | 赤褐色（底部暗褐色） | 精良 | やや軟質 | 58区 |
| １００５ | 甕Bb | 16.8<br>(22.7)<br>24.0 | 口縁部は「く」の字状に屈曲し、外面に稜を残して外反気味に立ち上がる。端部は丸くおさまる。体部は、最大径をほぼ中位に持つやや長目の球形を呈す。 | 口縁部―外面ハケメ<br>体部―内面上半ヘラケズリ、下半ヨコナデ | 赤褐色 | 精良 | やや軟質 | 底部に煤が認められる<br>66区 |
| １００６ | 甕Ba | 18.4<br>(11.8)<br>(26.6) | 口縁部は「く」に字状に屈曲し、外面に稜を残して立ち上がる。端部はわずかに内傾する面をなす。 | 口縁部―ヨコナデ<br>体部―ハケメ | 明茶褐色（外面）暗褐色（内面） | 砂粒を多く含み粗い | 良好 | 67区 |
| １００７ | 甕Bb | 13.8<br>(10.9)<br>(20.8) | 口縁部は「く」の字状に屈曲し、外傾して立ち上がる。端部は丸くおさまる。 | 口縁部―ヨコナデ<br>体部―外面粗いハケメ、内面ヘラケズリ | 明赤褐色 | 砂粒を多く含む | 良好 | 55区 |
| １００８ | 甕Cb | 11.6<br>19.8<br>16.0 | 口縁部は、ゆるく屈曲して立ち上がる。端部は、丸くおさまる。体部は長目の球形を呈す。 | 口縁部―ヨコナデ<br>体部―外面ハケメが一部認められる<br>〃　―内面指ケズリ | 赤褐色（上半）黒色（下半） | 砂粒を多く含む | 軟質 | 底部に煤が認められる |
| １００９ | 甕Da | 14.0<br>13.9<br>16.6 | 口縁部は「く」の字状に屈曲し、内彎気味に立ち上がる。端部は、内傾する面をなす。体部は最大径を上位にもち、底部は丸底を呈す。 | 口縁部―ヨコナデ<br>体部外面―タテハケ<br>内面―指ケズリ | 明赤褐色 | 細かい砂粒を含む | やや軟質 | 37区 |
| １０１０ | 甕Db | 14.4<br>(9.5)<br>17.4 | 口縁部は「く」の字状に屈曲し、内彎気味に立ち上がる。端部は丸くおさまる。体部は最大径をほぼ中位にもつ球形を呈すと思われる。 | 口縁部―ヨコナデ | 暗赤褐色 | 砂粒を多く含む | やや軟質 | 接合痕が顕着<br>37区 |
| １０１１ | 壺Bb２ | 10.6<br>15.1<br>14.1 | 口縁部はわずかに屈曲して立ち上がり、端部は丸くおさまる。体部は肩部が張り、底部は丸底を呈す。 | 口縁部―ヨコナデ、内面にハケメが認められる<br>体部―外面、肩部にハケメ底部はヘラケズリか | 暗赤褐色 | 精良 | 良好 | 黒斑が認められる |

| 番　号 | 器　種 | 法量 | 形　態　の　特　徴 | 調整技法の特徴 | 色　調 | 胎　土 | 焼　成 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| １０１２ | 壷Ba２ | 10.6<br>15.0<br>13.7 | 口縁部は外傾して立ち上がり、端部は丸くおさまる。体部は最大径をやや上位にもち、球形を呈す。 | 口縁部―ヨコナデ<br>体部―内面指ケズリ | 赤褐色 | 精良 | 軟質 | |
| １０１３ | 壷Ba２ | 10.8<br>13.5<br>14.1 | 口縁部は外傾して立ち上がり、端部は丸くおさまる。体部は最大径を上位にもち、球形を呈す。 | 口縁部―ヨコナデ、内面にハケメが一部残る | 赤褐色 | 砂粒を含む | やや軟質 | 57区 |
| １０１４ | 壷Bb１ | 8.7<br>14.6<br>13.8 | 口縁部は、外傾して立ち上がり、端部は丸くおさまる。体部は最大径を中位にもち、球形を呈す。 | 口縁部―ハケメ後ナデ<br>体部―外面ハケメが一部認められる、内面接合痕およびヘラ状痕が残る | 灰白色（黒斑が残る） | 精良 | 良好・堅緻 | |
| １０１５ | 壷Bb１ | 9.9<br>12.9<br>11.7 | 口縁部は外傾して立ち上がり、端部は丸くおさまる。体部は球形を呈す。 | 口縁部―ヨコナデ、内面にヘラ状痕が残る<br>体部―内面に指頭圧痕が認められる | 灰白色 | 砂粒を若干含む | 良好・堅緻 | 57区 |
| １０１６ | 壷Ba１ | 10.0<br>13.0<br>12.4 | 口縁部は、外反気味に立ち上がり、端部は丸くおさまる。体部は球形を呈す。 | 口縁部―ヨコナデ<br>体部―内面ヘラケズリ後ナデ<br>接合痕、指頭圧痕が認められる | 明茶褐色 | 精良 | 良好 | 37区 |
| １０１７ | 壷Ba３ | 8.2<br>14.3<br>14.6 | 口縁部は、外傾して立ち上がり、端部は丸くおさまる。体部は最大径を中位にもち、扁球形を呈す。 | 体部―内面ヘラケズリ | 明茶褐色 | 砂粒を多く含む | 軟質 | 66区 |
| １０１８ | 壷Bb３ | 9.5<br>12.6<br>16.7 | 口縁部は外傾して立ち上がり、端部は丸くおさまる。体部は最大径を中位にもち、扁球形を呈す。 | 口縁部―ヨコナデ、内面にハケメが認められる<br>体部―内面、指ケズリ底部にしぼり目状のものが残る | 茶褐色 | 砂粒を若干含む | 軟質 | 67区 |
| １０１９ | 小型丸底壷D | 8.0<br>8.7<br>9.6 | 口縁部は短く内彎気味に立ち上がり、端部は丸くおさまる。体部は最大径を中位にもち、球形を呈す。 | 体部外面―ハケメが一部残る | | | | 67区 |
| １０２０ | 鉢A | 9.2<br>11.5<br>9.9 | 口縁部はわずかに屈曲し、外傾して立ち上がる。端部は丸くおさまる。体部は最大径を中位にもち、球形を呈す。穿孔は、焼成前に行なわれている。 | 口縁部―ヨコナデ<br>体部―外面下半ヘラケズリ後ナデか | 赤褐色 | 砂粒を含む | 良好 | 84区 |
| １０２１ | 鉢B | 8.3<br>10.3<br>10.7 | 口縁部は外傾して立ち上がり、端部は丸くおさまる。体部は最大径をやや上位にもち、球形を呈す。穿孔は、焼成前に行なわれている。 | 口縁部―タテハケ後ヨコナデ<br>体部―外面ハケメ | 赤褐色 | 精良 | 軟質 | 48区 |
| １０２２ | 鉢B | 7.6<br>8.3<br>9.8 | 口縁部は外反して立ち上がり、端部は薄く尖り気味である。体部は最大径をやや上位にもち、球形を呈す。穿孔は、焼成前に行なわれている。 | 口縁部―ヨコナデ<br>体部―外面肩部にハケメ | 淡赤褐色 | 砂粒を少量含む | 良好 | |
| １０２３ | 高坏Ac | 22.4<br>17.3<br>16.5 | 坏部は、水平に延びる坏底部から屈曲して内彎気味に立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。端部は丸くおさまる。脚柱部は、直線的に開き、屈折して短い裾部へと続く。 | 坏部―外面ヨコナデ、指頭痕が認められる | 灰白色 | 砂粒を含む | 良好 | 接合法１類、56区 |

| 番　号 | 器　種 | 法量 | 形　態　の　特　徴 | 調整技法の特徴 | 色　調 | 胎　土 | 焼　成 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| １０２４ | 高坏Ab | 20.0<br>15.1<br>13.0 | 坏部は、坏底部から屈曲し､外傾して立ち上がる。口縁部へと続く。端部は薄くおわる。脚柱部は直線的に開き、屈曲して裾部へと続く。端部は、僅かに肥厚する。 | 坏部―ヨコナデ<br>脚柱部―内面ヘラケズリ後ヨコナデ、外面不明<br>裾部―内面ヨコナデ | 赤褐色 | 精良 | やや軟質 | 接合法４類、44区 |
| １０２５ | 高坏Ab | 22.2<br>13.2<br>14.2 | 坏部は、坏底部から外傾して立ち上がる。口縁部は僅かに外反する。端部は薄くおわる。脚柱部は直線的に開き、屈曲して裾部へと続く。端部は僅かに肥厚する。 | 坏部―ヨコナデ、ハケメが一部に残る<br>脚柱部―ヨコナデ、内面にしぼり面が残る<br>裾部―ヨコナデ | 灰白色<br>坏部口縁部に一部黒斑が認められる | 精良 | 良好 | 接合法３類、14区 |
| １０２６ | 高坏Ab | 14.2<br>12.7<br>11.3 | 坏部は坏底部から外傾して立ち上がる。口縁部へと続く。脚柱部は、直線的に開き、ゆるく屈曲して裾部へと続く。 | 坏部―外面ヨコナデ、内面ハケメが残る<br>脚柱部―外面タテハケ<br>裾部―内面ヨコハケ | 赤褐色 | 砂粒を多く含む | 軟質 | 接合法４類、57区 |
| １０２７ | 高坏Aa | 15.1<br>11.9<br>9.6 | 坏部は、坏底部から外傾して立ち上がる。口縁部へと続く、端部は丸くおさまる。脚柱部は、直線的に開き、鋭く屈折して裾部へと続く。 | 坏部―外面ハケメが一部残る<br>脚柱部―不明<br>裾部―不明 | 赤橙色 | 精良 | 軟質 | 接合法１類、47区 |
| １０２８ | 高坏Ab | 13.8<br>10.5<br>9.7 | 坏部は、坏底部から外反して立ち上がる口縁部へと続く。端部は丸くおさまる。脚柱部は中膨みでゆるく屈曲し、裾部へと続く。端部は面をなす。 | 坏部―外面ヨコナデ内面ヨコナデ及びハケメ<br>脚柱部―不明<br>裾部―不明 | 明赤褐色 | 精良 | 良好 | 接合法４類、77区 |
| １０２９ | 高坏Bb | 14.2<br>11.0<br>10.2 | 坏部は、坏底部から内彎して立ち上がる口縁部へと続く。端部は丸くおさまる。脚柱部は外反して開き、屈折して裾部へと続く。 | 坏部―不明<br>脚柱部―内面ヘラケズリ後ヨコナデ<br>裾部―不明 | 赤褐色 | 砂粒を含む | やや軟質 | 接合法４類、85区 |
| １０３０ | 高坏Ba | 13.2<br>10.7<br>10.6 | 坏部は、坏底部から内彎して立ち上がる口縁部へと続く。脚柱部は筒状を呈し、屈曲して裾部へと続く。 | 坏部―ヨコナデ、外面にハケメが一部残る。脚柱部―ヨコナデ | 明茶褐色 | 細砂粒を含む | 軟質 | 接合法１類、75区 |
| １０３１ | 高坏Bb | 16.0<br>12.4<br>10.4 | 坏部は、坏底部から外傾して立ち上がる口縁部へと続く。端部は丸くおさまる。脚柱部は筒状であり屈曲して裾部へと続く。 | 坏部―ヨコナデ<br>脚柱部―外面下半ヘラナデ<br>内面―下半ヘラケズリ後ヨコナデ<br>裾部―ヨコナデ | 明赤褐色 | 精良 | やや軟質 | 接合法３類、74区 |
| １０３２ | 高坏Bb | 15.2<br>12.2<br>9.7 | 坏部は、坏底部から外傾して立ち上がる口縁部へと続く。端部は直線的に開き、屈折して裾部へと続く。 | 坏部―ヨコナデ<br>脚柱部―内面ヘラケズリ後ヨコナデ<br>裾部―ヨコナデ | 赤褐色 | 精良 | 良好 | 接合法３類、77区 |
| １０３３ | 高坏Ba | 16.5<br>12.2<br>9.6 | 坏部は、坏底部から外反気味に開く口縁部へと続く。脚柱部は中膨みで、屈曲して裾部へと続く。 | 坏部―ヨコナデ<br>脚柱部―内面上半にしぼり目が残る<br>裾部―ヨコナデ | 赤褐色 | 精良 | やや軟質 | 接合法４類、47区 |
| １０３４ | 高坏Ba | 15.1<br>12.1<br>11.2 | 坏部は、坏底部から内彎気味に立ち上がる口縁部へと続く。坏底部と口縁部との境は明瞭な稜となっている。端部は丸くおさまる。脚柱部は外反して開き、僅かに屈曲して裾部へと続く。 | 坏部―ヨコナデ<br>脚柱部―内面しぼり目が残る<br>裾部―不明 | 赤橙色 | 精良 | 軟質 | 接合法４類、37区 |

| 番号 | 器種 | 法量 | 形態の特徴 | 調整技法の特徴 | 色調 | 胎土 | 焼成 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1035 | 高坏Ba | 15.3<br>12.5<br>11.9 | 坏部は、坏底部から内彎気味に立ち上がる、口縁部へと続く。坏底部と口縁部との境は段となって残る。端部は丸くおさまる。脚柱部は外反して開き、僅かに屈曲して裾部へと続く。端部は内面が凹む。 | 坏部—不明<br>脚柱部—不明<br>裾部—不明 | 赤橙色 | 精良 | 軟質 | 接合法1類、47区 |
| 1036 | 高坏Cc | 16.0<br>13.2<br>12.2 | 坏部は、坏底部から屈曲し、外傾して立ち上がる口縁部へと続く。脚柱部は直線的に開き、屈曲して短い裾部へと続く。 | 坏部—外面ヘラケズリ後ヨコナデ、内面ヨコナデ<br>脚柱部—外面ヨコナデ、内面ヘラケズリ後ヨコナデ<br>裾部—ヨコナデ | 暗赤褐色 | 砂粒を含む | 良好 | 接合法4類、47区 |
| 1037 | 高坏Cb | 22.8<br>16.2<br>14.4 | 坏部は、内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。端部は丸くおさまる。脚柱部は外反して開き、僅かに屈曲して裾部へと続く。 | 坏部—外面タテハケ後ヨコナデ<br>脚柱部—内面しぼり目が残る<br>裾部—内面ヨコハケ後ナデ | 淡赤褐色 | 精良 | やや軟質 | 接合法4類、脚柱部に円孔が3個認められる66区 |
| 1038 | 高坏Cc | 21.7<br>14.5<br>16.4 | 坏部は、坏底部から僅かに屈曲し、外傾して立ち上がる口縁部へと続く。脚柱部は外反して開き、裾部は認められない。 | 坏部—外面タテハケ、内面ヨコハケ<br>脚柱部—外面ヨコナデか？、内面上半ヘラケズリ後ナデ、下半ヨコハケ<br>裾部—不明 | 明赤褐色 | 精良 | 軟質 | 接合法4類、44区坏口縁部に一部黒斑 |
| 1039 | 高坏Ca | 16.6<br>11.9<br>11.6 | 坏部は内彎して立ち上がり、端部は薄く尖り気味である。脚柱部は直線的に開き鋭く屈折して裾部へと続く。 | 坏部—外面タテハケ及びヨコナデ、内面ヘラミガキ及びヨコナデハケメが一部残る<br>脚柱部—外面ヘラミガキ、内面しぼり目が認められる<br>裾部—不明 | 灰白色 | 精良 | 良好 | 接合法2類、55区 |
| 1040 | 高坏Cb | 16.2<br>12.9<br>11.8 | 坏部は内彎して立ち上がり、端部は薄く尖り気味である。脚柱部は直線的に開き、屈曲して裾部へと続く。 | 坏部—ヘラミガキ<br>口縁部—ヨコナデ<br>脚柱部—不明<br>裾部—ヨコナデ | 灰白色 | 精良 | やや軟質 | 接合法4類、67区 |
| 1041 | 高坏Cb | 16.4<br>12.7<br>12.2 | 坏部は内彎して立ち上がり、端部は丸くおさまる。脚柱部は外反気味に開き、屈曲して裾部へと続く。 | 坏部—外面タテハケ後ヨコナデ、内面底部ヘラミガキ<br>脚柱部—外面ヘラミガキ<br>裾部—ヨコナデ | 暗赤褐色 | 精良 | 良好 | 接合法4類、56区 |
| 1042 | 坏A | 口径<br>13.1<br>器高<br>4.8 | 平底気味の底部から内彎して立ち上がる。端部は薄く尖り気味である。 | 口縁部—ヨコナデ | 灰白色 | 砂粒を含む | 軟質 | 黒斑が認められる63区 |
| 1043 | 坏A | 10.8<br>4.8 | 平底気味の底部から内彎して立ち上がる。端部は丸くおさまる。 | 口縁部—ヨコナデ<br>体部—内面ヨコナデ、ヘラ痕が残る | 灰白色 | 精良 | やや軟質 | 64区 |
| 1044 | 坏A | 12.4<br>5.8 | 丸底の底部から内彎して立ち上がる。端部は面をなす。 | 口縁部—外面ヨコナデ<br>体部—内面ヘラケズリ後ヨコナデ | 赤褐色 | 小石粒を多く含む | 良好 | 55区 |
| 1045 | 坏B | 11.3<br>5.1 | 丸底の底部から内彎して立ち上がり、口縁部は屈曲して開く。端部は尖り気味である。 | 口縁部—ヨコナデ | 淡赤橙色 | 精良 | 軟質 | 75区 |
| 1046 | 坏C | 14.2<br>5.4 | 平底の底部から、口縁部は外傾して立ち上がる。端部は丸くおさまる。 | 口縁部—ヨコナデ<br>体部—外面ハケメが一部残る、内面ナデ | 明茶褐色 | 精良 | やや軟質 | 75区 |

| 番　号 | 器　種 | 法量 | 形　態　の　特　徴 | 調整技法の特徴 | 色　調 | 胎　土 | 焼　成 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| １０４７ | 坏C | 13.9<br>4.5 | 平底の底部から内彎気味に立ち上がり、口縁部は外方へ開く。端部は丸くおさまる。 | 不明瞭 | 橙褐色 | 精良 | 軟質 | 75区 |
| １０４８ | 埦B | 9.2<br>4.2 | 平底の底部から口縁部は外傾して立ち上がる。端部は丸くおさまる。 | 不明瞭 | 明赤褐色 | 粗砂粒を多く含む | 軟質 | 56区 |
| １０４９ | 埦B | 10.9<br>5.5 | 丸底気味の底部から、口縁部は外傾して立ち上がる。端部は丸くおさまる。 | 口縁部―ヨコナデ | 暗赤褐色 | 精良 | 良好 | 66区 |
| １０５０ | 埦B | 13.0<br>6.5 | 平底の底部から内彎して立ち上がる。端部は肥厚する。 | 口縁部―ナデ<br>体部―外面ヘラケズリ後ナデ | 明赤褐色（一部黒色） | 精良 | 良好 | 65区 |
| １０５１ | 埦A | 12.0<br>8.3 | 丸底の底部から、内彎して立ち上がり、口縁部は、外反する。端部は丸くおさまる。 | 口縁部―ヨコナデ<br>体部―内面ヘラケズリ後ナデ、底部にハケメが認められる | 灰白色 | 精良 | 良好 | 47区 |
| １０５２ | 短脚付坏B | 13.6<br>9.6<br>脚部径<br>9.8 | 坏部は、平底の底部から内彎して立ち上がり、口縁部は外面に稜を残している。端部は丸くおさまる。脚部は屈曲して開く。 | 坏部―ヨコナデ及びヨコハケ<br>脚部―ヨコナデ | 明赤褐色（黒斑が残る） | 砂粒を多く含む | 軟質 | 73区 |
| １０５３ | 短脚付坏B | 11.9<br>6.5<br>脚部径<br>7.6 | 坏部は、平底の底部から内彎して立ち上がり、口縁部は僅かに稜を残している。端部は内傾する面をなす。脚部は、外反気味に開き、端部は外側に肥厚する。 | 坏部―外面ヨコナデ及びヨコハケ、内面ナデ<br>脚部―ヨコナデ | 赤褐色 | 砂粒を多く含む | やや軟質 | 73区 |
| １０５４ | 器台 | 16.6<br>9.5<br>裾部径<br>14.0 | 坏部は内彎して立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。端部は上方へ突出する。脚部は外反して開き、裾部は認められない | 坏部―外面ハケメ後ヨコナデ、内面ヨコナデ<br>脚部―外面ヨコナデ、内面ヨコナデ一部ハケメが残る | | | | 55区 |
| １０５５ | 器台 | 12.0<br>8.4<br>裾部径<br>9.8 | 受部は、内彎して立ち上がり、端部は薄く尖り気味である。脚部は、中膨みで開く。 | 坏部―外面ヨコハケをナデ消す、内面ヘラケズリ後ヘラミガキ及びヨコナデ<br>脚部―外面ナデ、内面ヨコハケ及びナデ | 灰白色 | 精良 | 良好 | 外面に指頭圧痕が残る。<br>47区 |
| １０５６ | 甑 | 23.6<br>(20.0)<br>22.8 | 底部から体部にかけて内彎気味に立ち上がり、口縁部は外反する。端部は丸くおさまる。底部は丸底を呈すと思われる。 | 体部―外面下半にハケメ | 外面<br>暗赤褐色<br>内面<br>明赤褐色 | 小石を含み粗い | 軟質 | 47区 |
| １０５７ | 把手（？） | | 上方へ反っており、上面が凹む。 | | 赤褐色 | 砂粒を多く含む | 良好 | 27区 |
| １０５８ | 粗製土器 | 6.8<br>6.3<br>6.8 | 底部は平底である。体部は中位に最大径をもち、算盤玉状を呈す。口縁部は外傾して立ち上がり、端部は丸くおさまる。 | 口縁部―ヨコナデ<br>頸部―ハケメ | 灰白色 | 精良 | やや軟質 | 47区 |
| １０５９ | 手捏土器A | 5.6<br>5.4<br>5.0 | 口縁部は、ゆるく屈曲し、外反して立ち上がる。端部は、尖り気味である。底部は、平底である。 | 口縁部―ナデ<br>体部―外面指頭痕 | 灰白色 | 砂粒を若干含む<br>精良 | 良好 | 46区 |
| １０６０ | 手捏土器A | 6.0<br>4.5<br>6.0 | 平底の底部から内彎気味に立ち上がり、口縁部は外傾する。端部は丸くおさまる。 | 外面―口縁部ヨコナデ | 赤褐色 | 精良 | 軟質 | 64区 |

| 番　号 | 器　種 | 法量 | 形　態　の　特　徴 | 調整技法の特徴 | 色　調 | 胎　土 | 焼　成 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| １０６１ | 手捏土器<br>B | 7.8<br>5.1<br>— | 丸底の底部から外傾して立ち上がり、口縁部は僅かに屈曲する。端部は丸くおさまる。 | 指頭痕が顕著である | 明茶褐色 | 細砂粒を含む | やや軟質 | 57区 |
| １０６２ | 手捏土器<br>B | 6.2<br>4.1<br>6.5 | 丸底の底部から内彎して立ち上がる。端部は丸くおさまる。 | 内面―指ナデ | 淡茶褐色 | 細かい砂粒を含む | 良好 | 体部下半に黒斑が認められる。75区 |
| １０６３ | 手捏土器<br>B | 6.2<br>5.8<br>6.3 | 丸底の底部から直立気味に立ち上がり、口縁部は僅かに屈曲する。端部は丸くおさまる。 | 内面―指ナデ、接合痕が認められる | 明茶褐色 | 砂粒を多量に含む | 良好 | 55区 |
| １０６４ | 手捏土器<br>B | 4.9<br>5.2<br>6.7 | 丸底の底部から内彎して立ち上がる。端部は丸くおさまる。 | 体部―外面指頭痕が認められる、内面ヘラナデ | 赤褐色 | 精良 | やや軟質 | 56区 |
| １０６５ | 手捏土器<br>B | 5.4<br>4.7<br>5.9 | 丸底の底部から直立気味に立ち上がり、口縁部は僅かに屈曲する。端部は丸くおさまる。 | 指頭痕が認められる | 赤褐色 | 精良 | 軟質 | 65区 |
| １０６６ | 手捏土器<br>B | 4.9<br>4.3<br>5.8 | 丸底の底部から内彎して立ち上がる。端部は薄く尖り気味である。 | 不明瞭 | 赤褐色 | 精良 | 良好 | 56区 |
| １０６７ | 手捏土器<br>B | 6.2<br>4.5<br>— | 丸底の底部から内彎気味に立ち上がる。端部は薄くおわる。 | 外面―指頭痕が認められる | 灰白色一部赤褐色 | 砂粒を含む | 良好 | 55区 |
| １０６８ | 手捏土器<br>B | 3.6<br>3.6<br>3.6 | 丸底と思われる底部から上方へ立ち上がる。端部は丸くおさまる。 | 指ナデ | 灰白色 | 砂粒を含む | 良好 | 底部欠損<br>56区 |
| １０６９ | 手捏土器<br>B | 4.1<br>4.0<br>— | 丸底の底部から内彎して立ち上がる。端部は丸くおさまる。 | 不明瞭 | 茶褐色 | 精良 | 良好 | 56区 |
| １０７０ | 手捏土器<br>B | 4.5<br>3.3<br>— | 丸底の底部から外傾して立ち上がる。端部は薄い。 | 内面―指ナデ | 明茶褐色 | 精良 | 良好 | 55区 |
| １０７１ | 手捏土器<br>B | 3.6<br>3.6<br>4.2 | 丸底の底部から内彎気味に立ち上がり、口縁部は屈曲する。端部は丸くおさまる。 | 内面―指ケズリ | 赤褐色（底部黒斑） | 砂粒を多く含む | 良好 | 55区 |
| １０７２ | 手捏土器<br>B | 3.3<br>4.1<br>4.6 | 口縁部はゆるく屈曲し、直立気味に立ち上がる。端部は丸くおさまる。 | 口縁部―指頭痕 | 灰白色 | 精良 | 良好 | 54区 |
| １０７３ | 手捏土器<br>B | 3.0<br>2.2<br>— | 丸底の底部から内彎して立ち上がる。端部は薄くおわる。 | 指ナデ | 暗赤褐色 | 精良 | 良好 | 56区 |
| １０７４ | 手捏土器<br>B | 4.6<br>2.4<br>— | 丸底の底部から内彎して立ち上がる。端部は丸くおさまる。 | 外面　ヘラナデ | 明茶褐色 | 精良 | 良好 | |
| １０７５ | 手捏土器<br>B | 4.2<br>2.8<br>— | 丸底の底部から内彎して立ち上がる。端部は丸くおさまる。 | 外面―ヘラナデ<br>内面―指頭痕 | 赤褐色 | 精良 | 良好 | 55区 |
| １０７６ | 手捏土器<br>C | 5.8<br>4.6<br>底径<br>6.8 | 上げ底気味の底部から内彎して立ち上がる。端部は丸くおさまる。 | 内面―指ケズリ後ヨコナデ、指頭痕が認められる | 茶褐色<br>暗灰色（内面） | 精良 | 良好 | 66区 |
| １０７７ | 手捏土器<br>C | 6.2<br>4.2<br>— | 平底の底部から直立して立ち上がる。端部は丸くおさまる。 | 内面―指ナデ | 赤味を帯びた灰白色 | 砂粒を多く含む | 良好 | 76区 |
| １０７８ | 手捏土器<br>C | 4.4<br>3.5<br>4.8 | 平底の底部から、内彎して立ち上がる。端部は丸くおさまる。 | | 暗灰色<br>一部明灰色 | 良好 | 細砂粒を含む<br>精良 | 46区 |
| １０７９ | 手捏土器<br>C | 4.9<br>3.2<br>5.1 | 平底の底部から外傾して立ち上がる。端部は丸くおさまる。 | 口縁部―ヨコナデ、指ナデ | 暗灰色 | 砂粒を含む | 良好 | 64区 |
| １０８０ | 手捏土器<br>C | 6.4<br>3.2<br>底径<br>3.7 | 平底の底部から外傾して立ち上がる。端部は薄くおわる。 | 内面―指ナデ | 赤褐色 | 精良 | 良好 | 65区 |

| 番　号 | 器　種 | 法量 | 形　態　の　特　徴 | 調整技法の特徴 | 色　調 | 胎　土 | 焼　成 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| １０８１ | 手捏土器<br>C | 5.5<br>6.0<br>— | 平底の底部から外傾して立ち上がる。端部は、丸くおさまる。 | 外面—ヘラナデ<br>内面—指頭痕 | 暗灰色及び灰白色 | 良好 | 精良 | 54区 |
| １０８２ | 手捏土器<br>C | 6.3<br>8.6<br>7.1 | 平底の底部から内傾して立ち上がる。端部は尖り気味である。 | 口縁部—指頭痕が顕著である | 明灰白色 | 砂粒を多く含む | 良好 | 55区 |
| １０８３ | 手捏土器<br>C | 6.0<br>7.4<br>8.3 | 平底の底部から内傾して立ち上がり、口縁部は外反する。端部は尖り気味である。 | 内面—指頭痕、指ナデが認められる | 灰白色<br>一部黒斑 | 精良 | 良好 | 55区 |
| １０８４ | 手捏土器<br>D | 5.9<br>4.3<br>底径<br>4.2 | 丸底の底部から内彎して立ち上がる。A類に脚を付けたもの。端部は尖り気味である。 | 外面—指頭痕 | 灰白色 | 精良 | 良好 | 66区 |
| １０８５ | 手捏土器<br>D | 5.2<br>3.5<br>底径<br>4.2 | 丸底の底部から内彎して立ち上がる。A類に脚を付けたもの。端部は尖り気味である。 | 外面—指頭痕<br>内面—ナデ | 黒色、一部灰白色 | 精良 | 良好 | 66区 |
| １０８６ | 手捏土器<br>D | 5.4<br>(2.9)<br>— | 平底の底部から屈曲して外上方へと立ち上がり、口縁部へと続く。端部は丸くおさまる。脚部は不明。 | 内面—指ナデ | 暗灰色 | 砂粒を若干含む | 良好 | 56区 |
| １０８７ | 手捏土器<br>E | —<br>(5.4)<br>底径<br>3.8 | 脚柱部は棒状を呈し、裾部は広がる。端部は丸くおさまる。上げ底である。受部は内彎して立ち上がる。 | 内面—受部　ハケメが残る | 灰白色 | 精良 | やや軟質 | 45区 |
| １０８８ | 手捏土器<br>E | —<br>(4.4)<br>— | 脚柱部から裾部にかけて広がる。端部は丸くおさまる。上げ底である。受部は内彎して立ち上がる。 | 外面—指頭痕が認められる | 灰白色 | 精良 | やや軟質 | 44区 |
| １０８９ | 手捏土器<br>E | —<br>(4.5)<br>底径<br>3.7 | 脚柱部は棒状を呈し、裾部は僅かに広がると思われる。上げ底である。受部は不明。 | 不明 | 灰白色 | 精良<br>（赤色粒を含む） | やや軟質 | 35区 |
| １０９１ | 壷B | 11.0<br>(13.0)<br>14.6 | 口縁部は複合口縁を呈し、外上方へ立ち上がる。体部は球形で、丸底を呈すと考えられる。 | 口縁部—ヨコナデ<br>体部—外面上半ヨコナデ及びヨコナデ後タテハケ、下半ヘラミガキ、内面指ケズリ、接合部にしぼり目と指頭痕が残る | 黒色<br>（一部明褐色） | 精良 | 良好 | 55区 |
| １０９２ | 壷Bb３ | 9.5<br>12.0<br>13.4 | 口縁部は外傾し、僅かに屈曲して立ち上がる。端部は丸くおさまる。体部は球形を呈し、底部は平底気味である。 | 口縁部—ヨコナデ<br>体部—外面上半ハケメ後ヘラミガキ、下半ハケメが一部残る、内面上半ヨコナデ、下半指ケズリ | 黒色 | 精良 | 良好 | 55区 |
| １０９３ | 壷Ba３ | 9.3<br>12.9<br>13.2 | 口縁部は外傾し、端部は丸くおさまる。体部は球形を呈す。 | 口縁部—不明<br>体部—外面刷毛目が一部残る、内面ヘラケズリ後ナデ | 黒色<br>（口縁部内面暗赤褐色） | 精良 | やや軟質 | 55区 |
| １０９４ | 高坏Db | 10.4<br>12.6<br>裾部径<br>10.2 | 坏部は内彎して立ち上がり、端部は丸くおさまる。脚部は、直線的に開き、屈折して、 | 坏部—外面タテハケ、内面ナデ<br>脚部—外面ナデ、内面ヘラケズリ後ヨコナデ | 黒色 | 精良<br>（小石粒を若干含む） | 良好 | 45区 |
| １０９５ | 短脚付坏<br>A | 13.4<br>8.4<br>脚部径<br>9.4 | 坏部は内彎して立ち上がり、端部は内傾する面をなす。脚部は外反して開き、内外面に稜を残す。 | 坏部—ハケメが残る<br>脚部—ヨコナデ | 黒色 | 精良 | 良好 | 55区 |

| 番号 | 器種 | 法量 | 形態の特徴 | 調整技法の特徴 | 色調 | 胎土 | 焼成 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1096 | 短脚付坏A | 12.4<br>7.2<br>脚部径<br>8.3 | 坏部は内彎して立ち上がり、端部は内傾する面をなす。脚部は外反して開き、外面に稜を残す。 | 坏部—ハケメ、ヨコナデ<br>脚部—ヨコナデ | 黒色 | 砂粒を多く含む | やや軟質 | 36区 |
| 1097 | 埦B | 13.3<br>6.8<br>— | 平底気味の底部から内彎して立ち上がる。口縁部は外反して開き、端部は丸くおさまる。 | 口縁部—ヨコナデ<br>体部—外面ハケメ、内面ナデ<br>底部—ナデ | 黒色 | 精良 | 良好 | 56区 |
| 1098 | 坏A | 12.4<br>6.2<br>— | 平底の底部から内彎して立ち上がる。端部は尖り気味におさまる。 | 口縁部—ヨコナデ<br>体部—ナデ | 黒色 | 精良 | 良好 | 64区 |
| 1099 | 坏A | 12.0<br>4.9<br>— | 平底の底部から内彎して立ち上がる。端部は尖り気味におさまる。 | 不明 | 黒色 | 精良 | 良好 | 75区 |
| 1101 | 甕Bb | 16.0<br>25.4<br>22.5 | 口縁部は、体部から「く」の字状に屈曲し、外反して立ち上がる。端部は丸くおさまる。体部は、最大径をやや上半にもつ球形で、底部は丸底を呈す。 | 口縁部—ヨコナデ<br>体部—外面ハケメ、内面ヘラケズリ後ナデ | 暗赤褐色 | 細かい砂粒を多く含む | 良好 | 黒斑が認められる<br>No.34 |
| 1102 | 甕Bb | 16.8<br>25.0<br>23.5 | 口縁部は、体部から「く」の字状に屈曲し、外反して立ち上がる。端部は丸くおさまる。体部は球形、底部は丸底を呈す。 | 口縁部—ヨコナデ一部ハケメが残る<br>体部—外面ハケメ、内面ヘラケズリ後ナデ | 明赤褐色 | 精良 | やや軟質 | 黒斑が認められる<br>No.96 |
| 1103 | 甕Bc | 15.2<br>24.5<br>22.6 | 口縁部は、体部から「く」の字状に屈曲し外傾して立ち上がる。口縁部は全体的に肥厚し、端部は面をなす。体部は球形、底部は丸底で僅かに突出気味である。 | 口縁部—ヨコナデ<br>体部—外面ハケメ、内面ナデ | 灰白色<br>（内面暗灰色） | 砂粒を含む | 良好 | No.86 |
| 1104 | 甕Bb | 14.7<br>23.7<br>21.5 | 口縁部は、体部から「く」の字状に屈曲し、外反して立ち上がる。端部は丸くおさまる。体部は球形、底部は丸底を呈す。 | 口縁部—外面ハケメ後ヨコナデ、内面ヨコナデ<br>体部—外面ハケメ | 赤褐色 | 精良 | 良好 | No.34 |
| 1105 | 甕Ba | 17.0<br>24.3<br>23.0 | 口縁部は、体部から「く」の字状に屈曲し、外反して立ち上がる。端部は丸く肥厚し、内面が僅かに凹む。体部は、やや下膨れ気味の球形で、底部は丸底を呈す。 | 口縁部—ヨコナデ<br>体部—外面上半ハケメ、下半ハケメ後ナデ、内面上半ヨコナデ、下半ヘラケズリ | 灰白色 | 精良 | 良好 | 黒斑が認められる<br>No.44 |
| 1106 | 甕Ba | 16.4<br>(23.9)<br>26.0 | 口縁部は、体部から「く」の字状に屈曲し、内彎気味に立ち上がる。端部は肥厚し、内傾する面をなす。体部は球形で、底部は丸底を呈すと思われる。 | 口縁部—ヨコナデ<br>体部—外面ハケメ、内面指ケズリ | 灰白色 | 砂粒を含む | やや軟質 | 黒斑が認められる<br>接合痕が顕著<br>No.20 |
| 1107 | 甕Aa | 18.2<br>(31.6)<br>28.6 | 口縁部は、体部から「く」の字状に屈曲し、内彎気味に立ち上がる。端部は肥厚し、内傾する面をなす。体部は上半に最大径をもつ球形で、底部は丸底を呈す。 | 口縁部—ヨコナデ<br>体部—外面ハケメ、内面不明　指頭圧痕が認められる | 灰白色 | 砂粒を含む | やや軟質 | No.96・134 |
| 1108 | 甕Cb | 12.0<br>16.4<br>16.2 | 口縁部は体部からゆるく屈曲し、外傾して立ち上がる。端部は丸くおさまる。体部は上半に最大径を持つ球形で、底部は丸底を呈す。 | 口縁部—不明<br>体部—外面ハケメ、内面接合痕が認められる | 明赤褐色 | 砂粒を多く含む | 軟質 | 底部に焼成後の穿孔が認められ、煤が付着している |

| 番　号 | 器　種 | 法量 | 形　態　の　特　徴 | 調整技法の特徴 | 色　調 | 胎　土 | 焼　成 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| １１０９ | 甕Db | 11.2<br>12.7<br>16.8 | 口縁部は、体部から「く」の字状に屈曲し、外傾して立ち上がる。端部はやや尖り気味で丸くおさまる。体部は上半に最大径を持つ球形で、底部は丸底を呈す。 | 口縁部―外面ハケメ後ヨコナデ、内面ヨコナデ<br>体部―外面ハケメ、内面指ケズリ、指頭痕が認められる | 灰白色（外面、暗灰色） | 精良 | 良好 | 一部煤が付着<br>No.52<br>S３下 |
| １１１０ | 大型壷 | 17.2<br>28.6<br>30.3 | 口縁部は体部からゆるく屈曲し、外傾して立ち上がる。一部に稜が認められる。端部は僅かに内傾する面をなす。体部はやや肩の張る球形で、底部は丸底である。 | 口縁部―ヨコナデ<br>体部―外面ハケメ後ナデ、底部ヘラミガキ、内面ナデ、接合部に指頭痕が認められる | 灰白色 | 精良 | 良好 | 体部外面に黒斑が認められる |
| １１１１ | 壷Bb１ | 10.2<br>14.0<br>13.5 | 口縁部は、体部からゆるく屈曲し、外傾して立ち上がる。体部は球形で、丸底を呈す。底部は厚い。口縁部外面に稜が認められる。 | 口縁部―ヨコナデ<br>体部―外面ヨコナデか、内面　肩部に指頭痕が認められる | 淡赤褐色 | 精良 | 良好 | 内面に接合痕が残る |
| １１１２ | 壷Ba１ | 10.2<br>15.1<br>13.4 | 口縁部は、外傾して立ち上がり、端部は丸くおさまる。体部は球形を呈す。 | 口縁部―外面タテハケ後ヨコナデ、内面ハケメ<br>体部―外面ハケメ、内面指ケズリ | 赤褐色 | 精良 | 良好 | No.87 |
| １１１３ | 壷Ba２ | 10.2<br>13.9<br>12.6 | 口縁部は、外傾して立ち上がり、端部は丸くおさまる。体部は肩部が稜をなし、底部は丸底である。頸部は、僅かにくびれている。 | 口縁部―ハケメ<br>体部―外面ハケメ、内面指ケズリ | 灰白色 | 精良 | 良好 | No.15 |
| １１１４ | 壷Ba２ | 12.2<br>15.1<br>14.5 | 口縁部は、外傾して立ち上がり、端部は丸くおさまる。体部は肩の張る球形を呈す。 | 口縁部―外面ハケメ後ヨコナデ、内面ヨコナデ<br>体部―外面ハケメ、内面指ケズリ | 淡赤褐色 | 細砂粒を多く含む | 良好・堅緻 | No.98 |
| １１１５ | 壷Ba１ | 9.2<br>15.2<br>13.8 | 口縁部は、やや外傾して立ち上がり、端部は丸くおさまる。体部は球形で、丸底を呈す。 | 口縁部―外面ヨコナデ、内面ハケメ<br>体部―外面ハケメ | 暗赤褐色 | 砂粒を含む | 良好 | 底部に煤が付着<br>No.11 |
| １１１６ | 壷Ba１ | 10.5<br>13.8<br>13.4 | 口縁部は、外反して立ち上がり、端部は丸くおさまる。体部は球形で丸底を呈すが、一部面をなしている。 | 口縁部―ハケメ後ヨコナデ<br>体部―外面ハケメ、内面指ケズリ | 赤褐色 | 精緻 | 良好 | 一部黒斑が認められる |
| １１１７ | 壷Ba１ | 10.2<br>14.5<br>13.4 | 口縁部は、外反して立ち上がり、端部は丸くおさまる。体部は球形で丸底を呈す。 | 口縁部―ヨコナデ<br>体部―外面上半ヨコナデ、下半ヘラケズリ後ナデ、内面底部　指頭痕が認められる。 | 灰白色 | 砂粒を若干含む | 良好 | No.137 |
| １１１８ | 小型丸底壷C | 9.4<br>10.6<br>10.2 | 口縁部は、外傾して立ち上がり、端部は丸くおさまる。体部は球形を呈す。 | 口縁部―ヨコナデ<br>体部―外面上半ヨコナデ、下半ヘラケズリ後ナデ、内面ナデ | 赤褐色 | 精良 | 良好 | 内面に接合痕が残る<br>No.76 |
| １１１９ | 小型丸底壷C | 7.8<br>9.1<br>8.0 | 口縁部は、外傾して立ち上がり、端部は丸くおさまる。体部は、球形を呈す。 | 口縁部―ヨコナデ<br>体部―外面底部ヘラケズリ後ナデ | 淡赤褐色 | 細かい砂粒を含む | やや軟質 | No.33 |
| １１２０ | 小型丸底壷D | 7.9<br>8.0<br>8.2 | 口縁部は、外反気味に立ち上がり、端部は丸くおさまる。体部は球形を呈す。 | 口縁部―ヨコナデ<br>体部―外面上半ヨコナデ、内面ヨコナデ | 灰白色 | 砂粒を少量含む | 良好 | No.83 |

| 番　号 | 器　種 | 法量 | 形　態　の　特　徴 | 調整技法の特徴 | 色　調 | 胎　土 | 焼　成 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| １１２１ | 小型丸底壷D | 7.6<br>8.5<br>9.0 | 口縁部は、外傾して立ち上がり、端部は丸くおさまる。体部は球形を呈す。 | 口縁部―ヨコナデ、外面にハケメが認められる<br>体部―不明 | 明赤褐色 | 砂粒を多く含む | 良好 | No.14 |
| １１２２ | 小型壷 | 7.4<br>9.0<br>8.3 | 口縁部は、外傾して立ち上がり、端部は丸くおさまる。体部は最大径を中位にもち、底部は平底を呈す。 | 口縁部―ヨコナデ<br>体部―外面上半ヨコナデ、内面　指頭痕が残る | 淡赤褐色 | 砂粒を少量含む | 良好 | |
| １１２３ | 小型丸底壷C | 7.1<br>7.5<br>7.7 | 口縁部は、屈曲して立ち上がり、端部は丸くおさまる。体部は球形を呈す。 | 口縁部―ヨコナデ<br>体部―外面上半ヨコナデ | 灰白色 | 精緻 | 良好 | |
| １１２４ | 小型丸底壷C | 6.8<br>9.3<br>8.3 | 口縁部は、外反する頸部から直立して立ち上がり、端部は丸くおさまる。体部は球形を呈す。 | 口縁部―ヨコナデ、外面にハケメが認められる<br>体部―外面粗いハケメ | 赤褐色 | 精緻 | 良好 | 口縁部外面に籾痕、臼玉２個含む<br>No.135 |
| １１２５ | 甕A | 8.6<br>10.0<br>9.8 | 口縁部は、屈曲して立ち上がり、端部は丸くおさまる。体部はやや下膨れ気味である。穿孔は焼成前に行なわれている。 | 口縁部―ヨコナデ<br>体部―外面ヘラミガキ | 赤褐色 | 砂粒を含む | 良好 | 内面に接合痕が残る<br>No.80 |
| １１２６ | 高坏Ab | 16.9<br>12.5<br>11.2 | 坏部は、水平に伸びる坏底部から外傾して立ち上がる。端部は面をなす。脚柱部は直線的に開き、屈折して裾部へと続く。 | 坏部―ヨコナデ<br>脚柱部―外面ヘラナデ、内面ヘラケズリ後ヨコナデ<br>裾部―ヨコナデ | 淡赤褐色 | 砂粒を少量含む | やや軟質 | 接合法３類<br>No.115 |
| １１２７ | 高坏Aa | 16.1<br>11.1<br>10.9 | 坏部は、水平に伸びる坏底部から外傾して立ち上がる口縁部へと続く。外面に稜を残し、端部は面をなす。脚柱部は直線的に開き、屈折して裾部へと続く。 | 坏部―外面ヨコナデ、内面ハケメ<br>脚柱部―外面ヘラナデ、内面ヘラケズリ後ヨコナデ<br>裾部―ヨコナデ | 灰白色 | 砂粒を少量含む | 良好・堅緻 | 接合法２類、口縁部に黒斑、赤彩が認められ坏部に指頭痕<br>No.64 |
| １１２８ | 高坏Aa | 16.8<br>12.7<br>11.4 | 坏部は、水平に伸びる坏底部から外傾して立ち上がる。端部は面をなす。脚柱部は直線的に開き、屈折して裾部へと続く。 | 坏部―外面一部ハケメ、内面ハケメ、ヘラケズリ後ヨコナデ<br>脚柱部―外面ヘラナデ、内面ヘラケズリ後ヨコナデ、上半にしぼり目<br>裾部―ヨコナデ | 赤褐色 | 精緻 | 良好 | 接合法３類、口縁部に黒斑<br>No.3 |
| １１２９ | 高坏Aa | 21.0<br>16.0<br>13.0 | 坏部は、水平に伸びる坏底部から外傾して立ち上がる口縁部へと続く。端部は丸くおさまる。脚柱部は直線的に開き、屈折して裾部へと続く。 | 坏部―不明<br>脚柱部―内面上半にしぼり目<br>裾部―不明 | 明赤褐色 | 砂粒を多く含む | 堅緻 | 接合法４類No.142 |
| １１３０ | 高坏Ab | 11.5<br>10.7<br>8.2 | 坏部は、水平に伸びる坏底部から外傾して立ち上がる口縁部へと続く。端部は僅かに面をなす。脚柱部は外反気味に開き、屈曲して裾部へと続く。 | 坏部―外面ヨコハケが一部残る、内面ヨコナデ<br>脚柱部―外面ハケメ<br>裾部―不明 | 赤褐色 | 砂粒を多く含む | 軟質 | 接合法２類<br>No.148 |
| １１３１ | 高坏Aa | 16.2<br>13.5<br>11.3 | 坏部は、水平に伸びる坏底部から外傾して立ち上がる口縁部へと続く。端部は僅かに面をなす。脚柱部は直線的に開き、屈折して裾部へと続く。 | 坏部―外面ヨコナデ、内面ハケメ後ヨコナデ<br>脚柱部―外面ヨコナデ、内面ヘラケズリ後ヨコナデ<br>裾部―不明 | 灰白色 | 砂粒を少し含む | 良好 | 接合法１類、脚柱部外面に指頭痕<br>No.38 |

| 番　号 | 器　種 | 法量 | 形　態　の　特　徴 | 調整技法の特徴 | 色　調 | 胎　土 | 焼　成 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1132 | 高坏Ab | 16.2<br>10.3<br>12.0 | 坏部は、内彎する坏底部から外傾して立ち上がる口縁部へと続く。端部は尖り気味である。脚柱部は外反気味に開き、屈折して裾部へと続く。 | 坏部―外面ヘラケズリ後ヨコナデ、内面ヨコナデ<br>脚柱部―外面ヘラナデ、内面ヘラケズリ後ヨコナデ<br>裾部―ヨコナデ | 赤褐色 | 精緻 | 良好 | 接合法2類<br>No.73 |
| 1133 | 高坏Ab | 18.6<br>14.4<br>12.8 | 坏部は、外上方へ伸びる坏底部から外傾して立ち上がる口縁部へと続く。端部は丸くおさまる。脚柱部は外反気味に開き、屈折して裾部へと続く。 | 坏部―外面ヨコハケ及びヨコナデ、内面ヨコナデ<br>脚柱部―外面ヘラナデ、内面ヘラケズリ後ヨコナデ<br>裾部―ヨコナデ | 灰白色 | 細砂粒を含むが精良 | 良好 | 接合法1類<br>No.52 |
| 1134 | 高坏Ab | 13.8<br>14.1<br>10.2 | 坏部は、内彎する坏底部から外傾して立ち上がる口縁部へと続く。端部は丸くおさまる。脚柱部は直線的に開き、屈曲して裾部へと続く。 | 坏部―不明<br>脚柱部―不明<br>裾部―ヨコナデか？ | 明赤褐色 | 砂粒を多く含む | 軟質 | 接合法2類、脚柱部外面に指頭痕 |
| 1135 | 高坏Ab | 24.1<br>13.9<br>15.4 | 坏部は、内彎する坏底部から外傾して立ち上がる口縁部へと続く。端部は面をなす。脚柱部は、中膨み気味で屈曲して裾部へと続く。端部は反る。 | 坏部―外面タテハケが一部残る<br>脚柱部―外面ヨコナデ、内面上半にしぼり目<br>裾部―ヨコナデ | 明赤褐色 | 精緻 | 軟質 | 接合法2類、SX03下層と接合<br>No.136・141<br>S3下 |
| 1136 | 高坏Aa | 19.9<br>14.4<br>13.8 | 坏部は、水平に伸びる坏底部から外傾して立ち上がる。端部は面をなす。脚柱部は直線的に開き、屈折して裾部へと続く。 | 坏部―ヨコナデ、内面底部　細かいヘラミガキ<br>脚柱部―内面ヘラケズリ後ヨコナデ<br>裾部―ヨコナデ | 淡赤褐色 | 砂粒を少量含む | 良好・堅緻 | 接合法1類、口縁部に黒斑<br>No.140（坏部）・147（脚部） |
| 1137 | 高坏Bb | 15.9<br>13.1<br>10.8 | 坏部は、外面に稜を僅かに残して立ち上がり、端部は丸くおさまる。脚柱部は直線的に開き、屈折して裾部へと続く。 | 坏部―ヨコナデ、内面一部ハケメが残る<br>脚柱部―不明<br>裾部―ヨコナデ | 淡赤褐色 | 精緻 | 良好 | 接合法4類、口縁部に黒斑。脚柱部外面に指頭痕<br>No.25 |
| 1138 | 高坏Bb | 15.9<br>11.9<br>9.4 | 坏部は、内彎する坏底部から外傾して立ち上がる口縁部へと続く。端部は丸くおさまる。脚柱部は直線的に開き、屈曲して、外反する端部へと続く。 | 坏部―外面ハケメ後ヨコナデ、内面ヨコナデ<br>脚柱部―外面ヘラナデ、内面ヘラケズリ後ヨコナデ<br>裾部―ヨコナデ、ハケメが一部残る | 淡赤褐色 | 砂粒を少量含む | 良好 | 接合法1類<br>No.150 |
| 1139 | 高坏Bc | 14.6<br>14.9<br>11.1 | 坏部は、内彎して立ち上がり、外面に稜を残す。端部は内傾する面をなす。脚部は外反して開く。 | 坏部―外面ヘラケズリ後ヨコナデか？ハケメが残る、内面ヨコナデ<br>脚柱部―外面ヘラナデ、内面ヘラケズリ後ヨコナデ<br>裾部―ヨコナデ | 赤橙色 | 精緻 | 良好 | 接合法1類、接合部外面しぼり目か？ |
| 1140 | 高坏Ba | 21.2<br>13.5<br>14.1 | 坏部は、水平に伸びる坏底部から外傾して立ち上がる口縁部へと続く。端部は内傾する面をなす。脚柱部は直線的に開き、屈折して裾部へと続く。端部は面をなす。 | 坏部―外面ヨコナデ一部ハケメ、内面ハケメ<br>脚柱部―外面ヘラナデ、内面ヘラケズリ後ヨコナデ<br>裾部―ヨコナデ | 赤褐色 | 砂粒を多く含む | 良好 | 接合法2類 |

| 番号 | 器種 | 法量 | 形態の特徴 | 調整技法の特徴 | 色調 | 胎土 | 焼成 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1141 | 高坏Ca | 19.2<br>12.9<br>12.1 | 坏部は、内彎気味に立ち上がり、端部は丸くおさまる。脚柱部は直線的に開き、屈折して裾部へと続く。端部は面をなす。 | 坏部―外面ヨコナデ、内面ヘラミガキ一部ハケメが残る<br>脚柱部―外面ヘラケズリ後ヘラナデ、内面ヘラケズリ<br>裾部―ヨコナデ | 暗赤褐色 | 精緻 | 良好 | 接合法2類<br>No.58 |
| 1142 | 高坏Cb | 12.9<br>11.5<br>12.4 | 坏部は、内彎して立ち上がり、端部は丸くおさまる。脚柱部は直線的に開き、屈折して裾部へと続く。 | 坏部―ヘラケズリ後ヨコナデ<br>脚柱部―外面ヘラナデ、内面ヘラケズリ後ヨコナデ<br>裾部―ヨコナデ | 灰白色 | 砂粒を含む | 良好 | 接合法1類、脚柱部に孔を穿つ（二孔）。<br>No.154 |
| 1143 | 高坏Cb | 12.2<br>11.1<br>11.7 | 坏部は、内彎して立ち上がり、端部は丸くおさまる。脚柱部は直線的に開き、屈折して裾部へと続く。 | 坏部―ヨコナデ<br>脚柱部―外面ヘラナデ、内面ヘラケズリ<br>裾部―外面ヨコナデ、内面ヘラケズリ後ヨコナデ | 赤褐色 | 砂粒を多く含む | 良好 | 接合法1類、脚柱部に穿孔<br>No.57 |
| 1144 | 高坏Cc | 14.5<br>10.5<br>9.7 | 坏部は、内彎して立ち上がり、端部は丸くおさまる。脚柱部は外反して開く。 | 坏部―外面ヨコナデ粗いハケメが一部残る、内面ヘラケズリ後ヨコナデか？<br>脚柱部―外面ヘラナデ、内面ヘラケズリ後ヨコナデ<br>裾部―ヨコナデ | 明灰褐色 | 粗い砂粒を含むが精緻 | 良好 | 接合法3類<br>No.26 |
| 1145 | 高坏Ca | 16.0<br>12.1<br>11.1 | 坏部は、内彎して立ち上がり、端部は尖り気味で終る。脚柱部は直線的に開き、屈折して裾部へと続く。 | 坏部―外面ヨコナデ、ハケメ後ヘラミガキ、内面ヨコナデ後ヘラミガキ<br>脚柱部―外面ハケメ後ヘラミガキ、内面ヘラケズリ後ヨコナデ<br>裾部―ヨコナデ | 灰白色 | 精緻 | 良好・堅緻 | 接合法1類、口縁部に黒斑、脚柱部内面に指頭痕が残る<br>No.155 |
| 1146 | 高坏Ca | 17.8<br>13.2<br>12.4 | 坏部は、内彎して立ち上がり、端部は丸くおさまる。脚柱部は直線的に開き、屈折して裾部へと続く。 | 坏部―外面ヨコナデヘラケズリが一部残る、内面不明<br>脚柱部―外面ハケメ後ヘラナデ、内面ヘラケズリ後ナデ<br>裾部―ヨコナデ | 赤褐色 | 砂粒を多く含む | やや軟質 | 接合法2類、脚部内面に黒斑<br>No.44 |
| 1147 | 高坏Cb | 15.7<br>12.8<br>11.1 | 坏部は、坏底部からゆるく屈曲し、外傾して立ち上がる口縁部へと続く。端部は丸くおさまる。脚柱部は直線的に開き、屈折して裾部へと続く。 | 坏部―ヨコナデ、内面底部に放射状の細いヘラミガキ<br>脚柱部―外面上半ヘラナデ、下半ナデ、内面ヘラケズリ<br>裾部―ヨコナデ | 灰白色 | 小石を含むが精良 | 良好 | 接合法1類<br>No.31 |
| 1148 | 高坏Cb | 15.4<br>12.2<br>11.8 | 坏部は、内彎して立ち上がり、端部は丸くおさまる。脚柱部は直線的に開き、屈折して裾部へと続く。 | 坏部―ヨコナデ<br>脚柱部―外面ヨコナデ、内面ヘラケズリ<br>裾部―ヨコナデ | 赤褐色 | 砂粒を少し含む | 良好 | 接合法1類<br>No.12・13 |
| 1149 | 高坏Cb | 15.3<br>12.7<br>10.5 | 坏部は、坏底部からゆるく屈曲し、外傾して立ち上がる口縁部へと続く。端部は丸くおさまる。脚柱部は直線的に開き、屈折して裾部へと続く。 | 坏部―外面上半にハケメ状の粗いヨコナデ、下半ヘラミガキ、内面ヨコナデ<br>脚柱部―外面ヨコナデ、内面ヘラケズリ<br>裾部―ヨコナデ | 赤褐色 | 砂粒を少し含む | 良好 | 接合法1類 |

| 番　号 | 器　種 | 法量 | 形　態　の　特　徴 | 調整技法の特徴 | 色　調 | 胎　土 | 焼　成 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| １１５０ | 高坏Ca | 17.6<br>13.2<br>14.0 | 坏部は内彎して立ち上がり、端部は丸くおさまる。脚柱部は直線的に開き、屈折して裾部へと続く。端部は面をなす。 | 坏部―外面ヨコナデ、内面ヘラミガキ、ヨコナデ<br>脚柱部―外面ヘラナデ、内面ヘラケズリ後ヨコナデ<br>裾部―ヨコナデ | 淡赤褐色 | 精緻 | 良好 | 接合法２類<br>No.77 |
| １１５１ | 高坏Cb | 17.2<br>13.6<br>11.8 | 坏部は、坏底部からゆるく屈曲し、外傾して立ち上がる口縁部へと続く。端部は丸くおさまる。脚柱部は直線的に開き、屈曲して裾部へと続く。 | 坏部―外面ハケメ、ヨコナデ、内面ハケメ、底部ヘラミガキ<br>脚柱部―外面上半ハケメ、下半ハケメ後ヘラミガキ、内面ヘラケズリ<br>裾部―外面ハケメ後ヨコナデ、内面ハケメをナデ消す | 赤褐色 | 砂粒を少し含む | 良好 | 接合法３類<br>No.112 |
| １１５２ | 高坏Cb | 17.6<br>13.5<br>10.9 | 坏部は、坏底部からゆるく屈曲し、外傾して立ち上がる口縁部へと続く。端部は丸くおさまる。脚柱部は直線的に開き、屈曲して裾部へと続く。 | 坏部―不明<br>脚柱部―内面ヘラケズリが一部残る<br>裾部―不明 | 赤褐色 | 砂粒を含む | 軟質 | 接合法４類<br>No.149・150 |
| １１５３ | 粗製土器 | 6.2<br>9.3<br>10.7 | 口縁部は直立し、端部は丸くおさまる。頸部が若干くびれる。体部は最大径をやや上位にもつ球形である。 | 口縁部―ヨコナデ<br>体部内面　指ナデ、指頭痕が顕著 | 赤褐色及び暗灰色 | １～２㎜大の砂粒を多く含む | 良好 | |
| １１５４ | 粗製土器 | 5.7<br>7.7<br>8.5 | 口縁部は、内外面に稜を残し屈曲して立ち上がる。端部は丸くおさまる。底部は平底で体部は球形を呈す。 | 口縁部―ヨコナデ | 明赤褐色<br>底部明灰色 | 細砂粒を含む | 良好・堅緻 | |
| １１５５ | 粗製土器 | 6.7<br>7.0<br>7.3 | 口縁部は短く外傾して立ち上がる。端部は丸くおさまる。体部は肩が張り扁球形状を呈す。 | 口縁部―ヨコナデ（内面は粗い）<br>体部―ナデか？<br>底部―外面ヘラケズリ、内面指ナデ(ないしケズリ) | 上半灰白色、一部赤味を帯びる、下半灰褐色 | １㎜大の砂粒を多く含む | 良好 | 頸部に接合痕が顕著 |
| １１５６ | 粗製土器 | 6.0<br>7.1<br>7.4 | 口縁部は短く外反して立ち上がる。端部は丸くおさまる。体部は球形を呈す。 | 口縁部―ヨコナデ | 灰白色、一部暗灰色 | 砂粒を少量含む | 良好 | |
| １１５７ | 粗製土器 | 5.6<br>7.0<br>7.5 | 口縁部は外反して立ち上がる。端部は丸くおさまる。体部は球形を呈す。 | 口縁部―ヨコナデ<br>体部―上半ハケメが一部残る | 明赤褐色 | 小石粒及び１㎜大の砂粒を多く含む | 良好 | |
| １１５８ | 粗製土器 | 5.5<br>7.0<br>8.2 | 口縁部は短く外傾して立ち上がる。端部は尖り気味におわる。体部は球形を呈す。 | 口縁部―ヨコナデか？ハケメが一部残る | 明赤褐色 | １～２㎜大の砂粒を若干含む | やや軟質 | No21 |
| １１５９ | 粗製土器 | 5.5<br>6.0<br>6.6 | 口縁部は短く外傾して立ち上がる。端部は丸くおさまる。体部は球形を呈す。 | 口縁部―ヨコナデ<br>体部―内面ヨコナデ | 暗赤褐色及び暗褐色 | 細砂粒を若干含み精良 | 良好・堅緻 | |
| １１６０ | 粗製土器 | 7.0<br>8.4<br>7.8 | 口縁部は外傾して立ち上がり、端部は丸くおさまる。体部は球形を呈す。 | 口縁部―ハケメ後ヨコナデ<br>体部―ヨコナデ、指頭痕が顕著 | 明赤褐色 | 細砂粒を若干含む | 良好 | 体部の一部に黒斑が認められる |
| １１６１ | 粗製土器 | 7.2<br>9.0<br>8.2 | 口縁部は僅かに屈曲し、外傾して立ち上がる。端部は丸くおさまる。体部は球形を呈す。 | 口縁部―ハケメ、一部ヨコナデ<br>体部―外面ハケメ、一部ヨコナデ<br>〃　―内面ナデか？ | 明赤褐色 | １～２㎜大の砂粒を多く含む | 良好 | |

| 番　号 | 器　種 | 法量 | 形　態　の　特　徴 | 調整技法の特徴 | 色　調 | 胎　土 | 焼　成 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| １１６２ | 粗製土器 | 8.0<br>8.1<br>8.1 | 口縁部は外傾して立ち上がる。端部は丸くおさまる。体部は球形、底部は平底気味である。 | 口縁部―外面ヨコナデ、内面ハケメ<br>体部―外面指頭痕、内面指ケズリ | 灰白色、口縁部一部赤褐色 | 砂粒を若干含む | 良好 | No.73 |
| １１６３ | 粗製土器 | 8.8<br>9.5<br>8.5 | 口縁部は外傾して立ち上がる。端部は丸くおさまる。体部は肩部が張る。底部は平底気味である。 | 口縁部―ヨコナデ<br>体部―外面ヘラナデ、内面指ナデ | 灰白色、底部黒色 | 細砂粒を若干含む | 良好・堅緻 | |
| １１６４ | 粗製土器 | 8.9<br>8.0<br>8.4 | 口縁部は外反して立ち上がる。端部は丸くおさまる。体部は肩部が張る。底部は丸底を呈す。 | 口縁部―ヨコナデ<br>体部―外面ヘラナデか？<br>〃　―内面指ケズリ | 暗灰色、一部黒色 | １～２㎜大の砂粒を多く含む | 良好・堅緻 | No83 |
| １１６５ | 粗製土器 | 9.1<br>8.2<br>9.0 | 口縁部は外傾して立ち上がる。端部は丸くおさまる。体部は肩部が張る。底部は平底である。 | 口縁部―ヨコナデ<br>体部―外面下半粗いハケメが残る<br>〃　―内面指ケズリ | 赤味を帯びた灰白色 | 細砂粒を若干含むがほぼ精良 | 良好 | |
| １１６６ | 粗製土器 | 5.8<br>7.7<br>7.4 | 口縁部は短く外傾する。端部は丸くおさまる。体部は肩部が張る。底部は平底である。 | 口縁部―ヨコナデ<br>体部―上半ヨコナデ<br>底部―内面指頭痕が顕著に認められる | 明赤褐色 | 白色砂粒を多く含む | やや軟質 | 体部内面に接合痕が認められる、一部に黒斑が認められる |
| １１６７ | 手捏土器<br>B | 8.1<br>8.0<br>8.6 | 丸底の底部から内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。端部は尖り気味である。 | 口縁部―指頭痕<br>体部―内面指頭痕<br>底部―内面指ケズリ | 灰白色 | 砂粒及び赤色粒子を含む | 軟質 | |
| １１６８ | 手捏土器<br>B | 6.2<br>5.8<br>6.3 | 平底の底部から外傾気味に立ち上がる。口縁部は屈曲して開き、端部は丸くおさまる。 | 体部―外面指頭痕 | 灰白色 | 砂粒を若干含む | 軟質 | |
| １１６９ | 手捏土器<br>B | 5.3<br>5.4<br>5.9 | 丸底の底部から外傾して立ち上がる。口縁部は薄くおわる。 | 不明 | 暗灰色、外面一部黒色 | 小石及び細砂粒を多量に含む | やや軟質 | |
| １１７０ | 手捏土器<br>B | 5.2<br>6.2<br>6.3 | 丸底の底部から内彎して立ち上がる。口縁部は屈曲して開き、端部は丸くおさまる。 | 体部―内面指ケズリ | 赤褐色 | 砂粒を多量に含む | 良好 | |
| １１７１ | 手捏土器<br>B | 5.9<br>4.2<br>6.1 | 丸底の底部から直立して立ち上がる。端部は丸くおさまる。 | 体部―内面指ナデ | 灰白色、一部暗灰色 | 小石及び１㎜大の細粒を含む | 良好 | No93 |
| １１７２ | 手捏土器<br>B | 4.8<br>4.3<br>5.1 | 丸底の底部から直立して立ち上がる。端部は丸くおさまる。 | 体部―外面ヘラナデ<br>〃　―内面指ナデ | 明黄褐色底部暗褐色 | 砂粒を若干含む | 良好 | |
| １１７３ | 手捏土器<br>B | 3.4<br>4.7<br>5.1 | 丸底の底部から内彎して立ち上がり、口縁部はつまみ上げられている。 | 体部―内面指ケズリ | 明赤褐色及び灰白色 | 細砂粒及び赤色粒子を含む | 良好 | |
| １１７４ | 手捏土器<br>B | 3.8<br>4.5<br>3.9 | 丸底の底部から内彎気味に立ち上がる。端部は丸くおさまる。 | 不明 | 明赤褐色 | 砂粒を多量に含む | 良好 | No51 |
| １１７５ | 手捏土器<br>B | 4.0<br>3.2<br>4.2 | 丸底の底部から外傾気味に立ち上がる。端部は丸くおさまる。 | 体部―外面ナデ<br>〃　―内面指頭圧痕 | 暗赤褐色 | 細砂粒を含む | 良好 | |
| １１７６ | 手捏土器<br>B | 3.4<br>3.4<br>4.4 | 丸底の底部から内彎して立ち上がり、端部は丸くおさまる。 | ナデ | 暗赤褐色 | 精良 | 良好 | No77 |
| １１７７ | 手捏土器<br>B | 4.0<br>4.4<br>3.3 | 丸底の底部から内彎気味に立ち上がる。端部は丸くおさまる。 | 体部―内面指ケズリ | 明赤褐色 | １～３㎜大の砂粒を多く含む | 良好 | No127 |
| １１７８ | 手捏土器<br>B | 2.6<br>2.3<br>3.2 | 平底気味の底部から内彎して立ち上がる。端部は丸くおさまる。 | 不明 | 明灰色 | 細砂粒を若干含む | やや軟質 | No81 |

| 番　号 | 器　種 | 法量 | 形　態　の　特　徴 | 調整技法の特徴 | 色　調 | 胎　土 | 焼　成 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| １１７９ | 手捏土器<br>B | 2.6<br>2.2<br>2.9 | 丸底の底部から内彎して立ち上がる。端部は丸くおさまる。 | 体部―内面指頭痕 | 明茶褐色 | 細砂粒を若干含む | やや軟質 | No65 |
| １１８０ | 手捏土器<br>B | 5.1<br>3.3<br>― | 尖り気味の底部から外方へ立ち上がる。端部は丸くおさまる。 | 指頭痕が顕著 | 灰白色 | 細砂粒を若干含む | 良好 | |
| １１８１ | 手捏土器<br>C | 3.5<br>3.8<br>底径<br>5.0 | 底部は平底で、体部は内彎して立ち上がる。口縁部はつまみ上げられている。 | 指頭痕が顕著 | 赤味を帯びた灰白色 | 細砂粒を若干含む | 良好 | |
| １１８２ | 手捏土器 | 11.7<br>4.1<br>底径<br>5.0 | 平底の底部から外傾して立ち上がる。端部は丸くおさまる。 | 体部―外面ナデ | 明赤褐色 | 砂粒及び赤色粒子を多く含む | 極めて軟質 | |
| １１８３ | 甕Ba | 18.8<br>(7.2)<br>(23.8) | 口縁部は「く」の字状に屈曲し、外傾して立ち上がる。端部は丸くおさまる。 | 口縁部―ヨコナデ<br>体部―不明 | 赤褐色 | 砂粒を多く含む | 軟質 | 住居址 |
| １１８４ | 甕Bb | 18.4<br>(8.0)<br>(20.4) | 口縁部は「く」の字状に屈折し、外傾して立ち上がる。端部は丸くおさまる。 | 口縁部―ヨコナデ<br>体部―外面ハケメ内面指ケズリ | 茶褐色 | 砂粒を多く含む | 良好 | 煤が付着する |
| １１８５ | 甕Db | 14.2<br>15.3<br>17.2 | 口縁部は「く」の字状に屈曲し、外傾して立ち上がる。端部は丸くおさまり、内面に凹線が残る。体部は最大径を上位にもつ球形である。 | 口縁部―ヨコナデ、外面にヘラ痕が残る<br>体部―外面ハケメ内面接合痕が残る | 赤褐色 | 精良 | 軟質 | |
| １１８６ | 甑 | 27.6<br>(14.7)<br>― | 体部は外傾して立ち上がり、口縁部は外反する。端部は面をなし、僅かに凹む。 | 口縁部―不明<br>体部―外面ハケメが一部残る | 茶褐色 | 砂粒を多く含み粗い | 良好 | 住居址 |
| １１８７ | 小型壷 | 7.0<br>9.0<br>8.1 | 口縁部は外傾し、端部は丸くおさまる。体部は最大径を上位にもつ。底部は平底で上げ底である。 | 口縁部―外面ヨコナデ<br>体部―内面、指頭痕が残る | 淡赤褐色（内面は暗灰色） | 砂粒を多く含む | 良好 | 住居址 |
| １１８８ | 坏B | 12.8<br>5.7<br>― | 丸底の底部から内彎して立ち上がり、口縁部は屈曲する。端部は内傾する面をなす。 | 口縁部―ヨコナデ<br>体部―不明 | 灰白色、一部赤褐色 | 砂粒を多く含む | 良好 | |
| １１８９ | 坏A | 12.3<br>4.5<br>― | 平底の底部から内彎して立ち上がり、端部は丸くおさまる。 | 不明 | 暗灰色 | 精良 | 良好 | |
| １１９０ | 手捏土器<br>B | 4.9<br>3.6<br>― | 丸底の底部から外傾して立ち上がり、端部は尖り気味である。 | 口縁部―内面指頭痕が残る<br>体部―不明 | 茶褐色 | 精良 | 良好 | |
| １１９１ | 壷Bb１ | 10.0<br>13.3<br>12.7 | 口縁部は屈曲し、内外面に稜を残して立ち上がる。端部は丸くおさまる。体部は球形で丸底を呈す。 | 口縁部―ヨコナデ<br>体部―外面上半ナデ、内面ナデ、接合痕が残る<br>底部―ヘラケズリ後ナデ | 灰黒色 | 砂粒を多く含む | やや軟質 | S３下 |
| １１９２ | 甕Cb | 14.0<br>18.6<br>18.8 | 口縁部は「く」の字状に屈曲し、外反して立ち上がる。端部は丸くおさまる。体部は球形で丸底を呈す。 | 口縁部―ヨコナデ<br>体部―外面ナデ、内面ヘラケズリ後ナデ、接合跡・指頭痕が残る | 明赤褐色 | 砂粒を多く含む | 軟質 | S３下 |
| １１９３ | 大型壷 | 21.2<br>39.4<br>31.4 | 口縁部は複合口縁を呈し、屈折部外面は鋭い稜となる。また、端部は面をなし、外面へ僅かに肥厚する。体部は長目の球形を呈し、底部は平底気味である。 | 口縁部―ヨコナデ<br>体部―ハケメ<br>底部―ハケメ一部タタキ目が残る | 灰白色 | 精緻 | 良好 | S３下 |

| 番　号 | 器　種 | 法量 | 形　態　の　特　徴 | 調整技法の特徴 | 色　調 | 胎　土 | 焼　成 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| １１９４ | 高坏Ab | 23.9<br>14.4<br>底径<br>14.2 | 坏部は、水平に伸びる坏底部から屈曲し、外反気味に立ち上がる。端部はやや尖り気味である。脚柱部は直線的に開き、屈曲して裾部へと続く。 | 坏部―ナデ、ハケメが一部残る<br>脚柱部―外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ後ヨコナデ<br>裾部―ヨコナデ | 赤褐色 | 砂粒を多く含む | やや軟質 | |
| １１９５ | 器台 | ―<br>(5.2)<br>裾部径<br>(10.2) | 受部は内彎して立ち上がり、端部は上方へ突出すると思われる。脚部は膨み気味に開き、口縁部は僅かに外反すると思われる。 | 口縁部―不明<br>体部―外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ後ナデ | 赤褐色 | 砂粒を少量含む | 良好 | S３下 |
| １１９６ | 粗製土器 | (10.0)<br>5.5<br>底径<br>3.5 | 底部は平底で突出する。体部は内彎して立ち上がる。 | 口縁部―不明<br>体部―内面ナデ | 灰白色 | 小石粒を多く含み粗い | 軟質 | 底部に黒斑が残るS３下 |
| １１９７ | 甕Ab | 18.0<br>(6.7)<br>(22.4) | 口縁部はゆるく屈曲し、直線的に立ち上がる。端部は、丸くおさまる。 | 口縁部―ヨコナデ<br>体部―不明 | 暗赤褐色 | 砂粒を多く含む | やや軟質 | S４下E-B３ |
| １１９８ | 甕Ab | 16.2<br>(8.6)<br>(26.6) | 口縁部はゆるく屈曲し、直線的に立ち上がる。端部は、丸くおさまる。 | 口縁部―ヨコナデ<br>体部―外面ハケメ<br>内面指ケズリ | 灰白色 | 砂粒を若干含む | やや軟質 | S４-E３<br>S４下E-B３ |
| １１９９ | 甕Bc | 17.4<br>(3.4)<br>― | 口縁部は直線的に立ち上がり、端部近くで外側に屈曲する。端部は、面をなす。 | 口縁部―ヨコナデ | 明赤橙色 | 細砂粒を若干含む | やや軟質 | S４-E３<br>(S４E３-01) |
| １２００ | 甕Bb | 19.0<br>(3.8)<br>― | 口縁部はゆるく屈曲し、直線的に立ち上がる。端部は、丸くおさまる。 | 口縁部―ヨコナデ<br>体部―内面ヘラケズリ | 明赤橙色 | 細砂粒を若干含む<br>精良 | やや軟質 | S４-E３下<br>(S４E３-02) |
| １２０１ | 甕Ac | 18.2<br>(21.0)<br>26.0 | 口縁部はゆるく屈曲し、直線的に立ち上がる。端部は、面をなす。体部は、最大径をほぼ中位にもち、長目の球形を呈すと思われる。 | 口縁部―ヨコナデ<br>体部―外面ハケメ、内面ハケメが一部認められる | 明茶褐色 | 砂粒を含む | 良好 | S４下E-B３ |
| １２０２ | 大型壷 | 18.0<br>33.2<br>27.6 | 口縁部は、複合口縁を呈し、屈折部は外面に鋭い稜となって残る。端部は面をなし、外面に肥厚する。体部は、球形を呈す。呈部は、やや突出気味である。 | 口縁部―ヨコナデ、内面にハケメが残る<br>体部―外面ハケメ、内面ヘラケズリ | 灰白色及び明赤褐色（内面灰白色及び暗褐色） | 細砂粒を多く含む | 良好 | S３-下<br>S３-No.134<br>S４-E３ |
| １２０３ | 甕Bc | 17.4<br>(3.9)<br>― | 口縁部はゆるく屈曲し、内彎気味に立ち上がる。端部は面をなす。 | 口縁部―ヨコナデ<br>体部―外面ハケメが僅かに認められる | 明茶褐色 | 砂粒を多く含み、粗い | 良好 | S２F-３上 |
| １２０４ | 甕Ab | 22.0<br>(5.1)<br>― | 口縁部はゆるく屈曲し、直線的に立ち上がる。端部は丸くおさまる。 | 口縁部―ヨコナデ<br>体部―外面ハケメが一部認められる | 明茶褐色 | 砂粒を多く含み、粗い | 良好 | S２F-３ |
| １２０５ | 小型丸底壷 | 10.0<br>(5.4)<br>― | 口縁部は内彎気味に立ち上がり、端部は丸くおさまる。 | 口縁部―ヨコナデ | 淡赤褐色 | 精良 | 良好 | S２F-３上 |
| １２０６ | 小型丸底壷 | 9.6<br>(4.0)<br>― | 口縁部は直線的に立ち上がり、端部は丸くおさまる。 | 口縁部―ヨコナデ | 明茶褐色 | 精良 | やや軟質 | S２F-３ |
| １２０７ | 高坏A | 15.1<br>(4.6)<br>― | 坏部は、坏底部から外反して立ち上がる口縁部へと続く。端部は、丸くおさまる。 | | 明赤褐色 | 精良 | 良好 | S２下F-３ |
| １２０８ | 高坏 | ―<br>(7.5)<br>― | 脚柱部は、直線的に開き、屈折して裾部へと続く。端部は丸くおさまる。 | 脚柱部―ヘラケズリ後ヨコナデ<br>裾部―ヨコナデ | 明茶褐色 | 精良 | やや軟質 | S２F-３黒斑が認められる |
| １２０９ | 埦 | 10.2<br>10.9<br>13.6 | 口縁部は、短く立ち上がる。端部は、丸くおさまる。体部は、最大径をやや上位にもつ球形である。 | 口縁部―ヨコナデ<br>体部―内面ヘラケズリが認められる | 淡赤褐色<br>灰白色 | 小石を若干含む<br>精良 | 良好 | S２F-３ |

| 番　号 | 器　種 | 法量 | 形　態　の　特　徴 | 調整技法の特徴 | 色　調 | 胎　土 | 焼　成 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| １２１０ | 坏A | 12.7<br>4.9<br>— | 丸底底部から口縁部にかけて、内彎して立ち上がる。端部は、丸くおさまる。 | | 黒色 | 精良 | 良好 | S２F-３上 |
| １２１１ | 坏A | 14.1<br>4.5<br>— | 平底の底部から口縁部にかけて、内彎して立ち上がる。端部は、丸くおさまる。 | | 赤褐色 | 砂粒を多く含む | 良好 | G—２トレンチ黒斑が認められる |
| １２１２ | 坏A | 12.3<br>5.4<br>— | 平底の底部から口縁部にかけて、内彎して立ち上がる。端部は、丸くおさまる。 | 口縁部—ヨコナデ | 明赤褐色 | 砂粒を多量に含む | 良好 | H—３ |
| １２１３ | 小型壷 | 6.4<br>7.5<br>7.2 | 口縁部はゆるく屈曲し、直立気味に立ち上がる。体部は、球形を呈す。 | | 明赤褐色 | 精良 | 軟質 | I—３ |
| １２１４ | 小型壷 | 7.2<br>7.7<br>8.7 | 口縁部はゆるく屈曲し、直立気味に立ち上がる。体部は、球形を呈す。 | | 赤橙色 | 精良 | 軟質 | I—３ |
| １２１５ | 高坏Ba | 17.1<br>13.1<br>裾部径<br>11.5 | 坏部は、坏底部から屈曲して立ち上がる口縁部へと続く。脚柱部は直線的に開き、屈折して裾部へと続く。裾部は、内彎している。 | 坏部—ヨコナデ、外面の一部にハケメ<br>脚柱部—内面ヘラケズリ後ナデ<br>裾部—ヨコナデ | 赤橙色 | 精良 | 良好 | I—２接合法１類 |
| １２１６ | 高坏C | 16.0<br>(6.3)<br>— | 坏底部から、内彎気味に立ち上がる口縁部へと続く。端部は、丸くおさまる。 | 坏部—外面ヘラケズリ、内面ナデ、外面の一部にハケメが認められる | 淡赤褐色 | 砂粒を若干含む | 良好 | I—５ |
| １２１７ | 坏 | 12.4<br>14.4<br>5.3 | | | 明赤褐色 | 砂粒及び赤色粒を含む | 軟質 | K—２ |
| １２１８ | 埦 | 12.0<br>(4.5)<br>— | 底部から内彎して立ち上がり、口縁部は外側へ屈曲する。端部は、丸くおさまる。 | 口縁部—ヨコナデ | 明赤褐色 | 砂粒を多く含む | 良好 | K—８ |
| １２１９ | 高坏B | 18.8<br>5.4<br>— | 坏底部から、内彎気味に立ち上がる口縁部へと続く。端部は、丸くおさまる。 | | 淡黄褐色（外面）<br>灰色（内面） | 砂粒及び小石を含み粗い | やや軟質 | K—８ |
| １２２０ | 高坏Ba | 17.3<br>13.6<br>11.2 | 坏部は、坏底部から外反して立ち上がる口縁部へと続く。端部は、丸くおさまる。脚柱部は直線的に開き、屈折して裾部へと続く。 | 坏部—外面ヨコナデ | 明茶褐色 | 精良 | 良好 | L—２ |
| １２２１ | 甕Aa | 20.9<br>(9.7)<br>— | 口縁部は、ゆるく屈曲し直線的に立ち上がる。端部は､内傾する面をなす。 | 口縁部—ヨコナデ | 茶褐色 | 砂粒を多く含む | 良好 | L—６ |
| １２２２ | 壷Ba１ | 10.1<br>(7.6)<br>12.0 | 口縁部は、ゆるく屈曲し直線的に立ち上がる。端部は、丸くおさまる。体部は、最大径をほぼ中位にもつ球形を呈す。 | 口縁部—ヨコナデ<br>体部－外面粗いハケメ<br>内面ヘラケズリ | 暗赤褐色 | 砂粒を多く含む | 良好 | O—２ |
| １２２３ | 手捏土器B | 5.3<br>3.5<br>— | 底部から口縁部にかけて､内彎して立ち上がる。端部は、丸くおさまる。 | 内面—指ナデ | やや赤味を帯びた灰白色 | 砂粒を若干含む | 良好 | P—４ |
| １２２４ | 手捏土器B | 4.6<br>3.1<br>— | 底部から口縁部にかけて､内彎して立ち上がる。端部は、丸くおさまる。 | 内面—ナデ | 茶褐色 | 砂粒を若干含む | 良好 | P—４ |
| １２２５ | 手捏土器B | 3.5<br>2.7<br>— | 底部から口縁部にかけて､内彎して立ち上がる。端部は、丸くおさまる。 | 内面—指頭痕 | 明赤褐色 | 砂粒を若干含む | 良好 | P—４ |
| １２２６ | 大型壷 | 22.2<br>(12.8)<br>— | 複合口縁を呈し、屈折部は外面に突帯となって残る。端部は、面をなす。 | ヨコナデ | 灰白色（内面に黒斑） | 砂粒を多く含む | 良好・堅緻 | Q—４ |

| 番　号 | 器　種 | 法量 | 形　態　の　特　徴 | 調整技法の特徴 | 色　調 | 胎　土 | 焼　成 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1227 | 甕Ab | 20.7<br>(9.8)<br>— | 口縁部は、ゆるく屈曲し外反気味に立ち上がる。端部は丸くおさまる。 | 口縁部—ヨコナデ<br>体部—内面ヘラケズリ | 赤褐色 | 精良 | 良好 | Q—8 |
| 1228 | 坏A | 11.6<br>5.3<br>— | 底部から口縁部にかけて、内彎して立ち上がる。端部は、丸くおさまる。 | 口縁部—ヨコナデ<br>体部—外面ヘラケズリ後ヘラミガキ、内面ヘラミガキ | 赤褐色 | | | Q—5 |
| 1229 | 手捏土器C | 6.3<br>5.3<br>7.2 | 平底の底部から、内彎気味に立ち上がる。端部は、丸くおさまる。 | 内面—指ナデ | 明赤褐色 | 砂粒を多く含む | 良好 | Q—7 |
| 1230 | 坏A | 13.4<br>5.4<br>— | 底部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。端部は、丸くおさまる。外面に凹線がめぐる。 | 外面—ヘラケズリ後ナデ<br>内面—ナデ | 暗赤褐色 | 砂粒を含む | 良好 | R—5 |
| 1231 | 壷Ba3 | 13.8<br>17.6<br>15.2 | 口縁部は体部から「く」の字状に屈折して、外上方へと直線的に伸びる。端部は内面が凹むことにより、丸く肥厚する。体部は偏球形状を呈す。 | 口縁部—ヨコナデ<br>体部—外面上半ヘラミガキ、下半ヘラケズリ後ヘラミガキ、内面ヘラミガキ | | 精良 | 良好 | S1-55区下 |
| 1232 | 小型丸底壷A | 17.2<br>(6.4)<br>— | 体部は内彎して立ち上がり、外上方へと開く口縁部へと続く。また、端部は薄く尖り気味である。 | 口縁部—ヘラミガキ<br>体部—外面ヘラケズリ後ヘラミガキ | 赤褐色 | 精良 | 良好 | 表採 |

## 2．土　製　品

ここでは、手捏土器やミニチュア土器と呼称されている小型模造土器と、土製紡錘車、円盤状土製品を扱った。出作遺跡では、いずれもSX01・03からの出土である。

以下、a.「小型模造土器」。b.「土製紡錘車」。c.「円盤状土製品」。d.「SX01出土土製品の出土分布状況について」。e.「SX01・03出土土製品の組成について」を述べる事とする。

### a．小型模造土器

ここでの小型模造土器は、口径、器高とも7㎝以下のもので、成形の手法は手捏成形のものがほとんどである。模倣した器種別に、甕形、壺形、小型丸底坩形、椀形、坏形、鉢形、高坏形、支脚形に分類した。

甕形・埦形・坏形・鉢形の器種決定に於て不明瞭なものがあるが、ここでは、やや長胴で頸部が明瞭に意識され成形されているものを甕形、口縁が内傾し丸底のものを埦形、口縁が開く器高が低いものを坏形、口縁が開く器高が高いものを鉢形として扱った。

◎　甕形小型模造土器

甕Ⅰａ類　口縁が直立し、丸底を呈するもの。

甕Ⅰｂ類　口縁が直立し、平底を呈するもの。

甕Ⅱ類　　口縁がやや外傾しやや尖り気味におさめられ、平底のもの。

甕Ⅲ類　　口縁が短く立ち上がり、平底のもの。

◎　壺形小型模造土器

◎　小型丸底坩形小型模造土器

◎　埦形小型模造土器

埦Ⅰ類　　口径、器高とも3㎝以下の小型品で、手捏成形のもの。

埦Ⅱａ類　口径、器高とも3㎝以上のもの。

埦Ⅱｂ類　口径、器高とも3㎝以上のもので、内面に指ナデもしくは半裁竹管状工具の調整を施すもの。

◎　鉢形小型模造土器

鉢Ⅰ類　　口縁がやや外傾し口縁が開く、器高が高いもの。

鉢Ⅱ類　　台付きのもの。

鉢Ⅲ類　　器高が高く、コップ状のもの。

◎　坏形小型模造土器

坏Ⅰ類　　口縁が開く、器高が低いもの。

坏Ⅱ類　　底部が円盤高台状を呈するもの。

坏Ⅲ類　　底部の器厚が厚く、口縁端部が薄く尖り気味におさめられるもの。

◎　高坏形小型模造土器

◎　支脚形小型模造土器

SX01出土の土製模造土器（図51）

3001は埦Ⅰ類で、土製品としては最小のものである。手捏で成形後、底部から口縁にかけて指ナデ状に調整を施す。

3002は埦Ⅱb類で、手捏で成形後、口縁部内外面に連続の指押えを施す。内面を人差指、外面を親指で施されている。

3003は甕Ⅰa類で、体部中位から直立気味に立ち上がり、端部を丸くおさめ、手捏成形のみを施す。

3004は甕Ⅰb類で、口縁部内外面に連続の指押えを施し、底部の器厚が厚く、ヘラ状工具で小さな底部をナデ調整を施す。

3005は埦Ⅱb類で、口縁部内外面に連続の指押えを施し、内面に浅い半裁竹管状工具を用い縦方向に調整を施す。

3006は埦Ⅱb類で、手捏で成形後、口縁部内外面に連続の指押えを施す。内面を人差指、外面を親指で施されている。

3007は甕Ⅰa類で、体部中位から直立気味に立ち上がり、端部を丸くおさめる。手捏で成形後、口縁部内外面に連続の指押えを施す。

3008は甕Ⅰa類で、体部中位から直立気味に立ち上がり、端部を丸くおさめる。手捏成形のみを施す。

3009は鉢Ⅰ類で、口縁部内外面に連続の指押えを施し、縁部を丸くおさめる。手捏成形のみを施す。

3010は坏Ⅰ類で、口縁端部に向け薄くなり、尖り気味におさめる。

3011は坏Ⅱ類で、底部が円盤高台状を呈し、口縁部内外面に斜行の指ナデを施す。

3012は鉢Ⅱ類で、底部がやや突出する台付きのもの。内外面に手捏で成形後、指ナデを施す。

3013は広口の壺形で、頸部がやや直立気味で、口縁が開く「コ」の字状を呈し、端部を丸くおさめる。手捏で成形後、口縁部内外面に横位の指ナデを施す。

3014は鉢Ⅲ類で、器高が高いコップ状を呈する。手捏で成形後、内面に指ナデを施す。

3015は高坏形の脚部で、成形後、丁寧な指ナデを施す。

3016は受け部を欠いた支脚形で、荒い手捏成形で、指頭痕を顕著に残す上げ底で「ハ」の字状に開く脚部である。

SX03出土の土製模造土器（図52）

3017は埦Ⅰ類で、手捏で成形後、底部から口縁にかけて指ナデ状に調整を施す。

3018は埦Ⅱb類で、手捏で成形後、口縁部内外面に連続の指押えを施す。内面を人差指、外面を親指で施していると思われる。

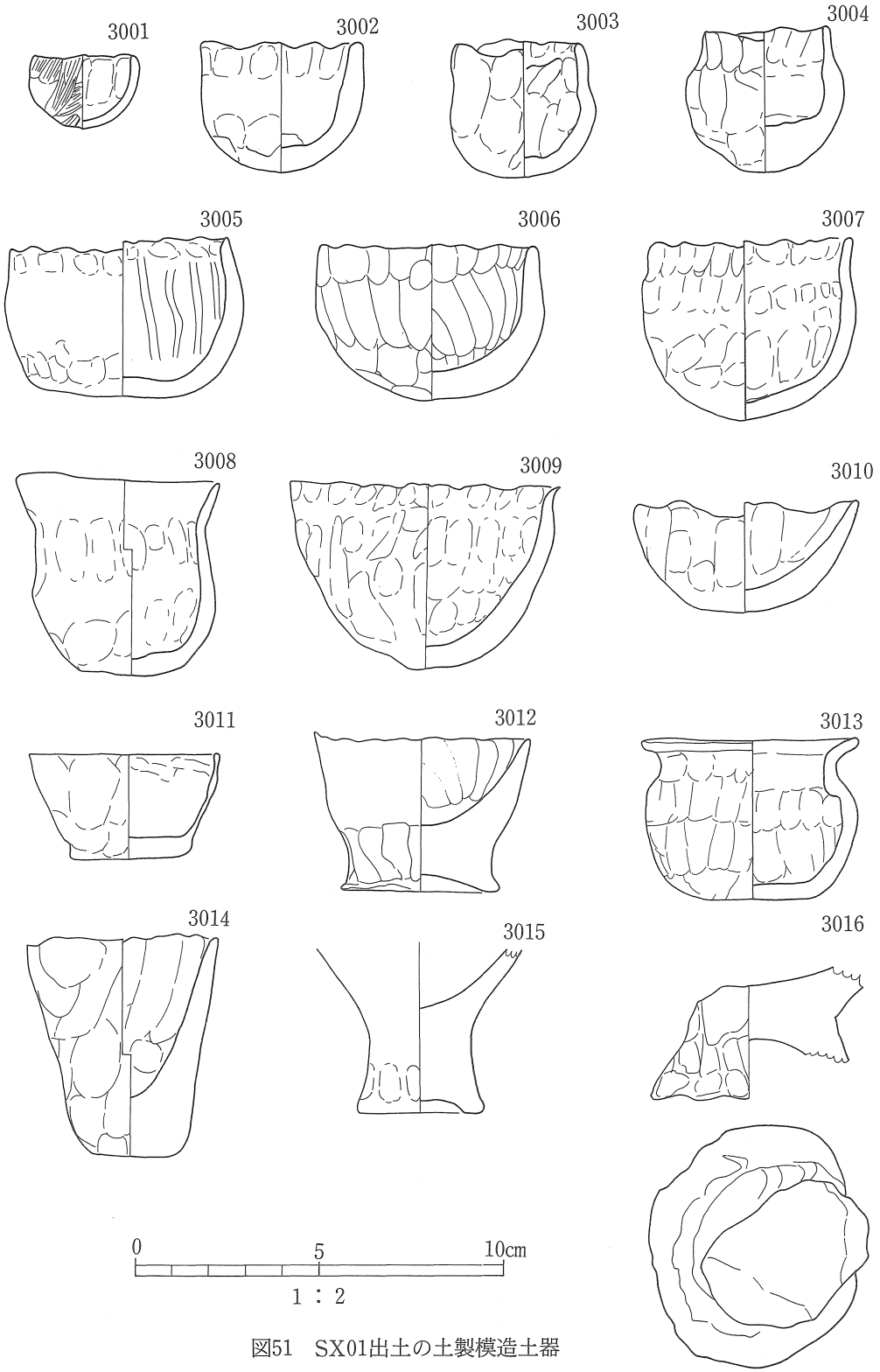



図51　SX01出土の土製模造土器

3019は埦IIb類で、手捏成形後、口縁部内外面に連続の指押えを施す。

3020は甕Ia類で、体部中位から直立気味に立ち上がり、端部を丸くおさめる。手捏成形のみを施す。

3021は坏III類で、底部の器厚が厚く、口縁部に向け薄くなり、端部を尖り気味におさめる。

3022は埦IIb類で口縁部内外面に連続の指押えを施し、内面に浅い半裁竹管状工具を用い縦方向に調整を施す。

3023は埦IIb類で、口縁部内外面に連続の指押えを施し、内面に浅い半裁竹管状工具を用い縦方向に調整を施す。

3024は甕Ia類で、体部中位から直立気味に立ち上がり、端部を丸くおさめる。手捏成形のみを施す。

3025は甕Ia類で、体部中位から直立気味に立ち上がり、端部を丸くおさめる。

3026は小型丸底坩形で、口縁内端部に折り曲げにより沈線文状を呈する。内外面に丁寧なナデ調整を施す。

3027は小型丸底坩形で、内外面に丁寧なナデ調整を施す。体部下半に指頭のナデ痕を残す。

### b. 土製紡錘車

3028はSX01から出土した。径4.4cm、厚さ1.3cmを測る土製紡錘車である。風化しているが使用痕はなかった。

### c. 円盤状土製品

3029はSX03から出土した。円盤状の土製品で、両端2箇所をつまみ出しにより意識して凹ませている。ミニチュアの蓋の可能性が考えられる。

### d.SX01出土土製品の出土分布について

SX01からの土製品は、土製模造土器78点、土製紡錘車1点が出土している。出土分布にやや偏りが見受けられる。これらの土製品は、中央部北側と中央部の2箇所に集中している。この2箇所の集中においては、器種別差異は余りなく、祭祀における器種の選別はなかったと言えるであろう。祭祀における土製品の廃棄は、土器溜り内の土製品の廃棄場所をある程度に意識しているが、器種別の廃棄はあまり意識されてなかったと思われ、これは、SX01出土の土製品が一括廃棄と言えるであろう。

詳細には、土器溜りにおける他の出土遺物の総合的判断をすべきであろう。

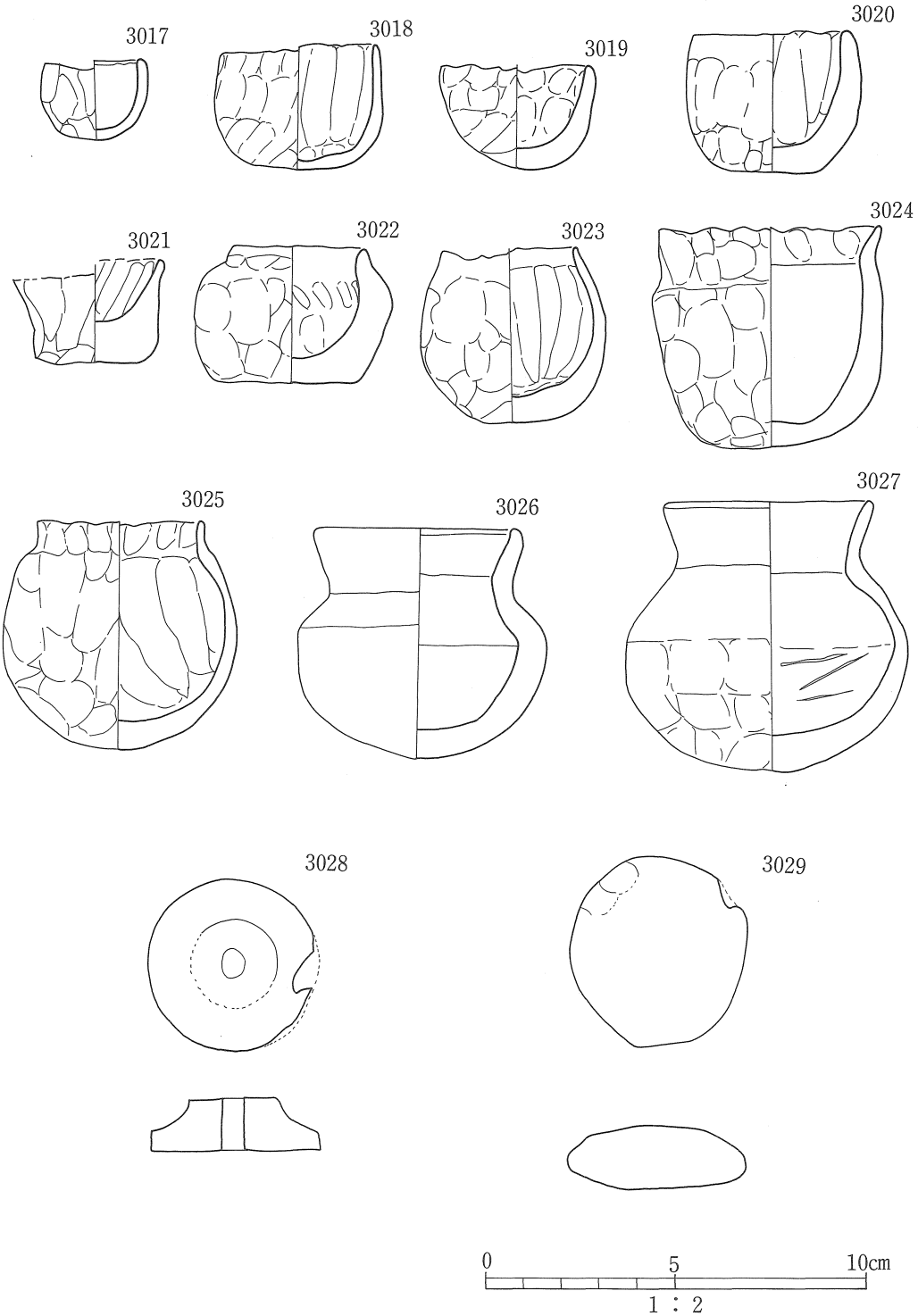



図52　SX03出土の土製模造土器と土製紡錘車、土製円盤

e.SX01・03出土土製品組成について

出作遺跡において、主要な祭祀遺構として、土器溜り遺構のSX01とSX03が上げられる。土製品の出土がSX01とSX03から出土しており、組成の違いがある事から、若干の考察を行う。

上記においての、分類別の組成を表5に示した。

SX01においての小型模造土器の主体は、手捏のもので、甕形、壺形、鉢形、坏形、高坏形、支脚形である。

甕形小型模造土器では、甕Ⅰa類と甕Ⅰb類が多く、甕Ⅱ類、甕Ⅲ類が少ない傾向にある。

壺形小型模造土器が3点出土しているが、小型丸底壺形小型模造土器は出土していない。

埦形小型模造土器が主体を占め、小型の埦Ⅰ類が多く、埦Ⅱb類が少量出土している。

鉢形小型模造土器の内、コップ状の鉢Ⅲ類が出土している。

坏形小型模造土器は、口縁が開く坏Ⅰ類が見受けられる。

高坏形小型模造土器と支脚形小型模造土器が各々1点出土している。土製紡錘車の出土は、SX01からのみ1点出土している。

SX03においての小型模造土器の主体は、手捏のもので、甕形、壺形、小型丸底壺形、鉢形、坏形がある。

甕形小型模造土器では、甕Ⅰ類と甕Ⅱ類が多く、甕Ⅲ類が少ない傾向にある。

壺形小型模造土器が1点出土している。小型丸底坩形小型模造土器はSX03からのみ5点出土している。

埦形小型模造土器が主体を占める。小型の埦Ⅰ類が多く、埦Ⅱb類が少量出土している。

鉢形小型模造土器の内、コップ状の鉢Ⅲ類が出土している。

坏形小型模造土器は、口縁が開く坏Ⅰ類が見受けられる。

性格不明の土製円盤が1点出土している。

以上、SX01とSX03の土製品組成の類似性と違いは、甕形や壺形、坏形、埦形、鉢形においては、ほぼ同様な組成のあり方を示しているが、小型丸底壺形がSX03からの出土で、SX01においては小型丸底壺形が出土せず、代わりに壺形が多く、高坏や支脚形の出土を指摘できる。同時にSX01の器種の豊富さが指摘できる。

これらの出土土製品の器種組成の違いは、SX01とSX03の土器廃棄に時間差がある事から、この時期差において規制されている可能性を指摘する事ができる。

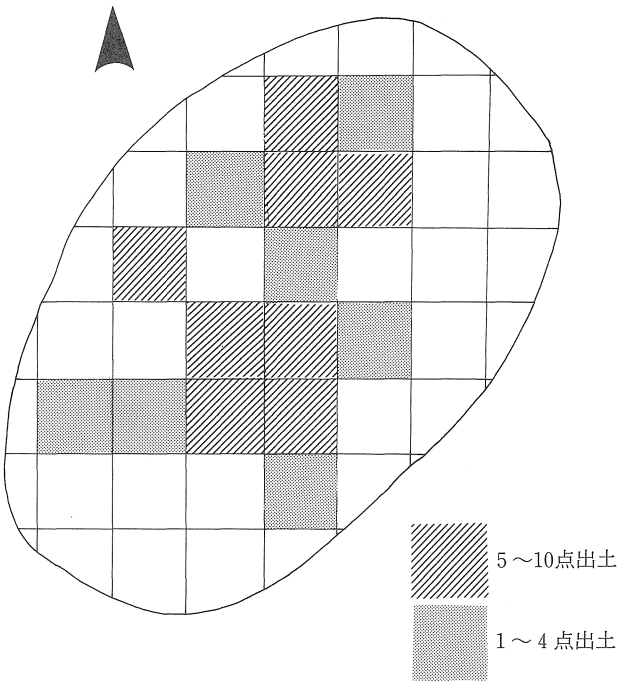



図53　SX－01出土の土製品分布状況図

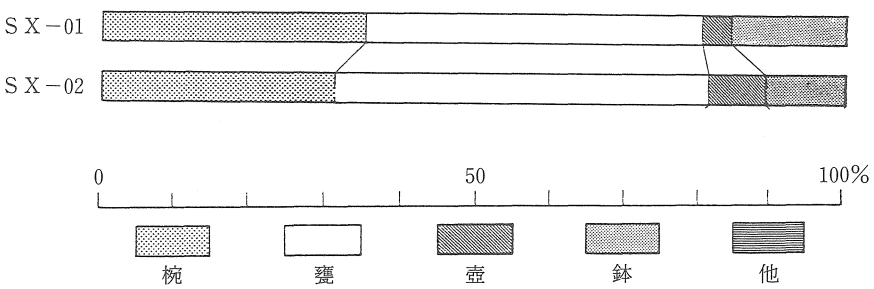



表5　土製品の組成比較表

表6　　出作遺跡出土の土製品観察表

単位；cm

| 遺物番号 | 出土地 | 器種 | 法量 | | | 手法の特徴 | | | 胎土 | 色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 底径 | 器高 | 口縁部 | 外面 | 内面 | | | |
| 3001 | SX01 | 埦Ⅰ類 | 2.8 | | 2.1 | | 手捏 | 手捏 | | 暗黄 | |
| 3002 | 〃 | 埦Ⅱb類 | 4.3 | | 3.6 | 連続指頭押 | 手捏 | 手捏 | | 明茶 | 黒班 |
| 3003 | 〃 | 甕Ⅰa類 | 3.5 | | 3.7 | 連続指頭押 | 指頭ナデ | 指頭ナデ | | 明茶 | |
| 3004 | 〃 | 甕Ⅰb類 | 3.3 | 1.6 | 3.7 | 連続指頭押 | 手捏 | 手捏 | | 黄白 | |
| 3005 | 〃 | 埦Ⅱb類 | 6.0 | 3.5 | 4.2 | 連続指頭押 | 指頭ナデ | ナデ・竹管 | | 明黄 | 黒班 |
| 3006 | 〃 | 埦Ⅱb類 | 6.0 | | 4.1 | 連続指頭押 | 指頭ナデ | 指頭ナデ | | 明黄 | 黒班 |
| 3007 | 〃 | 甕Ⅰa類 | 5.4 | | 4.7 | 連続指頭押 | 指頭ナデ | 指頭ナデ | | 明茶 | |
| 3008 | 〃 | 甕Ⅰa類 | 5.6 | 2.6 | 5.2 | 指頭ナデ | 指頭ナデ | 指頭ナデ | | 黄白 | |
| 3009 | 〃 | 鉢Ⅰ類 | 7.2 | | 4.8 | 連続指頭押 | 指頭ナデ | 指頭ナデ | 砂 | 黄褐 | |
| 3010 | 〃 | 坏Ⅰ類 | 6.0 | | 2.8 | | 指頭ナデ | 指頭ナデ | | 明茶 | |
| 3011 | 〃 | 坏Ⅱ類 | 5.0 | 3.1 | 2.8 | | 指頭ナデ | 指頭ナデ | | 明黄 | 黒班 |
| 3012 | 〃 | 鉢Ⅱ類 | 5.7 | 4.2 | 4.2 | | 指頭ナデ | 指頭ナデ | 砂 | 暗黄 | |
| 3013 | 〃 | 壺 | 5.8 | 3.7 | 4.4 | 横ナデ | 指頭ナデ | 指頭ナデ | 砂 | 黄茶 | |
| 3014 | 〃 | 鉢Ⅲ類 | 5.2 | 2.2 | 5.7 | | 指頭ナデ | 指頭ナデ | | 明黄 | |
| 3015 | 〃 | 高坏 | | 3.4 | 4.2 | | 指頭ナデ | 指頭ナデ | | 黄白 | |
| 3016 | 〃 | 支脚 | 5.6 | | 3.4 | | 手捏 | 手捏 | | 明黄 | |
| 3017 | SX03 | 埦Ⅰ類 | 2.6 | | 2.1 | | 手捏 | 手捏 | | 黄白 | |
| 3018 | 〃 | 埦Ⅱb類 | 4.0 | 2.2 | 3.3 | | 手捏 | 手捏→ナデ | | 明茶 | |
| 3019 | 〃 | 埦Ⅱa類 | 3.8 | | 2.6 | | 手捏 | 手捏 | 砂雲 | 暗茶 | |
| 3020 | 〃 | 埦Ⅱb類 | 4.3 | 2.7 | 3.6 | 手捏 | 手捏→ナデ | | | 暗黄 | |
| 3021 | 〃 | 坏Ⅲ類 | 4.0 | 2.8 | 2.7 | 手捏 | 手捏 | 手捏→ナデ | | 暗茶 | |
| 3022 | 〃 | 甕Ⅲ類 | 3.5 | 3.6 | 3.6 | 連続指頭押 | 指頭ナデ | 指頭ナデ | 砂 | 明黄 | |
| 3023 | 〃 | 甕Ⅲ類 | 3.5 | 1.7 | 4.5 | 連続指頭押 | 指頭ナデ | 指頭ナデ | 砂 | 明黄 | |
| 3024 | 〃 | 甕Ⅱ類 | 5.7 | 3.5 | 5.7 | 連続指頭押 | 指頭ナデ | 指頭ナデ | 砂 | 明黄 | |
| 3025 | 〃 | 甕Ⅰa類 | 4.4 | | 5.8 | 連続指頭押 | 指頭ナデ | 指頭ナデ | 砂 | 明茶 | |
| 3026 | 〃 | 小型丸坩 | 5.2 | | 6.0 | 横ナデ | 指頭ナデ | ナデヘラ痕 | | 暗茶 | |
| 3027 | 〃 | 小型丸坩 | 5.4 | | 7.0 | 横ナデ | 指頭ナデ | ナデヘラ痕 | 砂 | 明黄 | 赤色顔料 |
| 3028 | SX01 | 紡錘車 | 2.2 | 4.4 | 1.3 | | 指頭ナデ | | | 赤茶 | 孔5㎜ |
| 3029 | SX03 | 円盤 | 4.6 | | 1.6 | | 手捏→ナデ | | 砂 | 暗黄 | つまみ上 |
| 3030 | SX01 | 埦Ⅰ類 | 2.6 | | 2.1 | | 手捏 | 手捏 | | 明茶 | 未載 |
| 3031 | 〃 | 埦Ⅱb類 | 4.0 | 2.2 | 3.3 | | 手捏 | 手捏→ナデ | | 明茶 | 〃 |
| 3032 | 〃 | 埦Ⅱa類 | 3.8 | | 2.6 | | 手捏 | 手捏 | 砂雲 | 暗茶 | 〃 |
| 3033 | 〃 | 埦Ⅱb類 | 4.3 | 2.7 | 3.6 | | 手捏 | 手捏→ナデ | | 暗黄 | 〃 |
| 3034 | 〃 | 埦Ⅰ類 | 2.6 | | 2.1 | | 手捏 | 手捏 | | 暗黄 | 〃 |
| 3035 | 〃 | 埦Ⅱb類 | 4.0 | 2.2 | 3.3 | | 手捏 | 手捏→ナデ | | 明茶 | 〃 |
| 3036 | 〃 | 埦Ⅱa類 | 3.8 | | 2.6 | | 手捏 | 手捏 | 砂雲 | 暗茶 | 〃 |
| 3037 | 〃 | 埦Ⅱb類 | 4.3 | 2.7 | 3.6 | | 手捏 | 手捏→ナデ | | 暗黄 | 〃 |
| 3038 | 〃 | 甕Ⅰa類 | 3.5 | | 3.7 | 連続指頭押 | 指頭ナデ | 指頭ナデ | | 明茶 | 〃 |
| 3039 | 〃 | 甕Ⅰb類 | 3.3 | 1.6 | 3.7 | 連続指頭押 | 手捏 | 手捏 | | 黄白 | 〃 |
| 3040 | 〃 | 埦Ⅱb類 | 6.0 | 3.5 | 4.2 | 連続指頭押 | 指頭ナデ | ナデ・竹管 | | 明黄 | 〃 黒班 |
| 3041 | 〃 | 甕Ⅰb類 | 3.3 | 1.8 | 3.7 | 連続指頭押 | 手捏 | 手捏 | | 黄白 | 〃 |
| 3042 | 〃 | 甕Ⅰb類 | 3.8 | 1.6 | 3.7 | 連続指頭押 | 手捏 | 手捏 | | 黄白 | 〃 |
| 3043 | 〃 | 埦Ⅱb類 | 6.0 | 3.5 | 4.2 | 連続指頭押 | 指頭ナデ | ナデ・竹管 | | 明黄 | 〃 |
| 3044 | 〃 | 埦Ⅱb類 | 6.0 | | 4.1 | 連続指頭押 | 指頭ナデ | 指頭ナデ | | 明黄 | 〃 |
| 3045 | 〃 | 甕Ⅰa類 | 5.4 | | 4.7 | 連続指頭押 | 指頭ナデ | 指頭ナデ | | 明茶 | 〃 |
| 3046 | 〃 | 甕Ⅰb類 | 3.3 | 1.6 | 3.7 | 連続指頭押 | 手捏 | 手捏 | | 明茶 | 〃 |

| 遺物番号 | 出土地 | 器種 | 法量 | | | 手法の特徴 | | | 胎土 | 色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 底径 | 器高 | 口縁部 | 外面 | 内面 | | | |
| 3047 | ＳＸ01 | 坏Ⅰ類 | 6.0 | | 2.8 | | 指頭ナデ | 指頭ナデ | | 明茶 | 未載 |
| 3048 | 〃 | 坏Ⅱ類 | 5.0 | 3.1 | 2.8 | | 指頭ナデ | 指頭ナデ | | 明黄 | 〃 |
| 3049 | 〃 | 鉢Ⅱ類 | 5.7 | 4.2 | 4.2 | | 指頭ナデ | 指頭ナデ | 砂 | 暗黄 | 〃 |
| 3050 | 〃 | 壺 | 5.8 | 3.7 | 4.4 | 横ナデ | 指頭ナデ | 指頭ナデ | 砂 | 黄茶 | 〃 |
| 3051 | 〃 | 鉢Ⅲ類 | 5.2 | 2.2 | 5.7 | | 指頭ナデ | 指頭ナデ | | 明黄 | 〃 |
| 3052 | 〃 | 甕Ⅰａ類 | 3.5 | | 3.7 | 連続指頭押 | 指頭ナデ | 指頭ナデ | | 明茶 | 〃 |
| 3053 | 〃 | 鉢Ⅲ類 | 5.2 | 2.2 | 5.7 | | 指頭ナデ | 指頭ナデ | | 明黄 | 〃 |
| 3054 | 〃 | 高坏 | | 3.4 | 4.2 | | 指頭ナデ | 指頭ナデ | | 黄白 | 〃 |
| 3055 | 〃 | 支脚 | 5.6 | | 3.4 | | 手捏 | 手捏 | | 明黄 | 〃 |
| 3056 | 〃 | 埦Ⅰ類 | 2.6 | | 2.1 | | 手捏 | 手捏 | | 黄白 | 〃 |
| 3057 | 〃 | 甕Ⅰｂ類 | 3.3 | 1.6 | 3.7 | 連続指頭押 | 手捏 | 手捏 | | 黄白 | 〃 |
| 3058 | 〃 | 埦Ⅱｂ類 | 6.0 | 3.5 | 4.2 | 連続指頭押 | 指頭ナデ | ナデ・竹管 | | 明黄 | 〃 |
| 3059 | 〃 | 甕Ⅰｂ類 | 3.3 | 1.6 | 3.8 | 連続指頭押 | 手捏 | 手捏 | | 黄白 | 〃 |
| 3060 | 〃 | 甕Ⅰｂ類 | 3.3 | 1.9 | 3.7 | 連続指頭押 | 手捏 | 手捏 | | 黄白 | 〃 |
| 3061 | 〃 | 埦Ⅱｂ類 | 6.0 | 3.5 | 4.2 | 連続指頭押 | 指頭ナデ | ナデ・竹管 | | 明黄 | 〃 |
| 3062 | 〃 | 埦Ⅱｂ類 | 4.0 | 2.2 | 3.3 | | 手捏 | 手捏→ナデ | | 明茶 | 〃 |
| 3063 | 〃 | 埦Ⅱａ類 | 3.8 | | 2.6 | | 手捏 | 手捏 | 砂雲 | 暗茶 | 〃 |
| 3064 | 〃 | 埦Ⅱｂ類 | 4.3 | 2.7 | 3.6 | | 手捏 | 手捏→ナデ | | 暗黄 | 〃 |
| 3065 | 〃 | 甕Ⅰａ類 | 3.5 | | 3.7 | 連続指頭押 | 指頭ナデ | 指頭ナデ | | 明茶 | 〃 |
| 3066 | 〃 | 甕Ⅰｂ類 | 3.3 | 1.6 | 3.7 | 連続指頭押 | 手捏 | 手捏 | | 黄白 | 〃 |
| 3067 | 〃 | 埦Ⅱｂ類 | 6.0 | 3.5 | 4.2 | 連続指頭押 | 指頭ナデ | ナデ・竹管 | | 明黄 | 〃 |
| 3068 | 〃 | 甕Ⅰｂ類 | 3.6 | 1.6 | 3.7 | 連続指頭押 | 手捏 | 手捏 | | 黄白 | 〃 |
| 3069 | ＳＸ03 | 甕Ⅰｂ類 | 3.3 | 1.6 | 3.7 | 連続指頭押 | 手捏 | 手捏 | | 黄白 | 〃 |
| 3070 | 〃 | 埦Ⅱｂ類 | 4.3 | 2.7 | 3.6 | | 手捏 | 手捏→ナデ | | 暗黄 | 〃 |
| 3071 | 〃 | 甕Ⅰａ類 | 3.5 | | 3.7 | 連続指頭押 | 指頭ナデ | 指頭ナデ | | 明茶 | 〃 |
| 3072 | 〃 | 甕Ⅰｂ類 | 3.3 | 1.6 | 3.7 | 連続指頭押 | 手捏 | 手捏 | | 黄白 | 〃 |
| 3073 | 〃 | 埦Ⅱｂ類 | 6.0 | 3.5 | 4.2 | 連続指頭押 | 指頭ナデ | ナデ・竹管 | | 明黄 | 〃 |
| 3074 | 〃 | 甕Ⅰｂ類 | 3.3 | 1.6 | 3.9 | 連続指頭押 | 手捏 | 手捏 | | 黄白 | 〃 |
| 3075 | 〃 | 甕Ⅰｂ類 | 3.3 | 1.6 | 3.7 | 連続指頭押 | 手捏 | 手捏 | | 黄白 | 〃 |
| 3076 | 〃 | 埦Ⅱｂ類 | 6.0 | 3.5 | 4.2 | 連続指頭押 | 指頭ナデ | ナデ・竹管 | | 明黄 | 〃 |
| 3077 | 〃 | 埦Ⅱｂ類 | 6.0 | | 4.1 | 連続指頭押 | 指頭ナデ | 指頭ナデ | | 明黄 | 〃 |
| 3078 | 〃 | 甕Ⅰａ類 | 5.4 | | 4.7 | 連続指頭押 | 指頭ナデ | 指頭ナデ | | 明茶 | 〃 |
| 3079 | 〃 | 甕Ⅰｂ類 | 3.3 | 1.6 | 3.7 | 連続指頭押 | 手捏 | 手捏 | | 黄白 | 〃 |
| 3080 | 〃 | 甕Ⅰａ類 | 3.5 | | 3.7 | 連続指頭押 | 指頭ナデ | 指頭ナデ | | 明茶 | 〃 |
| 3081 | 〃 | 鉢Ⅲ類 | 5.2 | 2.2 | 5.7 | | 指頭ナデ | 指頭ナデ | | 明黄 | 〃 |
| 3082 | 〃 | 高坏 | | 3.4 | 4.2 | | 指頭ナデ | 指頭ナデ | | 黄白 | 〃 |
| 3083 | 〃 | 支脚 | 5.6 | | 3.4 | | 手捏 | 手捏 | | 明黄 | 〃 |
| 3084 | 〃 | 埦Ⅰ類 | 2.6 | | 2.1 | | 手捏 | 手捏 | | 明黄 | 〃 |
| 3085 | 〃 | 甕Ⅰｂ類 | 3.3 | 1.6 | 3.7 | 連続指頭押 | 手捏 | 手捏 | | 黄白 | 〃 |
| 3086 | 〃 | 埦Ⅱａ類 | 3.8 | | 2.6 | | 手捏 | 手捏 | 砂雲 | 暗茶 | 〃 |
| 3087 | 〃 | 埦Ⅱｂ類 | 4.3 | 2.7 | 3.6 | | 手捏 | 手捏→ナデ | | 暗黄 | 〃 |
| 3088 | 〃 | 甕Ⅰａ類 | 3.5 | | 3.7 | 連続指頭押 | 指頭ナデ | 指頭ナデ | | 明茶 | 〃 |
| 3089 | 〃 | 甕Ⅰｂ類 | 3.1 | 1.6 | 3.7 | 連続指頭押 | 手捏 | 手捏 | | 黄白 | 〃 |
| 3090 | 〃 | 埦Ⅱａ類 | 3.8 | | 2.6 | | 手捏 | 手捏 | 砂雲 | 暗茶 | 〃 |
| 3091 | 〃 | 埦Ⅱｂ類 | 4.3 | 2.7 | 3.6 | | 手捏 | 手捏→ナデ | | 暗黄 | 〃 |
| 3092 | 〃 | 甕Ⅰａ類 | 3.5 | | 3.7 | 連続指頭押 | 指頭ナデ | 指頭ナデ | | 明茶 | 〃 |

| 遺物番号 | 出土地 | 器種 | 法量 | | | 手法の特徴 | | | 胎土 | 色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 底径 | 器高 | 口縁部 | 外面 | 内面 | | | |
| 3093 | SX03 | 甕Ⅰb類 | 3.3 | 1.6 | 3.7 | 連続指頭押 | 手捏 | 手捏 | | 黄白 | 〃 |
| 3094 | 〃 | 埦Ⅰ類 | 2.6 | | 2.1 | | 手捏 | 手捏 | | 明黄 | 〃 |
| 3095 | 〃 | 埦Ⅱb類 | 4.0 | 2.2 | 3.3 | | 手捏 | 手捏→ナデ | | 明茶 | 〃 |
| 3096 | 〃 | 埦Ⅱa類 | 3.8 | | 2.6 | | 手捏 | 手捏 | 砂雲 | 暗茶 | 〃 |
| 3097 | 〃 | 埦Ⅱb類 | 4.3 | 2.7 | 3.6 | | 手捏 | 手捏→ナデ | | 暗黄 | 〃 |
| 3098 | 〃 | 埦Ⅰ類 | 2.6 | | 2.1 | | 手捏 | 手捏 | | 明黄 | 〃 |
| 3099 | 〃 | 埦Ⅱb類 | 4.0 | 2.2 | 3.3 | | 手捏 | 手捏→ナデ | | 明茶 | 〃 |
| 3100 | 〃 | 埦Ⅰ類 | 2.8 | | 2.1 | | 手捏 | 手捏 | | 暗黄 | 〃 |
| 3101 | 〃 | 埦Ⅱb類 | 4.3 | | 3.6 | 連続指頭押 | 手捏 | 手捏 | | 明茶 | 〃 |
| 3102 | 〃 | 甕Ⅰa類 | 3.5 | | 3.7 | 連続指頭押 | 指頭ナデ | 指頭ナデ | | 明茶 | 〃 |
| 3103 | 〃 | 甕Ⅰb類 | 3.3 | 1.6 | 3.7 | 連続指頭押 | 手捏 | 手捏 | | 黄白 | 〃 |
| 3104 | 〃 | 埦Ⅱb類 | 6.0 | 3.5 | 4.2 | 連続指頭押 | 指頭ナデ | ナデ・竹管 | | 明黄 | 〃 |
| 3105 | 〃 | 埦Ⅱb類 | 6.0 | | 4.1 | 連続指頭押 | 指頭ナデ | 指頭ナデ | | 明黄 | 〃 |
| 3106 | 〃 | 甕Ⅰa類 | 5.4 | | 4.7 | 連続指頭押 | 指頭ナデ | 指頭ナデ | | 明茶 | 〃 |
| 3107 | 〃 | 甕Ⅰa類 | 5.6 | 2.6 | 5.2 | 指頭ナデ | 指頭ナデ | 指頭ナデ | | 黄白 | 〃 |
| 3108 | 〃 | 鉢Ⅰ類 | 7.2 | | 4.8 | 連続指頭押 | 指頭ナデ | 指頭ナデ | 砂 | 黄褐 | 〃 |
| 3109 | 〃 | 甕Ⅰb類 | 3.3 | 1.6 | 3.7 | 連続指頭押 | 手捏 | 手捏 | | 黄白 | 〃 |
| 3110 | 〃 | 埦Ⅱb類 | 6.0 | 3.5 | 4.2 | 連続指頭押 | 指頭ナデ | ナデ・竹管 | | 明黄 | 〃 |
| 3111 | 〃 | 甕Ⅰb類 | 3.3 | 1.6 | 3.7 | 連続指頭押 | 手捏 | 手捏 | | 黄白 | 〃 |
| 3112 | 〃 | 甕Ⅰb類 | 3.3 | 1.6 | 3.7 | 連続指頭押 | 手捏 | 手捏 | | 黄白 | 〃 |
| 3113 | 〃 | 小型丸坩 | 5.2 | | 6.0 | 横ナデ | 指頭ナデ | ナデヘラ痕 | | 暗茶 | 〃 |
| 3114 | 〃 | 小型丸坩 | 5.4 | | 7.0 | 横ナデ | 指頭ナデ | ナデヘラ痕 | 砂 | 明黄 | 〃 |
| 3115 | 〃 | 小型丸坩 | 5.6 | | 6.0 | 横ナデ | 指頭ナデ | ナデヘラ痕 | | 暗茶 | 〃 |
| 3116 | 〃 | 甕Ⅰa類 | 3.5 | | 3.7 | 連続指頭押 | 指頭ナデ | 指頭ナデ | | 明茶 | 〃 |
| 3117 | 〃 | 鉢Ⅲ類 | 5.2 | 2.2 | 5.7 | | 指頭ナデ | 指頭ナデ | | 明黄 | 〃 黒斑 |
| 3118 | 〃 | 高坏 | | 3.4 | 4.2 | | 指頭ナデ | 指頭ナデ | | 黄白 | 〃 |
| 3119 | 〃 | 支脚 | 5.6 | | 3.4 | | 手捏 | 手捏 | | 明黄 | 〃 |
| 3120 | 〃 | 埦Ⅰ類 | 2.6 | | 2.1 | | 手捏 | 手捏 | | 明黄 | 〃 |
| 3121 | 〃 | 甕Ⅰb類 | 3.3 | 1.6 | 3.7 | 連続指頭押 | 手捏 | 手捏 | | 黄白 | 〃 |
| 3122 | 〃 | 埦Ⅱb類 | 6.0 | 3.5 | 4.2 | 連続指頭押 | 指頭ナデ | ナデ・竹管 | | 明黄 | 〃 |
| 3123 | 〃 | 甕Ⅰb類 | 3.3 | 1.7 | 3.7 | 連続指頭押 | 手捏 | 手捏 | | 黄白 | 〃 |
| 3124 | 〃 | 甕Ⅰb類 | 3.3 | 1.6 | 3.7 | 連続指頭押 | 手捏 | 手捏 | | 黄白 | 〃 |
| 3125 | 〃 | 甕Ⅰa類 | 3.5 | | 3.7 | 連続指頭押 | 指頭ナデ | 指頭ナデ | | 明茶 | 〃 |
| 3126 | 〃 | 甕Ⅰb類 | 3.3 | 2.6 | 3.7 | 連続指頭押 | 手捏 | 手捏 | | 黄白 | 〃 |
| 3127 | 〃 | 埦Ⅱb類 | 6.0 | 3.5 | 4.2 | 連続指頭押 | 指頭ナデ | ナデ・竹管 | | 明黄 | 〃 黒斑 |
| 3128 | 〃 | 小型丸坩 | 5.2 | | 6.0 | 横ナデ | 指頭ナデ | ナデヘラ痕 | | 暗茶 | 〃 |
| 3129 | 〃 | 小型丸坩 | 5.4 | | 7.0 | 横ナデ | 指頭ナデ | ナデヘラ痕 | 砂 | 明黄 | 〃 |

## 3．須　恵　器

### A　はじめに

須恵器は総数、約150点出土した。その内、約半数がSX01から出土し、次いでSX02が多かった。しかし、それ以外にはM－5区で8点の出土があったが、遺構として認識できる出土状態ではなかった。したがって、最も出土量が多いSX01を中心に出作遺跡の須恵器を報告する。出土した器種には蓋杯・高杯・𤭯・把手付椀・壺・器台・甑・甕があり、それぞれバリエーションがある。そこで出土した須恵器のなかで数が多く形態差があるものを分類した後、各遺構の須恵器を検討したい。

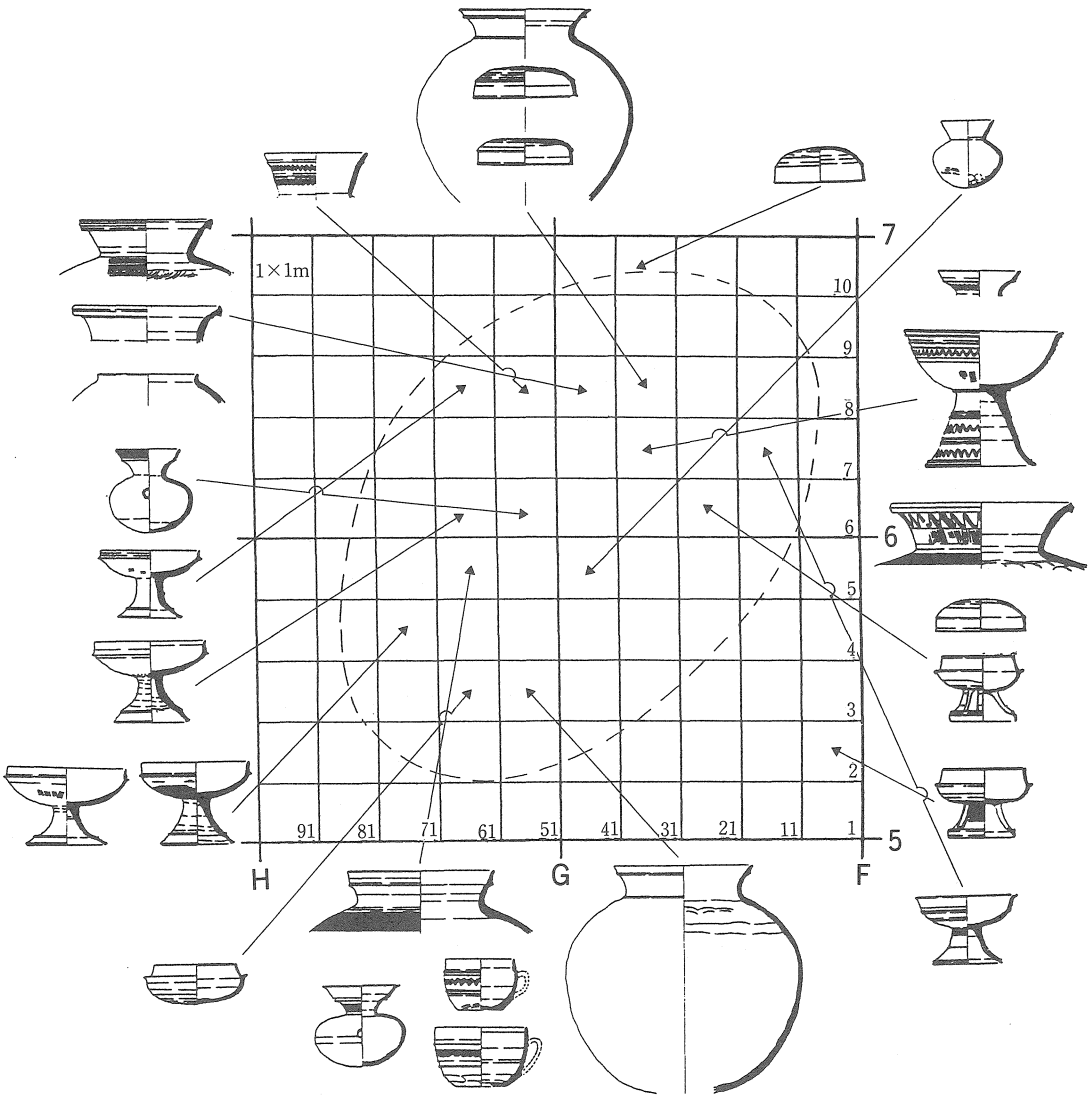



図52　SX01出土の須恵器分布

## B　器種分類

### 蓋　杯

杯身・杯蓋とも同じ基準で分類する。体底部を回転ヘラケズリするＡ類と、手持ちのケズリを施すＢ類に分ける。Ｂ類は図58－2051の１点のみである。Ａ類は口縁の形態によって次の３種に分類する。

１：凹面あるいは平坦面をもつ

２：内傾する段をもつ

３：単純に丸くおさめる

### 高　杯

Ａ類：杯身Ａ類に脚部を付加した有蓋高杯である。

Ｂ類：杯蓋を反転させた杯部に脚をつけた無蓋高杯である。２個体しか認められない。

Ｃ類：杯部に格子叩きを認め、口縁部が直立ないし外反して丸くおわる無蓋高杯である。

Ｄ類：杯部が屈曲して大きく外反し、脚部は幅広い方形透しを四方にもつ無蓋高杯である。

### 把手付椀

棒状の把手をもつものと、板状の把手をもつものがある。

### 甕

口縁部の形態によって３種類に分類する。

Ａ類：二重口縁となるもの。

Ｂ類：口縁部が単純に外反し、端部を上下に拡張するもの。

Ｃ類：口縁部が外弯し、端部が凹面を呈するもの。体部に縄蓆文叩きを施す。

## C　SX01出土の須恵器

（図55－2001～2024・図56－2025～2034・図59－2079・2080・2082・2084）

蓋　杯　杯身はすべて体部を回転ヘラケズリするＡ類で占められている。2001は端面が内傾する面をなす１類、2002は内傾する段をなす２類である。杯蓋はＡ１類2003・2004、Ａ２類2005、Ａ３類2006に分類される。Ａ１類は天井部が平坦でていねいなヘラケズリがなされているのに対し、Ａ２・３類は天井部が高くヘラケズリも２／３程度にしか施していない。

高杯　有蓋高杯２点、無蓋高杯６点の計８点が出土している。Ａ類は杯Ａ１類に脚部を付加した2007とＡ２類に脚部を付加した2008が認められる。脚部は短脚の１段スカシで、スカシはいずれも長方形の三方スカシである。2007は2008に対してスカシの幅が狭い。

高杯Ｂ類2009は未掲載のＬ－６区出土の１点と共に２点認められる。Ｂ類は形態に特徴があり、大阪府、陶邑の大野池地区の製品に近似している〔中村ほか1978〕。

高杯Ｃ類は2010～2014の５点が出土している。体部と口縁部が突帯によって界され、有蓋高杯にみえるものである。しかし、対応する蓋がないこと、有蓋高杯の受部とは形態が異

なることから、無蓋高杯と考えられる。それぞれ細部において差が認められるものの、杯部に格子叩きが残ることや脚部にスカシをもたないことなど共通する成形が認められる。

鬶　4点出土している。いずれも体部が偏球形を呈し、外反する口縁部をもつ。しかし、同形態のものはなく、施文部位や端部の処理に差がみられる。2016は口縁部に波状文を施し、体部には施文しない。また、口縁端部は丸くおわらせている。2017・2019は頸部と体部上半に波状文を施している。また、体部下半に叩き痕を残している。2018は口縁部が外反し端部は凹面を呈している。波状文は頸部のみに施されている。

把手付椀　2点あり、いずれも形態が異なっている。2020は口縁が内傾した後直立するもので、2021は底部から口縁にむかって内弯する形態である。2021はやや大型である。

器　台　大型の2025と小型の2024がある。2024は口縁部をつよく外反させ、直下に突線をめぐらせるため、口縁部が広い凹面を呈するようになる。波状文は稚拙で受部に1単位、脚部に2単位施文している。文様帯は突線によって区画しており、受部下半に残る格子叩きなど高杯C類と共通する要素が多い。2025は深い受部をもち、口縁部が屈曲しておわる。

壺　土師器の小型丸底壺と同形態の2022、口縁部が短く外反する短頸壺2027、口縁部に波状文を施した直口壺2023、外反する口縁端部直下に突帯をめぐらせる2026・2033・2034がある。2033・2034は頸部に細い突帯をめぐらせ、球形にちかい体部をもつ。体部下半に格子叩き痕を残し、焼成はいずれも悪く、瓦質にちかい特徴をもっている。

甕　二重口縁となるA類2030・2031と口縁部を上下に拡張するB類2028・2029・2032がある。A類は口縁形態が異なるものの、体部上半に格子叩きを施した後、カキ目を施すなど共通した特徴を有している。

甕B類は小型の2028・2029と大型の2032がある。2028は体部外面に縦位の平行叩きの後、カキ目を施し、内面は同心円の当て具痕を残している。SX01の壺・甕で内面の当て具痕をそのまま残すのは2028のみである。2032は頸部上半に大きな単位の波状文を施している。

### D　SX02出土の須恵器（図57－2035～2042・図59－2073）

SX02出土の須恵器には蓋杯・高杯・把手付椀・壺・甕がある。

杯蓋2035は口縁端部が内傾する凹面を呈する杯A1類である。また、2036は高杯A類に対応する蓋であろう。高杯2038は杯部上半が大きく外反するもので、脚部は幅広い方形の四方スカシである。壺2039・2040は二重口縁で頸部に突帯をめぐらせるものである。SX01出土の2033・2034と同形態である。2039は口縁部と肩部に波状文を施し、体部上半はカキ目、下半は格子叩きをそのまま残している。同形態の壺に比較して焼成はよいが、それでも堅く焼締まった一群とは異なる焼きあがりである。甕は二重口縁の甕A類2041と体部に縄蓆文叩きが認められる甕C類2042がある。縄蓆文をもつ2042は口縁部がつよく外反し端部は凹面となる。おそらく朝鮮からの搬入品と考えられる。2037は甑の角状の把手である。上方か

らの切込みがある。2073は板状の把手をもつ把手付椀である。口縁部が内弯ぎみに立ち上がり、端部は丸くおわる。口縁部と体部に波状文を施している。

### E　M－5区上層出土の須恵器（図58—2043～2050）

蓋杯が多く出土した。しかし、SX01・02のようなまとまりを認めることはできなかった。

杯身2043～2045はいずれもA2類である。蓋はA1類2046・2047である。2050は小型の壺で口縁端部が上方につまみ上げられるようになる。体部下半に格子叩き痕があり、瓦質にちかい焼きあがりである。

### F　表採および包含層出土の須恵器

ここで取り上げた須恵器は表採および単独で出土したものである。

蓋杯は唯一B類に分類した2051があり、体部下半を回転を利用しないヘラケズリで仕上げたものである。立ち上がりは内傾して低い。6世紀代の須恵器の可能性もあるが、体部が深いなど、異なる特徴もある。他はA1類2052・2057、A2類2053・2056・2058、A3類2054・2055である。口径が大きくなる2055・2058などは出作遺跡では最も新しい時期の須恵器であり、遺跡の存続期間を考える上で重要な資料となるものであろう。

高杯はA類に属する脚部2062～2064が多く2059は同類の蓋であろう。2060は高杯の蓋と考えられるが、対応すると思われる高杯は確認できていない。2066は大型の甕と考えられる破片である。

### G　小　結

出作遺跡出土の須恵器の概要を述べたが、特にSX01・SX02出土の須恵器が須恵器編年のなかでどのように位置づけられるかをみておきたい。最も特徴をとらえやすい蓋杯の特徴は次のようにまとめることができる。

①杯身の立ち上がりは、わずかに内傾して高い。
②口縁端部は段を有し、丸くおさめるのが主体となる。
③体部のヘラケズリは1／2をくだることはない。
④ロクロ回転はほとんど逆時計回りである。
⑤高杯は短脚の1段スカシである。

以上の特徴は、『陶邑古窯址群』[2]の田辺昭三氏の編年（以下、「田辺編年」と略す。）ではTK208型式からTK23型式に該当し、『陶邑Ⅰ』[3]・『陶邑Ⅲ』[4]で示された中村浩氏の編年観ではⅠ期の3段階から4段階に該当する。他の器種についてもこの編年観に矛盾するものはみられない。また、新しい特徴をもつ2053・2054は田辺編年のMT15型式に、2055・2058はTK10型式にほぼ対応させることができよう。このことから、出作遺跡の須恵器は包含

層から6世紀代の須恵器が少量出土するものの、祭祀遺構からは5世紀代後半の須恵器が出土するといってよいだろう。

さて、出作遺跡の須恵器が5世紀代後半の初期の須恵器であることは認められたと思う。この時期の須恵器は県下でも出土例が増加してきている。ところが、出作遺跡の須恵器の中にはこれまで報告されている同時期の須恵器には類例がほとんど認められない一群がある。その特徴を列挙すると以下のようにまとめることができる。

（1）色調が淡青灰色あるいは灰白色を呈し、軟質の焼き上がりになる。

（2）すべての器種に格子叩きが認められる。

（3）壺・甕の口縁部が二重口縁となる。

これらの特徴をもつ須恵器を器種毎にみると高杯ではC類、壺では二重口縁の一群、甕A類、器台では小型の2024などである。これらの特徴を有する須恵器は、近年調査が進展している四国の初期の須恵器と対比しても異質な存在であり、陶邑など畿内の同時期の遺跡でもこれらに共通する特徴を有するものはほとんど認められない。

一方、道後平野に目を向けると、わずかながら出作遺跡の一群と類似した須恵器が出土している。たとえば、松山市東野9号墳①周溝出土の壺・器台、五郎兵衛谷6号墳⑤出土の高杯などである。このように出作遺跡で一定の出土量をみる一群の須恵器は、道後平野ではわずかながら分布することが確認される。これらの須恵器をどう理解するかは、もう少し資料の増加を待たねばならないと思われるが、既に松本敏三氏⑥も指摘しているように、道後平野にこれらの須恵器を生産した未確認の窯があると考えるべきだろう。

〔 森 〕

註

①阪本安光　『東野遺跡埋蔵文化財調査報告書』　愛媛県教育委員会　1979.

②田辺昭三　『陶邑古窯址群Ⅰ』　平安学園考古学クラブ　1966.

③中村浩ほか『陶邑Ⅰ』　大阪府文化財調査報告書第28号　大阪府教育委員会　1976.

④中村浩ほか『陶邑Ⅲ』　大阪府文化財調査報告書第30号　大阪府教育委員会　1978.

⑤森光晴　『五郎兵衛谷古墳』　松山市文化財調査報告書13　松山市教育委員会　1978.

⑥松本敏三　「須恵器の源流　四国地方」『日本陶磁の源流』　柏書房　1984.

【付記】

本稿脱稿後に、長井数秋氏によって新資料が公表された。(「松山平野の須恵器編年」『愛媛考古学』12愛媛考古学協会1992.)。このなかで、伊予市市場南組窯跡出土とされる須恵器は、実測図でみる限り出作遺跡出土の須恵器の中で在地産であろうと考えた須恵器と酷似したものと言える。図中の1・2は形態から本報告で高杯C類とした無蓋高杯と近似しており、5・6は二重口縁の壺になるのではないかと思われる。焼成や調整が出作遺跡の須恵器と共通するかどうかの検討は必要であるが、出作遺跡出土の在地産と考えられる一群の須恵器が市場南組窯跡から供給された可能性は高いと思われる。

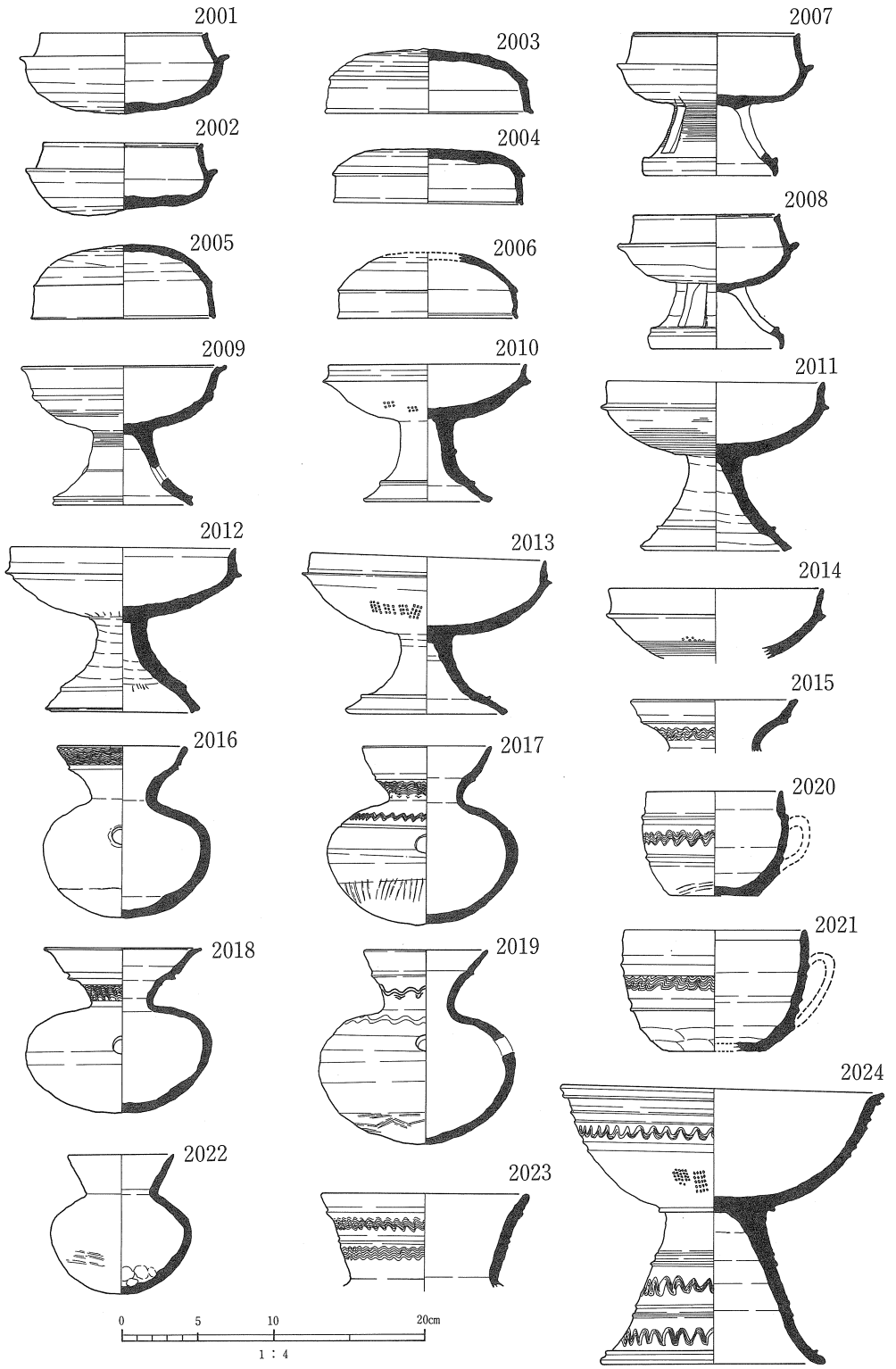

2001
2002
2003
2004
2005
2006
2007
2008
2009
2010
2011
2012
2013
2014
2015
2016
2017
2018
2019
2020
2021
2022
2023
2024
0
5
10
20cm
1：4

図55　須恵器(1)

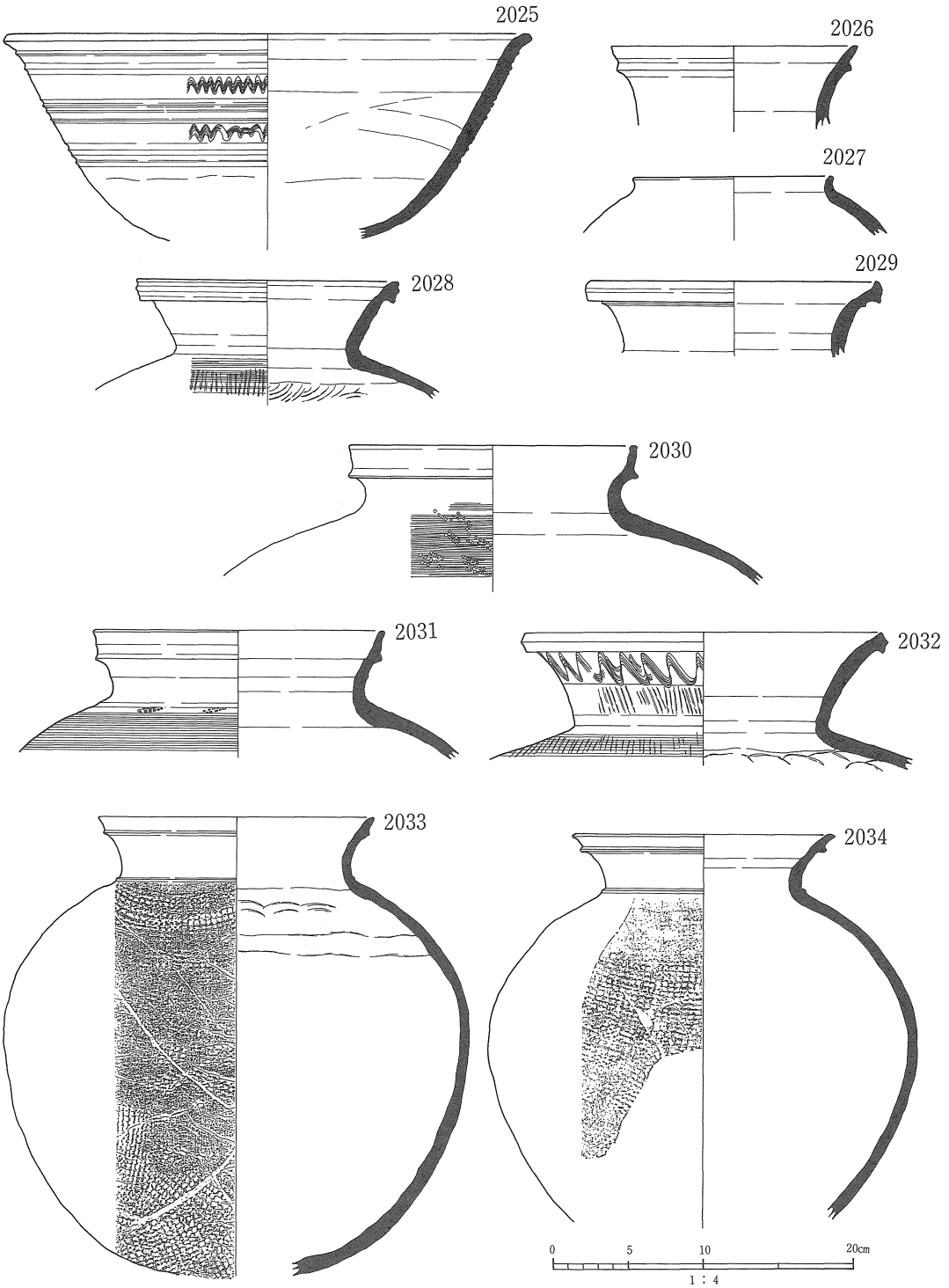

2025
2026
2027
2028
2029
2030
2031
2032
2033
2034
0
5
10
20cm
1：4

図56　須恵器(2)

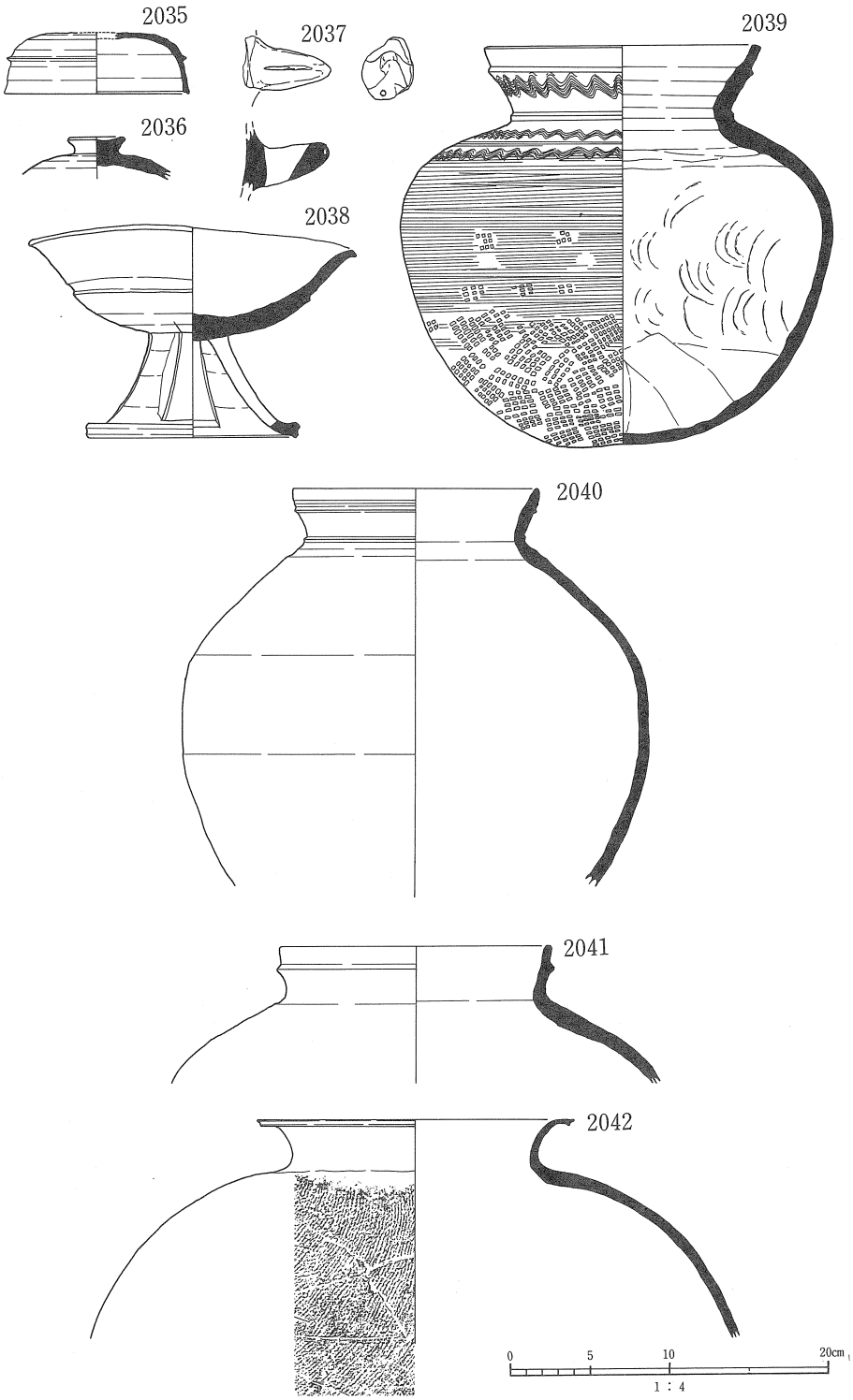



図57　須恵器(3)

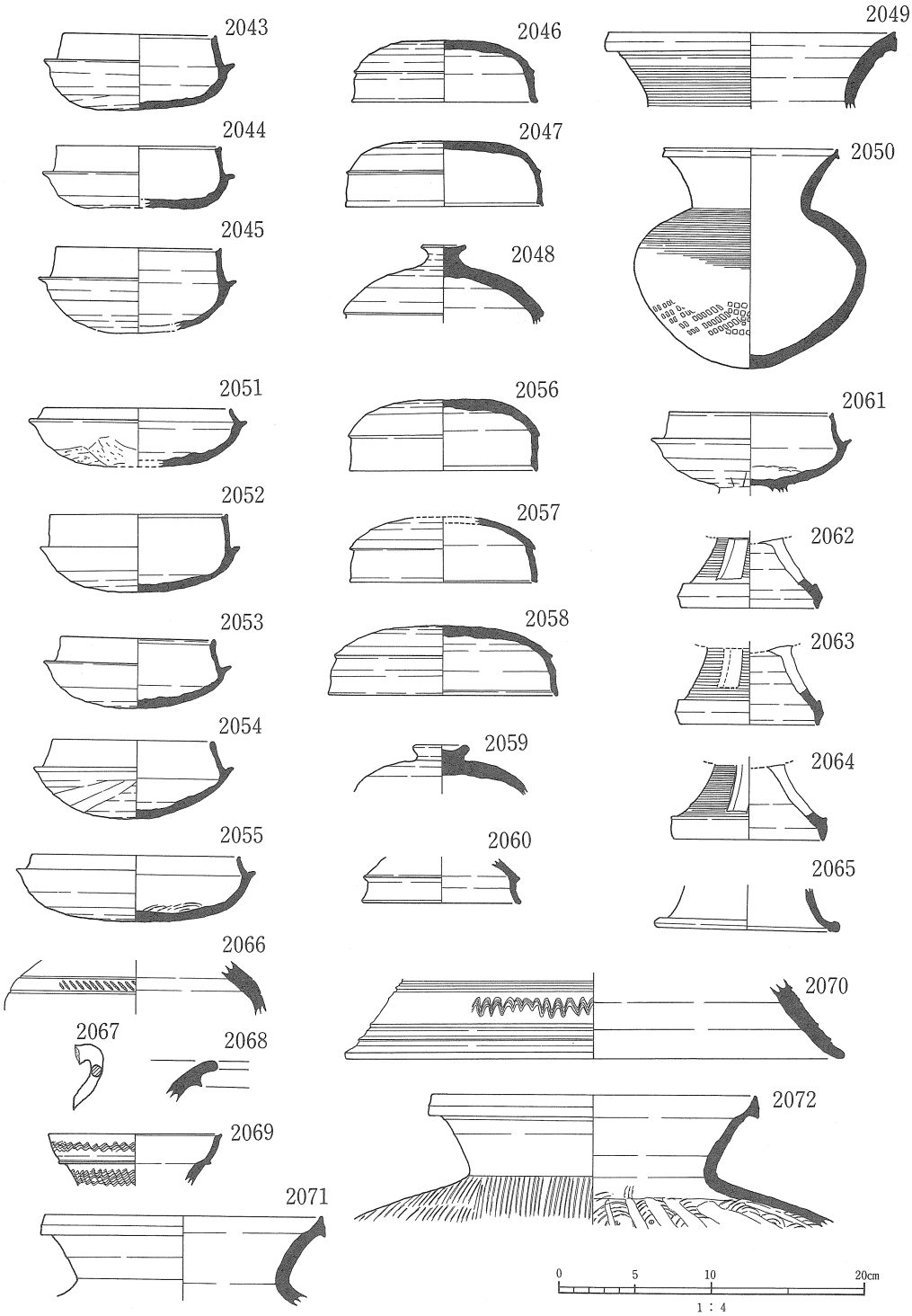

2043
2044
2045
2046
2047
2048
2049
2050
2051
2052
2053
2054
2055
2056
2057
2058
2059
2060
2061
2062
2063
2064
2065
2066
2067
2068
2069
2070
2071
2072
0
5
10
20cm
1：4

図58　須恵器(4)

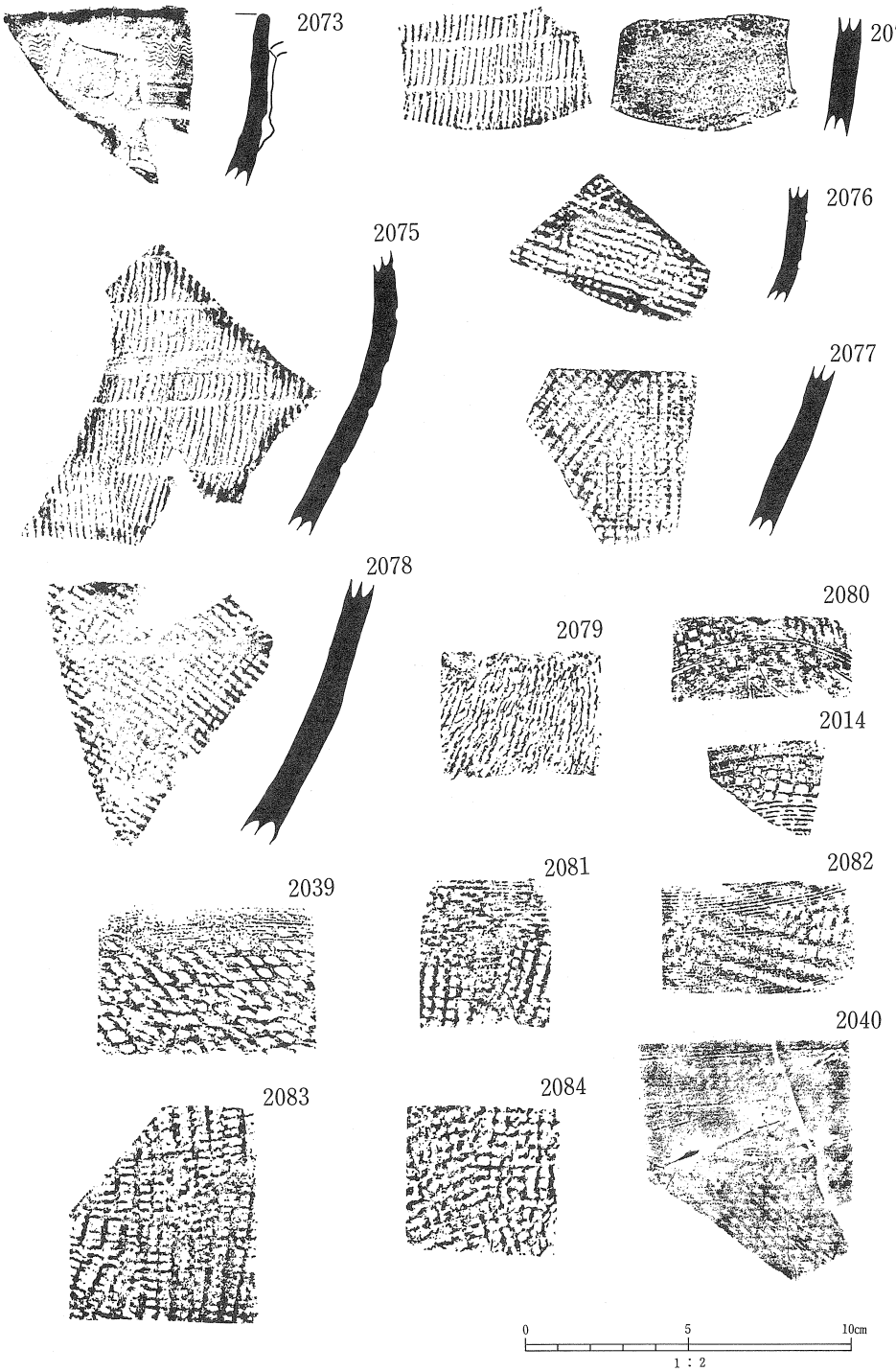

2073
2074
2076
2075
2077
2078
2080
2079
2014
2039
2081
2082
2040
2083
2084
0
5
10cm
1：2

図59　須恵器(5)

表７　出作遺跡出土の須恵器観察表

・器種分類は本文中の分類と一致する。

・法量は復元値の場合（　）で表示した。

・備考欄は色調・焼成を記号化して表示した。

色調（Ａ：青灰色、Ｂ：淡青灰色、Ｃ：灰色、Ｄ：灰白色）

胎土（ａ：堅緻、ｂ：軟質）

| 器種分類 | 図 番 号 | 法量(cm) | 形態の特徴 | 技法の特徴 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 杯身Ａ１ | 図55－2001 | 口径10.9<br>器高 5.4 | 立ち上がりは内傾し、端部は内傾する凹面を呈す。受部は外上方にのび丸くおさめる。 | 体部の１／２を時計回りにヘラケズリする。 | Ａ－ａ<br>SX01-63 |
| 杯身Ａ２ | 2002 | 口径10.4<br>器高 4.8 | 立ち上がりはわずかに内傾し端部は内傾する段をなす。受部は外上方にのび丸くおさめる。 | 体部の１／２をヘラケズリし、他はロクロナデ調整。 | Ａ－ａ<br>SX01 |
| 杯蓋Ａ１ | 2003 | 口径13.6<br>器高 4.3 | 口縁部はわずかに外開きし端部は内傾する凹面を呈す。天井部と口縁を界す稜線は鋭く天井部は平坦である。 | ヘラケズリは天井部全面におよび、単位は細かい。天井部内面に仕上げナデ。 | Ｂ－ａ<br>SX01-38 |
| 杯蓋Ａ１ | 2004 | 口径12.4<br>器高 3.6 | 口縁部は直線的に下がり、端部は内外に肥厚する。天井部と口縁部とを分ける稜は鋭く天井部は平坦である。 | 天井部全面に細かい単位のヘラケズリ。ロクロ回転は逆時計回り。 | Ｂ－ａ<br>SX01-38 |
| 杯蓋Ａ２ | 2005 | 口径12.1<br>器高 4.9 | 口縁部はやや外開き。端部は内傾する鈍い段をなす。天井部と口縁部は明瞭な稜で界され天井部は高く丸みをもつ。 | 天井部の約２／３を時計回りにヘラケズリする。他はロクロナデ調整。 | Ａ－ｂ<br>SX01-40 |
| 杯蓋Ａ３ | 2006 | 口径(12.0)<br>器高　— | 口縁部は内弯ぎみに下がり、端部でやや外開きする。端部は内傾して丸くおわる。 | 天井部の１／２を時計回りにヘラケズリする。天井部に重ね焼きの痕跡がある。 | Ａ－ａ<br>SX01-36 |
| 高杯Ａ | 2007 | 口径10.9<br>器高 9.5<br>底径 8.7 | 立ち上がりはわずかに内傾し端部は段をなす。口縁部外端に鋭い沈線が１条めぐる。脚部端面は幅広い凹面となる。 | 杯部は１／２強をヘラケズリし他はロクロナデ調整する。脚部はカキ目調整の後、三方に方形スカシを穿つ。 | Ａ－ａ<br>SX01-02 |
| 高杯Ａ | 2008 | 口径10.9<br>器高 9.5<br>底径 8.6 | 立ち上がりは内傾して高く、口縁部は内傾する段をなす。脚部は三方に長方形のスカシを穿つ。 | 杯部体底部の２／３を時計回りにヘラケズリする。スカシを穿つことによって外方に粘土がはみ出ている。 | Ａ－ａ<br>SX01-36 |
| 高杯Ｂ | 2009 | 口径13.5<br>器高 9.2 | 杯部は杯蓋を反転した形状を呈し、口縁部と体部は幅広い | 杯部から脚部にかけて全面ロクロナデ調整され、杯部中位 | Ｂ－ｂ<br>SX01-27 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| | | 底径 9.2 | 凹線で界される。端部は内傾する凹面を呈し、先端は丸くおわる。脚部はハの字形に開き、端部には凹線がめぐる。脚部中位に2つの円孔を穿つ。 | から脚上部にかけてカキ目調整される。 | |
| 高杯C | 2010 | 口径13.1<br>器高 9.1<br>底径 8.0 | 杯部は丸みをもち、口縁部と体部を1条の突帯によって界している。口縁部は直立ぎみに外反する。端部は丸くおわる2010・2011・2013・2014と内傾する面をもつ2012がある。脚部は無孔で下半部に段をもつ2012と鋭い突線で界されるものがある。 | 杯体部にはすべて格子叩きが認められるがそれをカキ目で消す2011・2014とナデによって消す2010・2012・2013がある全面ロクロナデ調整でヘラケズリは認められない。 | B－b<br>SX01-68 |
| | 2011 | 口径14.3<br>器高11.2<br>底径9.2 | | | A－a<br>SX01-74 |
| | 2012 | 口径14.7<br>器高11.0<br>底径 9.3 | | | B－a<br>SX01-75 |
| | 2013 | 口径15.4<br>器高10.4<br>底径10.1 | | | B－a<br>SX01-74 |
| | 2014 | 口径(14.0) | | | B－a |
| 瓦塔 | 2016 | 口径 8.6<br>器高11.4 | 頸部が大きく外弯し、口縁部は鋭い稜線を界して外上方に開く。口端部外面に繊細な波状文を施している。端部は丸くおさめている。濃緑色の自然釉がかかる。 | 全面ナデ調整される。円孔は胴上位にあり、孔の外面を面取りする。 | A－a<br>SX01-74 |
| 瓦塔 | 2017 | 口径 8.6<br>器高11.9 | 最大径は体部中位にあり、体部は偏球形を呈す。口縁部は短くくびれた頸部から内弯ぎみに立ち上がり、端部は丸い。 | 体部下半を縦位の平行叩きで整形したのち、全面をロクロナデ調整する。 | A－a<br>SX01 |
| 瓦塔 | 2014 | 口径(11.0) | 口縁部と頸部の境に凹線をめぐらせ、口縁端部は内傾する面をなす。頸部に波状文を施し、体部は偏平である。 | 体部にヘラケズリを施すが、ロクロナデによって平滑にしあげる。 | B－a<br>SX01-37 |
| | 2018 | 口径 8.3<br>器高11.0 | | | A－a<br>SX01-65 |
| 瓦塔 | 2019 | 口径 8.3<br>器高12.8 | 口縁部と頸部は鋭い稜線によって界され端部は尖り気味におわる。頸部に粗い波状文を施し、肩部の波状文は単位が不明瞭である。波状文の下には沈線がめぐる。 | 体部下半は横位の平行叩きのち、ナデ調整。 | A－a<br>SX01 |
| 把手付椀 | 2020 | 口径 8.3<br>器高 6.9 | 口縁部と体部は突線によって界され、体部中位に波状文を | 底部付近を右上がりの平行叩き整形の後、不連続のナデ調 | B－a<br>SX01-65 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| | | 底径 5.8 | 施す。底部はわずかに上げ底状になる。濃緑色の自然釉。 | 整。 | |
| 把手付椀 | 2021 | 口径(11.7)<br>器高 8.1<br>底径(6.7) | 底部から、口縁部に向かって内弯ぎみに成形され、口縁部は突線によって界される。体部中位の波状文は稚拙である。 | 体部下半は手持ちのヘラケズリを行い、他はロクロナデ調整する。 | B－a<br>SX01-65 |
| 壺 | 2022 | 口径 7.0<br>器高 9.2 | 頸部から口縁部は直線的に外開きし、端部は尖りぎみにおわる。最大径は体部上位にある。土師器の小型丸底土器と器形は近似する。淡緑色の自然釉がかかる。 | 体部下半は横位の平行叩きの後、ロクロナデ調整する。底部内面にオサエ痕が顕著に残る。 | C－a<br>SX01-45 |
| 直口壺 | 2023 | 口径(13.8) | 口縁部は頸部から直線的に外方にのびる。２条の突線によって口縁部は３段に区画され下位の２段に波状文を施す。 | 全面をロクロナデ調整するが、口縁部内面に不連続のナデを施す部分がある。 | B－a<br>SX01-58 |
| 器台 B | 2024 | 口径(21.2)<br>器高(18.2)<br>底径14.8 | 受部は半球形を呈し、上半に２条の突線に挟まれた施文帯が設けられる。脚部は八の字状に開き、2本単位の突線２条によって３区分され、下位から１・２段目に波状文を施す。受部と脚部との境に断面三角形の突帯をめぐらせる。 | 口縁部の成形は上端を斜め外方に折曲げ、端部直下に下方に突帯を貼付けている。受部下半には細かな斜格子の叩きによって整形される。 | B－b<br>SX01-37 |
| 器台 A | 図56－2025 | 口径(34.9) | 口縁部は短く外反し、深い受部である。鋭い突線に界された文様帯を有し、６本単位の繊細な波状文が施される。 | 全面をナデ調整するが内面下半は回転を利用しないナデによって調整される。 | C－a<br>SX01 |
| 壺 | 2026 | 口径(16.4) | 口縁部はあまり開かず端部下方に断面三角形の突帯をめぐらせる。 | 全面ロクロナデ調整。 | A－a<br>SX01 |
| 短頸壺 | 2027 | 口径(13.3) | 球形にちかい体部に短く外反する口縁部を有する。 | | B－b<br>SX01-48 |
| 甕 B | 2028 | 口径(17.5) | 2028は口縁部が頸部から直線的に外反し、2029は口縁部が外弯し口縁直下に突線をめぐらせる。 | 体部がわずかに残る2028は縦位の平行叩きの後、カキ目調整する。内面には当て具痕が残る。2029は口頸部にカキ目を施すが摩滅が激しい。 | B－a<br>SX01-48 |
| | 2029 | 口径(19.0) | | | C－b<br>SX01-48 |
| 甕 A | 2030 | 口径(19.2) | 頸部がつよく外弯し口縁部は２段に立ち上がる二重口縁である。2030は端部が面をなし2031は丸くおさめる。 | 体部は格子叩きで整形した後カキ目調整される。内面はナデ調整されるが、ケズリ状の砂粒の移動もみられる。 | C－b |
| | 2031 | 口径(19.2) | | | C－b<br>SX01-36 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | SX01-56 |
| 甕 B | 2032 | 口径(23.4) | 口縁部は大きく外反し、端部は中央に鋭い稜を有して上下に拡張する。 | 口縁部と体部との接合部分は回転を利用しないナデが施される。口頸部から体部にかけて縦位の平行叩き痕が残る。体部内面には当て具痕があるが大半はすり消される。 | 赤紫色<br>SX01-36 |
| 壺 | 2033 | 口径(18.5) | 口縁部は大きく外反し、体部はほぼ球形を呈す。2033は口縁端部直下に細い隆起を作り出し二重口縁となる。2034は口縁端部下に明瞭な突帯を有する二重口縁となる。頸部にはいずれも細い突帯がめぐる。 | 体部はいずれも格子叩きで整形され、内面は同心円の当て具痕が認められるが、ていねいにナデ消される。 | A－a<br>SX01-53 |
| | 2034 | 口径(17.5) | | | C－b<br>SX01-38 |
| 杯蓋A 1 | 図57－2035 | 口径(11.6) | 口縁部はわずかに外開きし、端部は内傾する凹面を呈す。天井部と口縁部は鋭い稜によって界される。 | 天井部の2／3を時計回りにヘラケズリする。 | B－b<br>SX02 |
| 高杯蓋 | 2036 | | | 天井部は時計回りにヘラケズリする。 | A－b<br>SX02 |
| 甑把手 | 2037 | | 角状を呈する甑把手。中央に貫通する溝状の切込みがある。 | | D－b<br>SX02 |
| 高杯 D | 2038 | 口径20.6<br>器高13.3<br>底径12.9 | 杯部は中位から段をもって外反し口縁端部は外傾する面をなす。脚部は大きく開き、端部は凹面となる。脚部に幅広い方形のスカシを四方に穿つ。 | 全面をロクロナデ調整する。スカシは外面を広く面取りする。<br>杯部内面に緑色の自然釉。 | B－a<br>SX02 |
| 壺 | 2039 | 口径　17.4<br>最大径27.2<br>器高　25.4 | 最大形が体部上半にあり、底部は平底状になる。頸部に断面三角形の突帯をめぐらせ、口縁部は段をもって立ち上がる。 | 底部から体部中位にかけて格子叩き。内面には同心円の当て具痕が残るが、内面はすり消される。 | B－a<br>SX02 |
| 壺 | 2040 | 口径(15.6) | 体部は球形を呈し、頸部に細い突帯がめぐる。口縁部は突線によって頸部と区画され、端部は丸くおわる。 | 体部は細かい格子叩き整形の後、回転のナデ調整である。内面はナデ調整。叩きの原体は器台2024の叩きと近似する。 | C－b<br>SX02 |
| 甕A | 2041 | 口径(17.2) | 直立ぎみの頸部から口縁部は短く立ち上がる。断面三角形の突体によって口縁部と頸部が画される。 | 体部には格子叩きの後、カキ目調整される。 | C－b<br>SX02 |
| 甕C | 2042 | 口径(20.0) | 口縁部が大きく外弯し、端部 | 体部に縦位の縄蓆文叩きを施 | C－a |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| | | | は上下に肥厚して凹面を呈す。器壁は薄い。体部が長胴形を呈すると考えられる。 | す。内面は当て具痕をすり消す。 | SX02 |
| 杯身Ａ２ | 図58－2043 | 口径10.2<br>器高 5.0 | 立ち上がりは内傾し、端部は内傾する段をなす。体部は深く平坦である。 | 体部の約１／２を時計回りにヘラケズリする。底部内面に不連続のナデをおこなう。 | Ａ－ａ<br>Ｍ５区 |
| | 2044 | 口径(10.9) | 立ち上がりは直立に近く、端部は内傾する段をなす。受部は横方向にのびる。体部は浅く平坦。 | 体部１／２をヘラケズリし、他はロクロナデ調整。 | Ａ－ａ<br>Ｍ５区 |
| | 2045 | 口径(10.8) | 立ち上がりはわずかに内傾し端部は段をなす。体部は深く丸みをもつ。 | 体部２／３を時計回りにヘラケズリ。 | Ａ－ａ<br>Ｍ５区 |
| 杯蓋Ａ１ | 2046 | 口径(12.2)<br>器高( 4.1) | 口縁部がわずかに開く。2046は端部が面をもち、2047は凹面を呈す。天井部と口縁部は鋭い稜で界される。 | 天井部４／５を時計回りにヘラケズリする。 | Ｂ－ａ<br>Ｍ５区 |
| | 2047 | 口径(12.9)<br>器高( 4.4) | | | Ａ－ａ<br>Ｍ５区 |
| 高杯蓋 | 2048 | | 天井部に高いツマミをもつ。天井部と口縁部を界する稜線は丸みをもつ。 | 天井部約１／２をヘラケズリする。天井部内面に不連続ナデを施す。 | Ｂ－ａ<br>Ｍ５区 |
| 甕Ｂ | 2049 | 口径(18.7) | 口縁は外反し、端部は下方に拡張される。口縁直下に低い突帯がめぐる。 | 頸部はカキ目調整。 | Ａ－ａ<br>Ｍ５区 |
| | 2050 | 口径　11.3<br>最大径15.1<br>器高　14.3 | 口縁部は直線的に外反し、端部は上下に拡張される。最大径は体部上位にあり、底部は尖りぎみの丸底である。 | 体部上半はカキ目調整され、下半は格子叩き痕を残す。瓦質に近い。 | Ｃ－ｂ<br>Ｍ５区 |
| 杯身Ｂ | 2051 | 口径(12.2)<br>器高( 3.9) | 立ち上がりは内傾して短く、端部は丸くおさめる。体部は立ち上がりに対して深い。 | 体底部の約１／２を手持ちのヘラケズリする。 | Ｃ－ｂ<br>Ａ４区 |
| 杯身Ａ１ | 2052 | 口径11.8<br>器高 5.2 | 立ち上がりは直立して高い。端部は内傾する凹面を呈し、受部は外上方にのび、丸くおさめる。 | 体底部の２／３を時計回りにヘラケズリ。 | Ｂ－ａ<br>SX02？ |
| 杯身Ａ２ | 2053 | 口径10.2<br>器高 4.7 | 立ち上がりはわずかに内傾し内端面に凹線がめぐる。体部は受部内面でつよく屈曲する。 | 体底部の１／２を逆時計回りにヘラケズリ。内底面は不連続のナデ。 | Ｂ－ａ<br>Ｋ８区 |
| 杯身Ａ３ | 2054 | 口径10.8<br>器高 5.2 | 立ち上がりは内傾し、端部は単純に丸くおわる。 | 体底部全面に逆時計回りのヘラケズリ。 | Ａ－ａ<br>SX02？ |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 杯身Ａ３ | 2055 | 口径13.6<br>器高 4.7 | 立ち上がりは内傾し低く、体部は浅い。 | 底部内面に同心円の叩き痕を残す。体底部１／３をヘラケズリ。 | Ａ－a<br>SX０２付近 |
| 杯蓋Ａ２ | 2056 | 口径12.4<br>器高 4.7 | 口縁部は垂下し、端部は内傾する鈍い段をなす。 | 天井部の約１／２を時計回りにヘラケズリする。 | Ｄ－b<br>SX01北 |
| 杯蓋Ａ１ | 2057 | 口径(12.3) | 口縁部はわずかに外開きし、端部は平坦面をなす。天井部と口縁部を界する稜線は鋭い。 | 天井部のほとんどをヘラケズリする。 | Ｂ－b<br>SX01 |
| 杯蓋Ａ２ | 2058 | 口径15.1<br>器高 4.6 | 天井部と口縁部を界する稜は明瞭だが、丸みをもつ。口縁部は若干外開きし、端部は内傾する鈍い段をなす。 | 天井部の４／５を逆時計回りにヘラケズリする。 | Ｃ－a<br>表採 |
| 高杯蓋 | 2059 | | 径3.6cmの偏平なツマミを有する。 | 天井部の１／３程度をヘラケズリ。 | Ｃ－b<br>Ｑ８区 |
| 高杯蓋 | 2060 | 口径(10.1) | 口縁部は鋭い稜によって天井部と界され、外開きする。端部は平坦面をなす。天井部は高く、中央にツマミを有すると考えられる。 | ロクロナデ調整。 | Ｂ－a<br>表採 |
| 高杯Ａ | 2061 | 口径10.7 | 立ち上がりはわずかに内傾して上部で若干内弯する。端部は内傾する面をなす。 | 杯部体底部２／３をヘラケズリする。底部内面は円弧状の叩き整形がみられ、それを消すようにナデ調整される。 | Ａ－a<br>Ｃ２区 |
| 高杯脚 | 2062 | 底径( 8.9) | 脚部は八の字状に開き、端部は明瞭な稜線をもつ2062･2063と鈍い稜の2064にわかれる。いずれも長方形の三方スカシである。 | ロクロナデの後、カキ目調整する。2064はカキ目の単位が細かく、2062・2063は粗い。 | Ｃ－a<br>表採 |
| | 2063 | 底径( 9.0) | | | Ｂ－a<br>Ｋ２区 |
| | 2064 | 底径( 9.7) | | | Ｃ－b<br>Ｑ８区 |
| 高杯脚 | 2065 | 底径(11.8) | 八の字状に開く脚部。端部は丸く肥厚する。 | ロクロナデ調整。 | Ｃ－a<br>不明 |
| 大型甕 | 2066 | | 肩部上位に２本の沈線に挟まれた列点文を施す。 | ロクロナデ調整。 | Ａ－a<br>表採 |
| 把手付椀 | 2067 | | 断面円形の椀把手。 | | Ｃ－a<br>表採 |
| 甕 | 2068 | | 口縁部直下に断面三角形の突帯を貼付けた甕口縁部。 | | Ａ－a<br>表採 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 甕 | 2069 | 口径(11.4) | 口縁部は内弯し、端部は内傾する凹面を呈す。口縁部と頸部に波状文を施す。 | | D－b<br>Q８区 |
| 器台 | 2070 | 底径(32.6) | 脚部は大きく開き、下端で角度を変えて開く。 | ロクロナデ調整。 | B－a<br>SX01？ |
| 甕B | 2071 | 口径(18.2) | 口縁部は大きく外反し、端部は上下に拡張される。 | 2071は厚い自然釉がかかり、2072は体部外面を縦位に平行叩きをおこない、内面には同心円の当て具痕を残す。体部内面はナデ上げによって当て具痕を消す。 | A－a<br>Q８区 |
| | 2072 | 口径(20.9) | | | A－a<br>SX01北 |
| 把手付椀 | 図59－2073 | | 口縁部は丸くおわり、把手は幅広い板状である。波状文は口縁部と体部中位に施されるが、把手の貼付は施文後である。 | ロクロナデされるが、把手部分の内面は接合時のオサエ痕を残す。 | B－a<br>SX02 |

| 図版番号 | 叩きの特徴 | 備考 |
|---|---|---|
| 図59 － 2074 | 縦位の縄蓆文叩きである。叩きは深い。縄蓆文叩きの後、横方向の沈線がめぐる。沈線の幅は1.4cm間隔である。内面は横方向にナデ調整される。 | B－a<br>表採 |
| 2075 | 2074と同一個体の可能性もある。外面の沈線は間隔が一定でなく、単位も異なる。内面には板状の工具でナデた痕跡がある。 | A－a<br>表採 |
| 2076 | 外面は細かい格子叩き3.5／cmで、横方向にナデ状の凹線がはいる。内面はナデ調整。 | C－a<br>K４区 |
| 2077 | 外面は格子様の叩きであるが、明瞭な隆起とそれに直交する階段状の隆起が認められる。柾目に直交して溝が彫られた叩き板による叩き痕であることが想定できる。格子叩きとは区別する。 | A－a<br>L７区 |
| 2078 | 外面は格子叩き3.5／cmで、２条の凹線がみられる。内面は縦方向にナデが認められる。軟質の焼き上がりである。 | A－b<br>L７区 |
| 2079 | 右上がりの縄蓆文を残す破片である。2074・2075に比較して、縄目の痕跡がよく残る。 | C－a<br>SX01-37 |
| 2080 | 高杯体部の格子叩きである。叩き痕の上をカキ目調整する。叩きの単位は３／cmである。 | B－a<br>SX01-68 |
| 2014 | 高杯2014体部の格子叩き。叩き痕の上をカキ目調整する。 | B－a<br>SX01 |
| 2039 | SX02出土の壺2039体部の格子叩きである。叩きは斜格子である。叩きの上から | B－a |

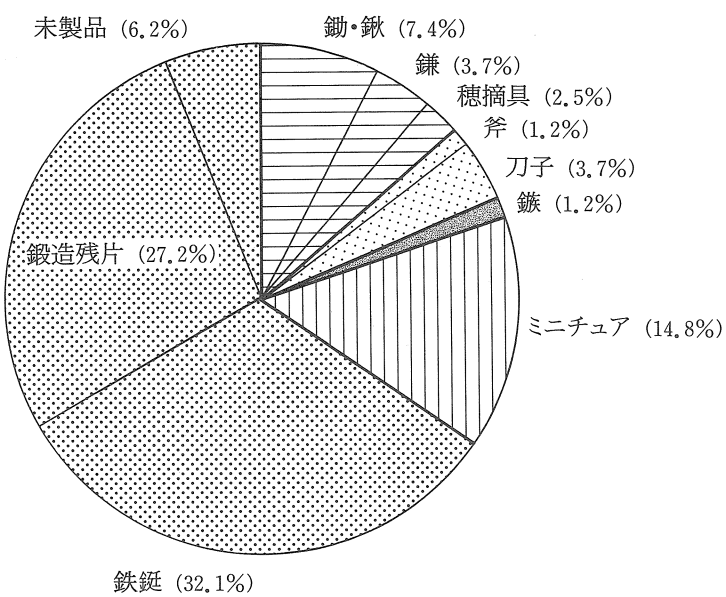
| | | |
|---|---|---|
| | カキ目調整をおこない叩きを消す部分がある。叩きの大きさは4×4㎜。 | SX02 |
| 2081 | 格子叩きの上をカキ目調整した甕の破片と思われる。 | SX01？ |
| 2082 | 甕A類の体部破片と考えられる。格子叩きの後、カキ目調整する。 | B－a<br>SX01 |
| 2083 | 甕の破片。叩きは長方形を呈する格子叩きで、大きさは6×2㎜である。 | 不明 |
| 2084 | 甕の格子叩きである。単位は3／㎝。 | SX01-73 |
| 2040 | 壺2040の格子叩き。叩きをナデによって消す。叩きは斜格子を呈し、3×2㎜と細かい。内面はていねいにナデ調整する。 | C－b<br>SX02 |

## 4．鉄　製　品

### A　構成と分布

鉄製品は、出土破片総数321点(約2.25kg）中、種類の判別可能な資料から分析すると、農具（鋤鍬６，鎌３，穂摘具２)、工具（斧１，刀子３)、武器（鏃１)、祭具（ミニチュア斧形11，ミニチュア鉾形１？)、素材（鉄鋌26)、鍛冶関連（残片22，加工片５）の計81点からなる。この数は破片も含めているため実数は変動するが、傾向として、鉄素材・鍛冶関連資料（66.5%）が多く、次いで祭具（14.8%)、農具（13.6%)、工具（4.9%)、武器（1.2%）類の順である。

表８　鉄製品の器種組成




出土遺構別に見ると、ほとんどがSX01出土で、SX03から鋤・鍬(4003)１点のみである。SX01における出土分布については、SX01の南西部で、他の遺物も集中する65，74，75地点周辺に集中している。

以下、各種の鉄製品を順次観察するが、錆化の進行した状態下での肉眼観察であり、製作痕跡（切断・鍛打・鍛接）の詳細や、各部の計測値については原況と幾分異なっているかも知れないことを断っておきたい。

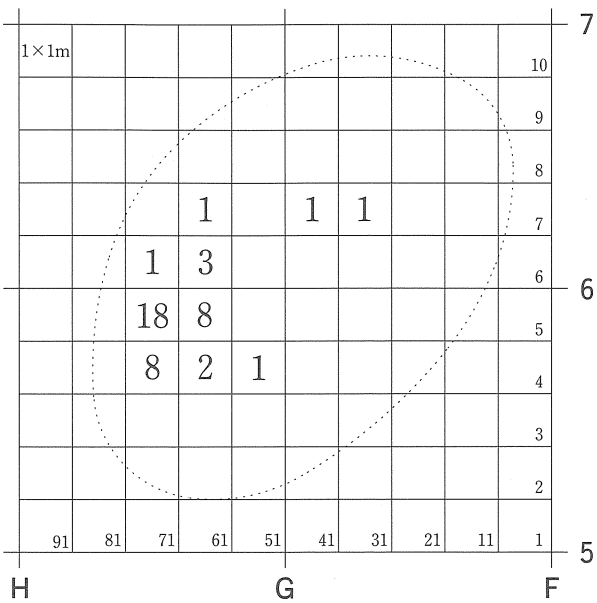



図60　SX01出土の鉄製品分布

## B 農　　具

### a 鍬・鋤

4001は鍛造による３本歯の又鍬で、左歯の中途を欠失しているがほぼ完存品である。形態的には「備中鍬」に近似し、鍬身が一体成形である。着柄部は、断面「C」字形に巻き込まれている。着柄部は、長さ6.5cm、内長径3.0cm、内短径2.5cmを測るが、奥になるほど僅かにすぼまっており、着柄孔は中歯の頭頂をかすめて貫通している。３本の歯は、上部からみると右歯が着柄部に対してほぼ直角に曲げられるのに対して、左歯は緩やかに曲げられ、結果的に歯の並びは右に約10度程偏している。歯を正面から見ると、ほぼ同長の歯が平行して垂直に下っている。側面から見ると、着柄部に対して約80度の角度で歯は設けられているが、中歯がやや迫り出し気味となっている。歯の断面は、遺存良好な右歯で、幅広の長方形(1.0×1.5cm～0.8×1.0cm）であり、先端ほど細くなっている。なお､3本歯は、幅12.7cm、長さ13.8cmである。

4002～4006は、鍬鋤の刃先とその部分であり、５点以上が存在する。形態的には､「凹」字形（4002）と､「U」字形（4003～4006）の２類に大別される。

凹字形：4002は、刃先が短く先端は直線的で、刃先から直角に立ち上がる側縁部の方が幅広となっている。刃先の断面形はほぼ「V」字形である。サイズは復元推定値で、幅約9.8cm前後と小型である。

U字形：4003は刃先が短く先端が僅かに直線気味で、長さ6.5cm、推定幅10.8cmである。刃の断面は背面が極端に広いが表面は狭く、着柄溝は浅い。また、短い側縁端部の背面には段が設けられており、刃先の断面と側縁端部の形態が特徴的である。

4004～4006は側縁部片であり、いずれも断面「V」字形ないし「Y」字形を呈している。なお、遺存する側縁幅から4004は大型品、4006は中型品、4005は小型品と思われる。

### b 鎌

4007～4009はいずれも中・小型の曲刃鎌で、遺存良好な4007と4008では、先端部と着柄部の形態に変化がある。

4007は、背部先端が強く湾曲するもので、着柄部端は背から見て右側に、幅全体を折り曲げている。全長13.6cm、折り曲げ部長0.7cm、着柄部幅2.4cm、刃部幅2.5cm、刃部厚0.4cm、重量59.1gを測る。刃部の使用による損耗等は目立たず、着柄端部付近に木質等の錆着は確認できない。

4008は､背部先端が緩やかに湾曲するもので､着柄部端は背から見て左側に､折り曲げている。全長13.2cm､折り曲げ部長0.5cm､着柄部幅2.7cm､刃部幅1.6cm､刃部厚0.5cm､重量35.9gを測る。刃部は先端から１/３着柄部寄りを中心に使用による損耗が著しい。着柄部端から約2.2cmの範囲に､微かではあるが木質の錆着が認められ､細手の柄が装着されていたと考えられる。

4009は刃部先端付近の破片である。刃幅1.8cm、同厚0.2cmであり、小型品と考えられる。

c　穂摘具

4010は、いわゆる「手鎌」と呼ばれる穂摘具のほぼ完存品である。両端は短く折り曲げられ、握りとなる台木の挿入部が造られている。また、挿入部の内側には横方向の木目が錆着しており、柾目材の台木が横方向に装着されていたことがわかる。なお各部の計測値は、幅8.2cm・折曲部長1.8～2.0cm、刃部幅1.3～1.6cm、刃部厚0.3cm、重量16.4gを測る。

4011は、4010と同巧の穂摘具と考えられるが、折曲部長0.9cm、刃部幅2.1cm、刃部厚0.5cmを測り、やや大振りである。

C　工　　具

a　鉄　斧

4012は、本遺跡出土の鉄器中唯一の鋳造品である。4012は有袋鉄斧の着柄部に近い胴部片で、断面は台形を呈している。遺存が悪く、全体の形態・法量等は不明であるが、胴部幅は約4.0～5.0cm前後を辛うじて計測できる。

b　刀　子

4013～4015は刀子である。4013は刀子の完存品で、全長7.2cm、刃部長3.1cm、刃部幅6.5～1.2cm、着柄部長4.1cm、同径0.3×1.0cm、重量7.2gと小型である。かなり使い込まれ、刃部は「研ぎ減り」で細っており、刀区は痕跡的な遺存である。

4014は、刃部先端や着柄部端を欠損する。4013同様「研ぎ減り」が著しく、刃部幅0.5～1.4cm、同厚さ0.4～0.6cm、着柄部径0.4×1.0cmである。

4015は、刃部と着柄部の境となる刀区が刃部側に明瞭に造られている。サイズは、刃基部幅が1.5cm、着柄部径0.6×1.2cmを測る。

なお、すべて刀子の着柄部に木質が遺存ないし錆着しているが、4013では、刀区まで届かない、中途半端な着柄となっている。

D　武　　器

a　鉄　鏃

4016は、尖根式鉄鏃で、断面凸レンズ形の鏃身部はかえりを有し、篦被部の断面は長方形である。全長11.0cm、鏃身部長2.6cm、同幅1.1cm、同厚さ0.4cm、篦被～着柄部長8.4cm、同径0.4～0.6cmである。なお、篦被部と着柄部の境は明瞭ではない。

E　祭　　具（ミニチュア）

a　斧　形

4018～4028はいずれも有袋鉄斧の模造品である。

4018は、刃部下半のみの遺存で、分類上、穂摘具と迷った資料であるが、穂摘具と認定す

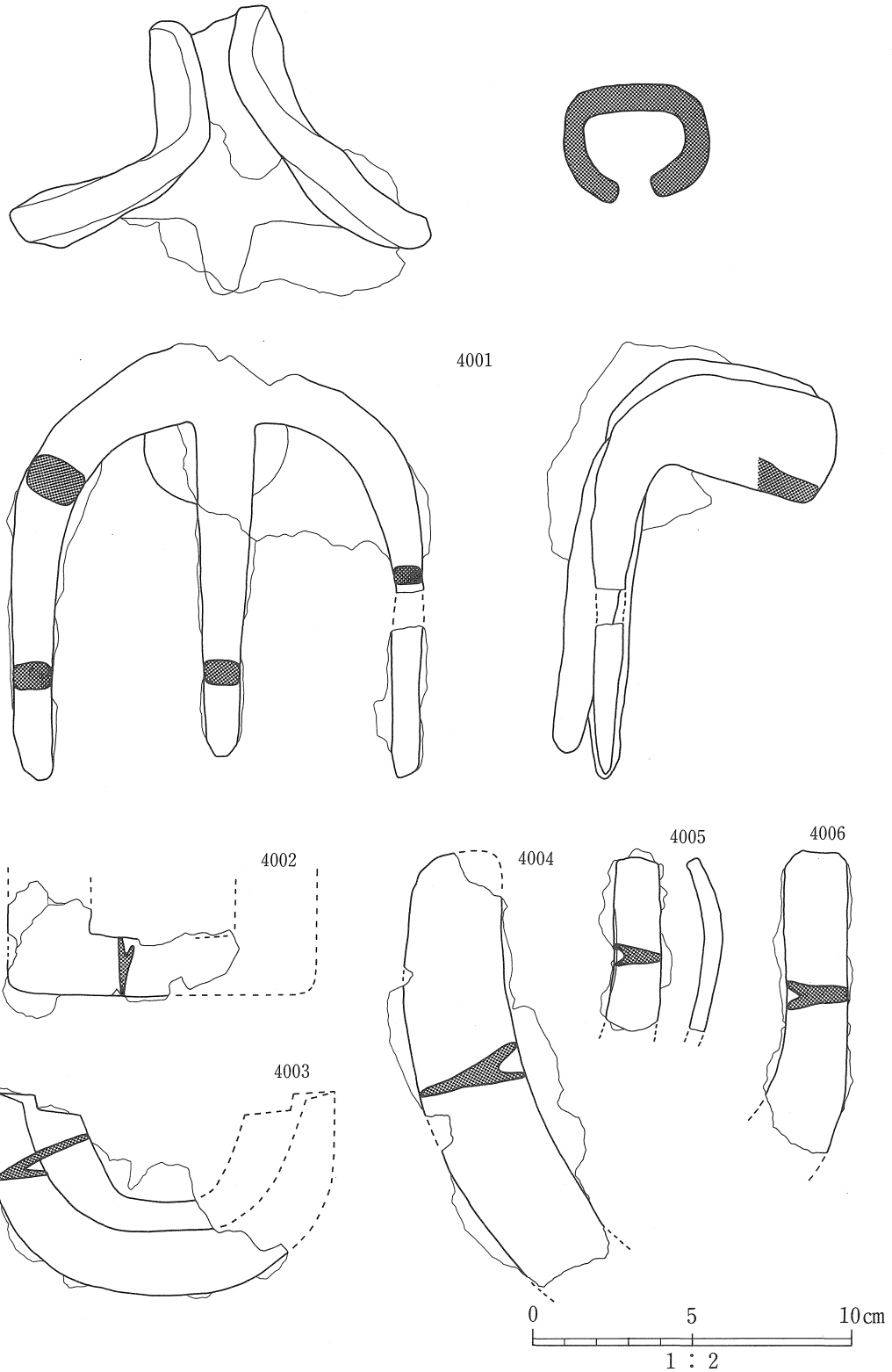



図61　鉄製品(1)

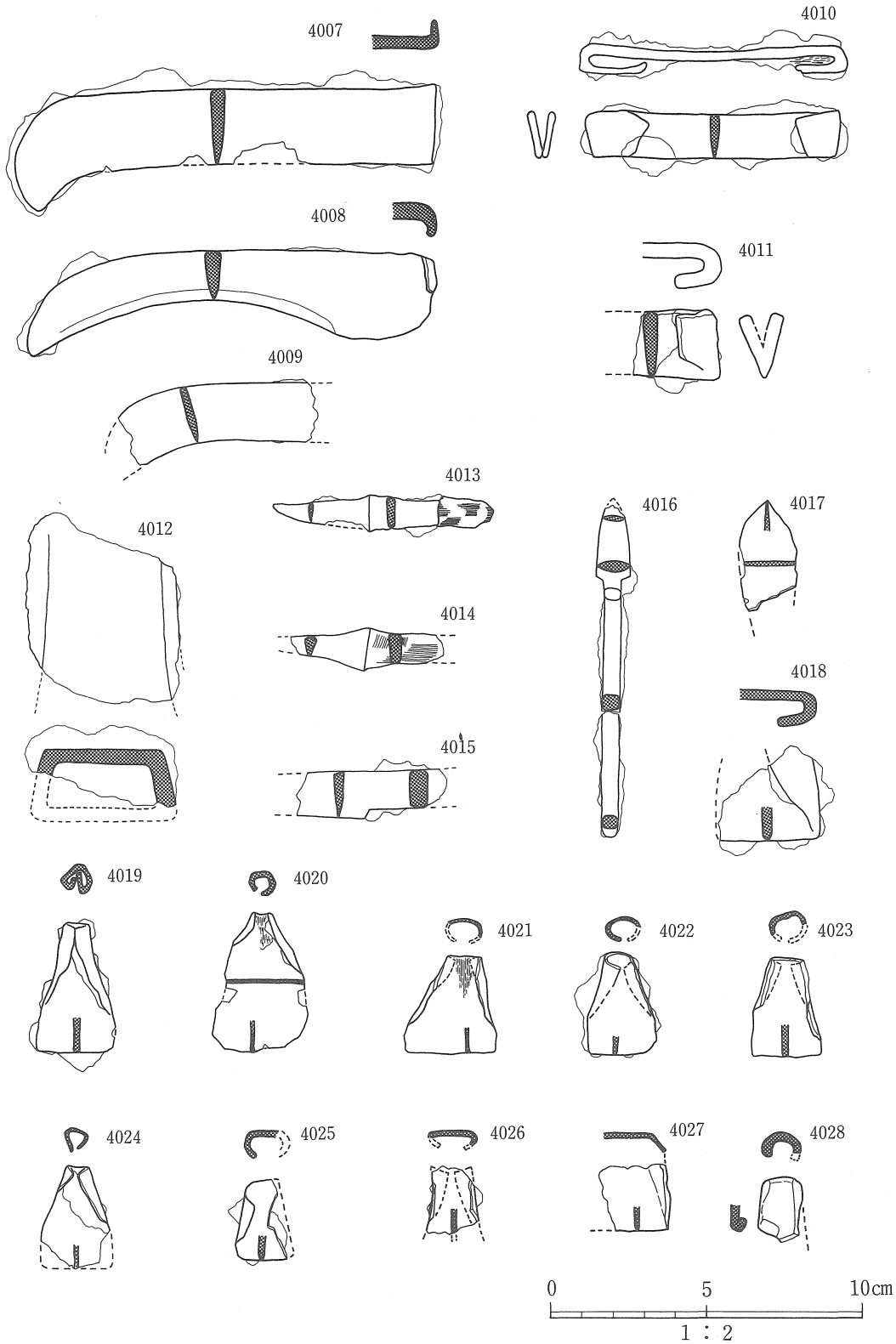

4007
4008
4009
4010
4011
4012
4013
4014
4015
4016
4017
4018
4019
4020
4021
4022
4023
4024
4025
4026
4027
4028
0
5
10cm
1 : 2

図62　鉄製品(2)

るには刃幅が広すぎることなどから、肉厚ながらミニチュアに分類しておく。

4019～4028は、厚さ1.0～2.0㎜薄い長方形ないし方形の鉄板の一辺を折り曲げて、着柄部を造る斧形である。

着柄部の折り曲げの断面形は歪なC字形が基本的であるが、極端に巻き込まれたもの（4019）や偏平なC字形のもの（4026）もある。刃部は、基本的には直線であるが、緩やかな弧を描くもの（4020）もある。サイズは、遺存の良好な4019～4023で、刃幅2.3～3.2cm、長さ3.2～4.5cmと小型である。なお、4020と4021の着柄部には木質が錆着しており、模造品ながら柄を実装していたものと考えられる。

4027と4028については、折り曲げの状態等から製品の欠損部位と考えるよりも未製品と考える方が妥当であろう。

b　鉾　形

4017は、先端と考えられる鋭角を挟む両辺に「切断痕」が観察され、薄く偏平である。欠損部近い両側は僅かにくびれ気味となっている。形態的にミニチュアの鉾形の先端部の欠損品である可能性がある。残存値で幅1.9cm、残長3.6cmである。

F　鉄　素　材

a　鉄　鋌

4029～4054は鍛冶素材となる鉄鋌であり、形態からA・Bの2類に大別される。

**鉄鋌A類**　形態的には、胴部より端部の幅が広いもの（4029～4039）で、端部の形態から、端部が撥形のもの（A1類：4034～4036）と、握り拳形のもの（A2類：4029～4033，4037～4039）に細別される。鉄鋌A類は、鍛打の反復で整形されているが、A1類は、入念な鍛打で側縁の均整を取るのに比べ、A2類は、周縁が大雑把な鍛打で整形されており、全体が不均整な仕上がりとなっている。A1類のサイズについては、好例に恵まれないが、最大幅と最小幅の指数が大きい。A2類のサイズは、唯一の完存資料である4029で、長さ15.2cm、最大幅2.8cm、最小幅1.8cm、厚さ0.3～0.5cmを測り、端部が最も厚く仕上げられている。4029以外に端部が厚手の資料は4031や4039である。こうした端部の肥厚は、4033の端部の「折り返し」などから類推して、折り返しと鍛打・鍛接の反復で製作されると考えられる。

参考までに、鉄鋌A類端部の資料から、最大幅とその厚さを計測すると、幅2.3～3.5cm、厚さ0.2～0.6cmである。また、最小幅とその厚さは、幅1.5～2.3cm、厚さ0.1～0.2cmである。

4049～4054は、鉄鋌の胴部片と考えられる資料である。側縁の均整な4052～4053はA1類、不均整な4049～4051はA2類、側縁幅の変化がない4054は後述する鉄鋌B類の胴部片である可能性が強い。サイズは最大幅1.2～2.5cm、最小幅1.4～2.5cm、厚さ0.1～0.3cmである。

**鉄鋌B類**　4040～4048が該当資料である。形態的には、胴部と端部の幅がほぼ等しく、ほとんどくびれない長方形が基本形であが、4042や4048のように端部の片側コーナーが切断に

よって欠落する例も含めている。鉄鋌B類の整形もA類と同様、反復鍛打による整形である。4040・4041の側縁は大雑把な鍛打で不均整であるが、4042～4048は丁寧な鍛打で均整な側縁をなしている。また、4044の端部小口や4046の端部側縁で、鍛打や切断時に生じると考えられる皺状の屈折が観察される。

鉄鋌B類に完存例はないが、サイズは最大幅1.5～3.2cm、最小幅1.3～2.7cm、残存長2.7～9.9cm、厚さ0.1～0.3cmを測り、鉄鋌A類と比較すると、①端部が薄い。②胴部幅が広い。などがあげられる。

なお、鉄鋌の出土総数については、ここに掲載したすべてが別個体とは考えられないが、少なくとも10枚以上が出土していると考えて間違いなかろう。

以上、鉄鋌にはA・B類の両者が存在するが、これが、①時期的変遷過程を反映するもの（鉄鋌A類から鉄鋌B類へと変化する。）か、あるいは、②鍛冶工程の中で生じる変化であるかが問題となる。鉄鋌自体が①の様に形態的変遷を辿るとするのが一般的な理解であるが、両者は同一出土地点に混在しており、時間差を認識できない。よって、A・B類の変化は、その形態やサイズを勘案して、鉄鋌B類は鉄鋌A類を鍛打によって加工した「鉄板」と考えるのが妥当であると思われる。後述する「鍛造残片」は、おもに鉄鋌A類から切断されたものが鍛造残片A類、鉄鋌B類から切断されたものがおもに鍛造残片B類と対応していると考えている。

つまり、鉄鋌A類から直接、鍛打や切断で鎌などを目指す工程と、鉄鋌A類から一旦薄手の鉄板である鉄鋌B類を鍛造したのち、穂摘具やミニチュア類などを目指す工程の2系統が存在すると思われる。

## G 鍛冶関連

### a 鍛造残片

4055～4076は、それ自体が定型化した鉄器ではなく、鍛冶工程で生じる屑鉄片と考えられるもので、おもに素材（鉄鋌など）からの「切断痕」（鏨状工具によると想定している。）や「捻れ」（切り放し最終時の折り曲げによるもの）が観察できる資料であり、いわゆる「鍛造残片」である。なお、鍛造残片は形態から大きくA・Bの2類に大別される。

**鍛造残片A類**　形態が概ね三角形を呈するもの（不等辺な直角三角形に近いものが多い。）で、4055～4067が該当資料である。長辺を挟む断面形は、両辺が片面から切断されたような台形をなしている。4056では十分な切断ができず、「捻り」が加えられて切り取られた痕跡が観察できる。各サイズは、長さ1.6～4.0cm、幅1.1～1.8cm、厚さ0.3～0.6cm、重量1.0～5.0gであり、大小のばらつきがあるが総じて厚手である。鍛造残片A類は、鉄鋌A・B類等の端部コーナーなどを切断した際に生じる破片と考えられる。なお、今回報告の鍛造残片A類は、厚さの点などからおもに鉄鋌A類から作出されたものが多いと考えられる。

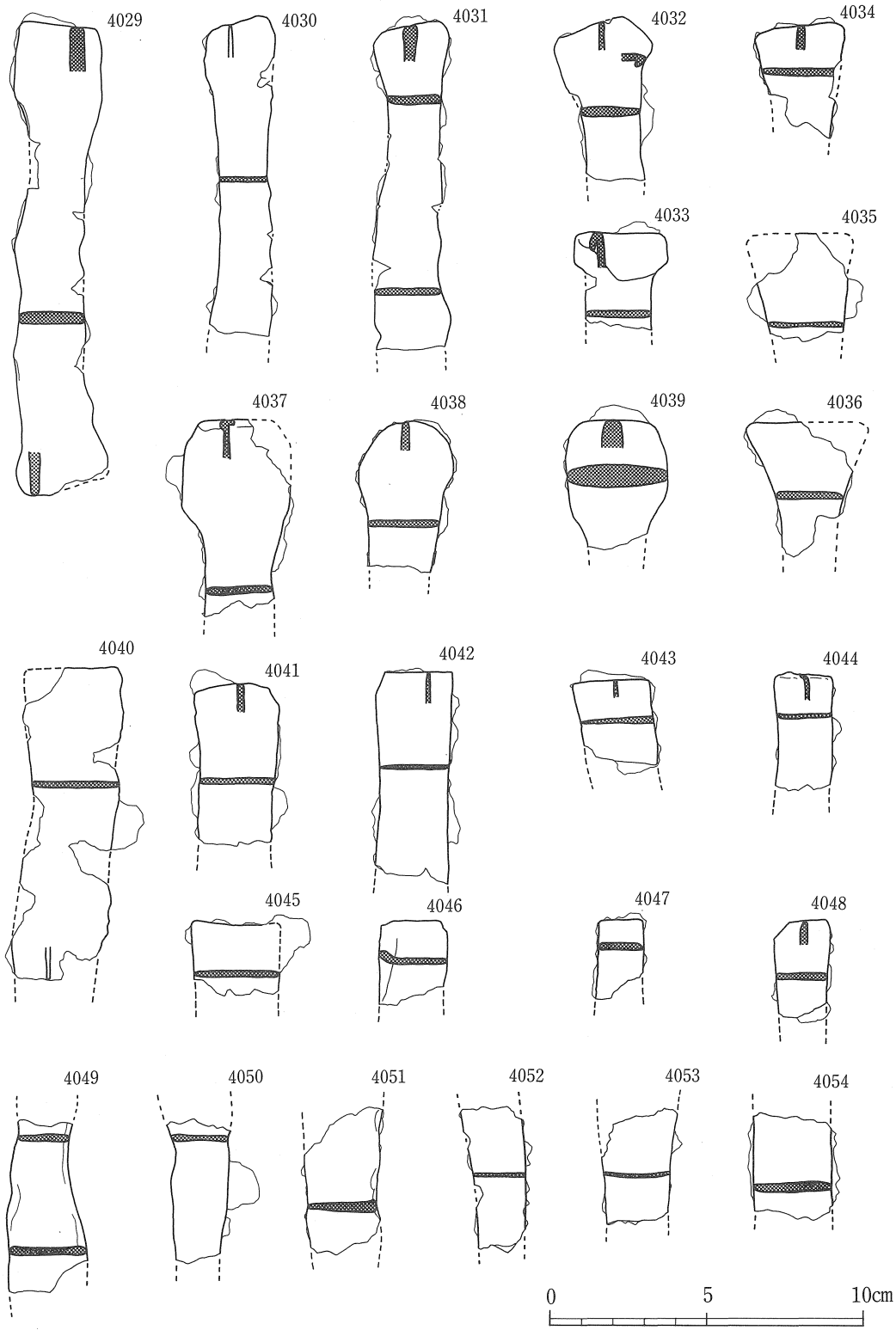

4029
4030
4031
4032
4034
4033
4035
4037
4038
4039
4036
4040
4041
4042
4043
4044
4045
4046
4047
4048
4049
4050
4051
4052
4053
4054
0
5
10cm
1 : 2

図63　鉄製品(3)

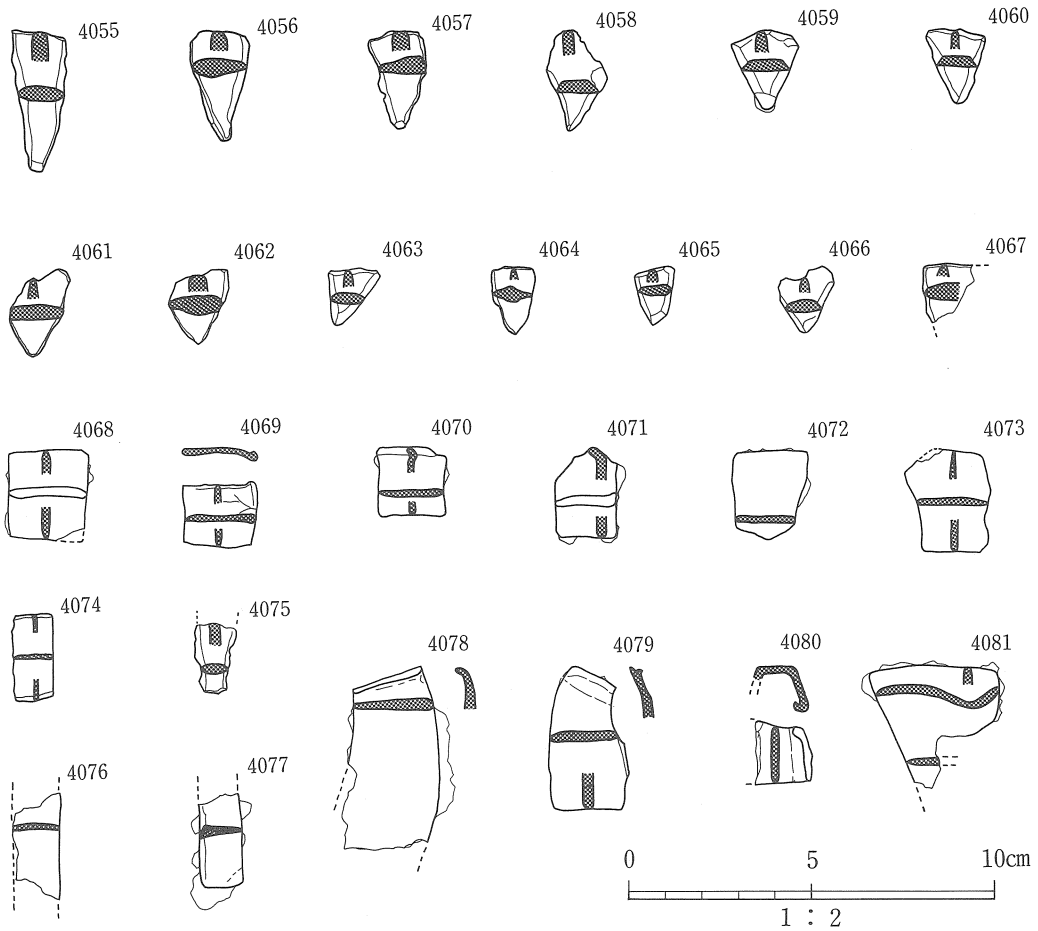



図64　鉄製品(4)

**鍛造残片Ｂ類**　形態が概ね方形ないし長方形を呈するもので、4068～4076が該当資料である。4069の一辺では「捻れ」と「切断痕」が、4070の一辺では「切断痕」と切り放し時の「折り曲げ」が比較的良好な状態で観察できる。各サイズは一辺1.1～2.5cm、厚さ0.1～0.3cm、重量1.5～4.8gである。鍛造残片Ｂ類は、鉄鋌Ａ・Ｂ類の端部もしくは胴部を切断した際に生じる破片と考えられる。なお、今回報告の鍛造残片Ｂ類は、薄手の例が多いことなどからおもに鉄鋌Ｂ類から作出された破片であると考えられる。

**b　鍛造未製品**

4077～4081は、「折り曲げ」・「切断」・「鍛打」を伴う鉄片であり、ここでは、「鍛造未製品」と呼称する。

4077は断面が二等辺三角形を呈し、幅1.2cm、厚さ0.4cmの刃部が造作されており、刀子の未製品と考えられる。

4078と4079は緩やかな弧を描く鉄片の片側端部を鍛打で折り曲げたものである。曲刃鎌の未製品の可能性がある。

4078は刃幅2.0～2.5cm、厚さ0.3cm、4079は刃幅1.7～2.2cm、厚さ0.3cmである。4080は、幅1.5～1.8cm、厚さ0.2cmの長方形の鉄板を鍛打によって「コ」字形に折り曲げたものであるが、何の製作を目指したかは不明である。

4081は、「L」字形の鉄片で、片側が鍛打によって大きく湾曲している。最大幅3.5cm、厚さ0.3cmを測る。製作目的は不明である。

c　鍛造鍛冶滓

今回図化した資料以外に鍛造鍛冶滓が数点含まれている。また整理中、SX01出土の石製模造品や玉類の分類に混じって、マッチ軸頭大の濃紫黒色ないし黒色を呈する粒が数点検出されている。この粒は、4074の表面などに付着している疣状の物質と同様の物であり、理科学分析を実施してはいないが、鍛造鍛冶工程で生じる遺物と思われる。

なお、これらの微細な遺物が直接、祭祀遺構に供献されたか否かは判然としない。

H　小　　結

a　鉄器製作の実施

出作遺跡（特にSX01）から出土した鉄製品は、実用品やミニチュアのみならず、鉄鋌や鍛造残片あるいは鍛造未製品といった鍛冶関連資料が多い。このことは、鍛冶具こそ出土していないが、鍛造による鉄器製作が極めて近隣で営まれていたことを示す資料であり、鍛冶滓と思われる微細粒の出土からも容認されよう。では、こうした鉄器製作は何処で実施されたのであろうか。再度、出作遺跡の遺構配置（図5）を概観しておきたい。まず調査区中央を東西に流走したのち北方向に屈折するSD01とSD02がある。これに取り囲まれたように主要祭祀遺構（SX01・SX03）、方形竪穴住居（SB01）が検出され、さらにSX01とSX03の間で多数の焚火跡が確認されていると言う。このSD01とSD02を自然流路ではなく部分的には人為的な溝と解釈し、住居跡の存在を重視すれば、調査区の北半は二重の方形溝によって区画された居住域である可能性がある。さて鉄器製作場所であるが、焚火跡の存在を注目したい。これらの焚火跡は堀り方を伴わず焼土と炭からなり、遺物の出土は報告されていないが、これを鉄器製作の「小鍛冶」[1]的遺構の一部とは考えられないだろうか。

このように見てくると、今回の調査したSD01とSD02に囲まれる範囲は方形溝で区画された居住域の西南部に相当し、そこが祭祀ゾーンであったと同時に鉄器製作（小鍛冶）ゾーンでもあったと考える事ができる。

b　鉄器製作の実態

出土鉄製品から、出作遺跡における「小鍛冶」行為を総括しておきたい。

**素　材**　鉄鋌A類の4029に見る結束痕などから、基本的には朝鮮半島から鉄鋌を獲得した

といった通説で理解しておきたい。ただ、SX01出土の三又鍬（4001）は、この時期の例としては少なく、一般的に使用された農具とは考えにくい。また諸特徴から朝鮮半島製であると考えられ、あるいは原料として半島から搬入された可能性も考えられよう。

**製　作**　鉄鋌A類から即、鍛打（鉄槌？）と切断（鏨？）で曲刃鎌などが製作される工程（工程II）と、鉄鋌A類を鍛打で偏平化し、薄い鉄板素材を作成した後、穂摘具や刀子・ミニチュアなどを製作する工程（工程II）の2系統の工程が存在すると考えられる。なお、工程Iで生じる屑鉄片の多くが鍛造残片A類であり、工程IIで生じる多くが鍛造残片B類と考えられる。

**製　品**　製品はいずれも鍛造品で、実用具は、鋤・鍬，鎌，穂摘具，刀子，鏃であり農工具が主体で、祭具はミニチュアの斧形を主体に鉾形？などの言うなれば「鉄製模造品」で構成されている。なお、鉄鋌自体の製作については、断定材料がないが、先に素材の項で述べたように半島製品から製作された可能性を完全には否定できない。

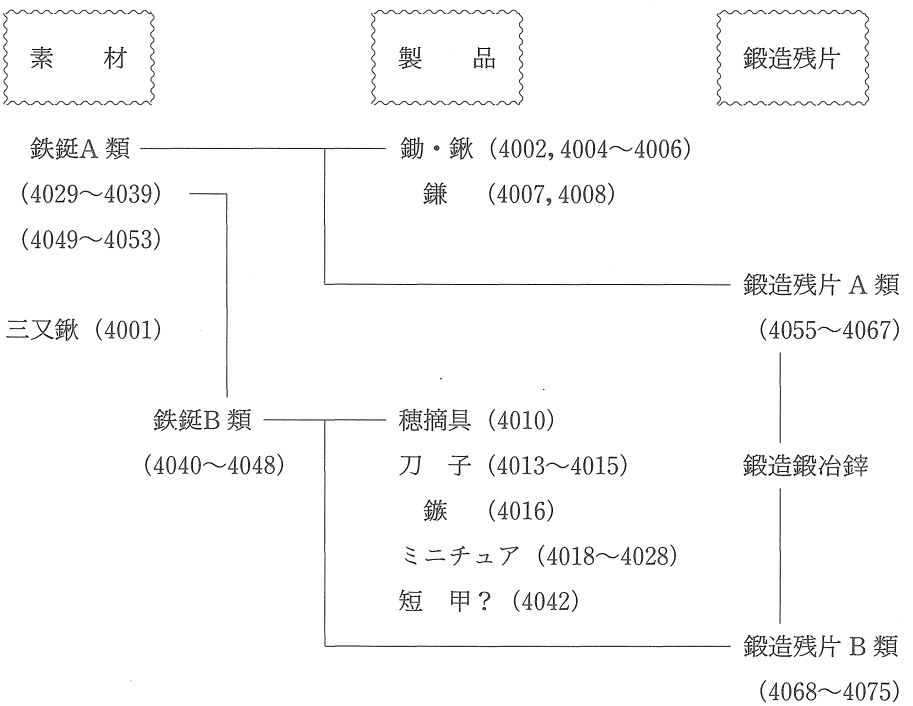



図65　出作遺跡における鍛造鍛冶工程概念

### c　出作遺跡と鍛冶集団

こうした鉄製品のあり方は、出作遺跡を構造的に理解する上で重要である。特に鉄器組成の点であるが、三又鍬や鋳造斧などの農工具類は、朝鮮半島南部から西日本における古墳時代前半期の有力古墳に散見する副葬品である。[②]また、鉄製模造品類（斧形や鉇形？）や鉄鋌は、福岡県沖ノ島[③]や本県魚島の大木遺跡[④]など海上交通の要衝に占地する祭祀遺跡から出土する希少例である。いずれもかなり広域な勢力範囲を掌握する有力首長層が保有した（生前・死後を問わず）遺物である。このことは出作遺跡における祭祀行為が、当地の広域首長層によって挙行され、同時にその下階層に直属の鍛冶集団が存在・関与していたことを示唆するものである。そしてこの鍛冶集団は、朝鮮半島と直接の関連を示す三又鍬や鋳造斧の存在から「渡来系」の集団であったと考えられる。

このように出作遺跡経営の階層構造を理解すると、伊予市の南部丘陵に占地する「伊予グループ」[⑤]と呼ばれる首長墓系列と、豊富な鉄器と鍛冶具（鑿、鉗子など）を保有する鍛冶集団の墓と考えられる猪ノ窪古墳[⑥]（円墳：約18m，箱式石棺）と関係が改めて注目される。

いずれにしても出作遺跡出土の鉄製品資料は、松山平野における古墳時代中期の手工業の分業形態を知る好資料であると同時に、日本における鉄器生産に貴重な資料を提示した。しかもそれは特異ではあるが祭祀といった消費形態を示した希有な例でもあり注目される。

〔谷若〕

**註**

① 大澤正己「古墳出土鉄鋌からみた古代製鉄」『日本製鉄史論集』1983.

② 東　潮「朝鮮三国時代の農耕」『橿原考古学研究所論集』第4冊1979.

③ 宗像神社復興期成会編『沖ノ島』1958.　宗像神社復興期成会編『続沖ノ島』1961.
第三次沖ノ島学術調査隊編『宗像沖ノ島』1979.

④ 長井数秋「愛媛県魚島の遺跡・遺物について」『ソーシアル・リサーチ』第4号　1975.

⑤ 相田則美「4・5世紀伊予の首長墓」『「社会科」学研究』　第1号　1980.
相田則美「古墳時代前期の松山平野（上）（下）」『伊予史談』257，259号　伊予史談会　1985.
谷若倫郎『上三谷古墳群II』愛媛県埋蔵文化財調査センター1988.
古墳時代全期を通して「伊予グループ」は、嶺昌寺古墳→吹上ノ森1号墳→吹上ノ森2号墳→桜山古墳→客池古墳→遊塚古墳→上三谷2号墳→塩塚古墳といった一連の首長墓系列となる。

⑥ 長井数秋『猪の窪古墳』伊予市教育委員会1981.

【付記】

本稿脱稿後、東　潮氏のご高配で、鉄製品類のレントゲン写真を見る機会を得た。その結果、筆者の実測図には錆化のために、いくつかの誤認があることが明らかとなった。その点については、東氏の実測図（図85～86）やレントゲン写真（図版78～79）を参照されたい。

この中で注目すべきは、鉄鋌B類（4042）に施される穿孔（径4㎜）が2箇所確認（図版79）され、形態・サイズ的に短甲（横矧板系？）パーツの未製品の可能性があることである。このことについては、その当否を巡って慎重な検討を要するが、出作遺跡の性格理解に重要な提言をなすものとして重視しておきたい。

表9　　出作遺跡出土の鉄製品一覧

| 番号 | 出土地点 | 種類 | 器種 | 型式 | 長さ | 幅 | 厚さ | 重さ | 諸特徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 4001 | SX01 | 農具 | 鍬 | 三又 | 13.8 | 12.7 | 7.5 | 373.5 | |
| 4002 | SX01 | 農具 | 鋤・鍬 | 凹字 | 3.5 | 9.8 | 0.5 | 18.1 | |
| 4003 | SX03 | 農具 | 鋤・鍬 | U字 | 6.5 | 10.8 | 0.8 | 56.3 | |
| 4004 | SX01－75 | 農具 | 鋤・鍬 | U字 | 13.5 | 2.9～3.3 | 0.6～1.0 | 111.6 | |
| 4005 | SX01－65 | 農具 | 鋤・鍬 | U字 | 5.4 | 1.5 | 0.7 | 19.2 | |
| 4006 | SX01－76 | 農具 | 鋤・鍬 | U字 | 9.4 | 2.0～2.5 | 0.5～0.9 | 32.7 | |
| 4007 | SX01－64 | 農具 | 鎌 | 曲刃 | 13.6 | 2.5 | 0.4 | 59.1 | 着柄部右曲げ. |
| 4008 | SX01－75 | 農具 | 鎌 | 曲刃 | 13.2 | 1.6～2.7 | 0.3～0.5 | 35.9 | 着柄部左曲げ，着柄痕 |
| 4009 | SX01－75 | 農具 | 鎌 | 曲刃 | 6.5 | 1.8 | 0.2 | 11.0 | |
| 4010 | SX01 | 農具 | 穂摘具 | 小型 | 8.2 | 1.3～1.6 | 0.2～1.1 | 16.4 | 台木着装痕. |
| 4011 | SX01－74 | 農具 | 穂摘具 | 大型 | 2.1 | 2.8 | 0.3～1.4 | 10.8 | |
| 4012 | SX01－75 | 工具 | 斧 | 有袋 | 6.1～ | 4.0～5.0 | 0.4～2.6 | 59.5 | 鋳造. |
| 4013 | SX01 | 工具 | 刀子 | 小型 | 7.2 | 0.5～1.2 | 0.2～0.3 | 7.2 | 研ぎ減り，着柄痕. |
| 4014 | SX01－75 | 工具 | 刀子 | 小型 | 5.0～ | 0.5～1.4 | 0.4～0.6 | 5.2 | 研ぎ減り. |
| 4015 | SX01－74 | 工具 | 刀子 | 中型 | 4.8～ | 1.2～1.5 | 0.3～0.6 | 10.0 | |
| 4016 | SX01－54 | 武器 | 鏃 | 尖根 | 11.0 | 0.6～1.1 | 0.2～0.5 | 9.1 | |
| 4017 | SX01 | 祭具 | ミニチュア | 鉾形 | 3.6～ | 1.9 | 0.2 | 3.5 | |
| 4018 | SX01 | 祭具 | ミニチュア | 斧形 | 3.1～ | 3.2 | 1.1 | 13.3 | やや大振り. |
| 4019 | SX01 | 祭具 | ミニチュア | 斧形 | 4.2 | 0.8～2.5 | 0.2～1.0 | 10.2 | |
| 4020 | SX01－64 | 祭具 | ミニチュア | 斧形 | 4.5 | 0.7～3.2 | 0.1～0.9 | 7.5 | 着柄痕. |
| 4021 | SX01 | 祭具 | ミニチュア | 斧形 | 3.2 | 1.1～2.5 | 0.1～1.0 | 4.1 | 着柄痕. |
| 4022 | SX01－75 | 祭具 | ミニチュア | 斧形 | 3.3 | 0.9～2.3 | 0.2～1.1 | 9.0 | |
| 4023 | SX01－75 | 祭具 | ミニチュア | 斧形 | 3.2 | 2.3 | 0.2～0.8 | 4.9 | |
| 4024 | SX01－75 | 祭具 | ミニチュア | 斧形 | 3.3 | 2.2 | 0.1～0.8 | 4.4 | |
| 4025 | SX01 | 祭具 | ミニチュア | 斧形 | 2.6 | 1.7 | 0.2～1.0 | 3.8 | |
| 4026 | SX01－65 | 祭具 | ミニチュア | 斧形 | 2.3～ | 1.3～1.7 | 0.2～0.5 | 1.7 | |
| 4027 | SX01 | 祭具 | ミニチュア | 斧形 | 2.2～ | 2.3～ | 0.1 | 2.5 | 未製品？ |
| 4028 | SX01－75 | 祭具 | ミニチュア | 斧形 | 2.1～ | 1.4 | 0.3～0.9 | 2.1 | 未製品？ |
| 4029 | SX01－47 | 素材 | 鉄鋌 | A2 | 15.2 | 1.8～2.8 | 0.3～0.5 | 39.1 | 完存，結束痕. |
| 4030 | SX01－65 | 素材 | 鉄鋌 | A2 | 10.3～ | 1.5～2.3 | 0.2～0.3 | 10.7 | |
| 4031 | SX01 | 素材 | 鉄鋌 | A2 | 10.6～ | 1.6～2.4 | 0.2～0.5 | 21.1 | |
| 4032 | SX01 | 素材 | 鉄鋌 | A2 | 5.2～ | 1.8～3.2 | 0.1～0.3 | 13.0 | |
| 4033 | SX01－66 | 素材 | 鉄鋌 | A2 | 3.1～ | 2.1～3.0 | 0.2～0.5 | 3.5 | 端部折返し. |
| 4034 | SX01－67 | 素材 | 鉄鋌 | A1 | 3.7～ | 2.9 | 0.3 | 6.7 | |
| 4035 | SX01－74 | 素材 | 鉄鋌 | A1 | 3.5～ | 2.3～3.0 | 0.1 | 7.7 | |
| 4036 | SX01 | 素材 | 鉄鋌 | A1 | 4.3～ | 1.8～3.3 | 0.2～0.3 | 9.3 | |
| 4037 | SX01－65 | 素材 | 鉄鋌 | A2 | 6.3～ | 2.2～3.5 | 0.1～0.3 | 21.1 | |
| 4038 | SX01 | 素材 | 鉄鋌 | A2 | 4.9～ | 3.0 | 0.2～0.3 | 10.5 | |
| 4039 | SX01－75 | 素材 | 鉄鋌 | A2 | 4.2～ | 1.9～3.3 | 0.5～0.6 | 24.0 | |
| 4040 | SX01－75 | 素材 | 鉄鋌 | B | 9.9～ | 2.7～3.2 | 0.2～0.3 | 28.5 | |
| 4041 | SX01－37 | 素材 | 鉄鋌 | B | 5.2～ | 2.4～2.7 | 0.2 | 18.2 | |
| 4042 | SX01－66 | 素材 | 鉄鋌 | B | 6.8～ | 2.2～2.4 | 0.1 | 10.1 | |
| 4043 | SX01 | 素材 | 鉄鋌 | B | 2.7～ | 2.5 | 0.1～0.2 | 8.3 | |
| 4044 | SX01 | 素材 | 鉄鋌 | B | 3.7～ | 1.8 | 0.1～0.2 | 5.0 | |
| 4045 | SX01 | 素材 | 鉄鋌 | B | 2.4～ | 2.8 | 0.2 | 7.8 | |

| 番号 | 出土地点 | 種類 | 器種 | 型式 | 長さ | 幅 | 厚さ | 重さ | 諸特徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 4046 | SX01－65 | 素材 | 鉄鋌 | B | 2.7～ | 2.0～2.2 | 0.2～0.3 | 3.5 | |
| 4047 | SX01－75 | 素材 | 鉄鋌 | B | 2.8～ | 1.3～1.5 | 0.2 | 3.0 | |
| 4048 | SX01 | 素材 | 鉄鋌 | B | 3.1～ | 1.6～1.8 | 0.2～0.3 | 2.3 | |
| 4049 | SX01－75 | 素材 | 鉄鋌 | A2？ | 5.6～ | 1.6～2.6 | 0.2～0.3 | 8.8 | |
| 4050 | SX01 | 素材 | 鉄鋌 | A2？ | 4.6～ | 1.4～2.0 | 0.1～0.2 | 8.2 | |
| 4051 | SX01－75 | 素材 | 鉄鋌 | A2？ | 4.8～ | 2.2～2.4 | 0.2～0.3 | 9.3 | |
| 4052 | SX01－75 | 素材 | 鉄鋌 | A1？ | 4.8～ | 1.5～2.1 | 0.1～0.2 | 6.9 | |
| 4053 | SX01－75 | 素材 | 鉄鋌 | A1？ | 3.7～ | 2.0～2.3 | 0.1 | 5.5 | |
| 4054 | SX01 | 素材 | 鉄鋌 | B | 3.8～ | 2.5 | 0.3 | 9.6 | |
| 4055 | SX01 | 鍛冶 | 鍛造剝片 | A | 4.0 | 1.5 | 0.4 | 5.0 | |
| 4056 | SX01－65 | 鍛冶 | 鍛造剝片 | A | 3.1 | 1.6 | 0.5 | 3.5 | |
| 4057 | SX01 | 鍛冶 | 鍛造剝片 | A | 2.9 | 1.5 | 0.5 | 3.5 | |
| 4058 | SX01－66 | 鍛冶 | 鍛造剝片 | A | 2.8 | 1.6 | 0.4 | 2.5 | |
| 4059 | SX01－75 | 鍛冶 | 鍛造剝片 | A | 2.3 | 1.8 | 0.4 | 2.0 | |
| 4060 | SX01－75 | 鍛冶 | 鍛造剝片 | A | 2.0 | 1.6 | 0.4 | 1.6 | |
| 4061 | SX01 | 鍛冶 | 鍛造剝片 | A | 2.4 | 1.7 | 0.3 | 2.3 | |
| 4062 | SX01 | 鍛冶 | 鍛造剝片 | A | 2.1 | 1.6 | 0.6 | 2.0 | |
| 4063 | SX01 | 鍛冶 | 鍛造剝片 | A | 1.8 | 1.4 | 0.4 | 1.3 | |
| 4064 | SX01 | 鍛冶 | 鍛造剝片 | A | 1.9 | 1.2 | 0.5 | 1.0 | |
| 4065 | SX01 | 鍛冶 | 鍛造剝片 | A | 2.2 | 1.1 | 0.3 | 1.1 | |
| 4066 | SX01 | 鍛冶 | 鍛造剝片 | A | 1.8 | 1.5 | 0.4 | 1.1 | |
| 4067 | SX01 | 鍛冶 | 鍛造剝片 | A | 1.6 | 1.3 | 0.6 | 1.6 | |
| 4068 | SX01－75 | 鍛冶 | 鍛造剝片 | B | 2.5 | 2.2 | 0.2～0.3 | 4.8 | |
| 4069 | SX01 | 鍛冶 | 鍛造剝片 | B | 2.1 | 1.8 | 0.2 | 2.0 | |
| 4070 | SX01－74 | 鍛冶 | 鍛造剝片 | B | 2.0 | 1.9 | 0.2 | 2.0 | |
| 4071 | SX01 | 鍛冶 | 鍛造剝片 | B | 2.5 | 1.7 | 0.2～0.3 | 4.0 | |
| 4072 | SX01－65 | 鍛冶 | 鍛造剝片 | B | 2.3 | 1.7～2.0 | 0.2 | 2.6 | |
| 4073 | SX01－74 | 鍛冶 | 鍛造剝片 | B | 2.8 | 1.8～2.2 | 0.1～0.2 | 2.8 | |
| 4074 | SX01－65 | 鍛冶 | 鍛造剝片 | B | 2.4 | 1.1 | 0.1 | 1.0 | |
| 4075 | SX01 | 鍛冶 | 鍛造剝片 | B | 1.9 | 1.1 | 0.3 | 1.6 | |
| 4076 | SX01－74 | 鍛冶 | 鍛造剝片 | B | 2.9～ | 1.3 | 0.1～0.2 | 1.5 | |
| 4077 | SX01 | 鍛冶 | 未製品 | 刀子 | 2.5～ | 1.2 | 0.1～0.4 | 3.0 | 未製品？ |
| 4078 | SX01 | 鍛冶 | 未製品 | 鎌？ | 4.9～ | 2.0～2.5 | 0.3 | 17.8 | 未製品？ |
| 4079 | SX01－74 | 鍛冶 | 未製品 | 鎌？ | 4.0 | 1.7～2.2 | 0.3 | 7.3 | 未製品？ |
| 4080 | SX01 | 鍛冶 | 未製品 | ？ | 1.5～1.8 | 1.5 | 0.2 | 2.5 | 未製品？ |
| 4081 | SX01 | 鍛冶 | 未製品 | ？ | 3.4～ | 3.5 | 0.3 | 6.7 | 未製品？ |

## 5．石　製　品

### A　石製模造品

#### a　構成と分布

出作遺跡から出土した石製模造品は、臼玉類を除いて、総数277点以上である。内訳は完・未製品を含めて、勾玉21点（7.6%）、剣形12点（4.3%）、円板238点（85.9%）、その他６点（2.2%）、のほか屑石片が多数であり、円板が大多数である。

出土分布は、SX01が266点と圧倒的に多く、次いでSX03の７点(5002，5120，5123，5144，5156，5178，5189）で、SB01の１点（5043）やその他の小区（H－６区5004，L－７区5275，T－５区5033）からも数点出土しいる。ただ、発掘調査の段階で、土砂ごと取り上げ、水洗選別を実施できたのが、SX01出土資料のみであり、数量に誤差があるとしても、SX01の出土量が卓抜することは違いない。

遺構別に石製模造品の構成（未製品及を含む）を見ると、SX01からは、勾玉19点、剣形11点、円板231点、その他５点と質量とも豊富である。また、SX03は、勾玉１点、円板６点が出土し、剣形の模造品は出土していない。なお、このほかSX03からは、実用の勾玉（5278）も出土している。

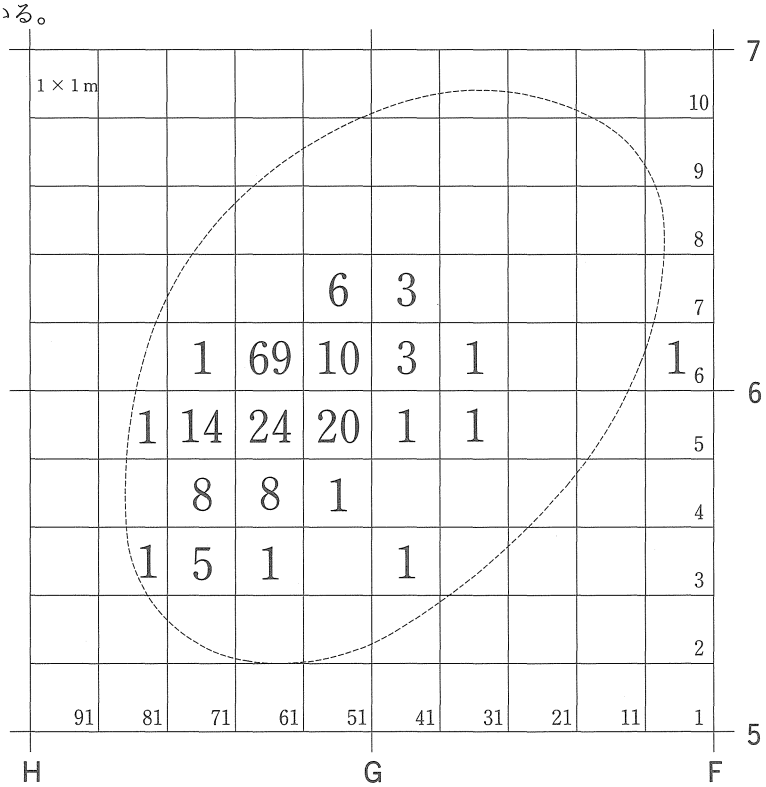



図66　SX01出土の石製模造品分布

b　勾　玉

勾玉は、完成品14点、未製品６点、素材剝片１点の計21点である。

完成品は形態から３類に大別される。

**勾玉の形態分類**

勾玉Ａ類＝「冂」形を呈し、やや大振りで厚手のもの…（5001～5003）
勾玉Ｂ類＝「冂」形を呈し、中型でやや厚手のもの　…（5004～5009）
勾玉Ｃ類＝「c」形を呈し、小振りで薄手のもの　　…（5010～5014）

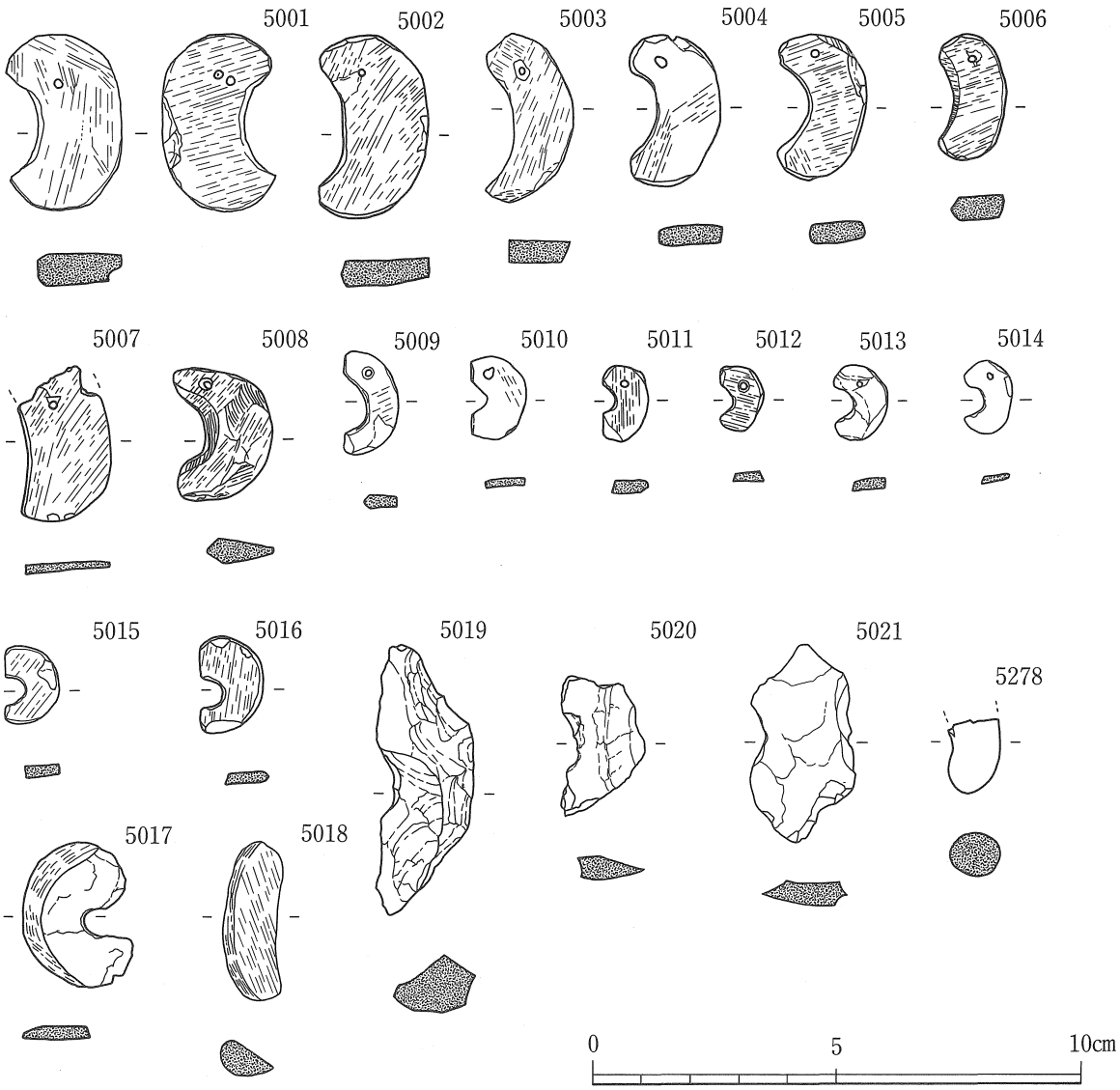



図67　石製品(1)　　2：3

分類の根拠は、腹部の調製法の差であり、サイズと相関する傾向にある。A類は、長さ3.4～3.7cm，厚さ1.8～2.4cmと大振り・厚手で、長めの腹部は平状砥石によって上中下を分割研磨されている。B類は、長さ2.1～2.7cm，厚さ1.1～2.0cmと中サイズ・やや厚手で、腹部は凸状砥石で一括研磨されている。C類は、長さ1.3～1.7cm，厚さ0.9～1.1cmと小振り・薄手で、腹部は造作時の穿孔痕に若干の研磨を加える程度である。

**完成品**（工程Ⅲ＝5001～5014）

目安は、頭部の穿孔と表裏・周縁の研磨である。穿孔はすべて回転穿孔によって1孔が穿たれているが、5001の裏面には穿孔中途の1穴が確認される。研磨は、表裏及び周縁とも施され、器壁の偏平化と整形の目的は達成されている。なお、5006，5008，5009では頭部側縁を中心に鉄製工具によると思われる切削痕が顕著に認められる。また、勾玉C類の中には、表裏の研磨を省略するもの（5009，5011）があるが、素材剝片自体が十分に偏平であり、その必要性はなかったのであろう。

**未製品**（工程Ⅱa＝5018～5020，Ⅱb＝5015～5017）

素材剝片から勾玉を目指して加工に着手した段階（工程Ⅱa）と、頭部が未穿孔ながら勾玉の形状が十分造形された段階（工程Ⅱb）とがある。

工程Ⅱb段階の例は、いずれも勾玉C類を目指している。5015～5017は、素材剝片の中央をやや偏したところに、6㎜前後の穿孔を施したのち、一部を折損し（5017）、周縁や表裏を研磨で整形している。なお、周縁の研磨で、頭部と尻部を同時に研磨する例（5015，5016）は、完成品（5010，5011）の勾玉C類に目立っている。ちなみに、厚手の勾玉A・B類における、表裏の偏平・平坦化では、5008を好例とするように、研磨以前に、鉄製工具による削剝が施される可能性が強い。

工程Ⅱa段階の例には、厚手（5018，5019）と薄手（5020）があり、形態から勾玉A類ないしB類を目指すものと思われる。5019～5020は腹部を剝離によって造作し、5019では、背部にも調整剝離が施されている。5018は、転石の自然面を残す例で、粗割による素材剝片ではなく異例であるが、背部が研磨調整されており、一応、勾玉の未製品と認定しておく。

**素材剝片**（工程Ⅰ＝5021）

5021は粗割の素材剝片で加工痕跡はない。粗割りによって得れた素材剝片は、勾玉をはじめ円板や剣形類と意識して獲得されたとは考えられないが、5021のように縦横比が長く、中央がくびれ気味の素材は、勾玉用に選抜された可能性が高い。

**勾玉の製作法**

| | | |
|---|---|---|
| Ⅰ | 工程＝母岩から粗割で適当な素材剝片を獲得・選抜する。 | → 粗　割 |
| Ⅱa | 工程＝腹部を穿孔ないし剝離で造作し、周縁を剝離や研磨する。 | → 成　形 |
| Ⅱb | 工程＝表裏や周縁を削剝ないし切削あるいは研磨する。 | → 整　形 |
| Ⅲ | 工程＝回転穿孔から側縁及び表裏の仕上げ研磨する。 | → 完　成 |

勾玉の穿孔は、完成品の目安となるもので、剣形や円板と比べて遅くに穿たれている。IIb工程の背部周辺の調整は切削や研磨であり、剝離例は確認できなかったが、研磨以前に調整剝離が施されている可能性は十分にある。

### c 剣 形

剣形は、完成品4点、未製品6点、素材剝片2点の計12点である。

完成品は、形態から2類に大別される。

**剣形の形態分類**

剣形A類＝幅より長さがはるかに長い、狭長なもの　…（5022）
剣形B類＝幅より長さが僅かに長い程度の、短軀なもの…（5023）

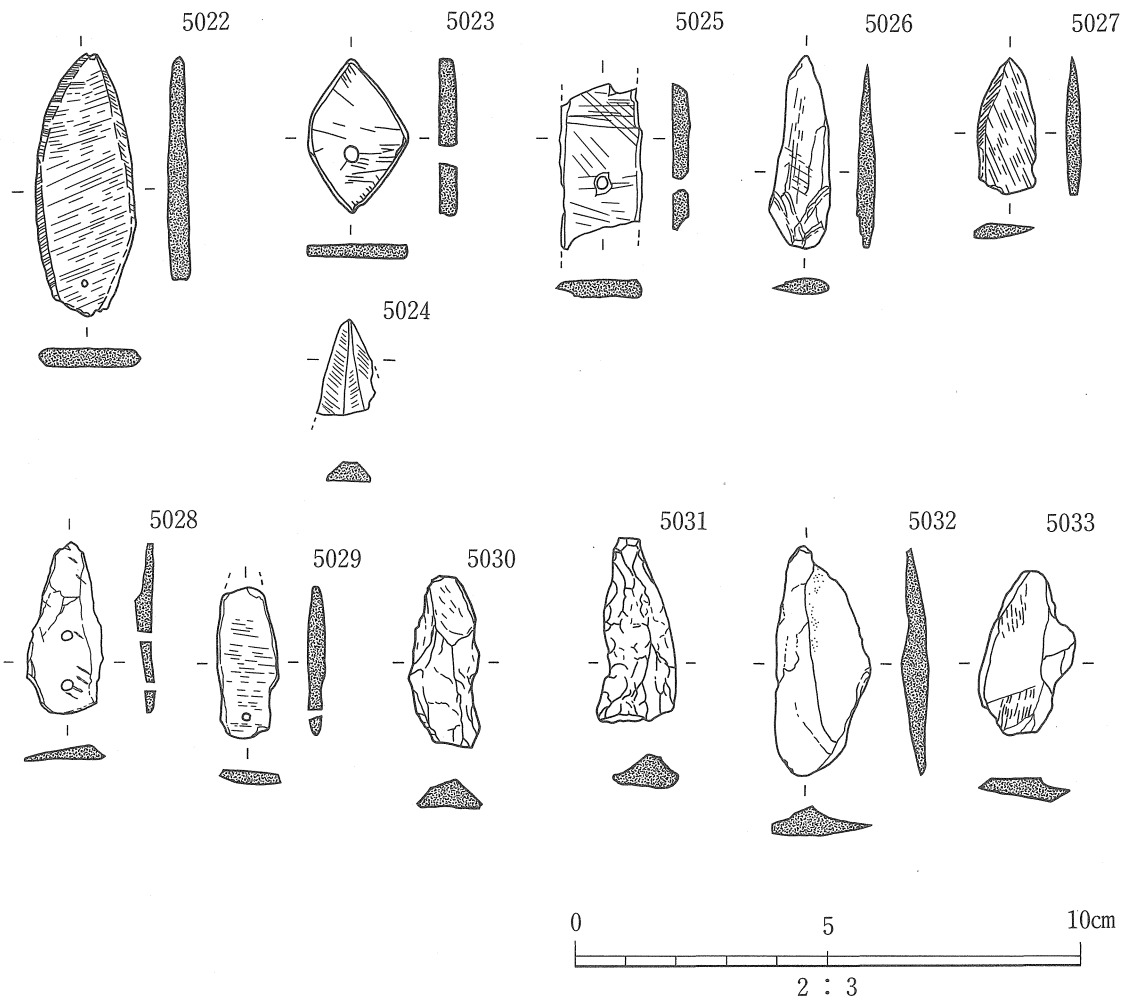



図68　石製品(2)

なお、剣形Ａ類はサイズから、やや大振りの剣形Ａ類Ｌ（5022，5025など）と小振りの剣形Ａ類Ｓ（5026～5029など）に細分され、出土例は剣形Ａ類Ｓが多い。

**完成品**（工程Ⅲ＝5022～5025）

目安は、表裏と周縁の研磨である。研磨については、剣形Ａ類の中に、表面に鎬状の稜を造り出すもの（5024）と、表裏を研磨で偏平に仕上げた後、周縁を表裏から若干研磨し刃部状に仕上げたもの（5022，5025）がある。また、剣形Ｂ類5023は、表裏を研磨で偏平に仕上げ、周縁は器面と垂直に研磨され、刃部状を呈していない。こうした剣形における研磨仕上げの変化は、立体的でリアルなものから平面的でデフォルメされたものへと変遷するものと考えられる。

**未製品**（工程Ⅱａ＝5030～5031，Ⅱｂ＝5026～5029）

素材剝片から剣形を目指して加工に着手した段階（工程Ⅱａ）と、基部に穿孔が施されたり、研磨や剝離によって剣形の形状が十分造形された段階（工程Ⅱｂ）とがある。

工程Ⅱｂ例は、いずれも剣形Ａ類Ｓを目指すものである。5026，5027は、表裏・側縁を研磨しているが、特に側縁の研磨は剣形の造形を意識して傾斜した研磨となっている。5028は、調整剝離ののち回転穿孔（２孔）で、未研磨である。5029は、回転穿孔ののち表裏が研磨されている。このように見ると、工程Ⅱｂ段階では、剝離ないし切削整形→回転穿孔→表裏研磨→側縁研磨といった作業の流れが予想できる。

工程Ⅱａ例は、5030，5031であるが、いずれも剣形Ａ類Ｓを目指すものと思われ、やや厚手の剝片素材が採用されている。5030は、素材剝片の長側縁を調整剝離しただけのものであるが、5034では調整剝離ののち、片側縁が研磨調整によって成形されている。

**素材剝片**（工程Ⅰ＝5032～5033）

いずれも薄い縦長の素材剝片で加工痕跡はないが、形態・サイズからして剣形Ａ類Ｓを目指す素材と考えられる。

**剣形の製作法**

| | | |
|---|---|---|
| Ⅰ　工程＝母石から粗割で適当な縦長の素材剝片を獲得・選抜する | → | 粗　割 |
| Ⅱａ工程＝側縁を主体に剝離や研磨する。 | → | 成　形 |
| Ⅱｂ工程＝回転穿孔及び表裏を研磨する。 | → | 整　形 |
| Ⅲ　工程＝表裏・側縁の仕上げ研磨する。 | → | 完　成 |

### ｄ　円　板

円板は、完成品141点、未製品85点、素材剝片12点の計238点である。

円板は、完成品・未製品を分類の対象とすると、形態と穿孔のあり方の組み合わせで分類される。以下、穿孔と形態の分類を実施し、各資料の観察から製作工程を復元する。

**円板の形態分類**

| |
|---|
| A１類＝正円形を呈するもの。 |
| A２類＝楕円形を呈するもの。 |
| B１類＝隅丸正方形を呈するもの。 |
| B２類＝隅丸長方形を呈するもの。 |
| C　類＝不整な多角形をなすもの。 |

円板の形態は、A類（円形ないし楕円形）とB類（隅丸方形ないし隅丸長方形）とC類（不整な多角形）の3類に大別でき、さらにA類とB類は、長さと幅の関係から細分され、「円板」と呼称しつつも形態的バリエーションは豊富である。

形態別に完成度を、完成品：未製品：素材剝片の数から比べると、A類は、96点＝79：17：0と完成品が大多数を占め、素材剝片はない。B類は、77点＝47：29：1でA類に比べて未製品の多さが目立っている。C類は、65点＝15：39：11であり、完成品より未製品が多く、素材剝片の数も目立っている。こうした各形態の差は、後述するように、素材剝片の制約や、製作工程上に生じるものであり、円板の用途・機能には関連しないものと考えられる。

**円板の穿孔分類**

| |
|---|
| 0　類＝穿孔を伴わない。 |
| １ａ類＝器体のほぼ中央に１孔を伴う。 |
| １ｂ類＝器体の周縁に偏して１孔を伴う。 |
| ２ａ類＝器体の中軸中央に近接する２孔を伴う。 |
| ２ｂ類＝器体の中軸を３分割するように２孔を伴う。 |
| ２ｃ類＝器体の中軸両側縁に偏して２孔を伴う。 |

円板の穿孔については、0類（無孔）と1類（単孔）と2類（双孔）の3類に大別され、1類・2類は、穿孔の配置から細分できる。穿孔と形態の関係については、特に原則はない。

0類は、完成品例が皆無であり、本来円板の穿孔は、1類ないし2類しか存在しないと思われる。1類は、器体のほぼ中央に1孔を伴う1a類と、器体の周縁に偏して1孔を伴う1b類であるが、穿孔類型と完成度の関係を見ると、1a類の多くは完成品（工程Ⅲ）であり、1b類はほとんどが未製品（工程Ⅱb）である。つまり、穿孔1類には1a類しか存在せず、1b類の多くは2類の穿孔過程の可能性が強い。ちなみに穿孔1b類の完成品例は、5120，5147，5148，5219，5220の5例であるが、いずれも仕上げ研磨が丁寧ではなく、積極的に1b類の存在を認定することは難しく、出作遺跡に限っては、穿孔1b類の円板は製作されていないと考えた方が妥当であろう。

2類については、器体の中軸中央に近接する2孔（2a）と中軸を3分割する2孔（2b）と器体の中軸両側縁に偏した2孔（2c）がある。こうした穿孔の配置間隔は、用途に関わる問題として分類したが、ここから特別な意味を読みとることはできなかった。

なお、破片資料中に、穿孔部で欠損している例が27点ある。うち、完成後（工程Ⅲ）の破損品９点以外は未製品段階（工程Ⅱａ～Ⅱｂ）であり、穿孔作業が製作上のポイントであったことが知られる。以上、円板の形態及び穿孔の分類は、製作段階に応じた変化であり、形態にとらわれず当該遺物の主要な機能属性である穿孔を重視すれば、出作遺跡出土の円板は、「双孔円板」と「単孔（穿孔１ａ類）円板」の２類に集約することができる。

**完成品**（工程Ⅲ＝Ａ１類：5034～5080，Ａ２類：5089～5120，
Ｂ１類：5130～5148，Ｂ２類：5168～5195，Ｃ類：5207～5221.）

目安は、表裏及び周縁の研磨仕上げである。円板の完成品計141点を形態別に見ると、Ａ類79点、Ｂ類47点、Ｃ類15点で、Ａ類が多い。穿孔は、１類37点（内１ａ類30点）、２類104点を数え、双孔円板類が圧倒的に多い。

穿孔１ａ類のなかで、表裏の偏平・平坦化や周縁の仕上がり具合を見ると、形態Ｂ類よりＡ類の方が優っており、穿孔１ａ類の典型が、形態Ａ類であることを示している。また、穿孔２類についても同様で、表裏や周縁の仕上がりは、形態Ａ類ほど入念で、次いでＢ・Ｃ類の順である。特にＢ類の場合、方形ないし長方形の角を取るべく周縁が研磨されており、方形や長方形が本来の円板の目指す形態ではないことを示している。つまり円板は、形態Ｃ類→Ｂ類→Ａ類へと製作工程で変容し、正円形が目標形態であったと考えられる。ただ現実には、Ｂ・Ｃ類にも完成品がある。こうした製品については、Ａ類を「厳密な完成品」とした場合、Ｂ・Ｃ類は、いわゆる「手抜きの完成品」と考えておきたい。

**未製品**　（工程Ⅱｂ＝Ａ１類：5081～5087，Ａ２類：5121～5126，
Ｂ１類：5149～5166，Ｂ２類：5196～5203，Ｃ類：5222～5247.）
（工程Ⅱａ＝Ａ１類：5088，Ａ２類：5127～5129，
Ｂ１類：5167，Ｂ２類：5204～5205，Ｃ類：5248～5260.）

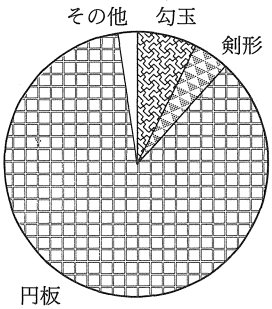
素材剝片から円板を目指して周縁あるいは表裏の加工に着手した段階（工程Ⅱａ）のものと、円板の形状が概ね造形され、穿孔を施した段階（工程Ⅱｂ）のものとがある。

工程Ⅱｂ例、計65点を形態別に見ると、Ａ類13点、Ｂ類26点、Ｃ類26点で、形態的に整わないＢ・Ｃ類が多い。穿孔は、１類52点（内１ｂ類36点）、２類13点を数え、双孔円板の片側のみを穿孔した段階（穿孔１ｂ類）の例が目立っている。なお、穿孔１ｂ類の穿孔箇所を細かくみると、ほとんどが器体の薄い箇所を選んで穿孔するとともに、表面を削剝で薄くしたのち穿孔を施した例（5239）などもあり、穿孔２類は、先ず薄い部分から実施されたのであろう。穿孔法は、ほとんどが回転穿孔であるが、厚さ４～５㎜境に、厚手は「両側穿孔」、薄手は「片側穿孔」の傾向にある。特異な穿孔法としては、薄手素材を「押圧穿孔」した例（5088，5127，5234）や厚手を「削剝穿孔」した例（5218）などもある。

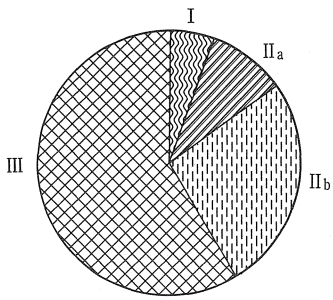
周縁の整形は、研磨、切削、剝離が単独ないし重複して施されている。調整状況は、研磨のみ（４点）、切削のみ（30点）、剝離のみ（６点）、剝離＋切削（４点）、切削＋研磨（２点）、

表10　石製模造品の統計

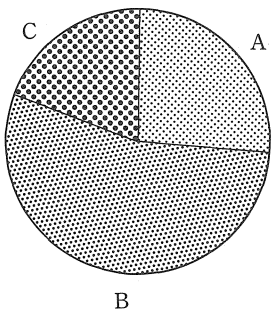
1．器種組成




2．完成度




3．石材組織



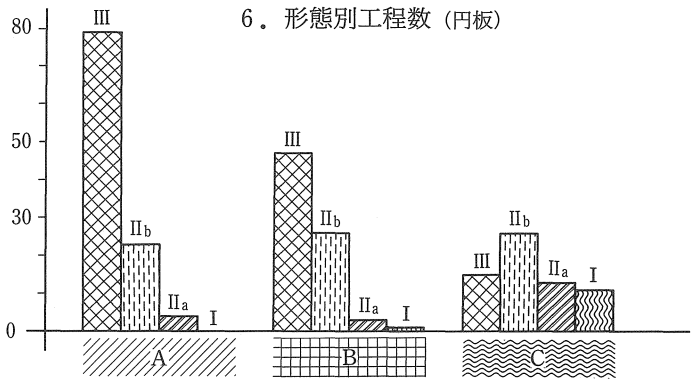

4．属性統計（石製模造品）

| 器種 | | 勾玉 | 剣形 | 円板 | ほか | 小計 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 数量 | | 21 | 12 | 238 | 6 | 277 |
| 工程 | I | 1 | 2 | 12 | − | 15 |
| | IIa | 3 | 3 | 20 | − | 26 |
| | IIb | 3 | 3 | 65 | − | 71 |
| | III | 14 | 4 | 141 | − | 159 |
| 石材 | A | 2 | 2 | 68 | 1 | 73 |
| | B | 10 | 8 | 129 | 3 | 150 |
| | C | 9 | 2 | 41 | 2 | 54 |

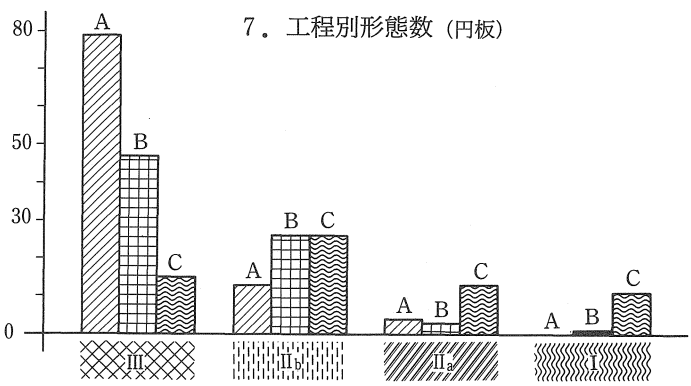
5．属性統計（円板）

| 形態 | A | B | C | 小計 |
|---|---|---|---|---|
| III | 79 | 47 | 15 | 141 |
| IIb | 13 | 26 | 26 | 65 |
| IIa | 4 | 3 | 13 | 20 |
| I | 0 | 1 | 11 | 12 |
| 合計 | 96 | 77 | 65 | 238 |

6．形態別工程数（円板）




7．工程別形態数（円板）



剝離＋切削＋研磨（１点）、無調整（18点）であり、周縁整形の主たる調整は切削である。

表裏の調整は、研磨や削剝で実施される。調整状況は、削剝のみ（18点）、研磨のみ（７点）、削剝＋研磨（２点）、無調整（38点）である。無調整例は、素材剝片自体が総じて偏平・平坦なケースであり、調整の必要がなかったのであろう。また、器体に凹凸がある例は、主に削剝によって平坦化が実施されている。

このように、表裏及び周縁の各調整手順に、一定の法則はないが、概して、剝離→切削ないし削剝→研磨へと移行する傾向にある。なお、穿孔のタイミングについては、無調整ながら穿孔を施す例もあり、工程IIｂでも早い段階に実施されると考えられる。

工程IIａ例、計20点を形態別に見ると、Ａ類４点、Ｂ類３点、Ｃ類13点で、形態的に不整なＣ類が多い。

周縁の整形は、研磨、切削、剝離が単独ないし重複して施されている。調整状況は、研磨のみ（５点）、切削のみ（７点）、剝離のみ（２点）、剝離＋切削（３点）、剝離＋研磨（１点）、無調整（２点）であり、周縁成形の主たる調整は剝離と切削である。

表裏の調整は、研磨と削剝で実施される。調整状況は、削剝のみ（６点）、研磨のみ（２点）、無調整（12点）であり、工程IIａにおいて、表裏の偏平・平坦化はそれほど意識されていないようである。

**素材剝片**（工程Ｉ＝5206，5261～5271）

計12点を認定したが、大型剝片（5261～5264）と小型剝片（5206，5265～5271）の２者がある。大型剝片は、母岩を粗割で得た１次剝片と考えられるが、5268の周縁に母岩の滑らかな自然面が確認でき、母岩として転石が採集されたことが知られる。一方、小型剝片については、そのまま周縁を成形し、穿孔・研磨で完成させ得るほど薄手のもの（5026，5266，5269～5271）と、厚手で、周縁の成形後に表裏に削剝を加わえなければ、偏平・平坦化が実現しないと思われるもの（5267，5268）がある。

**円板の製作法**

Ｉ　工程＝母岩から粗割で、適当な素材剝片を獲得・選抜する。　→　粗割り

IIａ工程＝周縁や表裏を調整剝離や切削及び研磨する。　→　成　形
一部では押圧穿孔。

IIｂ工程＝回転穿孔と周縁や表裏を、剝離や切削及び研磨する。　→　整　形

III　工程＝側縁及び表裏の仕上げ研磨す。　→　仕上げ

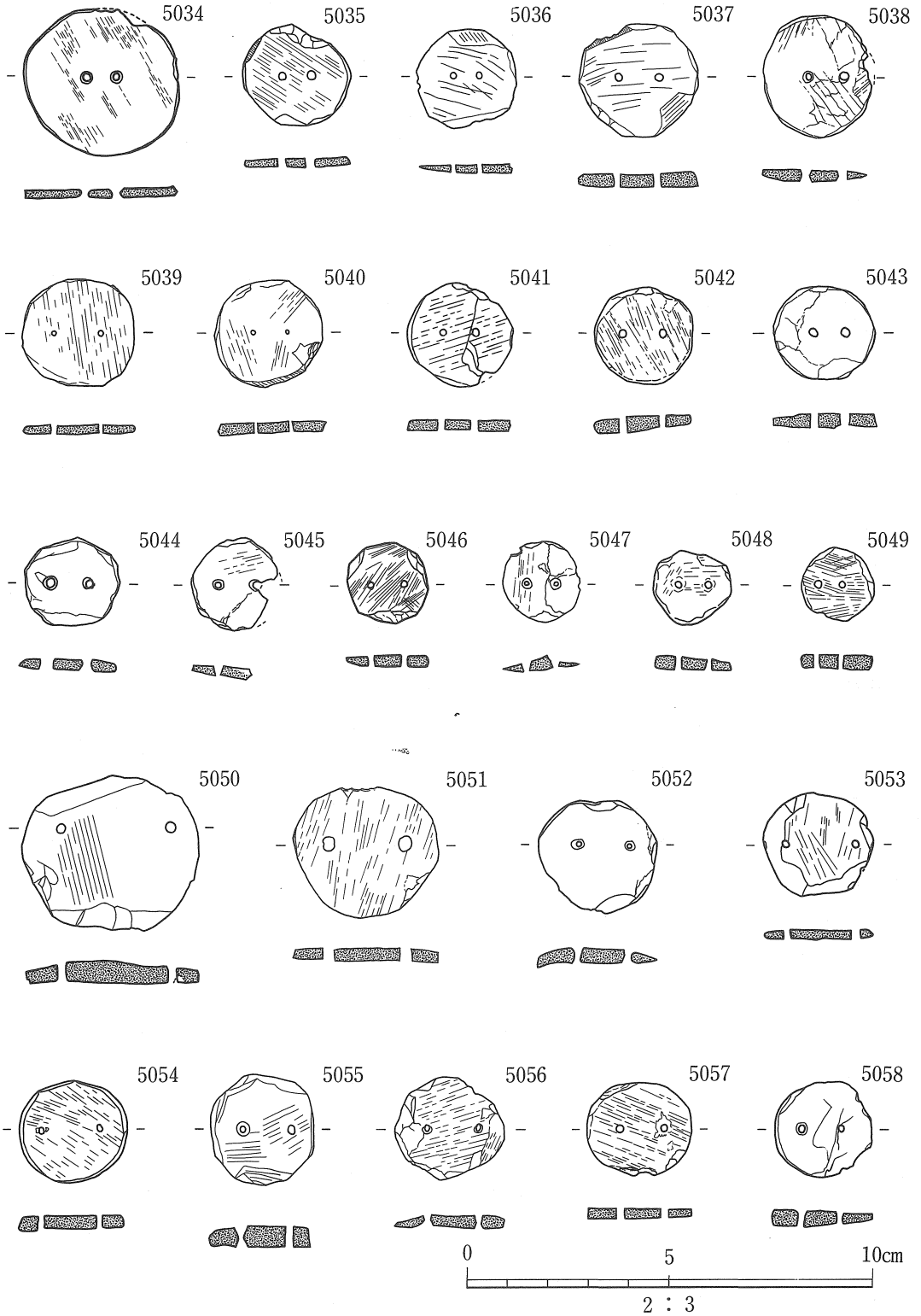

5034
5035
5036
5037
5038
5039
5040
5041
5042
5043
5044
5045
5046
5047
5048
5049
5050
5051
5052
5053
5054
5055
5056
5057
5058
0
5
10cm
2 : 3

図69　石製品(3)

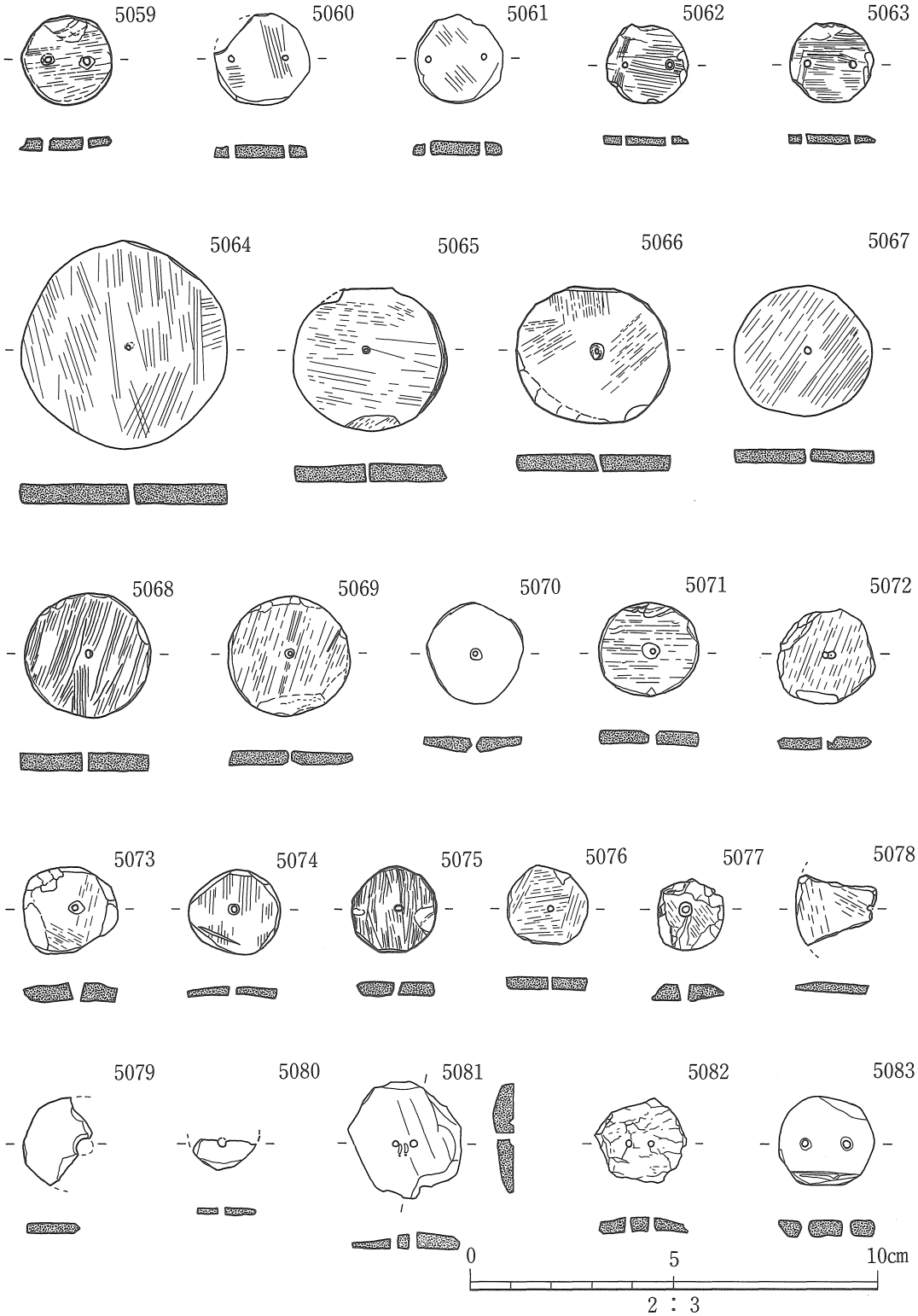

5059
5060
5061
5062
5063
5064
5065
5066
5067
5068
5069
5070
5071
5072
5073
5074
5075
5076
5077
5078
5079
5080
5081
5082
5083
0
5
10cm
2 : 3

図70　石製品(4)

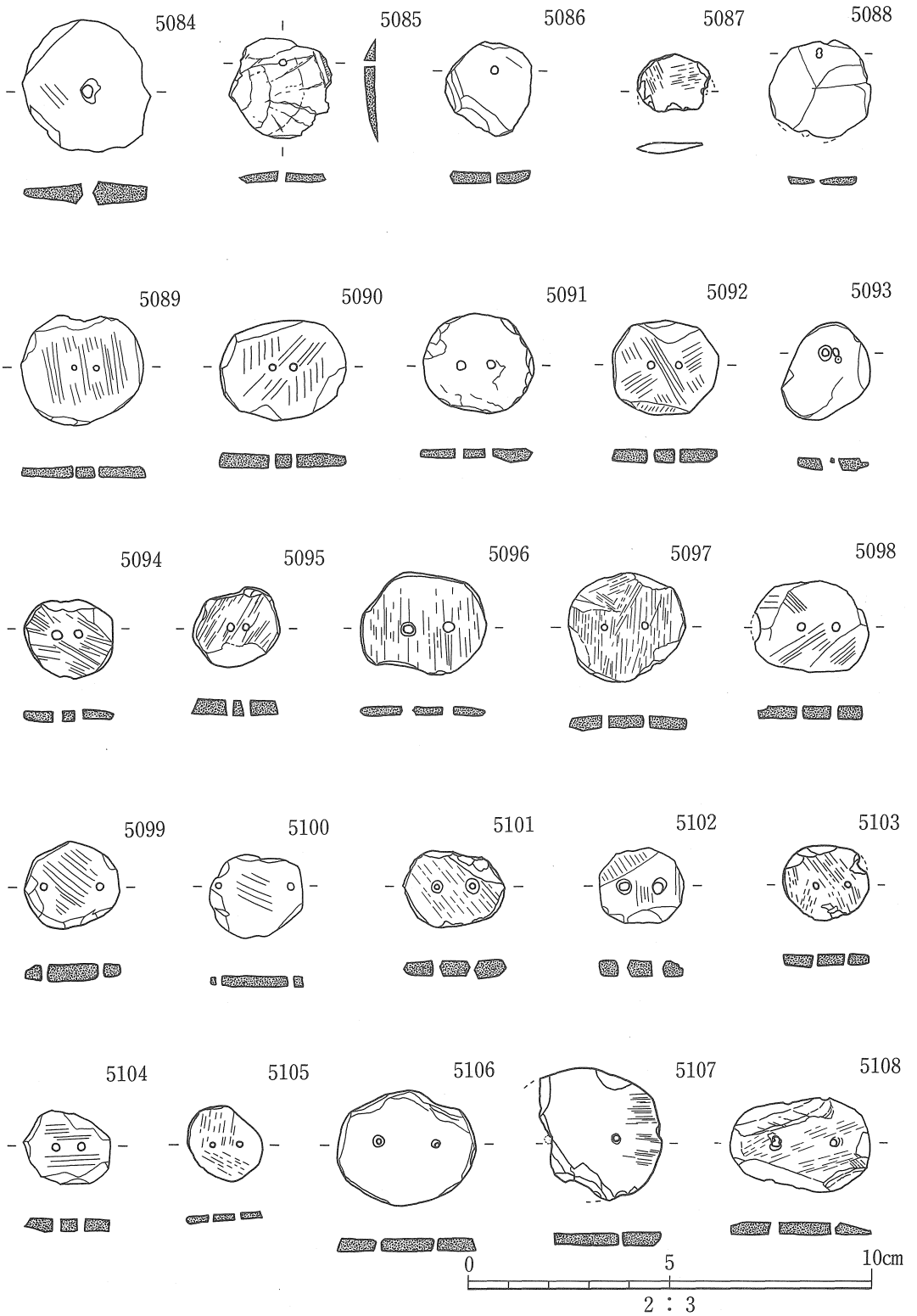

5084
5085
5086
5087
5088
5089
5090
5091
5092
5093
5094
5095
5096
5097
5098
5099
5100
5101
5102
5103
5104
5105
5106
5107
5108
0
5
10cm
2 : 3

図71　石製品(5)

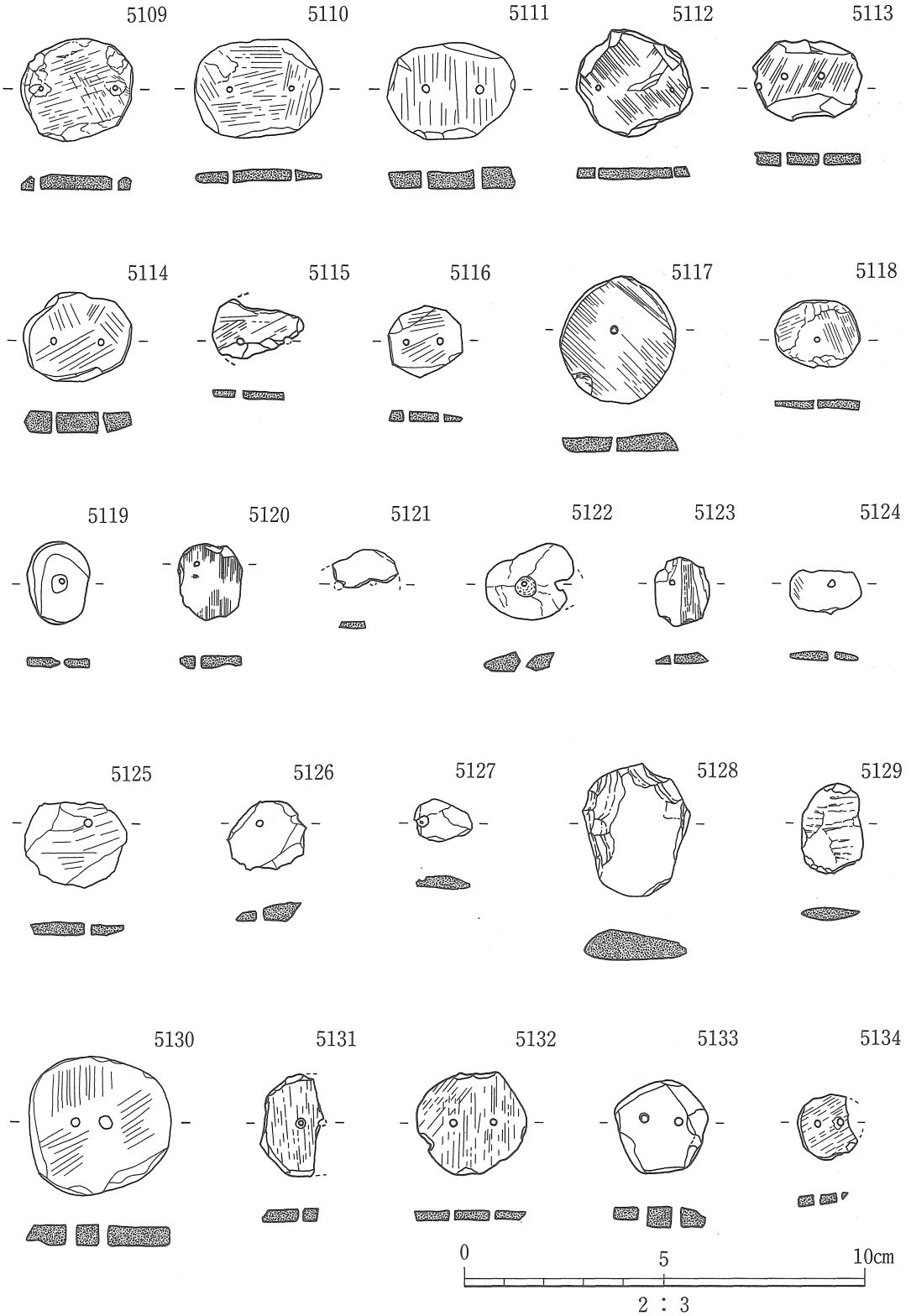

5109
5110
5111
5112
5113
5114
5115
5116
5117
5118
5119
5120
5121
5122
5123
5124
5125
5126
5127
5128
5129
5130
5131
5132
5133
5134
0
5
10cm
2 : 3

図72　石製品(6)

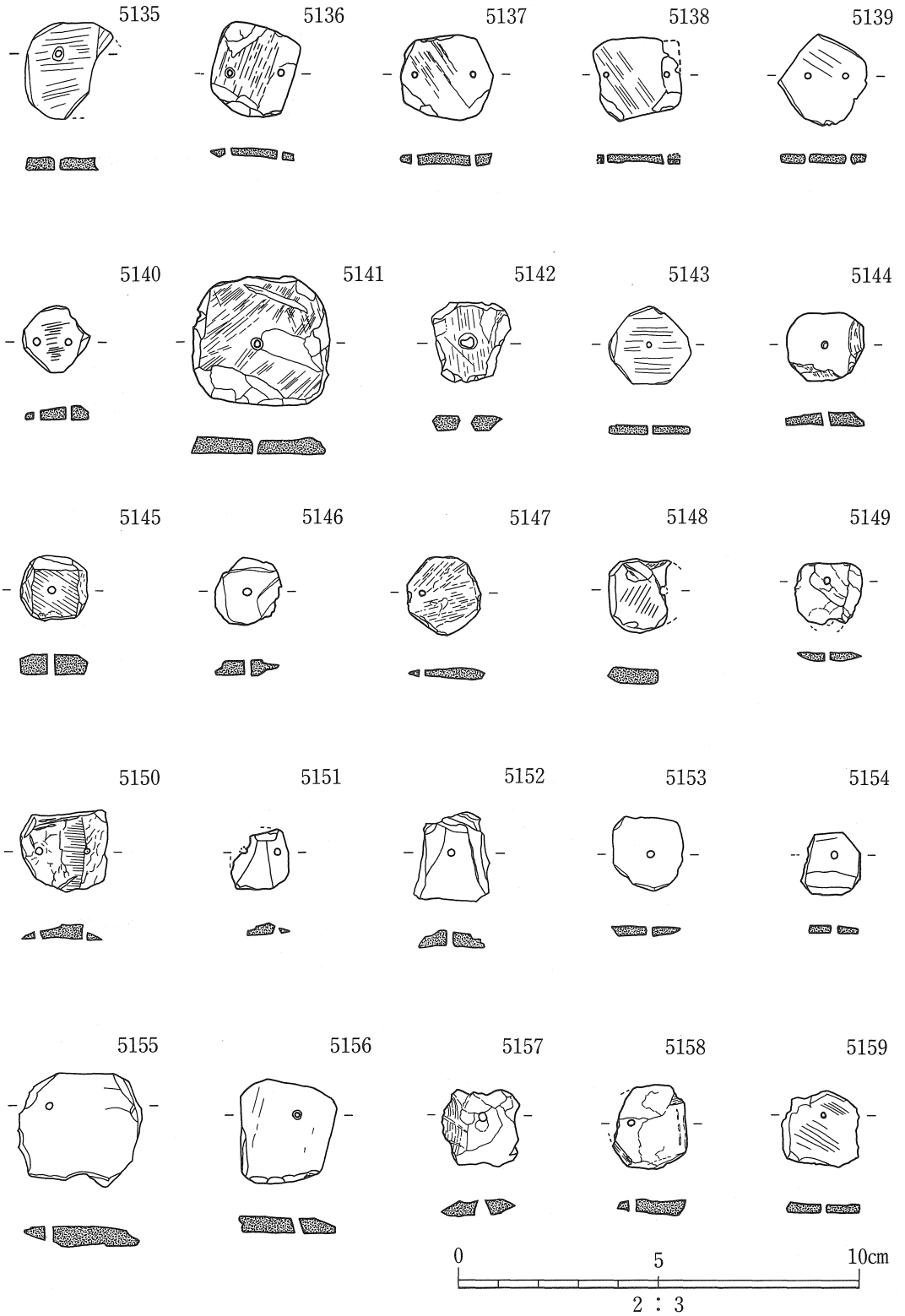

5135
5136
5137
5138
5139
5140
5141
5142
5143
5144
5145
5146
5147
5148
5149
5150
5151
5152
5153
5154
5155
5156
5157
5158
5159
0
5
10cm
2 : 3

図73　石製品(7)

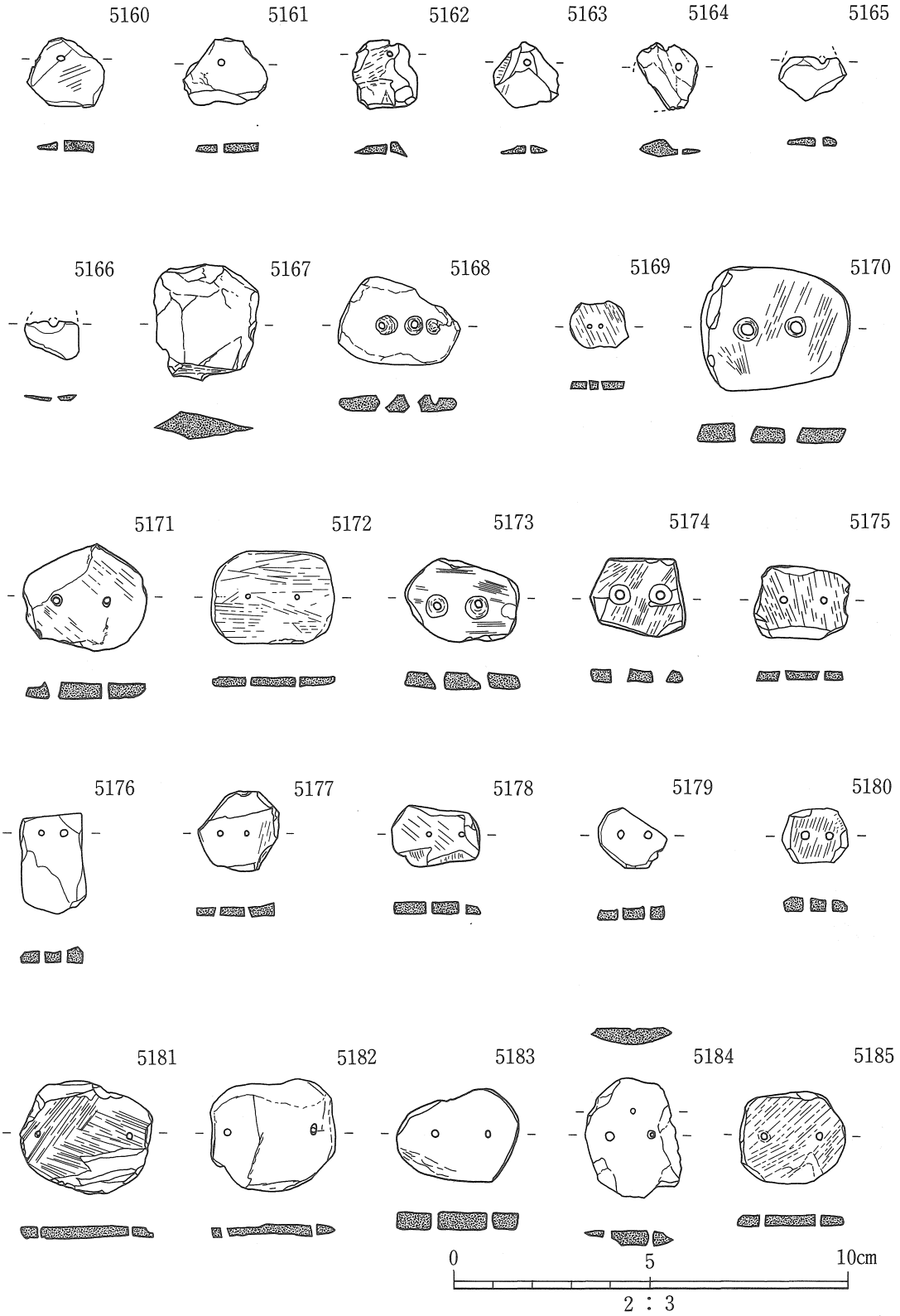

5160
5161
5162
5163
5164
5165
5166
5167
5168
5169
5170
5171
5172
5173
5174
5175
5176
5177
5178
5179
5180
5181
5182
5183
5184
5185
0
5
10cm
2 : 3

図74　石製品(8)

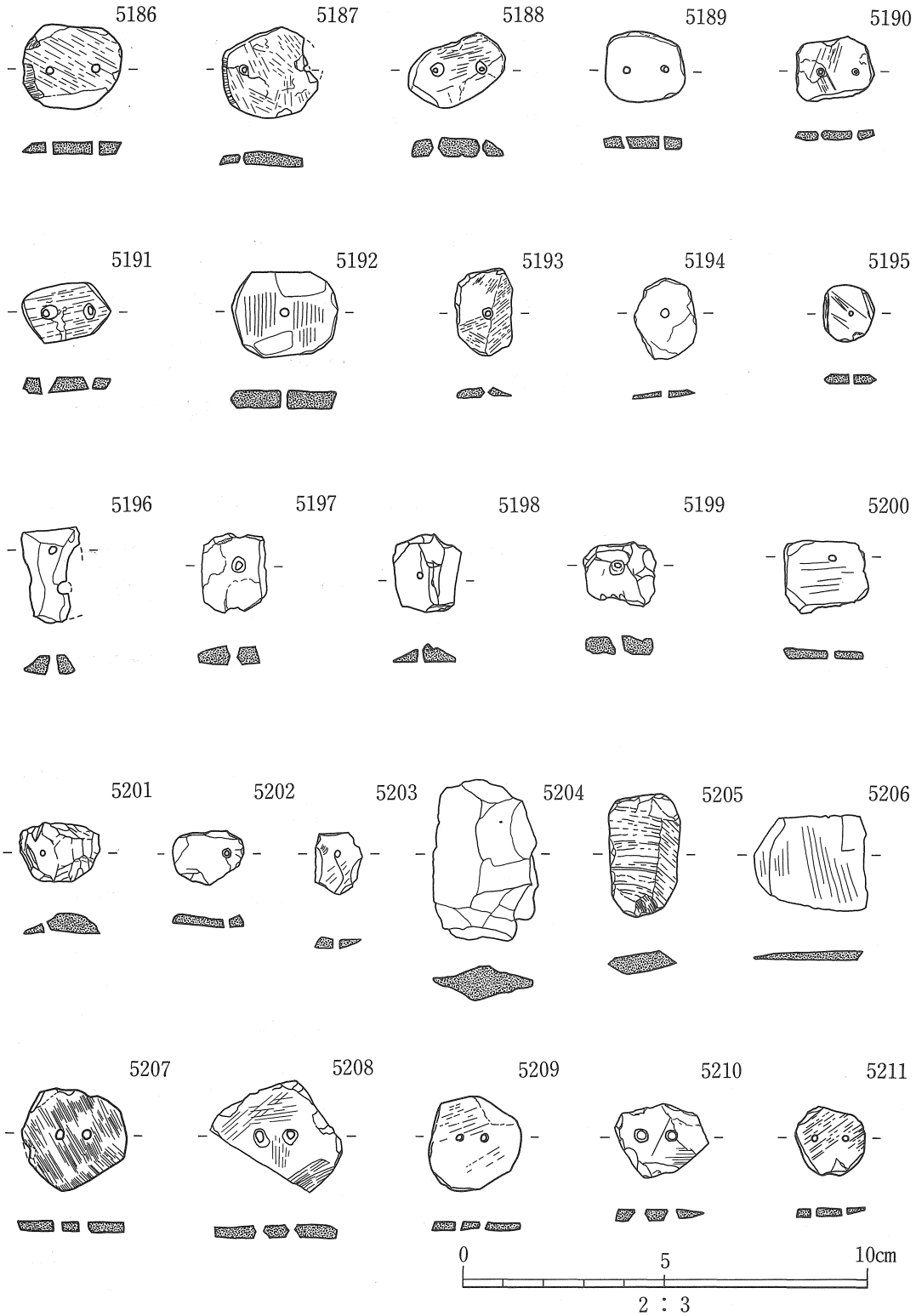

5186
5187
5188
5189
5190
5191
5192
5193
5194
5195
5196
5197
5198
5199
5200
5201
5202
5203
5204
5205
5206
5207
5208
5209
5210
5211
0
5
10cm
2 : 3

図75　石製品(9)

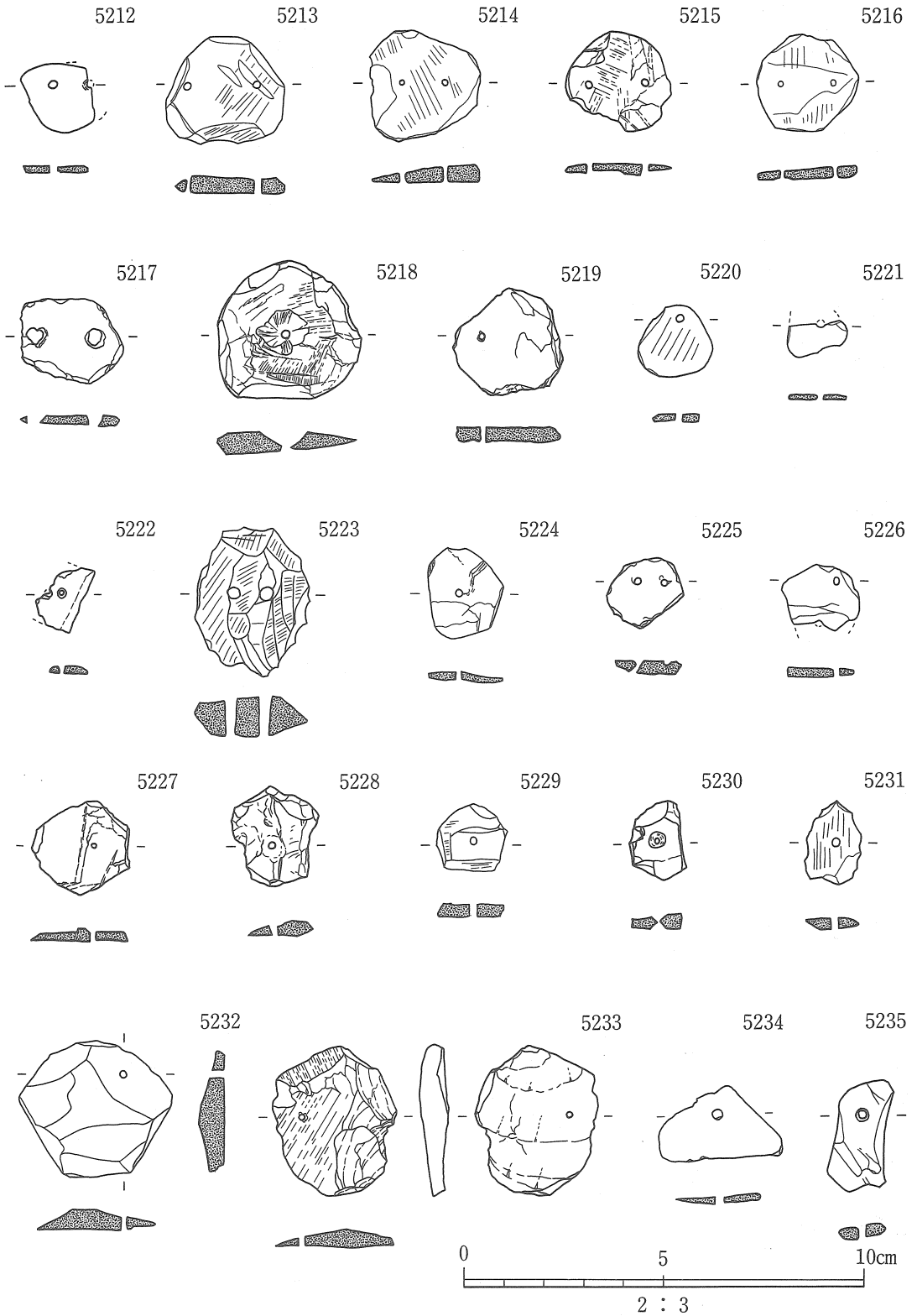

5212
5213
5214
5215
5216
5217
5218
5219
5220
5221
5222
5223
5224
5225
5226
5227
5228
5229
5230
5231
5232
5233
5234
5235
0
5
10cm
2 : 3

図76　石製品(10)

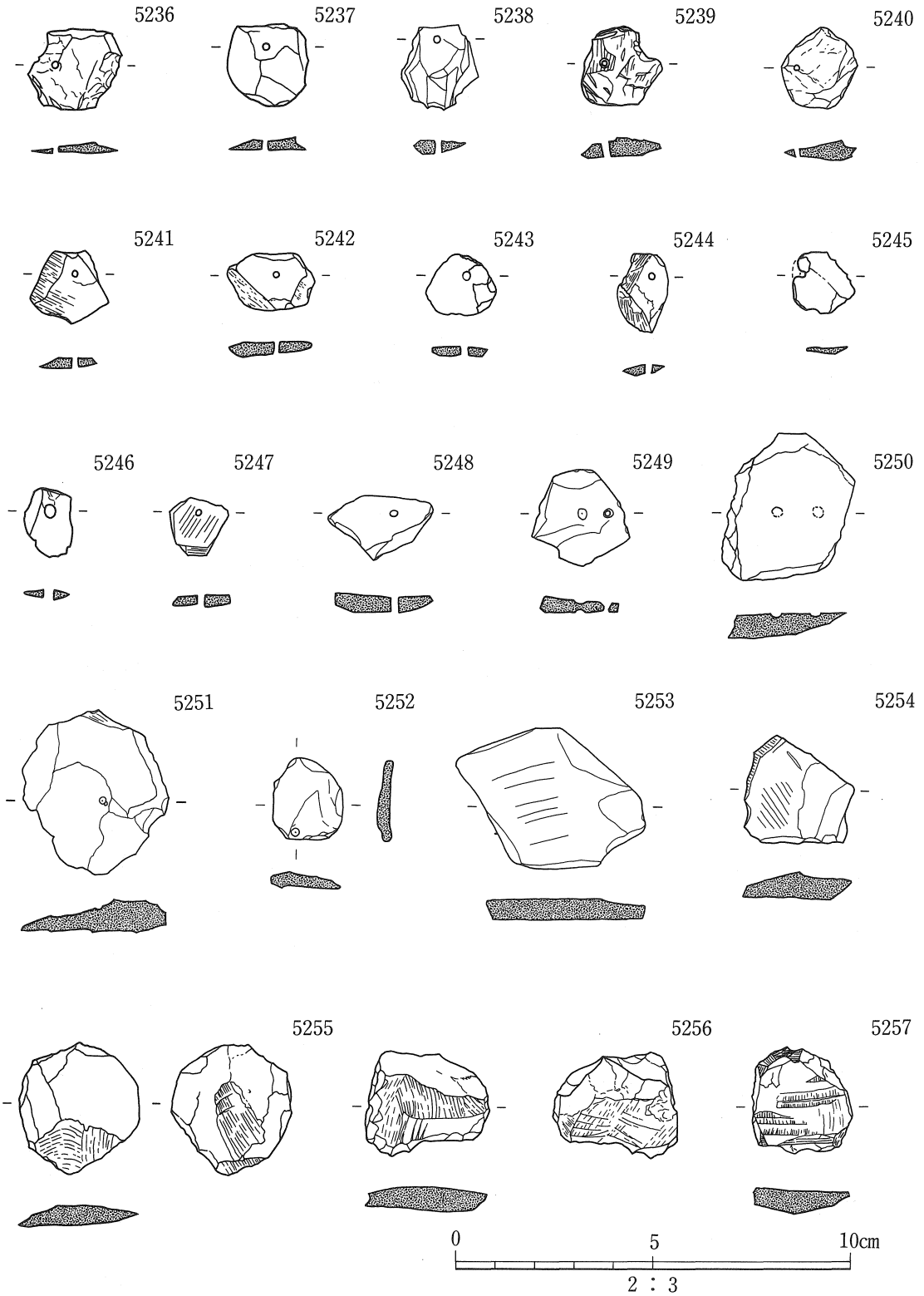

5236
5237
5238
5239
5240
5241
5242
5243
5244
5245
5246
5247
5248
5249
5250
5251
5252
5253
5254
5255
5256
5257
0
5
10cm
2 : 3

図77　石製品(11)

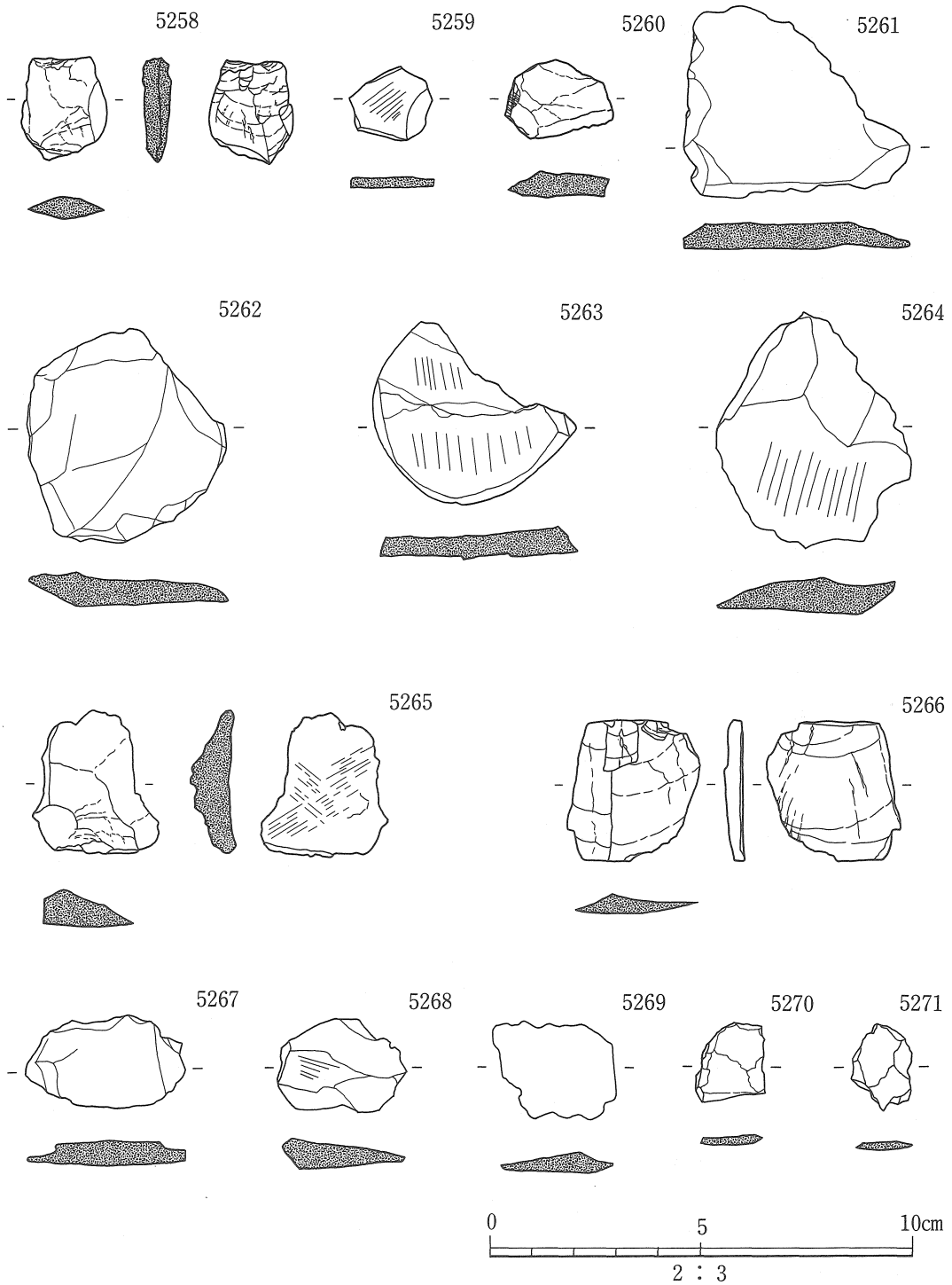

5258
5259
5260
5261
5262
5263
5264
5265
5266
5267
5268
5269
5270
5271
0
5
10cm
2 : 3

図78　石製品(12)

e 石　核

5272は素材剝片獲得後の石核である。石材の節理に平行する3面と、節理に直交する2面の計5面を持つが、石材の節理を無視した粗割である。法量は、長さ3.7cm、幅4.4cm、厚さ2.7cm、重さ41.9gを測り、石材はA類である。

f 剝　片

5273，5274は母岩の粗割で生じると考えられる剝片で、それ自体は素材剝片に適さない。

5273は、裏面が母岩の節理に応じた剝離面をなすもので、法量は、長さ7.5cm、幅3.3cm、厚さ0.9cm、重さ22.9gを測り、石材はB類である。ただ、5273は適当な大きさに切断することで各種の模造品の素材剝片は十分に得られる。

5274は、表面が簿岩の節理に応じた剝離面をなすもので、法量は、長さ7.6cm、幅1.8cm、厚さ1.3cm、重さ24.2gを測り、石材はB類である。表面に切削痕、側縁に剝離痕がある。

5275は加工剝片である。長方形の短辺を、片側は剝離調整によって凸形に、もう一方を、回転穿孔後の折損で凹形に加工した形態の偏平な剝片である。法量は、長さ5.7cm、幅2.6cm、厚さ0.9cm、重さ17.3gを測り、石材はB類である。形態的には、やや大振りの剣形の未製品とも考えられるが、ここでは不明剝片としておく。

g 石　材

ここでは石製模造品の石材を肉眼観察によって分類し、製品への採用状況を概観するとともにその産地を想定しておきたい。

**石材の分類**

A類－淡灰（黄）白色系を呈し、軟質のいわゆる滑石系の石材である。
B類－淡緑色系を呈し、やや硬質の結晶片岩系の石材である。
C類－暗青灰色系を呈し、硬質のいわゆる蛇文岩系の石材である。

各石材の採用状況は、観察資料277点中、石材A類73点（26.4%）、石材B類150点(54.1%)、石材C類54点（19.5%）と石材B類が過半数を占めている。

石材A類は、全器種で採用されるが、大振りの製品に採用される傾向にある。

石材B類は、全器種で普遍的に採用されており、石製模造品の主要石材である。

石材C類は、全器種の大小を問わず採用されるが、完成度の低い製品が多く、これは、石材硬度に起因するものと思われる。

各石材は、いずれも変成岩地帯に産出するもので、松山平野周辺では、砥部町・伊予市にその産地がある。よって、出作遺跡の石製模造品類は、遺跡の近辺から調達された在地石材によって製作されてたものと考えておきたい。

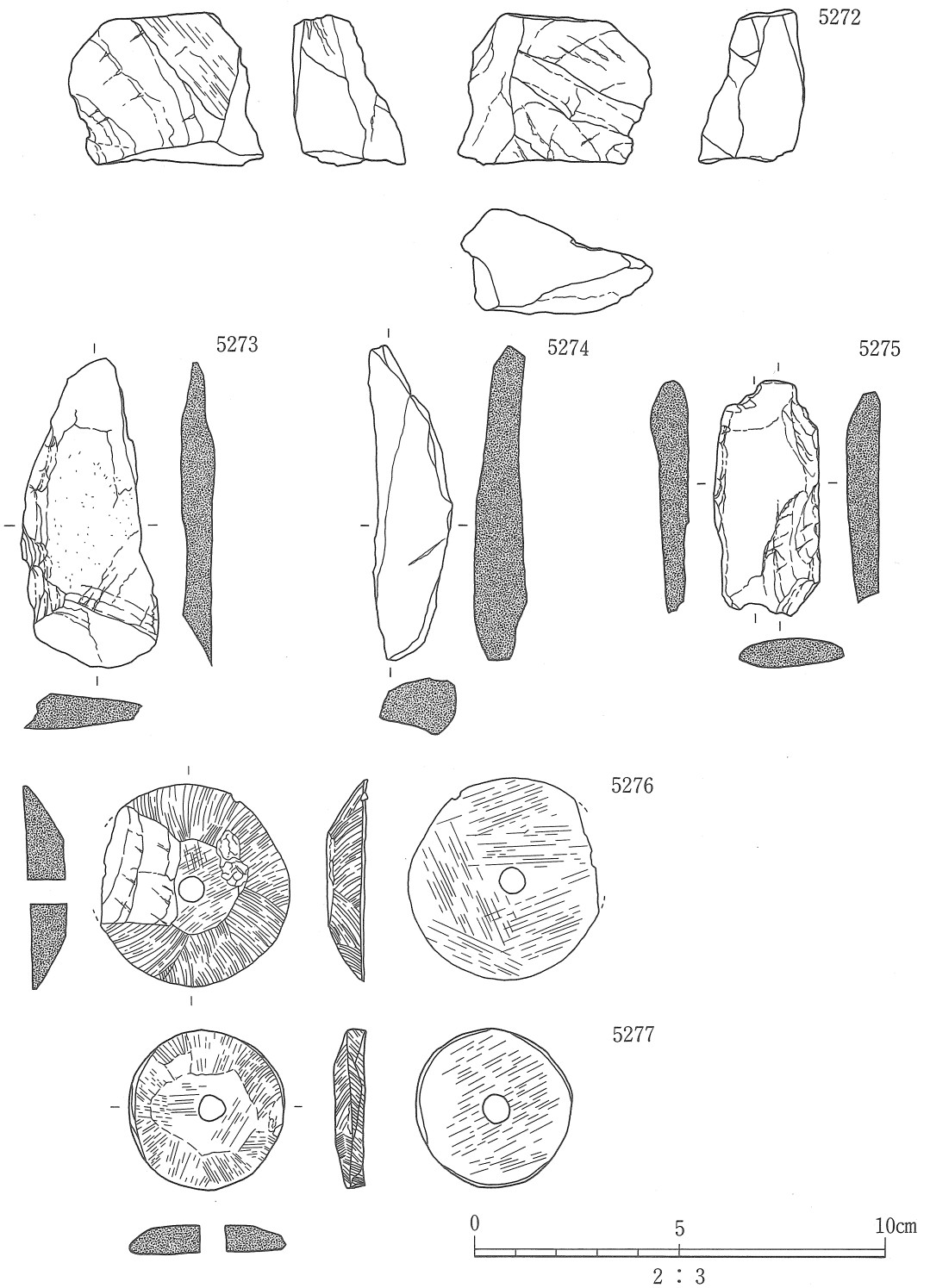



図79　石製品(13)

h　製作工程と完成度

各種模造品の製作工程を、粗割り（工程Ⅰ）→成形（工程Ⅱa）→整形（工程Ⅱb）→仕上げ（工程Ⅲ）へと想定した。ここに想定した工程は、各種模造品の完成度を対象資料271点から見ると、工程Ⅰ＝15点（5.5%）、工程Ⅱa＝26点（9.6%）、工程Ⅱb＝71点（26.2%）、工程Ⅲ＝159点（58.7%）であり、完成品が過半数を占めるとはいえ、未製品の多さが目立っている。こうした未製品の存在は、出作遺跡周辺で石製模造品の製作が実施されていたことを示す資料であり、石核（5272）や剝片（5273，5274）、あるいは豊富な砥石類の出土と併せて注目される。なお、剣形と円板は、その機能的な主要属性である穿孔を完了した段階(工程Ⅱb）で作業を完了し、祭祀に使用された可能性もある。

i　調整と工具

石製模造品の製作過程で施される調整は、「剝離」「切削」「削剝」「研磨」の4種である。以下、各調整法の概要と実施に当たって使用された工具を想定しておきたい。

「剝離」：おもに器体の周縁に施される押圧行為で、工程Ⅱaに多用される。工具は不明であるが、対象が小さいため、石や木よりも鉄製工具が使用された可能性が高い。

「切削」：おもに器体の周縁に施される切断行為で、工程Ⅱa～Ⅱbで多用される。工具は鉄製のノミ状あるいは刀子状工具が想定される。

（切削の好例＝ノミ状：5053，5150，5218，5223．刀子状：5009など）

「削剝」：おもに器体の表裏に施される削平行為で、実施される工程や想定される工具は「切削」と同様である。

（削剝の好例＝ノミ状：5008，5084，5218，5223．刀子状：5208など）

※5218は、特にノミ状の削剝と切削痕跡が顕著で、さらに穿孔もノミによって実施している。ノミの単位は、遺存良好な痕跡から、幅1.2cm前後である。

「研磨」：おもに器体の表裏と周縁に施される摩擦行為で、工程Ⅲで多用される。工具は砥石であるが、対象が小さいため据置砥石で実施されたと考えられる。

「穿孔」：器体に孔を設ける行為で、回転穿孔と押圧穿孔がある。勾玉では工程Ⅲ、剣形・円板では工程Ⅱbで多用される。工具は、孔径が総体的に小さく、鉄製の細い錐が想定される。

〔谷若〕

B　玉　類

a　勾　玉

5021（SX03出土）は古墳副葬品に通有の立体的な実用の勾玉である。頭部は欠損し、胴部以下の遺存である。遺存胴部の直径は0.9～1.0cmを測り、尾部は尖り気味に丸い。石材は硬石製で、色調は深緑色をベースに淡緑色の斑点が混じっている。　〔谷若〕

b 臼 玉

**諸特徴**

グリッド毎の出土地点の判明しているものは完形品1,951個、破片[①]75個の計2,026個、出土グリッドの判明しないものは完形品3,300個、破片175個の計3,475個で、出土総数は5,501個にのぼる。

臼玉の材質については、一般的に「滑石製模造品」などと総称されながら実際には硬度や色調、物理的性質などの面でかなりのヴァリエーションが認められ、滑石以外の岩種も多用されているとの指摘がある[②]。本遺跡の場合も変成岩・軟質の材質を基調としつつ、滑石だけではなく緑色片岩など多様な岩種が採用されている。

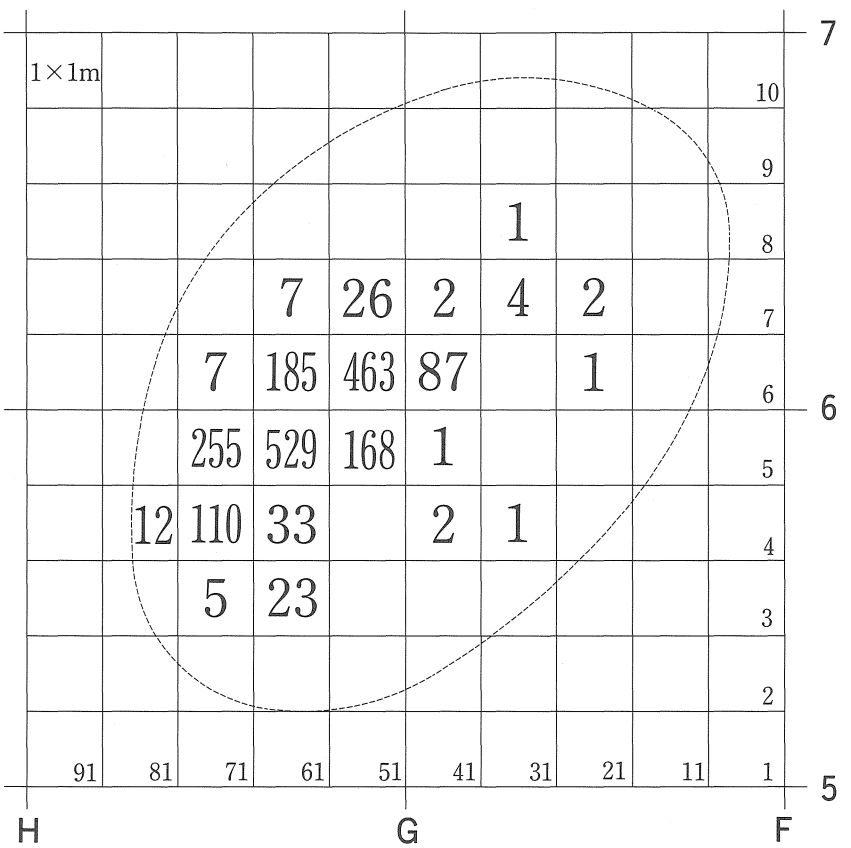



図80　SX01出土の臼玉分布

大きさについてもバラツキがある。表11は出土地点の判明している臼玉完形品に限定して、直径と厚さの相関完形を示したものである。直径については2.8㎜～6.3㎜、厚さについては0.8㎜～5.1㎜の幅がそれぞれある。

表11　臼玉完形品の直径と厚さ（単位：個）

| 直径 ＼㎜ / 厚さ㎜ | 2.8 ｜ 3.1 | 3.2 ｜ 3.5 | 3.6 ｜ 3.9 | 4.0 ｜ 4.3 | 4.4 ｜ 4.7 | 4.8 ｜ 5.1 | 5.2 ｜ 5.5 | 5.6 ｜ 5.9 | 6.0 ｜ 6.3 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 4.8－5.1 | | | | | 2 | | | | | 2 |
| 4.4－4.7 | | | | 3 | 2 | 3 | | | | 8 |
| 4.0－4.3 | | 1 | 2 | 3 | 4 | 4 | 4 | 1 | | 19 |
| 3.6－3.9 | | 3 | 10 | 16 | 23 | 12 | 4 | 5 | 1 | 74 |
| 3.2－3.5 | | 3 | 34 | 47 | 58 | 28 | 9 | 1 | 1 | 181 |
| 2.8－3.1 | | 7 | 78 | 79 | 77 | 34 | 10 | 1 | | 286 |
| 2.4－2.7 | 2 | 18 | 92 | 106 | 84 | 36 | 24 | 1 | | 363 |
| 2.0－2.3 | 3 | 35 | 89 | 105 | 77 | 32 | 14 | 5 | | 360 |
| 1.6－1.9 | 9 | 37 | 85 | 70 | 56 | 38 | 8 | 2 | 1 | 306 |
| 1.2－1.5 | 16 | 63 | 87 | 50 | 38 | 11 | 9 | 3 | | 277 |
| 0.8－1.1 | 8 | 18 | 21 | 19 | 5 | 2 | 2 | | | 75 |
| 計 | 38 | 185 | 498 | 498 | 426 | 200 | 84 | 19 | 3 | 1,951 |

**形　態**　形態については次の4種類に細分した。

臼玉の形態分類

A類　側面（周縁）断面が直線で、円筒形を呈するもの。
B類　側面の中央部が膨らむが、稜をなさずに丸くおさまるもの。
C類　側面中央部が突出し、稜をなすもの。
D類　截頭円錐形を呈するもの。

ただし、4種類に分類しても、なおどれに帰属されるべきか判断し難いものも多い。従って各種類の構成比率を具体的数値で示すことは不能であるが、概ねB＞C＞A＞D類の順序となり、B類とC類の合計が全体の9割前後を占めるものと考えられる。

**調　整**

次に、臼玉表面の調整についてである。側面はすべての臼玉において主軸方向に平行（縦位）の研磨が施されている。一方、上下端面の調整処理は一律ではない。

ここで上下端面の調整処理を次のように記号化してみる。

臼玉上下端面の調整分類

| |
|---|
| a　＝研磨痕のあるもの。 |
| b　＝研磨痕は認められないが、比較的平坦平滑な面を形成するもの。 |
| c　＝未研磨で凹凸の著しいもの |

記号を重複させて両端面の調整状況を表すとすれば、その組み合わせは全部で、aa，ab，ac，bb，bc，cc の6通りである。肉眼観察によれば、これら6通りすべてが認められる。端面に研磨痕が認められる「a」は全体の1～2割程度に過ぎないと考えられるが③、遺物が微小なことなどが理由で判別が困難である。「b」のなかにもその痕跡は確認し得ないが、研磨を施したものもあるかも知れない。また「b」では、工具を使用した調整を施し、端面を平坦に仕上げることを意図したものがあり得る。「端面調整」と先に4種類に分類した「形態」との相関関係については検討を行ったが、明確な関係は指摘できない。

**色　調**

色調については多様であり、いくつもの岩種が採用されていることを示すものである。最も多用されているのは緑色片岩である。大部分の臼玉は、緑青色、黄緑色、黒青色を示す。その他には、乳白色を呈する軟質のもの、黒色を呈する光沢の顕著なもの、淡黄緑色、淡緑色、明緑色を呈する半透明なものがそれぞれ小量ある。

**出土分布**

SX01における臼玉の分布状況は図80に示す通りである。ここでは完形品に限定して、グリッド内に更に設定された1m×1mのブロックごとの分布を表示した。なお、先に触れた出土位置の判明しない3,475個の臼玉は、いずれも発掘調査の段階で土砂ごと取り上げ、後日の水洗選別により確認されたものである。すべてSX01出土の資料ではあるが、詳細な出土位置は不明であり図示はしていない。このように多量の臼玉の詳細な出土位置が不明であることは問題ではあるが、分布密度の大要は示していると考える。

本遺跡のなかで最も濃密な臼玉の分布を示す地点は、SX01－65・56である。SX01ではこれを中心として、放射状に周辺部に向かうにつれて出土分布が希薄になっており、全体で1,924個の臼玉完形品が検出された④。一方、SX01以外の出土は僅かである。出土地点と個数を列挙すると、SX03が21個、竪穴住居（H－8区）が2個、SX02（F－3区）、H－7区、I－6区、P－4区が各1個である。

では次に、各遺構内部における臼玉のミクロな分布に祭祀儀礼にかかわるような特徴を見い出せないであろうか。事実関係に関する二、三の点を指摘して考察を加えたい。まず、特徴的なグループとしてSX01－63とSX03出土の一群がある。SX01―63は、出土個数23個のうち約半数の11個をA類が占めるという点で特異である（6063～6068）。

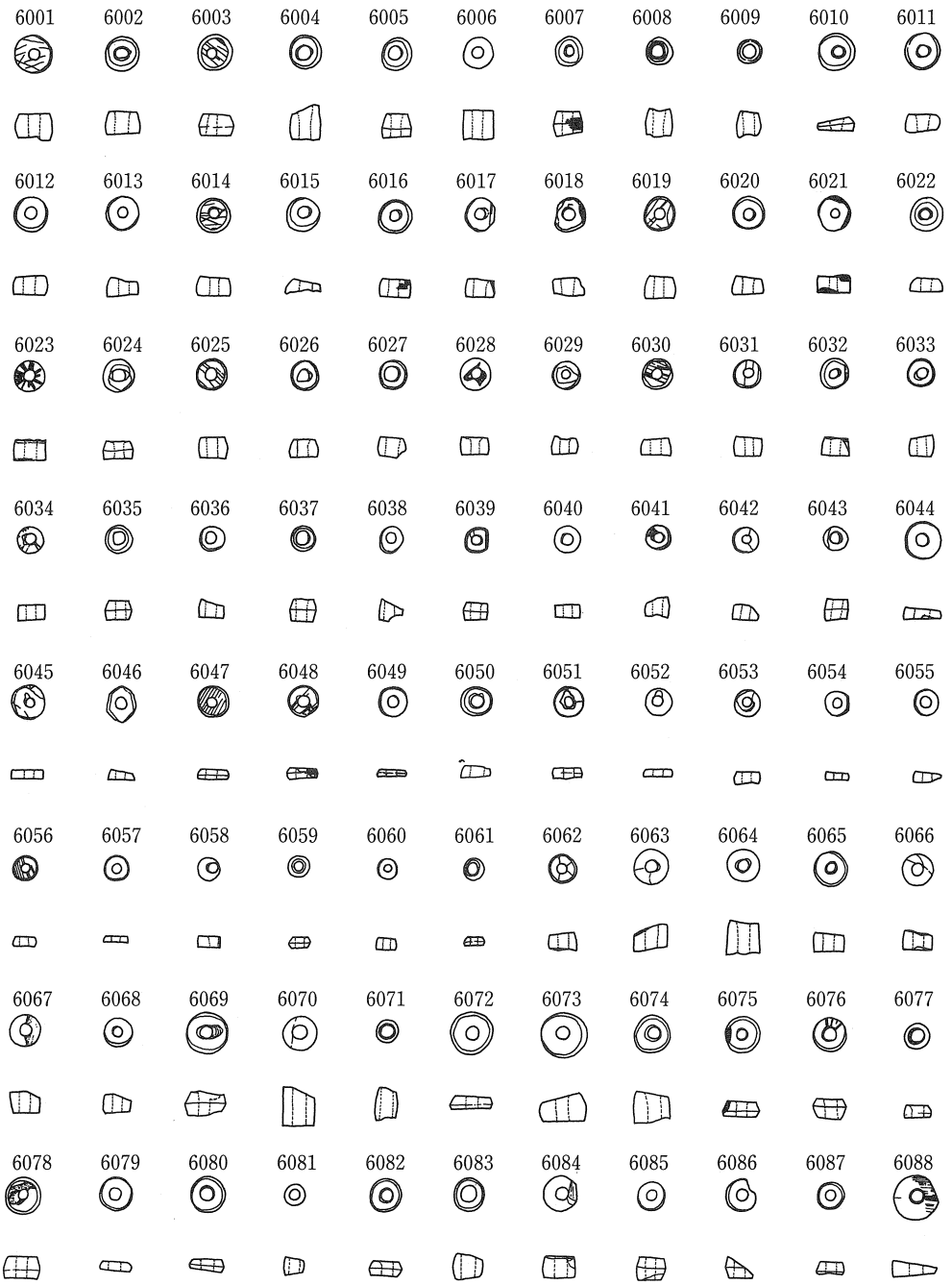

6001 6002 6003 6004 6005 6006 6007 6008 6009 6010 6011
6012 6013 6014 6015 6016 6017 6018 6019 6020 6021 6022
6023 6024 6025 6026 6027 6028 6029 6030 6031 6032 6033
6034 6035 6036 6037 6038 6039 6040 6041 6042 6043 6044
6045 6046 6047 6048 6049 6050 6051 6052 6053 6054 6055
6056 6057 6058 6059 6060 6061 6062 6063 6064 6065 6066
6067 6068 6069 6070 6071 6072 6073 6074 6075 6076 6077
6078 6079 6080 6081 6082 6083 6084 6085 6086 6087 6088
0
5
10cm
1 : 1

図81　石製品(14)

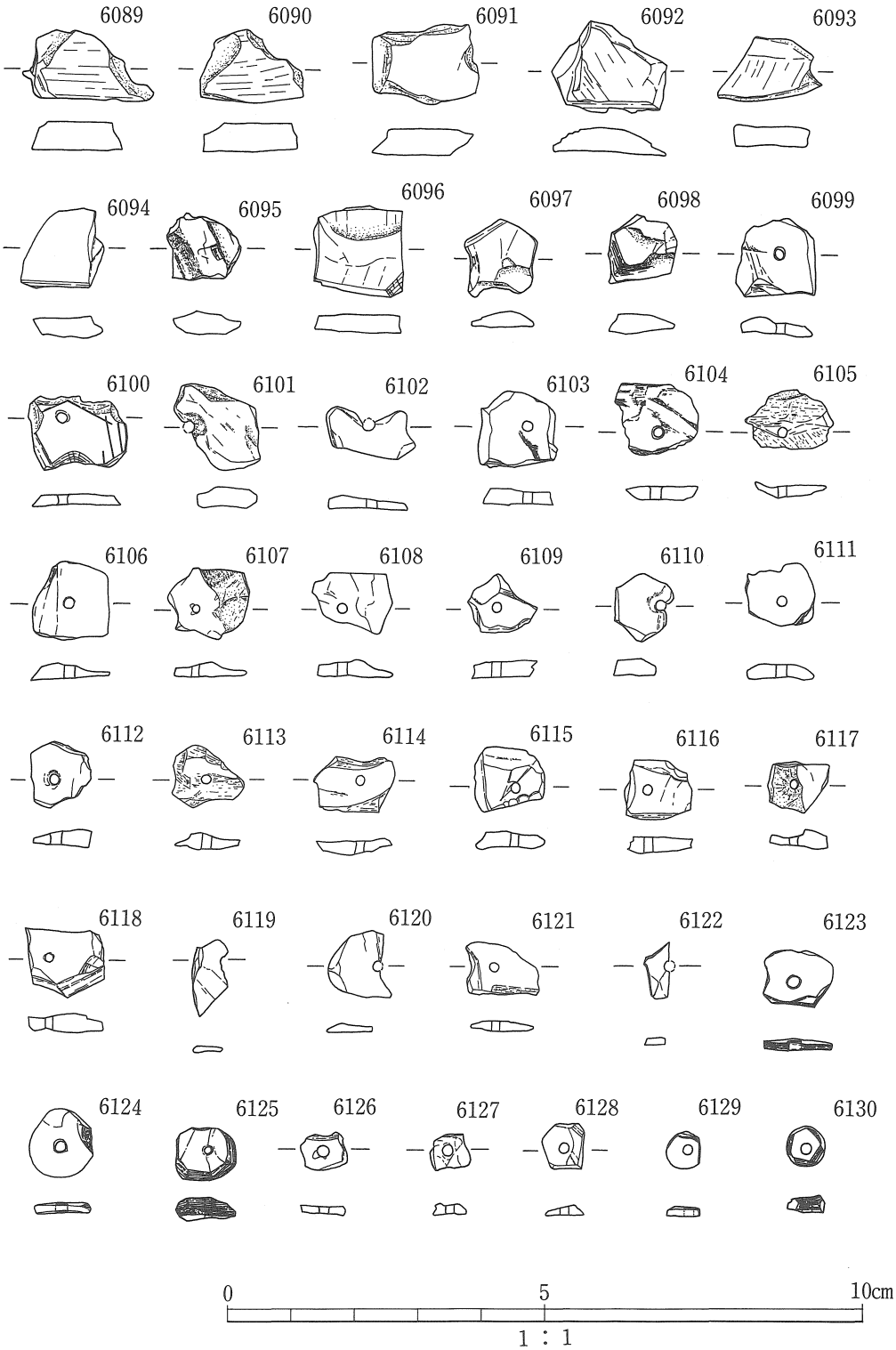

6089
6090
6091
6092
6093
6094
6095
6096
6097
6098
6099
6100
6101
6102
6103
6104
6105
6106
6107
6108
6109
6110
6111
6112
6113
6114
6115
6116
6117
6118
6119
6120
6121
6122
6123
6124
6125
6126
6127
6128
6129
6130
0
5
10cm
1 : 1

図82　石製品(15)

しかも端面はあたかも管玉状のものを打撃により切断したかのようである。SX03は出土個数21個のうち半数近い9個が淡黄緑色ないし淡緑色を呈する半透明な材質によるものであり（6075，6077など）特徴的である。SX01－63とSX03に見られる10個前後の同形もしくは同質の臼玉の集中現象は、同一場所と時間にあるいは同一工人によってそれらが生産され、更に祭祀場の同一箇所に、同時・一括で献納されたものである可能性が濃厚である。これらは、1回の臼玉献納行為の単位なりパターンなりに関連するのかもしれない。またSX01－57では、破片1個を含む合計7個の臼玉が土器中より検出されている[5]。元来土器に納められたまま献納されたのか、祭祀・献納行為の繰り返しのなかで偶然土器中に入り込んだのか確認できないが、前者であるとすればこれもひとつのパターンを示すものである。かつて多数の石製模造品を検出した長野・神坂峠の報告者は、臼玉献納のパターンとして、(a) 一度に多数撒かれる、(b) 他の遺物に副えられることが多いなどのケースを考えるべきだと指摘している[6]。SX01－63・57やSX03の事例は、(b) パターンを想定させるものである。しかし、SX01では、これらを除けば特徴的なグループを抽出することはできなかった。従って、これらにどのようなパターンが用いられているかは不明である。ただ一定の時期幅の中で何十回あるいは何百回という単位の臼玉の献納行為が繰り返されていると考えるのが妥当ではないだかろうか。生産からのプロセスに加えて、祭祀場での複雑、重層的な遺物の集積によってその単位やパターンの抽出が不能になったものと考えたい。

**未製品**

臼玉未製品と考えられる遺物もSX01から多数出土している。ただ、ここでどこまでを臼玉未製品として扱うかに関しては問題があるので、二点について整理しておきたい。

既に上下端面の研磨痕が確認できる臼玉完成品の割合が少ないことについて述べた。また、材質の硬度や砥石の細粗によっては研磨を実施しているにもかかわらず、その痕跡を確認し得ない場合があることや工具を使用した端面調整の可能性についても指摘した通りである。しかし凹凸が著しく、明らかに端面への調整や研磨を実施していないものが多数存在することも事実である。このことは臼玉製作の主眼が一定の形状を満たせばそれでよく、それ以上の要求が徹底したものではなかったからである。従って、基本的には穿孔され、側面研磨がほぼ全周すれば完成品として扱ってよいと思われる。その点で6124はその条件を具備するものであるが、サイズが他の臼玉よりかなり大きく特異である。これについては側面研磨途上のものと理解し未製品に含めたい。

第二に、臼玉未製品か有孔円板未製品か判断の難しいものが、形割工程品や穿孔工程品のなかにかなり存在する。小型精製の有孔円板のなかにも径が1.5cm前後のものがあり、平面形の大きさではここで臼玉未製品として扱ったものと円板との間にギャップの生じない領域もある。従って、臼玉未製品として扱ったものの一部に円板を意図したものが含まれている可能性もある（例えば穿孔部半截の6120，6122など）。ただ、研磨工程の途上にある径1cm前

後のもの（6123，6124）はどうみても円板の製作を意図したものとは考えられない。そうであれば、形割や穿孔工程の途上にある臼玉未製品のなかにそれを上回るサイズのものがあるのは当然であり、径が1.5cm前後の平板状のものには確実に臼玉未製品が存在するものと考えられる。

なお、未製品の材質にも片状な節理を示すものとそうでないものがあり、後者には半透明な材質が多くみられる。

**製作工程の復元**

未製品を検討した結果、基本的な製作工程は、荒割→形割→穿孔→側面調整→研磨（側面、一部端面？）の順序になると考えられる。ただし、程よい大きさ・形状のものが意図する工程より以前に得られた場合には、一工程ないし二工程を省略し、例えば極端な場合においては、荒割→穿孔→研磨というような事例も存在するものと思われる。

以上、結論を先に述べたが、ここで各工程ごとに検討を加えたい。

【荒割工程】

石材の片状節理の性質を利用して、扁平板状品を摘出する作業が基本であり、この板状品から更に数個に形割が行われたものと想定しているが、それを明確に示す荒割工程の遺物は存在しない。また、穿孔工程品のなかに上下端面が不整形で屈曲面をなし、周縁の殆どが面をつくらずササクレ状になるものがある（6104，6105，6111）。これらは、扁平板状品から摘出されたものとは考えられず、塊状を呈する石核から打撃により剝離させられたものである。

【形割工程】

6089～6098が形割工程品である。この工程では工具のみを使用し、あるいは打撃と工具の使用を併用して、切截・切削㋐の作業が行われている。平面形では正方形や正五角形を呈するもの（6096，6097）など等辺の多角形を指向するような形状のものがある反面、不整形のものが多く見受けられる。また大きさでは、上下端面・厚さともに大きいもの(6089～6093)と、いずれも小さいもの（6094～6098）に分かれる。

なお、分割を容易にするためのいわゆる擦切施溝の痕跡は本遺跡では認められない。

【穿孔工程】

穿孔は、上下端面の比較的中央に施されているもの（6099，6112）と、偏って施されたもの（6100，6110）がある。未製品・完成品を通じて孔径は個体によりまちまちであり、また錐ブレの痕跡（6069など）や図示していないが、未貫通孔を有する未製品の穿孔断面を観察すると先端が尖るものや丸くおさまるものがあり、穿孔には多種の錐が使用されていると考えられる。穿孔方向についても未製品・完成品を通じて明確に両面穿孔と考えられるものはなく、すべて片面穿孔であると思われるが、先に錐ブレと称したものが両面穿孔の痕跡の誤認であることも否定はできない。

【側面調整工程】

本遺跡の穿孔工程を終えた未製品の特徴として気がつくのは、上下端面が大きく不整形のものが多いことである。しかし同時に、上下端面が小さいものも（6122，6125～6128）存在し、なかには側面を切削によって丹念に調整したものもある。6125は、側面切削により平面多面形に整形され、楕円形に近い形を呈している。切削は上下両方向からそれぞれ斜面をつくり出すように行なわれているため、側面は中央部が突出し「く」字状の断面になっている。また、既に研磨工程にかかっているもののなかにも同様な切削の痕跡を残しているものがある（6129、6130）。このようなことから、穿孔終了後に側面を整形または調整する工程が存在することは確実である。この工程をここでは「側面調整工程」と呼ぶこととする。

「側面調整工程」では、上記の観察から二種類の作業に分類することができる。第一は、上下端面の平面形の整形に主眼を置き、形割工程で得た大きい不整形の未製品を例えばコーナーを落とすなどして小さく整形していくことであり、いわば形割の継続作業である。ここでは側面を「断ち切る」行為である切截を中心にしながら「削る」行為である切削も併用される。第二は、それに加えて研磨直前の工程として側面の形状を精細に加工整形していくことをも強く意識したものであり、切削が多用される。

【研磨工程】

最終工程は研磨工程である。未製品のなかで一部でも研磨痕が確認できる研磨途上のものは、6123，6124，6129，6130である。臼玉完成品としたものでは、すべてに対して側面全面にわたる研磨が実施される。なかには入念な研磨により、孔壁と側面（周縁）の厚みが非常に薄くなっているもの（6008，6009，6071など）がある反面、なお部分的に前工程までの切截・切削の痕跡を側面に残しているもの（6007，6016～6018など）もかなり見受けられる。端面研磨が認められるものは一部である。臼玉未製品を検出する他の遺跡のなかには、研磨工程が更に荒研磨と仕上げ研磨に分類されるところがあるようだが、本遺跡の場合はそのような区別が全くできない。側面研磨はすべて縦位（主軸に平行）に施されており、横位（主軸に垂直）のものは認められない。既に側面調整工程の項で述べたが、利器を使用した切削による丹念な側面の加工整形の作業が荒研磨を代用する役割を果たしていると考えられる。一方、側面研磨の途中のものも含めて、出土した未製品で端面に研磨痕が確認されるものは一例もない。このことにより、端面研磨は側面研磨の後に実施された可能性が強いが、資料数が少ないため確実とは言えない。

なお、上下端面に放射状に凹線を残しているものがわずかに存在する（6023，6062）。どのような性格・目的によるものか判断できないが、あるいは刃を有する刀子、ノミ、タガネなどの工具痕が最終調整後も残存しているのかもしれない。

**出作遺跡の臼玉製作法**

さて、臼玉の大まかな製作方法については、以前次の四種類が想定された[8]

A　平板石に碁盤目状に直交する溝をいれ、各々の中央に穿孔し、チョコレートのように割るもの。

B　扁平長方形の長細い板材を次々と切断し、正方形の材をつくり、整形・穿孔するもの。

C　板状の扁平石を原材とし、一個分ずつ割り出していくもの。

D　管玉を切断するもの。

これらの方法のうち、本遺跡の臼玉製作技法に近似するのはCであろう。また、荒割工程の項で指摘したように、これらの類例に該当しないものとして、塊状の石核から直接割り出されたものが存在する。ただし、本遺跡では明確に荒割工程品として識別できる資料がないという憾みがあり、資料に基づいて詳述できる状況ではない。また、少なくともAやBの方法は認められないが、Dについては可能性がある[9]。とりわけSX01－63出土の完成品のうちA類（円筒形を呈するもの）の一群については、端面があたかも打撃により断ち切られたような状況を呈するものも含まれており、Dの可能性を彷彿とさせる。しかし、本遺跡では管玉や管玉状品は一点も検出されておらず、可能性を指摘するにとどめたい。

ここで改めて本遺跡の臼玉製作方法の特徴について整理を行っておきたい。

1．形割工程では大きくて不整形の未製品が多い。このため、穿孔終了後の側面調整工程において形割の継続作業が実施される。逆説的に言えば、穿孔の実施時期が比較的早い段階であるとも言える。形割、穿孔終了時における大形・不整形の未製品の存在は、他の遺跡に比した本遺跡の大きな特徴である。

2．形割の作業にいわゆる擦切施溝は認められない。ちなみに福岡・沖ノ島、島根・出雲玉作遺跡、奈良・布留遺跡、千葉・治部台遺跡では擦切施溝が確認されるという[10]。

3．穿孔作業に両面穿孔のものは確認できず、片面穿孔のみと考えられる。一方、奈良・布留遺跡では両面穿孔が行われ、長野・神坂峠では両面穿孔、片面穿孔のいずれもが認められる。

4．側面調整工程には二種類の作業がある。このうち、利器を使用した切削による丹念な側面調整の作業は結果として荒研磨の代用になるものである。穿孔後に切截・切削により側面調整を実施する工程が想定されるのも本遺跡の大きな特徴であり、管見に触れた既出報告には類例がない。

5．研磨は少なくとも穿孔が終わってから実施される。また、未製品のなかには端面研磨のものが一例もない。荒研磨・仕上げ研磨というように研磨が二つに区別して行われた痕跡も確認できない。ちなみに穿孔後に研磨が実施される例としては、島根・出雲玉作遺跡、奈良・布留遺跡があるが、本遺跡もこの一例であろう。これに対して、穿孔前に端面などに荒研磨を施すものが認められる例として、富山・浜山遺跡、新潟・大角地遺跡、千葉・夏見台遺跡、同・治部台遺跡、同・稲荷峰遺跡などがある[11]。

まとめ

現在までに愛媛県内においていわゆる滑石製模造品の生産工房が確認された事例はない。しかし、出作遺跡の滑石製臼玉に多くの未製品が存在するだけでなく、それらから想定される製作工程には指摘した通り県外の生産遺跡と異なる工程順序や要素が確認されるのである。このことは、道後平野南部に所在する出作遺跡周辺の地で滑石製模造品の在地生産が行われたことを一層強く示唆するものである。〔井出〕

C　紡錘車

5276（SX01出土）は、僅かに長円形を呈し、断面が低い台形の紡錘車で、上面の1／4が剝落している。法量は、直径4.6～4.9cm、厚さ0.9cm、重さ27.3gで、中央に孔径0.6cmの円孔が主として上面から穿たれている。整形は、天井から側縁に向けて鉄製工具（ノミ状）で放射状に削剝している。仕上げの研磨は、天井部と裏面と周縁で重点的に施されている。石材は、淡緑色（B類）である。

5277（SX01―55出土）は、形態・調整とも5276と同様の紡錘車であるが、仕上がりはやや粗雑であり、法量的には、直径3.9cm、厚さ0.7cm、孔径0.6cm、重さ18.6gと比較的小振りである。石材は、暗青灰色（C類）である。

〔谷若〕

D　砥石類

7001～7012は擦痕を有する石器であり、主として砥石として使用されたと考えられるが、敲打痕や被敲打痕を共有する例もあり、砥石以外の用途も兼務している。

これらの石器は、形態機能から分類すると、可動＝手持ち用（7001～7003，7012）と定置＝据え置用（7004～7011）に大別される。さらに、材質機能からは、粗＝荒研ぎ用（7002，7008，7009）、中＝中研ぎ用（7001，7003，7010）、密＝仕上げ用（7004～7007，7011）で分けられる。ちなみに、荒研ぎ用には和泉砂岩、中研ぎ用には白色の石英粗面岩、仕上げ用には赤白色の石英粗面岩や結晶片岩が採用されている。また、各使用面は、ほとんど平面であるが、なかに凸面（7003－b・c・d，7008－c，7009－c，7010―a，7012－a～e）や凹面（7009－a・b，7011－a)もある。なお、凹面中に筋状凹部例はない。

以下、各資料を詳述する。

7001は石英粗面岩（白色）製の手持ち中砥石である。使用面は平面6面で、全面に微細な線状擦痕が認められるほか、a面に線状に太い削痕1条が認められる。法量は長さ11.9cm、幅4.0cm、厚さ3.5cm、重さ0.26kgである。

7002は和泉砂岩製の手持ち荒砥石である。使用面は平面2面で、両面とも太めの線状擦痕が斜め方向に確認される。法量は長さ6.5cm、幅2.4cm、厚さ1.9cm、重さ0.05kgである。

7003は石英粗面岩（白色）製の手持ち中砥石で、半身は欠損している。使用面は平面２面、凸面３面の計５面である。凸面ｂ～ｄ面は、平面ａ・ｅ面と接するコーナー付近が重点的に擦られている。ａ・ｅ面中央には被敲打痕（径1.5～2.0cm）が認められる。

7004は石英粗面岩（赤白色）製の据え置き仕上げ砥石の破片である。使用面は平面２面で、ａ面には微細な線状の擦痕が多数認められる。一方ｂ面は、擦痕はないが中央に被敲打痕(径2.0～2.8cm）が認められる。

7005は石英粗面岩（赤白色）製の据え置き仕上げ砥石の破片である。使用面は平面１面で微細な線状の擦痕が多数認められる。

7006は石英粗面岩（白色）製の据え置き仕上げ砥石の破片である。使用面は平面６面である。全面に微細な線状の擦痕多数のほか、ａ～ｃ面先端付近に被敲打痕が認められる。

7007は結晶片岩（緑色）製の据え置き仕上げ砥石の半身である。使用面は平面２面で、両面とも微細な線状の擦痕が多数認められる。なお、擦痕はａ面は縦方向に、ｂ面は不整方向に遺存している。

7008は和泉砂岩製の据え置き荒砥石である。使用面は平面２面、凸面１面の計３面である。各面とも微細な線状擦痕多数と太めの線状擦痕数条が重複して認められる。各面の境となる稜には、敲打痕跡が顕著であり、手持ちの敲打具として兼用されたことが知られる。法量は長さ17.0cm、径7.7～8.5cm、重さ1.45kgである。

7009は和泉砂岩製の据え置き荒砥石で一部欠損している。使用面は凹面２面である。両面とも微細な線状擦痕が斜め方向に多数認められる。

7010はラグビーボール状の石英粗面岩（白色）製の据え置き中砥石である。使用面はやや凸面をなすａ面のみで、不整方向に太細を問わず多様な線状の擦痕や削痕が多数認められる。法量は長さ30.9cm、径13.8～15.3cm、重さ7.83kgである。

7011は、偏平な隅丸長方形を呈する結晶片岩製の据置仕上げ砥石である。使用面は凹面１面のみである。ａ面の凹部（径10～13cm）は不整方向の微細な条痕で器面は滑らかである。また、短辺近くの平坦部には、太めの長い線条痕が重複して認められる。この石器については、調理具類（石皿）として使用された可能性もある。法量は長さ31.3cm、幅19.6cm、厚さ2.2cm、重さ2.54kgである。

7012は、拳大の安山岩製の円礫で、使用面は凸面５面からなる。全面に不整方向の微細な線状擦痕があるほか、ｂ面に敲打痕、ａ・ｃ面に被敲打痕（径2.5～3.0cm）があり、敲石・凹石・擦石の３役を果している。法量は長さ11.5cm、径7.2～9.3cm、重さ1.1kgである。

これら擦痕を有する石器は12点中７点がSX01から、豊富な鉄製品や石製模造品と共に出土した。各石器の出土地点は、いずれも石製模造品（未製品を含む）の集中地点であり、状況的には石製模造品類を対象に使用されたと考えたいが、肉眼観察による限り鉄・石の識別は困難であり、その判断は保留しておく。〔谷若〕

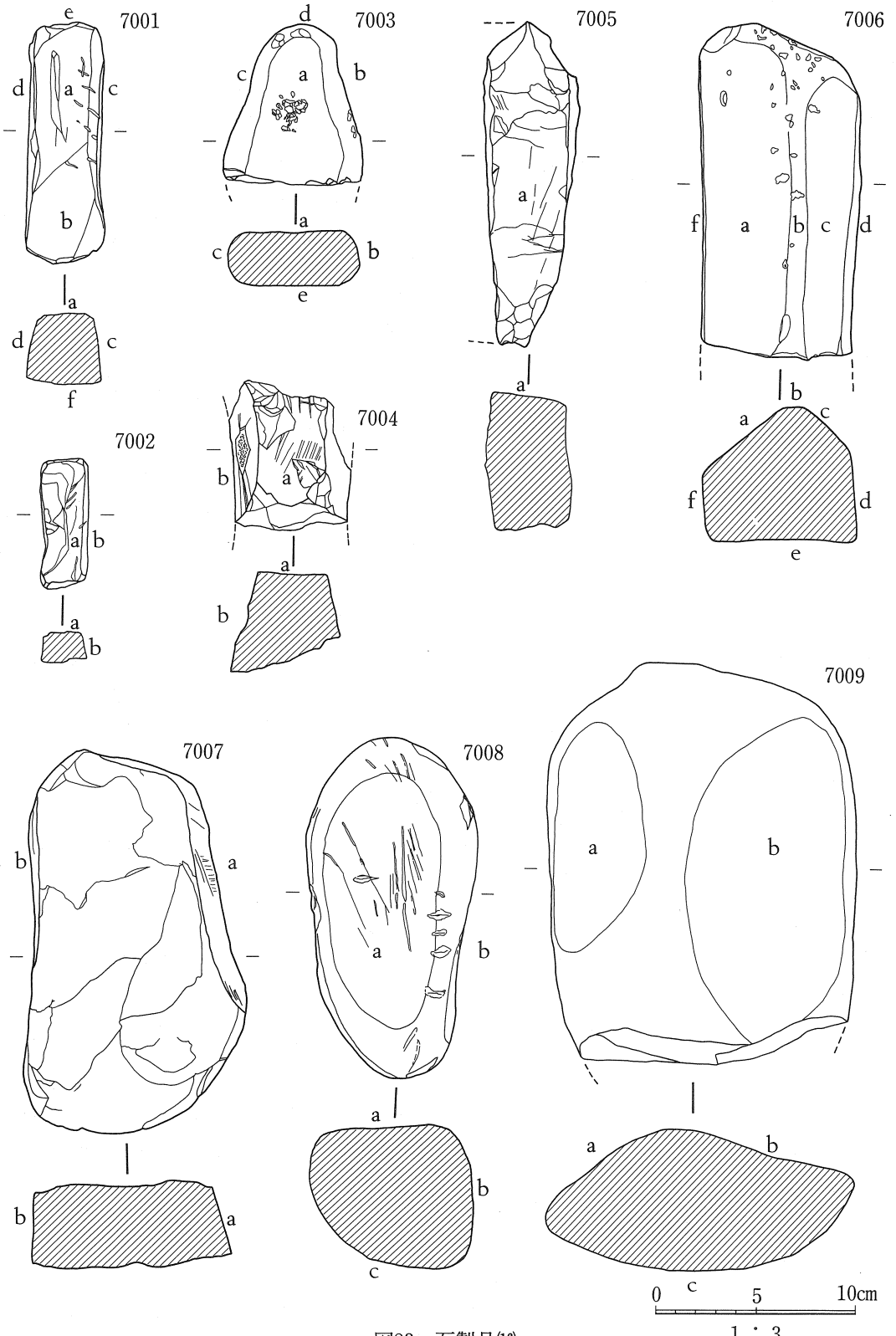



図83　石製品(16)

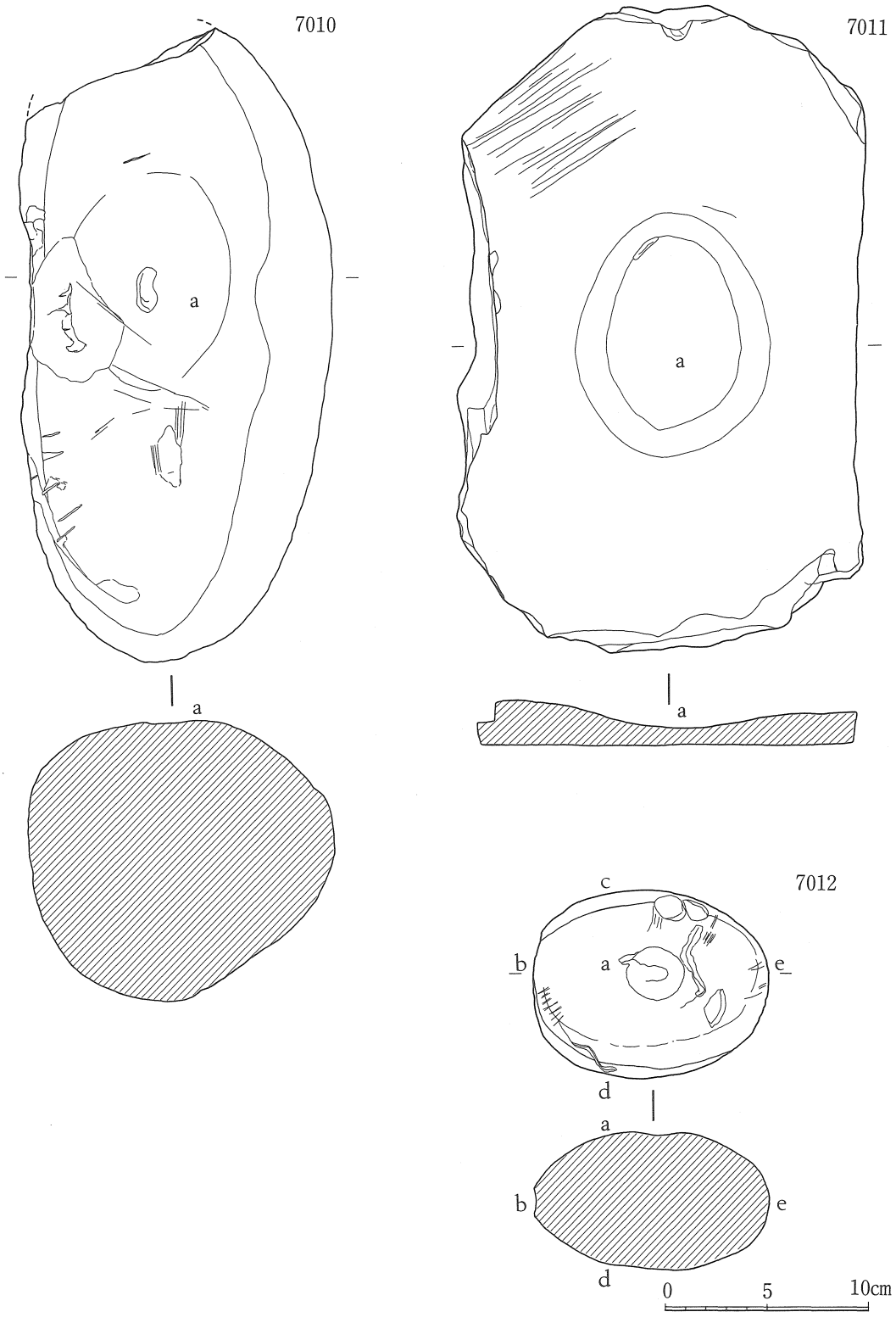



図84　石製品(17)　　1 : 3

## E 小 結

### a 石製模造品製作の実施

出作遺跡（特にSX01）から出土した石製模造品類には未製品が多く、本報告で臼玉の分析所見のまとめで井出氏も述べるように、出作遺跡で石製模造品類の製作が実施された可能性は極めて高い。このことは、石核（5272）や剝片（5273，5274）の存在から明かであり、また、使用石材が在地石材で占められることからも補強される。なお、SX01を中心に各グリッドから出土した砥石類（7001～7012）のすべてが「石」を対象に研磨したとは判断できないが、そのうちのいくつかは石器製作用のものの可能性も十分にある。

このように見てくると、既に鉄器の項で出作遺跡が居住域である可能性を述べたが、該当エリアの南西部で重複する鉄器製作ゾーンと祭祀ゾーンに加えて石製模造品製作ゾーンの存在も追認できるのである。

### b 出作遺跡の石製模造品製作

出作遺跡における各石製模造品の製作工程についての詳細は、個々の項目で復元しているので重複を避けるが、その特徴を概括すると以下の2点に集約される。

①各製品における「穿孔」が比較的早い段階で実施される。

②成形（形割）工程や整形（側面調整）工程の主たる行為は「切削」や「削剝」であり、いわゆる「擦切技法」は存在しない。

そしてこれらの行為には、「穿孔」＝（鉄錐）、「削剝」「切削」＝（鉄刀子ないし鉄鑿）がそれぞれ用いられたと仮想される。

つまり、出作遺跡における石製模造品の製作技法は、鉄製工具の普及と使用を背景として成立した技法であると考えられる。

### c 出作遺跡と石工集団

出作遺跡の石製品のあり方から、石製模造品の製作実態を探ってきたが、これは出作遺跡形成の構成員に石工集団が関与していたことを示すものである。よって出作遺跡を形成した当地の有力首長層は、鍛冶集団に加えて石工集団をも掌握するといったより複合的階級構造を構成していたと考えられる。

最後に石製模造品の流通の問題に触れておきたい。松山平野の古墳時代集落から出土する石製模造品を集成・整理した相田氏は、「有孔円板・勾玉・臼玉については、出作遺跡あるいは周辺工房で生産され、祭祀遺跡をはじめ集落遺跡や古墳の副葬品として流通しているのではないだろうか。」と指摘している。[12]この考えは出作遺跡が、松山平野における古墳時代中期後半から後期前半の石製模造品供給を専業的に担った集落遺跡の可能性を示唆する重要な提言である。今後、該当資料の石材や技法等を具体的に検証し、その当否を検証することは、出作遺跡の歴史的評価に関わる重要な課題である。〔谷若〕

**註**

① ここでは破損して半截したものを破片とし、周縁などを一部破損しながらも、孔壁が潰れずに全周しているものについては完形品として扱った。

② 森谷ひろみ「石製模造品の岩種について」『千葉大学文理学部紀要』第4巻第3号　1965.

③ SX01－65出土の臼玉完形品529個のなかから任意に200個を抽出して調べたところ、1割にあたる20個に研磨痕を確認した。

④ これに破片75個やSX01出土グリッド・ブロックの不明なもの3,475個を加えると、実際のSX01出土総数は計5,474個となる。

⑤ 東京・伊興遺跡では溝状遺構内ではあるが、壷形土器の底部から3個の臼玉が検出されている。四国では、高知・東神木遺跡において蓋をした須恵器杯から30個の小円礫と4個の臼玉が確認されたという。（一山典　「5．A区の調査」大場磐雄・鈴木敏弘編『武蔵伊興遺跡』1975. 岡本健児「四国」大場磐雄編『神道考古学講座』第2巻　雄山閣　1972.）

⑥ 大場磐雄・椙山林継『神坂峠』阿智村教育委員会　1969.

⑦ 寺村光晴氏は刀子状ないしノミ状工具による整形加工を「切截」・「切削」と呼んでいる（寺村光晴『古代玉作形成史の研究』吉川弘文館　1980. 寺村光晴「石工（玉工）」『新版考古学講座』9　雄山閣　1980.）。氏によれば、「切截」とは「断ち切る」ことであり、「切削」とは「削り取る」ことであるとされている。しかし、筆者が出作遺跡の実際の遺物を観察した結果としては、両者の区別が困難な事例も存在する。従って、ここでは寺村氏の定義を念頭におきつつも、実際の遺物の観察の際には、行為を受けた箇所がフラットな面になっているか否かを判断の基準とし、前者を「切削」、後者を「切截」と呼んだ。そのため氏のニュアンスと相違するところがあるかもしれない。即ち、あくまでも工具の使用の有無や工具の種類、使用方法などを重視して用いたものでないことをお断りしておきたい。

⑧ ⑥前掲書。

⑨ ⑥前掲書によれば、長野・神坂峠の遺物の一部にも想定されるものがあるということである。このほかにもいくつかの遺跡で想定されている。

⑩ 置田雅昭「古墳時代手工業の一例－奈良県天理市布留遺跡に於ける玉作り」『国分直一博士古稀記念論集考古篇』　1980.

⑪ ⑩前掲書や寺村光晴氏の一連の編集・著作（『古代玉作の研究』吉川弘文館　1966.『下総国の玉作遺跡』雄山閣　1974.『古代玉作形成史の研究』吉川弘文館　1980.）、下津谷達男・岡崎文喜ほか『夏見台』ニューサイエンス社　1967. などによる。

⑫ 相田則美「道後平野における古墳時代の集落内祭祀」『松山大学構内遺跡』松山市教育委員会　1991.

表12　　出作遺跡出土の石製模造品一覧

| 番号 | 出土地点 | 器種 | 形態 | 穿孔 | 研磨 | 削剝 | 切削 | 剝離 | 工程 | 長さ | 幅 | 厚さ | 重さ | 材 | 残存 | 諸　特　徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 5001 | SX01−63 | 勾玉 | A | 1＋＊ | a b c | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅲ | 3.6 | 2.4 | 0.6 | 9.1 | C | 100 | 穿孔中途痕1. |
| 5002 | SX03−01 | 勾玉 | A | 1 | a b c | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅲ | 3.7 | 2.2 | 0.5 | 7.8 | C | 100 | |
| 5003 | SX01−75 | 勾玉 | A | 1 | a b c | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅲ | 3.4 | 1.8 | 0.4 | 4.3 | B | 100 | |
| 5004 | H−6 | 勾玉 | B | 1 | a b c | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅲ | 3.1 | 1.8 | 0.4 | 3.5 | B | 100 | |
| 5005 | SX01−75 | 勾玉 | B | 1 | a b c | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅲ | 3.0 | 1.8 | 0.4 | 3.5 | B | 100 | |
| 5006 | SX01 | 勾玉 | B | 1 | a b c | ＊＊＊ | ＊＊ c | ＊＊＊ | Ⅲ | 2.6 | 1.3 | 0.5 | 2.9 | B | 100 | |
| 5007 | SX01−75 | 勾玉 | B | 1 | a b c | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅲ | 3.2 | 1.8 | 0.2 | 2.2 | B | 70 | 完成後頭部欠損. |
| 5008 | SX01−66 | 勾玉 | B | 1 | a b c | a b ＊ | ＊＊ c | ＊＊＊ | Ⅲ | 2.7 | 2.0 | 0.5 | 4.2 | C | 100 | 頭部側縁に切削痕顕著. |
| 5009 | SX01 | 勾玉 | B | 1 | a b c | ＊＊＊ | ＊＊ c | ＊＊＊ | Ⅲ | 2.1 | 1.1 | 0.3 | 1.1 | C | 100 | 胴部表面に削剝痕顕著. |
| 5010 | SX01−66 | 勾玉 | C | 1 | a b c | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅲ | 1.7 | 1.1 | 0.1 | 0.7 | A | 100 | |
| 5011 | SX01 | 勾玉 | C | 1 | a b c | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅲ | 1.5 | 0.9 | 0.3 | 0.5 | A | 100 | |
| 5012 | SX01 | 勾玉 | C | 1 | a b c | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅲ | 1.3 | 0.9 | 0.2 | 0.4 | C | 100 | |
| 5013 | SX01−55 | 勾玉 | C | 1 | ＊＊ c | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅲ | 1.5 | 1.1 | 0.2 | 0.7 | C | 100 | |
| 5014 | SX01−66 | 勾玉 | C | 1 | ＊＊ c | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅲ | 1.5 | 0.9 | 0.1 | 0.4 | C | 100 | |
| 5015 | SX01 | 勾玉 | C | 0 | a b c | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅱb | 1.6 | 1.1 | 0.2 | 0.7 | B | 100 | |
| 5016 | SX01−66 | 勾玉 | C | 0 | a b c | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅱb | 2.0 | 1.3 | 0.2 | 1.0 | B | 100 | |
| 5017 | SX01 | 勾玉 | ? | 0 | ＊＊ c | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅱb | 2.9 | 2.2 | 0.3 | 2.5 | C | 100 | |
| 5018 | SX01 | 勾玉 | ? | 0 | a ＊ c | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅱa | 3.2 | 1.2 | 0.7 | 3.3 | B | 100 | |
| 5019 | SX01−73 | 勾玉 | ? | 0 | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊ c | Ⅱa | 5.5 | 2.0 | 1.1 | 12.3 | B | 100 | |
| 5020 | SX01-66 | 勾玉 | ? | 0 | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊ c | Ⅱa | 2.9 | 1.7 | 0.5 | 2.5 | B | 100 | |
| 5021 | SX01-66 | 勾玉 | ? | 0 | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | 1 | 4.0 | 2.1 | 0.5 | 6.7 | C | 100 | |
| 5022 | SX01 | 剣形 | A | 1 | a b c | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅲ | 5.2 | 1.9 | 0.4 | 6.2 | A | 100 | |
| 5023 | SX01-55 | 剣形 | B | 1 | a b c | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅲ | 3.1 | 2.0 | 0.3 | 2.8 | C | 100 | |
| 5024 | SX01-46 | 剣形 | A | ? | a b c | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅲ | 1.9 | 1.6 | 0.4 | 0.8 | B | 40 | 完成後欠損. |
| 5025 | SX01-66 | 剣形 | A | 1 | a b c | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅲ | 3.3 | 1.6 | 0.3 | 3.0 | B | 50 | 完成後先茎部欠損. |
| 5026 | SX01-55 | 剣形 | A | 0 | a ＊ c | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅱb | 3.8 | 1.2 | 0.3 | 1.8 | A | 100 | |
| 5027 | SX01-57 | 剣形 | A | 0 | a b c | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅱb | 2.7 | 1.1 | 0.3 | 1.0 | B | 100 | |
| 5028 | SX01-66 | 剣形 | A | 2 | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊ c | Ⅱb | 3.3 | 1.5 | 0.3 | 1.6 | C | 100 | |
| 5029 | SX01-75 | 剣形 | A | 1 | a b ＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅱb | 3.0 | 1.2 | 0.3 | 1.7 | B | 70 | 製作中先端欠損. |
| 5030 | SX01-65 | 剣形 | A | 0 | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊ c | Ⅱa | 3.4 | 1.4 | 0.6 | 3.2 | B | 100 | |
| 5031 | SX01 | 剣形 | A | 0 | ＊＊ c | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅱa | 3.7 | 1.5 | 0.6 | 3.2 | B | 100 | |
| 5032 | SX01-55 | 剣形 | A | 0 | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅰ | 4.5 | 1.9 | 0.6 | 4.4 | B | 100 | |
| 5033 | T-5 | 剣形 | A | 0 | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅰ | 3.2 | 1.9 | 0.4 | 3.1 | B | 100 | |
| 5034 | SX01-56 | 円板 | A1 | 2a | a b c | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅲ | 3.5 | 3.7 | 0.2 | ? | A | 95 | 完成後欠損. |
| 5035 | SX01-56 | 円板 | A1 | 2a | a b c | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅲ | 2.5 | 2.7 | 0.2 | ? | B | 100 | |
| 5036 | SX01-65 | 円板 | A1 | 2a | a b c | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅲ | 2.4 | 2.4 | 0.2 | 2.2 | B | 100 | |
| 5037 | SX01-55 | 円板 | A1 | 2b | a b c | ＊＊＊ | ＊＊ c | ＊＊＊ | Ⅲ | 2.8 | 3.0 | 0.4 | 4.3 | B | 100 | |
| 5038 | SX01 | 円板 | A1 | 2b | ＊＊ c | a b ＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅲ | 3.0 | 2.6 | 0.3 | 3.9 | B | 90 | 完成後欠損. |
| 5039 | SX01-66 | 円板 | A1 | 2b | a b c | ＊＊＊ | ＊＊ c | ＊＊＊ | Ⅲ | 2.6 | 2.7 | 0.2 | 2.9 | C | 100 | |
| 5040 | SX01-66 | 円板 | A1 | 2b | a b c | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅲ | 2.6 | 2.6 | 0.3 | 4.1 | B | 100 | |
| 5041 | SX01-75 | 円板 | A1 | 2b | a b c | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅲ | 2.6 | 2.6 | 0.3 | 3.4 | A | 90 | 完成後破損. |
| 5042 | SX01-66 | 円板 | A1 | 2b | a b c | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅲ | 2.3 | 2.4 | 0.4 | 4.0 | B | 100 | |
| 5043 | SB01 | 円板 | A1 | 2a | ＊＊ c | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅲ | 2.3 | 2.4 | 0.4 | 3.4 | C | 100 | |
| 5044 | SX01 | 円板 | A1 | 2b | a b c | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅲ | 2.2 | 2.3 | 0.3 | 3.0 | B | 100 | |
| 5045 | SX01-55 | 円板 | A1 | 2b＊ | ＊＊ c | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅲ | 2.3 | 2.0 | 0.3 | 1.8 | A | 90 | 完成後欠損. |
| 5046 | SX01? | 円板 | A1 | 2b | a b c | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅲ | 2.0 | 1.9 | 0.3 | 1.8 | B | 100 | |

| 番号 | 出土地点 | 器種 | 形態 | 穿孔 | 研磨 | 削剝 | 切削 | 剝離 | 工程 | 長さ | 幅 | 厚さ | 重さ | 材 | 残存 | 諸　特　徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 5047 | SX01-66 | 円板 | A1 | 2b | ＊＊c | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅲ | 2.0 | 1.9 | 0.3 | 1.5 | A | 100 | |
| 5048 | SX01? | 円板 | A1 | 2b | a b c | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅲ | 1.8 | 1.9 | 0.3 | 1.6 | A | 100 | |
| 5049 | SX01? | 円板 | A1 | 2b | a b c | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅲ | 1.8 | 1.8 | 0.3 | 2.1 | A | 100 | |
| 5050 | SX01-55 | 円板 | A1 | 2c＋＊ | a b c | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅲ | 3.8 | 4.3 | 0.6 | 12.7 | B | 100 | 未穿孔１，切削痕顕著. |
| 5051 | SX01-66 | 円板 | A1 | 2c | a b c | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅲ | 3.2 | 3.5 | 0.3 | 6.1 | C | 100 | |
| 5052 | SX01-66 | 円板 | A1 | 2c | a＊c | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅲ | 2.9 | 2.7 | 0.4 | 5.6 | B | 100 | |
| 5053 | SX01? | 円板 | A1 | 2c | a b c | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅲ | 2.5 | 2.7 | 0.2 | 2.8 | B | 100 | 切削痕顕著. |
| 5054 | SX01-66 | 円板 | A1 | 2c | a b c | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅲ | 2.5 | 2.6 | 0.3 | 4.2 | B | 100 | |
| 5055 | SX01-55 | 円板 | A1 | 2c | a b c | ＊＊＊ | ＊＊c | ＊＊＊ | Ⅲ | 2.7 | 2.5 | 0.5 | 6.2 | B | 100 | |
| 5056 | SX01-55 | 円板 | A1 | 2c | a b c | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅲ | 2.5 | 2.6 | 0.3 | 3.2 | B | 100 | |
| 5057 | SX01-43 | 円板 | A1 | 2c | a b c | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅲ | 2.2 | 2.6 | 0.2 | 3.1 | B | 100 | |
| 5058 | SX01 | 円板 | A1 | 2c | a b c | ＊b＊ | ＊＊＊ | ＊＊c | Ⅲ | 2.3 | 2.4 | 0.4 | 3.0 | A | 100 | |
| 5059 | SX01-66 | 円板 | A1 | 2c | a b c | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅲ | 2.2 | 2.2 | 0.3 | 2.6 | B | 100 | |
| 5060 | SX01-47 | 円板 | A1 | 2c | a b c | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅲ | 2.3 | 2.3 | 0.3 | 2.7 | B | 80 | 完成後欠損. |
| 5061 | SX01-74 | 円板 | A1 | 2c | a b c | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅲ | 2.2 | 2.2 | 0.4 | 2.8 | A | 100 | |
| 5062 | SX01? | 円板 | A1 | 2c | a b c | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅲ | 1.9 | 2.1 | 0.2 | 1.6 | C | 100 | |
| 5063 | SX01? | 円板 | A1 | 2c | a b c | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅲ | 1.9 | 2.0 | 0.2 | ? | C | 100 | |
| 5064 | SX01-74 | 円板 | A1 | 1a | a b c | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅲ | 5.1 | 5.1 | 0.5 | 21.9 | A | 100 | |
| 5065 | SX01-66 | 円板 | A1 | 1a | a b c | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅲ | 3.5 | 3.8 | 0.4 | 10.2 | A | 95 | 完成後欠損. |
| 5066 | SX01-66 | 円板 | A1 | 1a | a b c | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅲ | 3.3 | 3.7 | 0.4 | 10.4 | A | 100 | |
| 5067 | SX01-66 | 円板 | A1 | 1a | a b c | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅲ | 3.2 | 3.4 | 0.3 | 6.9 | A | 100 | |
| 5068 | SX01? | 円板 | A1 | 1a | a b c | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅲ | 3.1 | 3.0 | 0.4 | 8.0 | A | 100 | |
| 5069 | SX01-36 | 円板 | A1 | 1a | a b c | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅲ | 3.0 | 2.9 | 0.4 | 6.2 | A | 100 | |
| 5070 | SX01? | 円板 | A1 | 1a | a b c | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅲ | 2.5 | 2.4 | 0.4 | 3.0 | B | 100 | |
| 5071 | SX01-55 | 円板 | A1 | 1a | a b c | ＊＊＊ | ＊＊c | ＊＊＊ | Ⅲ | 2.3 | 2.4 | 0.3 | 3.8 | A | 100 | |
| 5072 | SX01 | 円板 | A1 | 1a＋＊ | a b c | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅲ | 2.3 | 2.3 | 0.3 | 2.9 | B | 100 | 未穿孔１. |
| 5073 | SX01-66 | 円板 | A1 | 1a | ＊＊c | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅲ | 2.1 | 2.3 | 0.4 | 4.3 | B | 100 | |
| 5074 | SX01? | 円板 | A1 | 1a | a b c | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅲ | 2.1 | 2.3 | 0.2 | 1.8 | C | 100 | |
| 5075 | SX01? | 円板 | A1 | 1a | a b c | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅲ | 2.1 | 2.1 | 0.4 | 2.4 | B | 100 | |
| 5076 | SX01? | 円板 | A1 | 1a | a b c | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅲ | 1.9 | 2.0 | 0.3 | 2.1 | A | 100 | |
| 5077 | SX01? | 円板 | A1 | 1a | a b c | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅲ | 1.7 | 1.6 | 0.4 | 1.4 | B | 100 | |
| 5078 | SX01-55 | 円板 | A1 | 1a＊ | a b c | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅲ | 1.9 | 1.7 | 0.2 | 1.1 | B | 40 | 完成後欠損. |
| 5079 | SX01-66 | 円板 | A1 | 1a | a＊c | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅲ | 2.0 | 1.6 | 0.3 | 1.2 | A | 40 | 完成後欠損. |
| 5080 | SX01-65 | 円板 | A1 | 1＊ | a b c | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅲ | 0.8 | 1.5 | 0.2 | 0.5 | B | 30 | 完成後欠損. |
| 5081 | SX01-66 | 円板 | A1 | 2a＋＊ | ＊＊＊ | a＊＊ | ＊＊c | ＊＊＊ | Ⅱb | 2.0 | 2.8 | 0.5 | 3.6 | B | 100 | 未穿孔２. |
| 5082 | SX01? | 円板 | A1 | 2a | ＊＊＊ | a＊＊ | ＊＊c | ＊＊＊ | Ⅱb | 2.0 | 2.2 | 0.4 | 2.0 | B | 100 | |
| 5083 | SX01-56 | 円板 | A1 | 2c | ＊b＊ | ＊b＊ | ＊＊c | ＊＊＊ | Ⅱb | 2.2 | 2.3 | 0.4 | 3.5 | C | 100 | |
| 5084 | SX01-47 | 円板 | A1 | 1a | ＊＊＊ | a b＊ | ＊＊c | ＊＊＊ | Ⅱb | 3.3 | 3.1 | 0.6 | 7.4 | C | 100 | 切削痕顕著. |
| 5085 | SX01-65 | 円板 | A1 | 1b | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊c | ＊＊c | Ⅱb | 2.5 | 2.5 | 0.3 | 2.4 | C | 100 | |
| 5086 | SX01-66 | 円板 | A1 | 1b | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊c | ＊＊＊ | Ⅱb | 2.3 | 2.1 | 0.3 | 1.9 | A | 100 | |
| 5087 | SX01-66 | 円板 | A1 | 1b＊ | ＊＊c | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅱb | 1.8 | 1.4 | 0.3 | 0.9 | B | 60 | 穿孔時欠損. |
| 5088 | SX01-66 | 円板 | A1 | 2c＊ | ＊＊c | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅱa | 2.4 | 2.5 | 0.2 | 2.8 | A | 95 | 穿孔時欠損，押圧穿孔. |
| 5089 | SX01-65 | 円板 | A2 | 2a | a b c | ＊＊＊ | ＊＊c | ＊＊c | Ⅲ | 2.7 | 3.0 | 0.3 | 4.1 | A | 100 | |
| 5090 | SX01-65 | 円板 | A2 | 2a | a b c | ＊＊＊ | ＊＊c | ＊＊＊ | Ⅲ | 2.4 | 3.1 | 0.4 | 4.8 | A | 100 | |
| 5091 | SX01-66 | 円板 | A2 | 2a | ＊＊c | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅲ | 2.5 | 2.7 | 0.3 | 3.2 | B | 100 | |
| 5092 | SX01-65 | 円板 | A2 | 2a | a b c | ＊＊＊ | ＊＊c | ＊＊＊ | Ⅲ | 2.3 | 2.6 | 0.3 | 3.8 | B | 100 | |
| 5093 | SX01-55 | 円板 | A2 | 2a＋＊ | ＊＊c | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅲ | 2.3 | 2.1 | 0.3 | 2.5 | A | 100 | |
| 5094 | SX01? | 円板 | A2 | 2a | a b c | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅲ | 2.0 | 2.2 | 0.3 | 1.6 | B | 100 | |

| 番号 | 出土地点 | 器種 | 形態 | 穿孔 | 研磨 | 削剝 | 切削 | 剝離 | 工程 | 長さ | 幅 | 厚さ | 重さ | 材 | 残存 | 諸　特　徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 5095 | SX01? | 円板 | A2 | 2a | a b c | * * * | * * * | * * * | Ⅲ | 1.9 | 2.2 | 0.4 | 2.6 | C | 100 | |
| 5096 | SX01-57 | 円板 | A2 | 2b | a b c | * * * | * * * | * * * | Ⅲ | 2.5 | 3.1 | 0.2 | 3.3 | C | 100 | |
| 5097 | SX01-66 | 円板 | A2 | 2b | a b c | * * * | * * c | * * * | Ⅲ | 2.7 | 2.8 | 0.3 | 5.0 | B | 100 | |
| 5098 | SX01-64 | 円板 | A2 | 2b | a b c | * * * | * * * | * * * | Ⅲ | 2.3 | 2.8 | 0.3 | 3.7 | B | 95 | 完成後欠損. |
| 5099 | SX01-65 | 円板 | A2 | 2c | a b c | * * * | * * * | * * * | Ⅲ | 2.1 | 2.3 | 0.4 | 3.0 | B | 100 | |
| 5100 | SX01-75 | 円板 | A2 | 2c | a b c | * * * | * * * | * * * | Ⅲ | 2.1 | 2.3 | 0.3 | 2.7 | B | 100 | |
| 5101 | SX01? | 円板 | A2 | 2b | a b c | * * * | * * * | * * * | Ⅲ | 1.9 | 2.5 | 0.4 | 3.8 | B | 100 | |
| 5102 | SX01-66 | 円板 | A2 | 2b | a b c | a * * * | * c | * * * | Ⅲ | 1.9 | 2.1 | 0.4 | 2.2 | A | 100 | |
| 5103 | SX01-66 | 円板 | A2 | 2b | a b c | * * * | * * * | * * * | Ⅲ | 1.9 | 2.1 | 0.3 | 1.9 | B | 95 | 完成後欠損. |
| 5104 | SX01-64 | 円板 | A2 | 2b | a b c | * * * | * * c | * * * | Ⅲ | 1.8 | 2.1 | 0.3 | 2.4 | B | 100 | |
| 5105 | SX01-66 | 円板 | A2 | 2b | a b c | * * * | * * * | * * * | Ⅲ | 1.9 | 1.9 | 0.2 | 1.1 | A | 100 | |
| 5106 | SX01? | 円板 | A2 | 2b | a b c | * * * | * * * | * * * | Ⅲ | 2.9 | 3.4 | 0.3 | 5.6 | A | 100 | |
| 5107 | SX01-83 | 円板 | A2 | 2c* | a b c | * * * | * * * | * * * | Ⅲ | 3.2 | 3.0 | 0.3 | 6.0 | A | 70 | 穿孔1，完成後欠損. |
| 5108 | SX01-66 | 円板 | A2 | 2c | a b c | * * * | * * * | * * * | Ⅲ | 2.3 | 3.4 | 0.3 | 3.7 | B | 100 | |
| 5109 | SX01-66 | 円板 | A2 | 2c | a b c | * * * | * * * | * * * | Ⅲ | 2.5 | 2.8 | 0.3 | 4.6 | B | 100 | |
| 5110 | SX01-56 | 円板 | A2 | 2c | a b c | * * * | * * * | * * * | Ⅲ | 2.5 | 3.2 | 0.3 | 5.0 | C | 100 | |
| 5111 | SX01-66 | 円板 | A2 | 2c | a b c | * * * | * * * | * * * | Ⅲ | 2.4 | 3.1 | 0.6 | 6.9 | B | 100 | |
| 5112 | SX01-73 | 円板 | A2 | 2c | a b c | * * * | * * * | * * * | Ⅲ | 2.7 | 2.9 | 0.3 | 3.9 | B | 100 | |
| 5113 | SX01? | 円板 | A2 | 2b+* | a b c | * b * | * * * | * * * | Ⅲ | 2.0 | 2.7 | 0.3 | 2.5 | A | 100 | 未穿孔1. |
| 5114 | SX01-75 | 円板 | A2 | 2c | a b c | a b * | * * c | * * * | Ⅲ | 2.2 | 2.7 | 0.6 | 5.3 | B | 100 | |
| 5115 | SX01-75 | 円板 | A2 | 2c* | a b c | * * * | * * * | * * * | Ⅲ | 1.5 | 2.3 | 0.2 | 1.1 | A | 50 | 完成後欠損. |
| 5116 | SX01-64 | 円板 | A2 | 2c | a b c | * * * | * * * | * * * | Ⅲ | 1.7 | 1.8 | 0.3 | 1.1 | B | 100 | |
| 5117 | SX01? | 円板 | A2 | 1a | a b c | * * * | * * * | * * * | Ⅲ | 3.2 | 2.9 | 0.4 | 7.0 | A | 100 | |
| 5118 | SX01? | 円板 | A2 | 1a | a b c | * * * | * * * | * * * | Ⅲ | 1.7 | 2.1 | 0.2 | 1.2 | B | 100 | |
| 5119 | SX01? | 円板 | A2 | 1a | a b c | * * * | * * * | * * * | Ⅲ | 2.1 | 1.6 | 0.3 | 1.8 | B | 100 | |
| 5120 | SX03-151 | 円板 | A2 | 1b | a b c | * * * | * * * | * * * | Ⅲ | 1.9 | 1.6 | 0.3 | 1.2 | B | 100 | |
| 5121 | SX01-66 | 円板 | A2 | 2b** | a * c | * * * | * * * | * * * | Ⅱb | 1.4 | 1.1 | 0.2 | 0.4 | A | 40 | 穿孔時欠損. |
| 5122 | SX01-75 | 円板 | A2 | 2b* | * * c | * * * | * * * | * * * | Ⅱb | 1.9 | 2.2 | 0.5 | 2.2 | A | 90 | 穿孔時欠損. |
| 5123 | SX03 | 円板 | A2 | 1b | a * * | * * * | * * * | * * * | Ⅱb | 1.7 | 1.4 | 0.3 | 0.9 | B | 100 | |
| 5124 | SX01-76 | 円板 | A2 | 1a | * * * | a * * | * * c | * * c | Ⅱb | 1.1 | 1.8 | 0.2 | 0.8 | C | 100 | |
| 5125 | SX01-64 | 円板 | A2 | 1b | a b * | * * * | * * c | * * * | Ⅱb | 2.1 | 2.6 | 0.3 | 2.4 | B | 100 | |
| 5126 | SX01-66 | 円板 | A2 | 1b | * * * | * * * | * * c | * * * | Ⅱb | 1.7 | 1.9 | 0.5 | 1.8 | C | 100 | |
| 5127 | SX01 | 円板 | A2 | 1b* | * * c | * * * | * * * | * * * | Ⅱa | 1.4 | 1.0 | 0.3 | 0.5 | B | 100 | 未穿孔1. |
| 5128 | SX01-55 | 円板 | A2 | 0 | a * c | * * * | * * * | * * c | Ⅱa | 3.3 | 2.6 | 0.7 | 8.0 | B | 100 | |
| 5129 | SX01? | 円板 | A2 | 0 | * * c | * * * | * * * | * * * | Ⅱa | 2.2 | 1.5 | 0.3 | 1.6 | B | 100 | |
| 5130 | SX01-66 | 円板 | B1 | 2a | a b c | * b * | * * c | * * * | Ⅲ | 3.5 | 3.6 | 0.5 | 11.5 | C | 100 | |
| 5131 | SX01-55 | 円板 | B1 | 2a* | a b c | * * * | * * c | * * * | Ⅲ | 2.6 | 1.5 | 0.3 | 2.2 | C | 50 | 完成後欠損. |
| 5132 | SX01-57 | 円板 | B1 | 2b | a b c | * * * | * * * | * * * | Ⅲ | 2.6 | 2.7 | 0.2 | 3.0 | B | 100 | |
| 5133 | SX01? | 円板 | B1 | 2b | a b c | * * * | * * * | * * * | Ⅲ | 2.3 | 2.3 | 0.5 | 4.0 | C | 100 | |
| 5134 | SX01? | 円板 | B1 | 2b | a b c | * * * | * * * | * * * | Ⅲ | 1.6 | 1.5 | 0.2 | 1.0 | B | 80 | 完成後欠損. |
| 5135 | SX01-74 | 円板 | B1 | 2c | a b c | * * * | * * * | * * * | Ⅲ | 2.4 | 1.9 | 0.3 | 2.4 | B | 60 | 完成後欠損. |
| 5136 | SX01-66 | 円板 | B1 | 2c | a b c | * * * | * * c | * * * | Ⅲ | 2.4 | 2.2 | 0.2 | 2.2 | A | 100 | |
| 5137 | SX01 | 円板 | B1 | 2c | a b c | * * * | * * * | * * * | Ⅲ | 2.1 | 2.2 | 0.3 | 2.2 | A | 100 | |
| 5138 | SX01? | 円板 | B1 | 2c | a b c | * * * | * * * | * * * | Ⅲ | 2.0 | 2.2 | 0.2 | 1.4 | A | 90 | 完成後欠損. |
| 5139 | SX01-64 | 円板 | B1 | 2c | a b c | * b * | * * c | * * * | Ⅲ | 2.3 | 2.2 | 0.2 | 2.0 | B | 100 | |
| 5140 | SX01-65 | 円板 | B1 | 2c | a b c | * * * | * * * | * * * | Ⅲ | 1.7 | 1.6 | 0.4 | 1.1 | B | 100 | |
| 5141 | SX01-45 | 円板 | B1 | 1a | a b c | * * * | * * * | * * * | Ⅲ | 3.2 | 3.4 | 0.4 | 12.9 | A | 100 | |
| 5142 | SX01-66 | 円板 | B1 | 1a | a b c | * * * | * * * | * * * | Ⅲ | 2.0 | 1.9 | 0.4 | 2.3 | B | 100 | |

| 番号 | 出土地点 | 器種 | 形態 | 穿孔 | 研磨 | 削剝 | 切削 | 剝離 | 工程 | 長さ | 幅 | 厚さ | 重さ | 材 | 残存 | 諸　特　徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 5143 | SX01-47 | 円板 | B1 | 1a | abc | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅲ | 2.0 | 2.0 | 0.3 | 1.5 | C | 100 | |
| 5144 | SX03-152 | 円板 | B1 | 1a | abc | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅲ | 1.7 | 1.9 | 0.3 | 1.7 | B | 100 | |
| 5145 | SX01? | 円板 | B1 | 1a | abc | ＊＊＊ | ＊＊c | ＊＊＊ | Ⅲ | 1.6 | 1.7 | 0.5 | 2.6 | C | 100 | |
| 5146 | SX01-66 | 円板 | B1 | 1a | a＊c | ＊＊＊ | ＊＊c | ＊＊＊ | Ⅲ | 1.7 | 1.6 | 0.3 | 1.5 | C | 100 | |
| 5147 | SX01-35 | 円板 | B1 | 1b | abc | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅲ | 2.0 | 1.8 | 0.3 | 1.5 | B | 100 | |
| 5148 | SX01-65 | 円板 | B1 | 1b | abc | ab＊ | ＊＊c | ＊＊＊ | Ⅲ | 1.8 | 1.4 | 0.4 | 2.0 | B | 70 | 完成後欠損. |
| 5149 | SX01-66 | 円板 | B1 | 2b＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅱb | 1.5 | 1.6 | 0.2 | 0.7 | A | 90 | 穿孔時欠損. |
| 5150 | SX01? | 円板 | B1 | 2c | ab＊ | ＊b＊ | ＊＊c | ＊＊＊ | Ⅱb | 2.0 | 2.2 | 0.3 | 2.4 | B | 100 | 切削痕顕著. |
| 5151 | SX01? | 円板 | B1 | 2c＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅱb | 1.5 | 1.5 | 0.3 | 0.7 | C | 80 | 穿孔時欠損. |
| 5152 | SX01-56 | 円板 | B1 | 1a | ＊＊＊ | a＊＊ | ＊＊c | ＊＊＊ | Ⅱb | 2.2 | 1.9 | 0.4 | 2.0 | B | 100 | |
| 5153 | SX01-65 | 円板 | B1 | 1a | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊c | ＊＊＊ | Ⅱb | 1.8 | 1.7 | 0.3 | 1.2 | B | 100 | |
| 5154 | SX01-66 | 円板 | B1 | 1a | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊c | ＊＊＊ | Ⅱb | 1.5 | 1.4 | 0.2 | 0.6 | C | 100 | |
| 5155 | SX01-46 | 円板 | B1 | 1b | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊c | ＊＊c | Ⅱb | 2.8 | 3.1 | 0.5 | 5.8 | A | 100 | |
| 5156 | SX03 | 円板 | B1 | 1b | a＊c | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅱb | 2.6 | 2.4 | 0.4 | 4.3 | B | 100 | |
| 5157 | SX01-65 | 円板 | B1 | 1b | ＊＊＊ | a＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊c | Ⅱb | 2.2 | 2.3 | 0.4 | 2.1 | B | 100 | |
| 5158 | SX01-55 | 円板 | B1 | 1b | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊c | ＊＊＊ | Ⅱb | 1.9 | 2.1 | 0.4 | 2.3 | B | 100 | |
| 5159 | SX01-66 | 円板 | B1 | 1b | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊c | ＊＊＊ | Ⅱb | 1.8 | 1.9 | 0.3 | 1.4 | A | 100 | |
| 5160 | SX01-64 | 円板 | B1 | 1b | ＊＊＊ | ＊b＊ | ＊＊c | ＊＊c | Ⅱb | 1.7 | 1.9 | 0.3 | 1.4 | B | 100 | |
| 5161 | SX01? | 円板 | B1 | 1b | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊c | Ⅱb | 1.7 | 2.1 | 0.2 | 1.5 | B | 100 | |
| 5162 | SX01-66 | 円板 | B1 | 1b | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅱb | 1.7 | 1.6 | 0.3 | 1.5 | B | 100 | |
| 5163 | SX01-46 | 円板 | B1 | 1b | ＊＊＊ | a＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅱb | 1.2 | 1.6 | 0.2 | 0.8 | B | 100 | |
| 5164 | SX01? | 円板 | B1 | 1b | ＊＊＊ | a＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅱb | 1.7 | 1.5 | 0.4 | 1.0 | B | 70 | 整形時欠損. |
| 5165 | SX01-65 | 円板 | B | 1＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅱb | 1.1 | 1.7 | 0.2 | 0.8 | B | 40 | 穿孔時欠損. |
| 5166 | SX01-65 | 円板 | B | 1＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅱb | 1.0 | 1.4 | 0.1 | 0.3 | A | 40 | 穿孔時欠損. |
| 5167 | SX01 | 円板 | B1 | 0 | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊c | ＊＊＊ | Ⅱa | 2.9 | 2.6 | 0.6 | 6.7 | B | 100 | |
| 5168 | SX01-06 | 円板 | B2 | 2a＋＊ | abc | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅲ | 2.2 | 3.1 | 0.4 | 3.4 | B | 100 | 未穿孔1(1b). |
| 5169 | SX01? | 円板 | B2 | 2a | abc | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅲ | 1.2 | 1.4 | 0.2 | 0.7 | C | 100 | |
| 5170 | SX01-73 | 円板 | B2 | 2b | abc | a＊＊ | ＊＊c | ＊＊＊ | Ⅲ | 3.1 | 3.7 | 0.5 | 13.5 | B | 100 | |
| 5171 | SX01? | 円板 | B2 | 2b | abc | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅲ | 2.7 | 3.1 | 0.4 | ? | B | 100 | |
| 5172 | SX01-66 | 円板 | B2 | 2b | abc | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅲ | 2.3 | 3.1 | 0.3 | 3.7 | B | 100 | |
| 5173 | SX01-85 | 円板 | B2 | 2b | abc | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅲ | 2.1 | 2.9 | 0.4 | 4.1 | B | 100 | |
| 5174 | SX01-66 | 円板 | B2 | 2b | abc | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅲ | 2.0 | 2.4 | 0.3 | 2.8 | C | 100 | |
| 5175 | SX01-66 | 円板 | B2 | 2b | ab＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅲ | 1.9 | 2.3 | 0.2 | 2.5 | B | 100 | |
| 5176 | SX01-66 | 円板 | B2 | 2b | a＊c | ＊＊＊ | ＊＊c | ＊＊＊ | Ⅲ | 2.5 | 1.6 | 0.4 | 2.4 | A | 100 | |
| 5177 | SX01? | 円板 | B2 | 2b | ＊bc | a＊＊ | ＊＊c | ＊＊＊ | Ⅲ | 2.0 | 2.1 | 0.3 | 2.0 | B | 100 | |
| 5178 | SX03-035 | 円板 | B2 | 2b | abc | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅲ | 1.5 | 2..2 | ? | 1.7 | B | 100 | |
| 5179 | SX01-56 | 円板 | B2 | 2b | abc | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅲ | 1.5 | 1.7 | 0.3 | 1.1 | A | 100 | |
| 5180 | SX01-74 | 円板 | B2 | 2b | abc | ＊＊＊ | ＊＊c | ＊＊＊ | Ⅲ | 1.4 | 1.6 | 0.4 | 1.5 | A | 100 | |
| 5181 | SX01-73 | 円板 | B2 | 2c | abc | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅲ | 2.9 | 3.3 | 0.3 | 5.7 | C | 100 | |
| 5182 | SX01? | 円板 | B2 | 2c | abc | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅲ | 2.9 | 3.1 | 0.3 | 4.8 | A | 100 | |
| 5183 | SX01? | 円板 | B2 | 2c | abc | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅲ | 2.3 | 3.1 | 0.4 | 5.3 | B | 100 | |
| 5184 | SX01-66 | 円板 | B2 | 2c＋＊ | ＊＊c | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊c | Ⅲ | 3.0 | 2.4 | 0.4 | 3.9 | A | 100 | 未穿孔1(1b). |
| 5185 | SX01-57 | 円板 | B2 | 2c | abc | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅲ | 2.3 | 2.6 | 0.3 | 4.6 | C | 100 | |
| 5186 | SX01 | 円板 | B2 | 2c | abc | ＊＊＊ | ＊＊c | ＊＊＊ | Ⅲ | 2.0 | 2.3 | 0.4 | 3.4 | B | 100 | |
| 5187 | SX01-75 | 円板 | B2 | 2c＊ | abc | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅲ | 2.2 | 2.4 | 0.3 | 3.2 | B | 90 | 完成後欠損. |
| 5188 | SX01? | 円板 | B2 | 2c＋＊ | abc | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅲ | 1.8 | 2.4 | 0.5 | 2.4 | B | 100 | 未穿孔1(1a) |
| 5189 | SX03 | 円板 | B2 | 2c | abc | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | Ⅲ | 1.8 | 2.0 | 0.3 | 1.9 | C | 100 | |
| 5190 | SX01-66 | 円板 | B2 | 2c | abc | ab＊ | ＊＊c | ＊＊＊ | Ⅲ | 1.6 | 1.9 | 0.2 | 1.3 | A | 100 | |

| 番号 | 出土地点 | 器種 | 形態 | 穿孔 | 研磨 | 削剝 | 切削 | 剝離 | 工程 | 長さ | 幅 | 厚さ | 重さ | 材 | 残存 | 諸　特　徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 5191 | SX01-66 | 円板 | B2 | 2c | abc | *** | *** | *** | Ⅲ | 1.5 | 2.2 | 0.4 | 1.9 | C | 100 | |
| 5192 | SX01-66 | 円板 | B2 | 1a | abc | *** | **c | *** | Ⅲ | 2.1 | 2.6 | 0.5 | 4.3 | B | 100 | |
| 5193 | SX01? | 円板 | B2 | 1a | a*c | *** | **c | *** | Ⅲ | 2.1 | 1.4 | 0.2 | 1.4 | B | 100 | |
| 5194 | SX01 | 円板 | B2 | 1a | **c | *** | **c | *** | Ⅲ | 1.9 | 1.5 | 0.2 | 0.9 | B | 100 | |
| 5195 | SX01? | 円板 | B2 | 1a | abc | *** | **c | *** | Ⅲ | 1.3 | 1.2 | 0.2 | 0.6 | B | 100 | |
| 5196 | SX01-64 | 円板 | B2 | 2c* | *** | *** | **c | *** | Ⅱb | 2.3 | 1.4 | 0.5 | 1.5 | C | 70 | 穿孔時欠損. |
| 5197 | SX01-74 | 円板 | B2 | 1a | *** | *** | **c | **c | Ⅱb | 2.1 | 1.5 | 0.4 | 2.3 | A | 100 | |
| 5198 | SX01? | 円板 | B2 | 1a | *** | *** | *** | **c | Ⅱb | 1.9 | 1.7 | 0.4 | 1.6 | B | 100 | |
| 5199 | SX01-73 | 円板 | B2 | 1a | *** | *** | **c | *** | Ⅱb | 1.6 | 1.8 | 0.4 | 1.8 | A | 100 | |
| 5200 | SX01-65 | 円板 | B2 | 1b | *** | *** | **c | *** | Ⅱb | 1.8 | 2.1 | 0.3 | 1.9 | B | 100 | |
| 5201 | SX01? | 円板 | B2 | 1b | *** | *** | **c | *** | Ⅱb | 1.5 | 1.9 | 0.4 | 2.0 | B | 100 | |
| 5202 | SX01? | 円板 | B2 | 1b | *** | *** | *** | *** | Ⅱb | 1.3 | 1.8 | 0.3 | 0.9 | A | 100 | |
| 5203 | SX01 | 円板 | B2 | 1b | ***a | b** | **c | *** | Ⅱb | 1.5 | 1.3 | 0.3 | 0.5 | A | 100 | |
| 5204 | SX01-65 | 円板 | B2 | 0 | ***a | b** | *** | *** | Ⅱa | 3.9 | 2.6 | 0.8 | 10.2 | B | 100 | |
| 5205 | SX01-66 | 円板 | B2 | 0 | ***a | *** | *** | **c | Ⅱa | 3.1 | 1.7 | 0.5 | 4.0 | B | 100 | |
| 5206 | SX01 | 円板 | B2 | 0 | *** | *** | **c | *** | Ⅰ | 2.4 | 2.7 | 0.2 | 2.5 | B | 100 | |
| 5207 | SX01-56 | 円板 | C | 2a | abc | *** | **c | *** | Ⅲ | 2.5 | 2.6 | 0.2 | 3.0 | C | 100 | |
| 5208 | SX01 | 円板 | C | 2a | abca | *** | **c | *** | Ⅲ | 3.1 | 2.1 | 0.4 | 4.0 | A | 100 | 切削痕顕著. |
| 5209 | SX01-66 | 円板 | C | 2a | abc | *** | *** | *** | Ⅲ | 2.3 | 2.2 | 0.2 | 2.0 | B | 100 | |
| 5210 | SX01? | 円板 | C | 2b | abc | *** | *** | *** | Ⅲ | 1.8 | 2.3 | 0.3 | 1.6 | B | 100 | |
| 5211 | SX01-66 | 円板 | C | 2b | abc | *** | **c | *** | Ⅲ | 1.7 | 1.7 | 0.2 | 1.0 | C | 100 | |
| 5212 | SX01? | 円板 | C | 2b* | **c | *** | *** | *** | Ⅲ | 1.7 | 1.9 | 0.2 | 1.0 | A | 70 | 完成後欠損. |
| 5213 | SX01-66 | 円板 | C | 2c | abca | *** | **c | *** | Ⅲ | 2.7 | 2.9 | 0.5 | 5.6 | B | 100 | |
| 5214 | SX01-56 | 円板 | C | 2b | abc | *** | **c | *** | Ⅲ | 2.8 | 2.7 | 0.4 | 4.2 | B | 100 | |
| 5215 | SX01-66 | 円板 | C | 2c | abc | *** | *** | **c | Ⅲ | 2.5 | 2.6 | 0.3 | 2.4 | B | 100 | |
| 5216 | SX01-65 | 円板 | C | 2c | abc | *** | **c | *** | Ⅲ | 2.4 | 2.5 | 0.3 | 2.8 | C | 100 | |
| 5217 | SX01 | 円板 | C | 2c | *** | *** | **c | **c | Ⅲ | 2.1 | 2.6 | 0.3 | 0.8 | A | 100 | 押圧穿孔. |
| 5218 | SX01-66 | 円板 | C | 1a | *bca | b** | *** | *** | Ⅲ | 3.5 | 3.6 | 0.5 | 9.5 | C | 100 | 切削・削剝顕著,削剝穿孔. |
| 5219 | SX01 | 円板 | C | 1b | abc | *bc | **c | *** | Ⅲ | 2.7 | 2.7 | 0.4 | 3.9 | B | 100 | |
| 5220 | SX01-65 | 円板 | C | 1b | a*c | *** | **c | *** | Ⅲ | 1.8 | 1.9 | 0.2 | 1.6 | B | 100 | |
| 5221 | SX01-65 | 円板 | C | 1* | **c | *** | *** | *** | Ⅲ | 0.8 | 1.5 | 0.1 | 0.3 | A | 30 | 完成後欠損. |
| 5222 | SX01? | 円板 | C | 2a* | *** | *b* | *** | *** | Ⅱb | 1.6 | 1.4 | 0.2 | 0.5 | A | 60 | 穿孔時欠損. |
| 5223 | SX01-56 | 円板 | C | 2b | *** | ab* | **c | *** | Ⅱb | 3.7 | 2.8 | 1.0 | 14.2 | C | 100 | 切削・削剝痕顕著. |
| 5224 | SX01-65 | 円板 | C | 1a | **c | ab* | **c | *** | Ⅱb | 2.2 | 1.8 | 0.4 | 1.7 | A | 100 | |
| 5225 | SX01 | 円板 | C | 2b* | abc | *** | *** | *** | Ⅱb | 1.8 | 1.9 | 0.3 | 1.5 | B | 100 | 未穿孔1. |
| 5226 | SX01-66 | 円板 | C | 2c* | ab* | *** | **c | *** | Ⅱb | 1.6 | 1.8 | 0.2 | 1.3 | A | 85 | 穿孔時欠損. |
| 5227 | SX01-55 | 円板 | C | 1a | *** | a** | **c | *** | Ⅱb | 2.4 | 2.4 | 0.3 | 2.4 | C | 100 | |
| 5228 | SX01? | 円板 | C | 1a | *** | a** | **c | *** | Ⅱb | 2.5 | 2.2 | 0.4 | 2.7 | B | 100 | |
| 5229 | SX01 | 円板 | C | 1a | *** | *** | **c | *** | Ⅱb | 1.7 | 1.7 | 0.4 | 1.4 | B | 100 | |
| 5230 | SX01? | 円板 | C | 1a | *** | *** | *** | *** | Ⅱb | 2.0 | 1.4 | 0.4 | 1.4 | B | 100 | |
| 5231 | SX01-66 | 円板 | C | 1a | a** | *** | *** | **c | Ⅱb | 2.1 | 1.3 | 0.3 | 1.1 | A | 100 | |
| 5232 | SX01-66 | 円板 | C | 1b | abc | *** | **c | *** | Ⅱb | 3.4 | 3.8 | 0.6 | 9.9 | B | 100 | |
| 5233 | SX01-57 | 円板 | C | 1b | *** | *** | *** | **c | Ⅱb | 3.7 | 3.1 | 0.5 | 6.6 | B | 100 | |
| 5234 | SX01-66 | 円板 | C | 1b | *** | *** | *** | *** | Ⅱb | 1.9 | 3.1 | 0.2 | 1.5 | A | 100 | 押圧穿孔. |
| 5235 | SX01-66 | 円板 | C | 1b | *** | ab* | **c | *** | Ⅱb | 2.7 | 1.4 | 0.3 | 2.0 | C | 100 | |
| 5236 | SX01? | 円板 | C | 1b | *** | *** | **c | *** | Ⅱb | 2.0 | 2.4 | 0.3 | 1.5 | B | 100 | |
| 5237 | SX01? | 円板 | C | 1b | *** | *** | **c | *** | Ⅱb | 2.1 | 2.1 | 0.3 | 2.2 | B | 100 | |
| 5238 | SX01-66 | 円板 | C | 1b | *** | a** | **c | *** | Ⅱb | 2.1 | 1.9 | 0.4 | 2.1 | C | 100 | |

| 番号 | 出土地点 | 器種 | 形態 | 穿孔 | 研磨 | 削剝 | 切削 | 剝離 | 工程 | 長さ | 幅 | 厚さ | 重さ | 材 | 残存 | 諸　特　徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 5239 | SX01? | 円板 | C | 1b | ＊＊＊ | a＊＊ | ＊＊c | ＊＊＊ | IIb | 2.0 | 2.0 | 0.4 | 2.2 | A | 100 | |
| 5240 | SX01? | 円板 | C | 1b | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | IIb | 2.1 | 1.9 | 0.5 | 1.8 | B | 100 | |
| 5241 | SX01-65 | 円板 | C | 1b | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊c | ＊＊＊ | IIb | 1.8 | 1.7 | 0.2 | 1.4 | C | 100 | |
| 5242 | SX01-54 | 円板 | C | 1b | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | IIb | 1.4 | 2.2 | 0.4 | 1.7 | B | 100 | |
| 5243 | SX01-57 | 円板 | C | 1b | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | IIb | 1.5 | 1.7 | 0.2 | 0.9 | A | 100 | |
| 5244 | SX01? | 円板 | C | 1b | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊c | ＊＊＊ | IIb | 2.0 | 1.3 | 0.3 | 1.2 | C | 100 | |
| 5245 | SX01? | 円板 | C | 1b＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | IIb | 1.5 | 1.6 | 0.2 | 0.5 | A | 95 | 穿孔時欠損. |
| 5246 | SX01? | 円板 | C | 1b | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | IIb | 1.7 | 1.2 | 0.2 | 0.6 | B | 100 | |
| 5247 | SX01-66 | 円板 | C | 1b | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊c | ＊＊＊ | IIb | 1.5 | 1.5 | 0.3 | 0.8 | C | 100 | |
| 5248 | SX01-66 | 円板 | C | 1b | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊c | ＊＊＊ | IIa | 1.6 | 2.6 | 0.5 | 2.4 | A | 100 | |
| 5249 | SX01-65 | 円板 | C | 2a＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊c | ＊＊＊ | IIa | 2.4 | 2.5 | 0.4 | 2.7 | B | 100 | 両側未穿孔1. |
| 5250 | SX01 | 円板 | C | 2b＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | IIa | 3.7 | 3.3 | 0.6 | 10.9 | B | 100 | 未穿孔2. |
| 5251 | SX01-74 | 円板 | C | 1a＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊c | ＊＊c | IIa | 4.1 | 4.6 | 0.8 | 9.4 | B | 100 | 未穿孔. |
| 5252 | SX01-65 | 円板 | C | 1b＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊c | IIa | 2.1 | 1.8 | 0.3 | 1.5 | B | 100 | 未穿孔. |
| 5253 | SX01-74 | 円板 | C | 0 | abc | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | IIa | 3.5 | 3.9 | 0.5 | 12.9 | A | 100 | |
| 5254 | SX01-64 | 円板 | C | 0 | ＊＊＊ | a＊＊ | ＊＊c | ＊＊＊ | IIa | 2.7 | 2.7 | 0.7 | 5.2 | B | 100 | |
| 5255 | SX01 | 円板 | C | 0 | ＊＊＊ | ab＊ | ＊＊c | ＊＊c | IIa | 3.3 | 3.0 | 0.5 | 6.8 | B | 100 | |
| 5256 | SX01-75 | 円板 | C | 0 | ＊＊＊ | ab＊ | ＊＊c | ＊＊＊ | IIa | 2.6 | 3.1 | 0.6 | 6.6 | C | 100 | |
| 5257 | SX01-66 | 円板 | C | 0 | ＊＊＊ | a＊＊ | ＊＊c | ＊＊＊ | IIa | 2.6 | 2.4 | 0.5 | 5.8 | B | 100 | |
| 5258 | SX01? | 円板 | C | 0 | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊c | IIa | 2.4 | 2.0 | 0.5 | 3.3 | B | 100 | |
| 5259 | SX01 | 円板 | C | 0 | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊c | ＊＊＊ | IIa | 1.8 | 2.0 | 0.2 | 1.1 | B | 100 | |
| 5260 | SX01-65 | 円板 | C | 0 | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊c | ＊＊c | IIa | 2.5 | 1.4 | 0.5 | 3.1 | B | 100 | |
| 5261 | SX01-66 | 円板 | C | 0 | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊c | I | 4.5 | 5.3 | 0.6 | 18.3 | A | 100 | 大型剝片. |
| 5262 | SX01-65 | 円板 | C | 0 | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | I | 5.0 | 4.7 | 0.8 | 19.6 | A | 100 | 大型剝片. |
| 5263 | SX01-74 | 円板 | C | 0 | ＊＊＊ | a＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | I | 4.1 | 4.7 | 0.6 | 10.8 | A | 100 | 大型剝片，自然面. |
| 5264 | SX01-56 | 円板 | C | 0 | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊c | ＊＊＊ | I | 5.5 | 4.5 | 0.8 | 21.3 | B | 100 | 大型剝片. |
| 5265 | SX01? | 円板 | C | 0 | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | I | 3.4 | 3.0 | 0.9 | 8.5 | B | 100 | |
| 5266 | SX01-75 | 円板 | C | 0 | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊c | ＊＊＊ | I | 3.3 | 3.1 | 0.4 | 4.5 | B | 100 | |
| 5267 | SX01-55 | 円板 | C | 0 | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | I | 2.2 | 3.8 | 0.6 | 6.1 | B | 100 | |
| 5268 | SX01-75 | 円板 | C | 0 | ＊＊＊ | a＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊c | I | 2.2 | 3.0 | 0.7 | 4.8 | A | 100 | |
| 5269 | SX01-66 | 円板 | C | 0 | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊c | I | 2.2 | 2.8 | 0.5 | 2.9 | A | 100 | |
| 5270 | SX01-55 | 円板 | C | 0 | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊c | I | 1.8 | 1.6 | 0.3 | 1.1 | B | 100 | |
| 5271 | SX01-55 | 円板 | C | 0 | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | I | 2.0 | 1.4 | 0.2 | 0.7 | B | 100 | |
| 5272 | SX01 | 石核 | － | － | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | abc | － | 3.7 | 4.4 | 2.7 | 41.9 | A | 100 | 剝離面5（不整方向）. |
| 5273 | SX01 | 剝片 | － | － | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊c | － | 7.5 | 3.3 | 0.9 | 22.9 | B | 100 | |
| 5274 | SX01-75 | 剝片 | － | － | ＊＊＊ | ＊＊a | ＊＊＊ | ＊＊c | － | 7.6 | 1.8 | 1.3 | 24.2 | B | 100 | |
| 5275 | L-7 | 剝片 | － | － | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊c | － | 5.7 | 2.6 | 0.9 | 17.3 | C | 100 | 剣形？ |
| 5276 | SX01 | 紡錘 | A | 1 | abc | a＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | III | 4.9 | 4.6 | 0.9 | 27.3 | B | 90 | 完成後剝落. |
| 5277 | SX01-55 | 紡錘 | A | 1 | abc | a＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | III | 3.9 | 3.7 | 0.6 | 18.6 | C | 100 | |
| 5278 | SX03 | 勾玉 | － | － | abc | ＊＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | － | 1.5 | 1.0 | 0.9 | 2.1 | － | 50 | 完成後欠損. |

※項目：穿孔の中でアラビア数字直後の(＊)は、穿孔後欠損した孔の存在と数を表している。
　　また、アラビア数字直後の(＋＊)は、未貫通の穿孔痕の存在と数を表している。
※項目：研磨～剝離の中で、アルファベットは、a＝表面，b＝裏面，c＝周縁を指している。
　　調整確認部位はアルファベットを記入し、無調整例は＊を記入している。

表13　　出作遺跡出土の臼玉観察表

単位：mm

| No. | 出土地点 | 直径 | 厚さ | 孔径 | 色　　調 | 形状・端面調整 | 諸　　特　　徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 6001 | S X01-65 | 5.1 | 3.6 | 1.7 | 灰色 | B　a c | |
| 6002 | 〃 | 4.9 | 3.1 | 1.9 | 黄緑色 | B　b b | |
| 6003 | 〃 | 4.9 | 3.0 | 1.4 | 淡褐色 | C　a a | 穿孔位置がやや偏る。 |
| 6004 | 〃 | 4.8 | 4.6 | 2.1 | 黄褐色 | B？　c c | 側面の一部に不明瞭な稜あり。 |
| 6005 | 〃 | 4.6 | 3.3 | 1.8 | 黒青色 | C　b c | |
| 6006 | 〃 | 4.3 | 4.1 | 1.5 | 青褐色 | A　b c | 一端面が中窪みになる。 |
| 6007 | 〃 | 4.2 | 3.5 | 1.8 | 黒青色 | C　b c | 側面に傷あり。 |
| 6008 | 〃 | 4.0 | 3.9 | 2.3 | 黄緑色 | B　c c | 孔壁と側面との厚みが薄い。 |
| 6009 | 〃 | 3.7 | 3.8 | 1.7 | 褐色 | B　？？ | 孔壁と側面との厚みが薄い。 |
| 6010 | 〃 | 5.3 | 1.9 | 1.6 | 黒青色 | C　b b | 両端面は平行でなく、傾斜面。 |
| 6011 | 〃 | 5.1 | 2.2 | 2.0 | 淡緑色 | B　b b | 両端面は平滑平胆。 |
| 6012 | 〃 | 4.9 | 2.7 | 1.8 | 緑青色 | B　b c | |
| 6013 | 〃 | 4.8 | 2.4 | 1.5 | 黒色 | B　b c | 光沢あり。両端面は平行でない。 |
| 6014 | 〃 | 4.8 | 2.3 | 1.4 | 淡褐色 | B　a a | |
| 6015 | 〃 | 4.8 | 2.0 | 2.0 | 淡赤褐色 | B又はC　a c | 端面の一面が剝離。 |
| 6016 | 〃 | 4.7 | 2.4 | 1.8 | 明緑色 | B　b b | 側面の一部に傷あり。 |
| 6017 | 〃 | 4.7 | 2.3 | 1.8 | 濃緑褐色 | B　b b | 側面に切截痕？あり。 |
| 6018 | 〃 | 4.7 | 2.2 | 1.8 | 黒青色 | A又はB　b b | 側面に切截痕？あり。 |
| 6019 | 〃 | 4.6 | 2.7 | 1.8 | 淡赤紫色 | B又はD　a a | |
| 6020 | 〃 | 4.6 | 2.5 | 1.9 | 乳白色 | B　a b | |
| 6021 | 〃 | 4.6 | 2.2 | 1.4 | 緑褐色 | A　b b | 側面に切截痕？あり。 |
| 6022 | 〃 | 4.6 | 1.8 | 1.7 | 暗黄緑色 | D　a b | |
| 6023 | 〃 | 4.5 | 2.5 | 1.7 | 黒色 | A　b c | 両端面に孔中心の放射状の傷あり。側面の上下端部付近にも主軸に垂直の傷があり、ほぼ全周。 |
| 6024 | 〃 | 4.4 | 2.6 | 1.6 | 青褐色 | C　b b | |
| 6025 | 〃 | 4.4 | 2.5 | 1.5 | 淡黄緑色 | B　a b | |
| 6026 | 〃 | 4.3 | 2.3 | 1.6 | 半透明黄褐色 | B？　b b | 光沢あり。側面の一部に稜あり。 |
| 6027 | 〃 | 4.2 | 2.7 | 1.8 | 乳白色 | B　b c | |
| 6028 | 〃 | 4.2 | 2.4 | 1.2 | 半透明淡黄緑色 | B　b b | |
| 6029 | 〃 | 4.2 | 2.3 | 1.2 | 黄褐色 | B　a c | 一端面の中央が穿孔により窪む。 |
| 6030 | 〃 | 4.2 | 2.3 | 1.5 | 濃緑褐色 | B？　a a | |
| 6031 | 〃 | 4.1 | 2.4 | 1.4 | 黄褐色 | B　a a | |
| 6032 | 〃 | 4.1 | 2.2 | 1.2 | 濃緑褐色 | A又はB　b c | 側面に切截痕？あり。 |
| 6033 | 〃 | 4.0 | 2.5 | 1.6 | 黒色 | B　b b | 光沢が顕著。 |
| 6034 | 〃 | 4.0 | 2.1 | 1.4 | 緑青色 | A？　b b | |
| 6035 | 〃 | 3.9 | 2.5 | 2.0 | 黒色 | C　b b | 光沢あり。孔壁と側面との厚みが薄い。 |
| 6036 | 〃 | 3.9 | 2.4 | 1.6 | 緑青色 | B　b c | |
| 6037 | 〃 | 3.8 | 3.0 | 1.7 | 緑青色 | C　b c | 端面処理は不明確。 |
| 6038 | 〃 | 3.8 | 2.8 | 1.6 | 緑青色 | A　b c | 一部欠損。 |
| 6039 | 〃 | 3.8 | 2.2 | 1.4 | 黄緑色 | C　b b | 側面を一部欠損。 |
| 6040 | 〃 | 3.8 | 1.9 | 1.6 | 緑青色 | A？　b b | |
| 6041 | 〃 | 3.7 | 2.9 | 1.4 | 乳白色 | B　c c | 一端面は凹凸著しい。 |
| 6042 | 〃 | 3.7 | 2.2 | 1.6 | 濃緑色 | B？　b c | |

| No. | 出土地点 | 直径 | 厚さ | 孔径 | 色調 | 形状・端面調整 | 諸特徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 6043 | ＳＸ01-65 | 3.6 | 3.1 | 1.8 | 緑青色 | Ｃ？ ｂｃ | 一端面に穿孔時の傷あり。 |
| 6044 | 〃 | 5.3 | 1.4 | 1.8 | 黒青色 | Ｂ ｂｂ | 一端面に擦痕？、研磨の可能性。 |
| 6045 | 〃 | 4.8 | 1.3 | 1.2 | 黒青色 | Ａ？ ａｂ | 偏平。 |
| 6046 | 〃 | 4.6 | 1.4 | 1.6 | 黒青色 | Ｄ？ ｂｂ | 側面に傷あり。 |
| 6047 | 〃 | 4.4 | 1.3 | 1.5 | 青灰色 | Ｃ ａａ | |
| 6048 | 〃 | 4.3 | 1.2 | 1.4 | 黒青色 | Ｃ？ ａａ | 偏平。側面に傷あり。 |
| 6049 | 〃 | 4.3 | 0.9 | 1.6 | 黒青色 | Ｃ？ ｂｂ | 偏平。 |
| 6050 | 〃 | 4.2 | 1.4 | 2.0 | 半透明明緑色 | Ｂ？ ｂｃ | |
| 6051 | 〃 | 4.0 | 1.4 | 1.3 | 半透明明緑色 | Ｃ？ ｂｃ | 側面の一部に不明瞭な稜あり。 |
| 6052 | 〃 | 4.0 | 1.0 | 1.6 | 明緑色 | Ｂ？ ｂｂ | 一端面に穿孔時のブレを確認。 |
| 6053 | 〃 | 3.8 | 1.5 | 1.2 | 緑褐色 | Ｂ ａｃ | 一端面に穿孔時のブレを確認。 |
| 6054 | 〃 | 3.7 | 1.2 | 1.5 | 黄褐色 | Ｂ ｂｂ | |
| 6055 | 〃 | 3.6 | 1.4 | 1.6 | 黒色 | Ｂ？ ｂｃ | 光沢あり。 |
| 6056 | 〃 | 3.5 | 1.2 | 1.2 | 黒青色 | Ｂ ａａ | |
| 6057 | 〃 | 3.5 | 1.0 | 1.5 | 黒青色 | Ｂ又はＤ ｂｂ | |
| 6058 | 〃 | 3.4 | 1.7 | 1.8 | 緑青色 | Ａ ｂｂ | 穿孔位置が偏る。 |
| 6059 | 〃 | 3.2 | 1.6 | 1.4 | 黒青色 | Ｃ ｂｂ | 端面処理は不明確。 |
| 6060 | 〃 | 3.1 | 1.7 | 1.5 | 黒色 | Ｂ ｂｂ | 光沢が顕著。 |
| 6061 | 〃 | 2.8 | 1.3 | 1.7 | 黒青色 | Ｂ又はＣ ｂｂ | 側面に部分的な稜あり。 |
| 6062 | 〃 | 4.2 | 2.3 | 1.7 | 淡緑色 | Ｂ ｂｃ | 一端面に４本の放射状の凹線。 |
| 6063 | ＳＸ01-63 | 4.8 | 3.4 | 1.9 | 緑灰色 | Ａ ｃｃ | |
| 6064 | 〃 | 4.5 | 4.4 | 2.0 | 緑灰色 | Ａ ｃｃ | |
| 6065 | 〃 | 4.5 | 2.5 | 1.8 | 緑灰色 | Ａ ｂｃ | |
| 6066 | 〃 | 4.4 | 2.8 | 1.6 | 緑灰色 | Ａ ｂｃ | |
| 6067 | 〃 | 4.2 | 2.9 | 1.6 | 緑灰色 | Ａ ｂｃ | |
| 6068 | 〃 | 4.0 | 2.8 | 1.6 | 緑灰色 | Ａ ｂｃ | |
| 6069 | ＳＸ01-66 | 5.9 | 3.0 | 2.2 | 緑青色 | Ｃ ｃｃ | 貫通した孔に接してもう１つ穿孔途中の孔あり。 |
| 6070 | 〃 | 4.6 | 5.1 | 2.0 | 緑青色 | Ａ ｃｃ | |
| 6071 | ＳＸ01-56 | 3.3 | 4.2 | 2.2 | 緑青色 | Ｂ ？？ | 孔壁と側面との厚みが薄い。 |
| 6072 | 〃 | 5.9 | 1.3 | 1.7 | 緑青色 | Ｃ？ ｂｂ | 偏平。 |
| 6073 | ＳＸ01-55 | 6.1 | 3.8 | 1.8 | 緑青色 | Ｂ ｂｂ | |
| 6074 | ＳＸ03 | 5.2 | 4.1 | 2.5 | 淡青色 | Ａ又はＢ ｂｃ | |
| 6075 | 〃 | 5.0 | 1.9 | 1.6 | 半透明淡緑色 | Ｃ ｂｂ | 側面に傷あり。 |
| 6076 | 〃 | 4.5 | 2.4 | 2.0 | 黄緑色 | Ｃ ｂｂ | 一端面に工具痕？あり。 |
| 6077 | 〃 | 3.7 | 1.6 | 2.5 | 半透明淡緑色 | Ｃ又はＤ ｂｂ | 一端面に穿孔時のブレを確認。 |
| 6078 | 〃 | 5.0 | 2.8 | 2.1 | 半透明淡緑色 | Ｃ？ ｂｂ | |
| 6079 | 〃 | 4.6 | 1.2 | 1.8 | 明緑色 | Ｂ ｃｃ | |
| 6080 | 〃 | 4.9 | 1.5 | 2.1 | 半透明淡緑色 | Ｃ ｂｂ | |
| 6081 | 〃 | 3.0 | 2.5 | 1.5 | 緑青色 | Ｂ ｂｂ | |
| 6082 | 〃 | 4.4 | 1.6 | 1.9 | 半透明淡緑色 | Ｃ ｂｂ | |
| 6083 | ＳＸ02 | 4.3 | 3.1 | 2.4 | 緑青色 | Ｂ ｃｃ | |
| 6084 | 竪穴住居 | 4.9 | 2.6 | 1.8 | 乳白色 | Ｂ ｂｃ | 側面を一部欠損。 |
| 6085 | 〃 | 3.7 | 2.5 | 1.4 | 黒青色 | Ｃ？ ｂｃ | 一端面は著しい傾斜面をなす。 |
| 6086 | Ｈ-7区 | 4.0 | 2.3 | 1.9 | 緑青色 | Ｃ ｂｃ | |
| 6087 | Ｉ-6区 | 3.8 | 1.4 | 1.6 | 半透明淡黄緑色 | Ｄ？ ｂｂ | |
| 6088 | Ｐ-4区 | 6.3 | 1.9 | 1.8 | 半透明淡緑色 | Ａ？ ａｂ | |

表14　　出作遺跡出土の臼玉未製品観察表

単位：mm

| No. | 出土地点 | 最大幅・最小幅 | 厚さ | 孔径 | 色　　調 | 諸　　特　　徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 6089 | S X01-75 | 20.9×11.1 | 4.5 | － | 淡緑青色 | 緑色片石の節理を利用。上下面は平担。 |
| 6090 | 〃 | 16.5×11.4 | 4.4 | － | 淡緑青色 | 緑色片石の節理を利用。上下面は平担。 |
| 6091 | S X01-64 | 17.6×12.2 | 4.4 | － | 半透明 濃青色 | 平面形は四角形。側面は切截による。 |
| 6092 | S X01-55 | 18.2・14.1 | 4.6 | － | 緑青色 | 平面形は不整五角形。側面は切截による。 |
| 6093 | 〃 | 16.2・10.0 | 3.6 | － | 緑青色 | 上下面は比較的平坦。側面は切截による。 |
| 6094 | S X01-66 | 16.0・11.8 | 3.7 | － | 淡青灰色 | 一側面の断面は平担で、擦痕あり。工具痕か研磨痕かは判然としない。 |
| 6095 | S X01-74 | 11.9・10.4 | 3.7 | － | 淡緑青色 | 上下面は凹凸著しい。側面は切截による。 |
| 6096 | S X01-？ | 14.5×13.8 | 3.1 | － | 緑青色 | 平面四角形を呈する。一側面は切削、他の三側面は切截。 |
| 6097 | 〃 | 13.5・11.5 | 2.2 | － | 緑青色 | 平面五角形を呈する。一側面は切削、平担。 |
| 6098 | 〃 | 11.0×10.2 | 3.3 | － | 緑青色 | 上下面、側面ともに凹凸著しい。 |
| 6099 | S X01-65 | 12.6×12.0 | 3.5 | 2.1 | 半透明 明緑色 | 上下面は凹凸がある。やや硬質の石材で、片状の節理はあまり感じられない。 |
| 6100 | 〃 | 15.2×11.8 | 2.2 | 2.3 | 緑青色 | 側面を切截、上下面の一方に工具痕が残る。穿孔位置が偏る。 |
| 6101 | 〃 | 16.8・10.9 | 3.7 | ？ | 緑青色 | 穿孔失敗品。 |
| 6102 | S X01-55 | 14.5・7.7 | 2.1 | 2.0 | 黄緑色 | 穿孔失敗品。やや硬質だが、片状節理の性質が強い。 |
| 6103 | S X01-？ | 12.8×11.8 | 2.9 | 1.8 | 緑青色 | 平面形は五角形。側面は切截・切削による。 |
| 6104 | 〃 | 14.0・10.8 | 3.1 | 1.8 | 緑青色 | 上下面は凹凸著しく、周縁も殆ど面をなさない。 |
| 6105 | S X01-55 | 13.7・10.1 | 2.7 | 1.8 | 緑青色 | 上下面は凹凸著しく、周縁も殆ど面をなさない。 |
| 6106 | S X01-？ | 12.9×12.3 | 3.0 | 1.9 | 緑青色 | 平面形は四角形に近い。側面は切截。 |
| 6107 | 〃 | 13.6・10.7 | 2.9 | 2.1 | 緑青色 | 上下面の一方は凹凸著しい。側面は切截。 |
| 6108 | 〃 | 13.1・9.2 | 3.2 | 2.1 | 半透明 黄緑色 | 上下面は凹凸著しい。 |
| 6109 | 〃 | 11.3・8.8 | 3.0 | 2.3 | 淡黄緑色 | 上下面は比較的平担。側面は切截による。 |
| 6110 | 〃 | 10.5・9.0 | 2.7 | 1.6 | 半透明 暗緑色 | 平面六角形の穿孔失敗品。穿孔位置が偏っている。 |
| 6111 | 〃 | 11.9・9.6 | 2.7 | 2.0 | 半透明 明緑色 | 周縁は面をなさない部分もある。上下面は曲面となり、ササクレ状を呈する。 |
| 6112 | 〃 | 10.8・9.6 | 3.1 | 2.3 | 黄緑色 | 平面三角形の角をカット。上下面も平担でない。 |
| 6113 | 〃 | 11.7・9.0 | 2.7 | 1.8 | 明緑色 | 上下面の一方は凹凸著しい。 |
| 6114 | 〃 | 13.4・8.5 | 2.6 | 2.2 | 緑青色 | 上下面は凹凸がある。側面は切截による。 |
| 6115 | 〃 | 11.8×9.6 | 3.1 | 2.0 | 緑青色 | 上下面ともにやや凹凸がある。側面は切截。 |
| 6116 | 〃 | 10.7×9.1 | 2.7 | 2.0 | 緑青色 | 上下面の一方は平担、他方は凹凸あり。 |
| 6117 | 〃 | 10.7・7.5 | 3.2 | 1.4 | 緑青色 | 穿孔のためか、上下面の一方で一部剝離。 |
| 6118 | S X01-66 | 12.1×10.5 | 3.9 | 2.0 | 緑青色 | 平面五角形に切截。 |
| 6119 | S X01-46 | 12.5×5.9 | 1.7 | ？ | 緑青色 | 穿孔失敗品の可能性があるが、判然としない。上下面の一方に工具による擦痕がある。 |

| No. | 出土地点 | 最大幅・最小幅 | 厚さ | 孔径 | 色　　調 | 諸　　特　　徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 6120 | ＳＸ01-？ | 最小径10.1 | 1.1 | 1.5 | 緑青色 | 穿孔時又はそれ以後に破損。極めて偏平。 |
| 6121 | ＳＸ01-66 | 11.4×8.2 | 2.3 | 1.8 | 緑青色 | 周縁は切截による。面をなさない部分あり。 |
| 6122 | ＳＸ01-55 | 最大幅9.3 | 1.1 | 1.6 | 緑青色 | 穿孔部分を半截した欠損品。有孔円板の可能性もある。偏平。 |
| 6123 | ＳＸ01-74 | 10.8・8.6 | 1.8 | 2.4 | 黒青色 | 側面は切截面を残すが、一部に縦位の研磨痕あり。 |
| 6124 | 〃 | 10.8・10.1 | 2.0 | 2.4 | 黒青色 | 上下面ともにやや凹凸あり。平面形は円形を呈する。側面は縦位の研磨痕がほぼ全周するが、切截痕も残存。 |
| 6125 | ＳＸ01-？ | 9.7・8.3 | 3.6 | 2.2 | 淡緑色 | 平面形は不整惰円形に近い。上下面は凹凸がある。周縁は上下面双方の側から工具による切削が行われ、擦痕を有する平担面がいくつも形成されている。このため、周縁の中央部が突出し、稜をつくりつつある。縦位の研磨は認められない。 |
| 6126 | 〃 | 7.9・5.4 | 1.3 | 1.6 | 緑青色 | 厚みが薄い。側面は切截による。 |
| 6127 | 〃 | 7.1・5.5 | 1.8 | 1.7 | 緑青色 | 上下面はいずれも平担でない。側面は切截。 |
| 6128 | 〃 | 7.9・6.6 | 1.5 | 1.6 | 緑青色 | 上下面の一方のみ平担。側面は切削による。 |
| 6129 | 〃 | 6.2・5.7 | 1.5 | 1.6 | 淡黄褐色 | 側面には縦位の研磨が施される。 |
| 6130 | 〃 | 6.5・6.1 | 2.6 | 1.6 | 黄褐色 | 上下面ともほぼ平担。側面には縦位の研磨が施されているが、切削痕がかなり残存。 |

表15　　出作遺跡出土の砥石類一覧

| 番号 | 出土地点 | 機能 | | 石材 | 法量(cm, kg) | | | | 残存 | 使用面 | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 形態 | 材質 | | 長さ | 幅 | 厚さ | 重さ | | a | b | c | d | e | f | 数 |
| | 使用状況 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 7001 | S X01-66 | 可動 | 中 | 石英粗面岩(白) | 11.9 | 4.0 | 3.5 | 0.26 | 完 | 平 | 平 | 平 | 平 | 平 | 平 | 6 |
| | a面：太い線状の削痕1条. | | | | | | | | | | | | | | | |
| 7002 | S X01-75 | 可動 | 粗 | 和泉砂岩 | 6.5 | 2.4 | 1.9 | 0.05 | 完 | 平 | 平 | | | | | 2 |
| | a・b面：太めの線状の擦痕多数. | | | | | | | | | | | | | | | |
| 7003 | S X01-65 | 可動 | 中 | 石英粗面岩(白) | 8.0 | 7.0 | 2.8 | 0.22 | 欠 | 平 | 凸 | 凸 | 凸 | 平 | | 5 |
| | a・e面：被敲打痕による凹部(径1.5～2.0cm)，b～d面：a・e面に接する角を中心に使用. | | | | | | | | | | | | | | | |
| 7004 | G-4 | 定置 | 密 | 石英粗面岩(赤白) | 7.5 | 5.9 | 5.8 | 0.28 | 欠 | 平 | | | | | | 1 |
| | a面：細い線状の擦痕多数. b面：被敲打痕による凹部(2.0～2.8cm). | | | | | | | | | | | | | | | |
| 7005 | Q-8 | 定置 | 密 | 石英粗面岩(赤白) | 16.1 | 5.0 | 7.5 | 0.71 | 欠 | 平 | | | | | | 1 |
| | a面：細い線状の擦痕多数. | | | | | | | | | | | | | | | |
| 7006 | S X01-ウエ | 定置 | 密 | 石英粗面岩(白) | 16.7 | 8.0 | 6.7 | 1.47 | 欠 | 平 | 平 | 平 | 平 | 平 | 平 | 6 |
| | b面：端部付近に被敲打痕. | | | | | | | | | | | | | | | |
| 7007 | L-6 | 定置 | 密 | 結晶片岩(緑) | 19.2 | 5.0 | 11.0 | 1.44 | 欠 | 平 | 平 | | | | | 2 |
| | a・b面：細い線状の擦痕. | | | | | | | | | | | | | | | |
| 7008 | S X01-55 | 定置 | 粗 | 和泉砂岩 | 17.0 | 8.5 | 7.7 | 1.45 | 完 | 平 | 平 | 凸 | | | | 3 |
| | a～c面：太めの線状の擦痕多数，各稜と両端に被敲打痕. | | | | | | | | | | | | | | | |
| 7009 | M-2 | 定置 | 粗 | 和泉砂岩 | 20.1 | 15.3 | 7.0 | 3.15 | 欠 | 凹 | 凹 | 凸 | | | | 3 |
| | a面：擦痕による凹部(径5.0～2.5cm)，c面：全面に被敲打痕. | | | | | | | | | | | | | | | |
| 7010 | S X01？ | 定置 | 中 | 石英粗面岩(白) | 30.9 | 15.3 | 13.8 | 7.85 | 完 | 凸 | | | | | | 1 |
| | a面：太細多様な不整方向に線状の擦痕. | | | | | | | | | | | | | | | |
| 7011 | K-8 | 定置 | 密 | 結晶片岩(緑) | 31.8 | 19.6 | 2.2 | 2.54 | 完 | 凹 | | | | | | 1 |
| | a面：擦痕による凹部(径13～10cm)のほか、端部平担面に太めの線状擦痕. | | | | | | | | | | | | | | | |
| 7012 | S X01-ウエ | 可動 | 硬 | 安山岩 | 11.5 | 9.3 | 7.2 | 1.10 | 完 | 凸 | 凸 | 凸 | 凸 | 凸 | | 5 |
| | a・c面：被敲打痕(径2.5～3.0cm)，b面：敲打痕，全面：不整方向に線状の擦痕. | | | | | | | | | | | | | | | |

# V．付　論

## 1　出作遺跡出土の鉄鋌をめぐって

徳島大学　東　　潮

### 1　出作遺跡鉄鋌と鍛冶

出作遺跡では、小型鉄鋌が出土している（表16）[①]。完形品は２点であるが、破片は30片以上出土している。①の上端部（図上で上下端の意味）は長さ2.0cmほど鍛打・圧延、整形されている。長さ13.0cm・幅2.0cmほどの長方形鉄板を成形したのであろう。側面の鉄鎚による曲線の成形痕を明瞭にとどめる（図85－５）。図はＸ線写真で補正したのであるが、錆化がかなり進んでいることがわかる。下端部の扁平化は顕著でないが、端面が直線的であり、タガネで切断したような痕跡である。全体に２枚の鍛接面がみられる。紐のような痕跡は不明である。②の上端部は約1.5cmほど鍛打・扁平化され、小形鉄鋌特有の形状を示す。下端は直線的に切断されている。錆の状態からみて、破損面や成形時のものというより、鉄鋌を裁断した可能性がつよい。また一部に折り返し痕跡が認められる（図85－７）。③は下端の一部が破損しているが、完形にちかい。（図85－６）。①のように15cm前後に復元しえるかもしれない。両側面は曲線状の鍛打成形痕が顕著である。他に鉄鋌の破片は30点以上存在する。そして鍛造工程で切断された鉄片が多数出土している。それらの鉄片がいずれもタガネで切断されたり、捻切りされている（図85－８）。表裏に交互鍛打の切断もありえたであろう。図86の４～８・15も鉄鋌の破片であろう。タガネによる切断痕跡がみとめられるので、鉄鋌を切断した鉄片といえる（図86）。

表16　出作遺跡出土の鉄鋌

（mm）

| 番号 | 長　さ | 幅 | | | 厚　さ | 重　さ | 整理番号 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 上　端 | 中　央 | 下　端 | | | |
| ① | 153.60 | 26.88 | 18.88 | 27.37 | 1.62～1.95 | 3.90 | 4029 |
| ② | 103.89 | 22.08 | 15.93 | 21.82 | 1.30～1.59 | 10.50 | 4030 |
| ③ | 100.81 | 21.50 | 14.49 | 23.14 | 1.11～1.84 | 20.90 | 4031 |

鉄鋌①は未使用品といえる。そこで試みに、鉄鋌と鉄鎌の図を合成すると、鉄鋌から容易に鎌をつくりうることがわかる。小形・薄みの鉄鎌ならば、１枚の鉄鋌で事足りるが、鉄鎌4009には３枚の鍛接面があり、剝離面も明瞭である。その長さは鉄鋌と変わらない（図85－

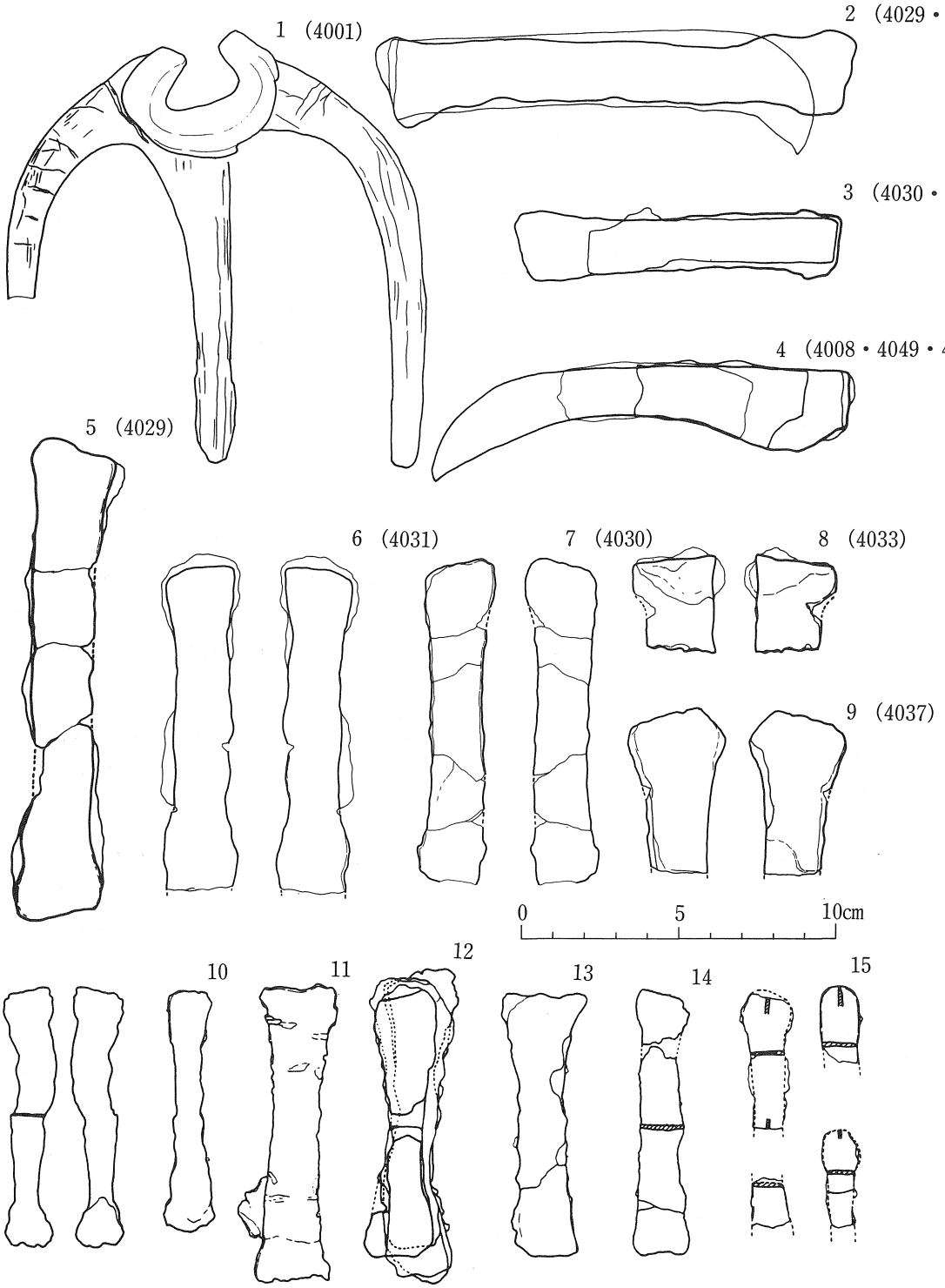



図85. 出作遺跡出土の鉄鋌と農具（X 線写真から）

1～9．出作遺跡　10．大和 6 号墳　11．新聞 2 号墳　12．鞍塚古墳　13．野中古墳　14．宮山古墳　15．大木遺跡

4）。4049や4078のような、刃部を作り出していない鎌の未製品もみられる。手鎌も同様、小形鉄鋌から鍛造されている（図85－4）。

またこの遺跡では、鉄斧のミニチュアとともに、その未製品も出土している。鈍角にひらく二辺をもつ破片であり、台形に成形したものと想定される（図86－19・20・22・23）。鉄斧は台形の鉄板の両端部を鍛打して、袋部をつくった簡単なものである。

鉄鋌②のように、鉄鋌自体に切断面が明瞭にみられること、鉄鋌の特徴といえる扁平化した端部、鍛打の際の鉄鎚の痕跡をとどめるものなど、鉄鋌を切断した鉄片、鉄器未製品も存在する。したがって鉄鋌を素材として鍛冶がおこなわれたことは確実である。鉄鋌とその加工破片の出土する遺跡としてきわめて重要である。あらためて出作遺跡が、鍛冶関連の遺跡として再評価できよう。

ところで、建物址・住居址内で出土した鉄鋌に、次の諸例がある。

| | | |
|---|---|---|
| 1 | 千葉市・南二重堀遺跡（24号住居址） | 5世紀 |
| 2 | 東京都板橋区・氷川神社北方遺跡（住居址） | 5世紀 |
| 3 | 岡山県阿哲郡・新市谷遺跡（土坑） | 5世紀前半 |
| 4 | 岡山県総社市・窪木薬師遺跡（住居址） | 5世紀前半 |

窪木薬師遺跡では、鍛冶工房址（竪穴式）の作り付け竈内から鉄鋌1枚が出土した。鉄滓・砥石を伴出していることから、鍛冶址であることは確かである。新市谷遺跡では、方形鍬先と伴出している。製品としての鉄鋌・鍬先と解釈していたが、その鉄鋌は鍬先など農工具の素材といえる。窪木薬師遺跡で出土した初期須恵器も、付近に窯の存在が想定されるが、加耶系土器であることが注目される。5世紀前葉の段階に西日本に集住する加耶系渡来集団によって操業された窯であろう。同時期のことであるから、窪木薬師の鉄鋌や鍛冶生産技術も加耶から伝播した可能性がたかい。

## 2　出作遺跡鉄鋌の供給地問題

出作遺跡の鉄鋌は、形態的に細型鉄鋌B（長さ8.0～18.0cm、最小幅1.0～2.5cm）に該当する。大和6号墳・鞍塚古墳・野中古墳・宮山古墳・釜山福泉洞1号墓・同4号墓・礼安里52号墓・退来里3号墓などの諸例と同一範疇に属する（東1991）。そのなかで、鉄鋌の長さ・厚さ、鉄鎚による成形痕跡などからみて、大和6号墳のものにもっとも類似する（図83－10）。愛媛県今治東方の沖に位置する魚島大木遺跡では、鉄鋌や鉄片など24点が出土している。鉄鋌の形状はいずれも大和6号墳のものに類似する。

瀬戸内海の対岸である姫路宮山古墳の小形鉄鋌も、出作遺跡のものに酷似する。それらの供給源が同一であることを示唆する。

大和6号墳では大量の鉄鋌が副葬されていたのであるが、それらの供給地は、朝鮮半島の南部地域、洛東江下流域と推定される。釜山や金海地域の鉄鋌と形状が類似するからである。

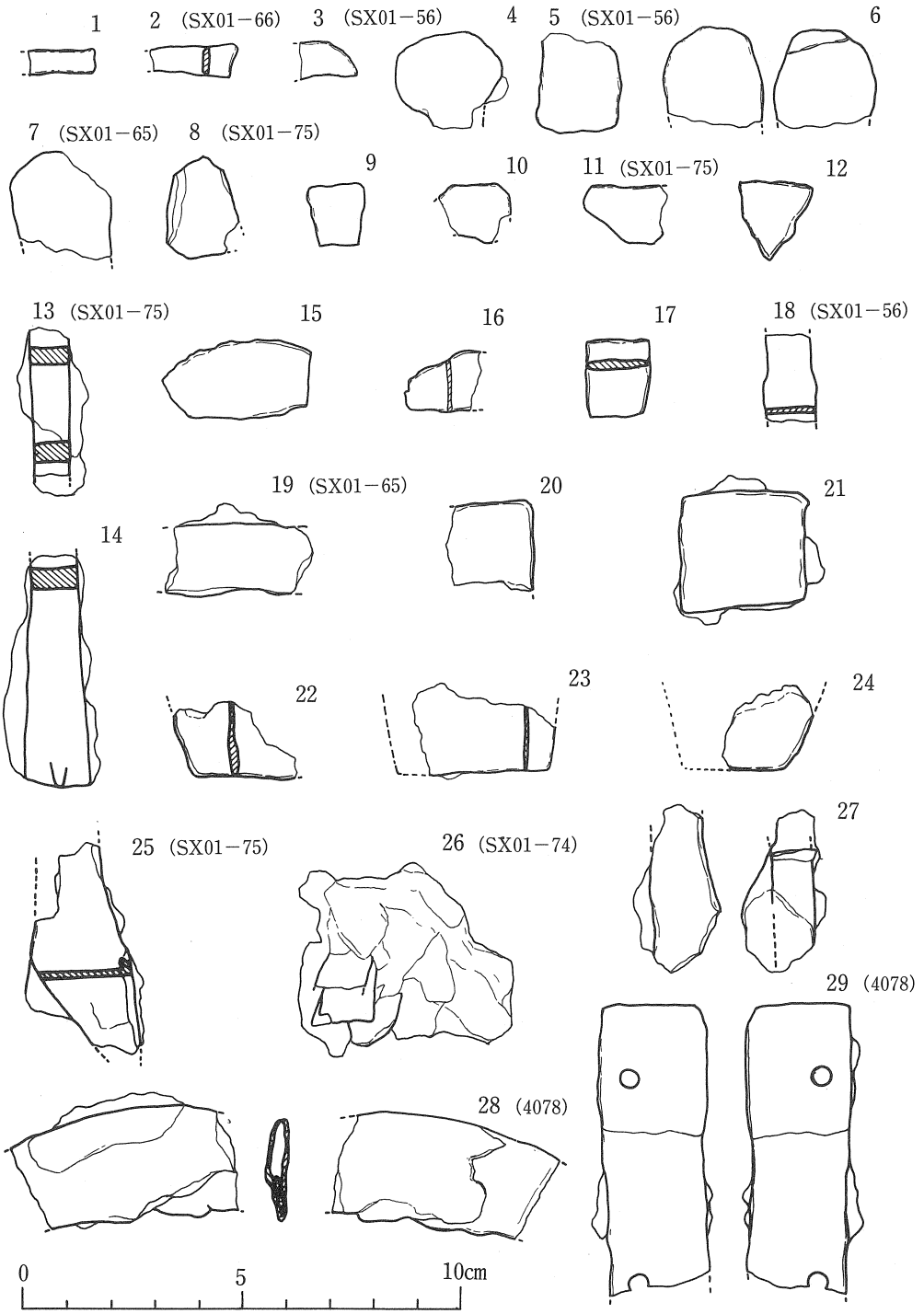



図86. 出作遺跡出土の鉄鋌・鉄片

その流入の時期は5世紀前半から中葉にかけてと推定される。もちろん日本列島内の鉄鋌の供給は同一地域からではなく、全羅南道の地域からも北部九州の地域に流入したことも想定される。そして鉄鋌の国産は6世紀、さかのぼっても5世紀末葉であろうと考えられる。

5世紀における生産技術の伝播は、基本的に加耶・百済からであった。そうした国際環境からみて、倭への鉄の供給は両地域からと推定される。5世紀中葉ごろになると、鉄資源の確保（鉄鋌の輸入・交換）にさいして、大和政権が中心勢力となり、そこからさらに鉄素材が各地に供給されたと考えられる。大和・河内から瀬戸内海沿岸の地域首長へ鉄が供給されたのであろう。

4世紀後半から5世紀段階には、碧玉製品や銅鏡、甲冑の分布などからみて、流通機構も整備されていたにちがいない。5世紀中葉には鍛冶生産は飛躍的な発展をとげ、5世紀後半には鉄生産も開始すると想定されるが、5世紀中葉（5世紀第2から第3四半期）段階の鉄鋌は基本的に朝鮮半島で製作されたもので、加耶・百済の地域から流入したのであろう。

### 3　出作遺跡出土の農具

SX01において、U字形鋤・鍬先・股鍬・鋳造トウ鍬の耕起具と鎌・手鎌の収穫具が出土している。5世紀代における鉄製農具の一括資料である。

U字形鋤・鍬先は、「U字形刃先」と呼ばれる[2]。大形・小形品が各1丁出土している。破片であるが、いずれも製品が破損したものといえる。鉄片のなかに、図86－13のような、厚手の棒状品があるが、U字状刃先も製作しえる条件にあると考えられる。

スキ先（4003）は、SX03出土であるが、全体にU字形の刃をなし、刳り込みのある後面をもつものである。高さ6㎝で、刃幅は約11㎝ほどに復元される。SX03から出土したU字形鋤・鍬先とは形態的に異なり、別の用途のものであることを推測させる。出土状況に問題がなければ、古墳時代では初出といえる。牛耕用か、踏鋤であるのか不明であるが、小形である点は留意されよう。

三本鍬（股鍬）は、X線写真によって鍛接・鍛打の痕跡が認められた。それをもとに製作工程を推定する[3]（図85－1）。

1．厚さ5㎜ほどの横長の鉄板の下半部に2条の縦方向の割りを入れる。

2．ヒツをつくるために、鉄板の両側から横方向に割りを入れる。

3．3本の爪刃を鍛き出す。

4．ヒツを刃歯に直交するように折り曲げ、ヒツを円形に仕上げる。

鍛打・伸展に際しては刃と平行に亀裂が何条も入るが、折り曲げる時には刃と直交した亀裂がみられる。とくに両肩部に認められる。錆化と同時にその亀裂が明瞭となるのであろう。刃先の部分の厚さはヒツの約2倍であり、鍛接された可能性がある。爪刃の部分のは直列状に鍛接した痕跡はとどめない。

鋳造トウ鍬（鋳造斧形品）は、4世紀末の岡山・金蔵山古墳を上限として6世紀中葉まで、西日本の各地で出土する。静岡県から九州の鹿児島県にまで及ぶ。愛媛県内では越智郡玉川町藪谷大塚古墳で1点が出土している。分布状況や高度な鋳造技術などから、朝鮮半島から流入したものといえよう。その用途については、鉄素材説や手斧説があるが、手鍬・トウ鍬・タビ（踏鍬）として、農具・土木具として使用されたと推定される④。

鎌については、刃部を研ぎ出していない未製品をふくみ、この遺跡で鍛冶していたことは確かであろう。

## 4　おわりに

出作遺跡では、滑石製有孔円板や臼玉などが出土し、祭祀遺跡と考えられていた。ところが鉄片の多さ、鉄鋌加工鉄片の存在などから、遺跡・遺構の再検討がなされてきた。鍛冶工房址としての可能性である。もちろん鉄素材としての鉄鋌とともに、鍛冶で生じた鉄片などもあわせて奉納し鍛冶にかかわる祭祀が実修された可能性もあろう。また滑石製品を中心とした玉造りもあわせておこなわれていたかもしれない。

鉄鋌自体を素材として用いた鍛冶工房址の存在の確認された意義は大きい。またスキ先・股鍬・鋳造トウ鍬・タビ・鎌という鉄製農具が一括して出土したことは、5世紀における農具の実態をとらえるうえできわめて重要である。またスキ先（4003）の存在については、古代日本における農具史のうえで今後論議を呼ぶであろう。

**註**

①この度、出作遺跡鉄器の検討の機会を与えていただいた愛媛県埋蔵文化財調査センター谷若倫郎氏、X線撮影をおこなっていただいた国立歴史民俗博物館永嶋正春氏に感謝したい。出作遺跡出土の鉄鋌については、発掘を担当された相田則美氏の好意にもとづき、1983年3月に実測する機会があり、それらの資料を掲載させていただいたことがある。今回あらためて検討することができたが、復元実測図に誤りのあることを気づいたので修正したい。再実測にあたっては、X線写真を参考にした。またかって4枚の鉄鋌をもとに、長さの平均（3例）14.7cm、最小幅平均（4例）1.7cm、最大幅平均（4例）2.9cm・厚さ約0.3cmという数字を算出したことがあるが、これもあらためておきたい（東1991）。つまり出作鉄鋌①と②のような2種のような鉄鋌が基準となろう。いずれも小形鉄鋌である。

東　潮「鉄鋌の基礎的研究」『考古学論攷』12, 1987.

東　潮「鉄素材」『古墳時代の研究』5 雄山閣, 1991.

②都出比呂志『日本農耕社会の成立過程』岩波書店, 1989.

③朝岡康二　『鉄製農具と鍛冶の研究』法政大学出版局, 1986.

④村上恭通　「朝鮮半島の副葬鉄斧について」『信濃』508, 1992.

東　潮　「朝鮮渡来の文物」『吉備の考古学的研究』下　山陽新聞社, 1992.

# 2　出作遺跡の非陶邑系須恵器・陶質土器

京都文化博物館　定　森　秀　夫

出作遺跡出土須恵器の中に陶邑系と異なるものが若干存在することは指摘されていた[①]。小文では非陶邑系須恵器[②]ないしは陶質土器と思われるものについて若干検討してみる。なお私の実測図面を付すが、個々の説明は森毅氏の観察表を参照されたい。

高杯は無透孔と有透孔のものとがある。無透孔高杯の最大の特徴は、杯底部調整として格子タタキの後にヨコナデを施す（図87－1・3・4）ことである。カキメ調整もある（図87－2）が、その前にタタキを行っている可能性も考えられる。カキメ調整の類例はTK85に見られる[③]。しかし、全体的な形態とタタキ調整は陶邑系初期須恵器には見られない。ただ、脚部が下方でやや屈曲しその部分に突帯が巡り脚端部が端面をもって終わる形態は、円孔はあるものの、TK73に見られる[④]ことが注意される。また、図87－1のたちあがりに類似のものが堺市小阪遺跡に見られる[⑤]。一方、韓国では類似例を求めるのが難しい[⑥]。

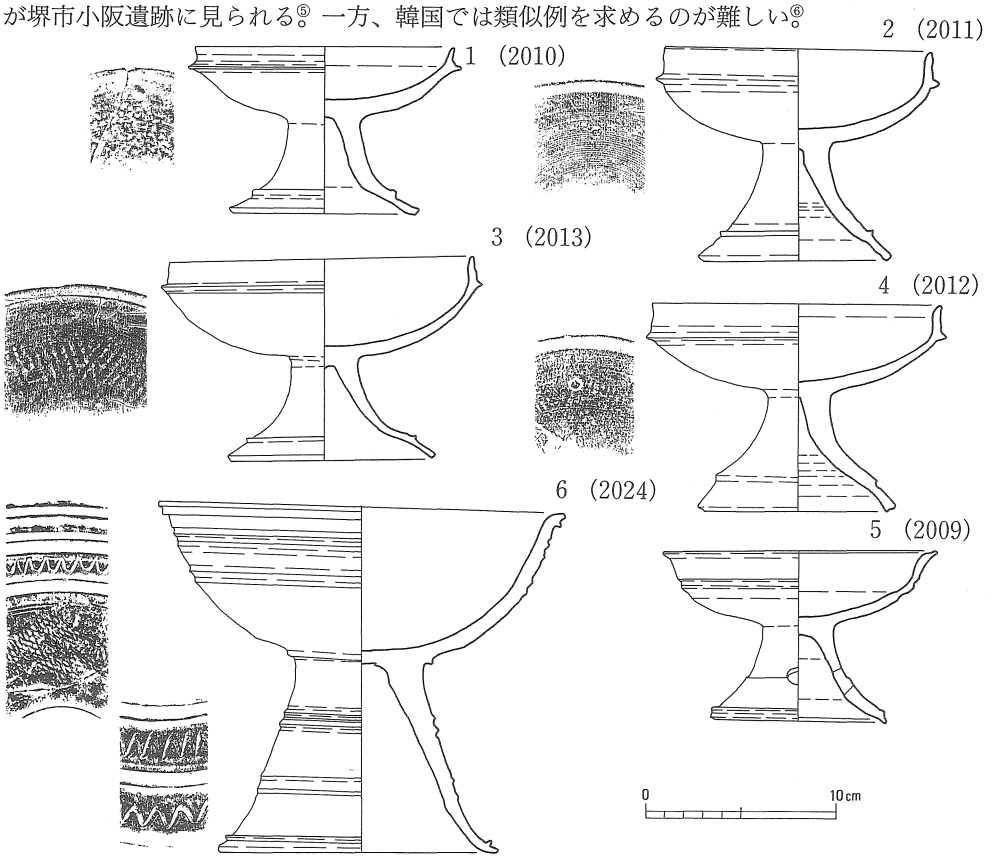



図87　出作遺跡出土の非陶邑系須恵器・陶質土器(1)

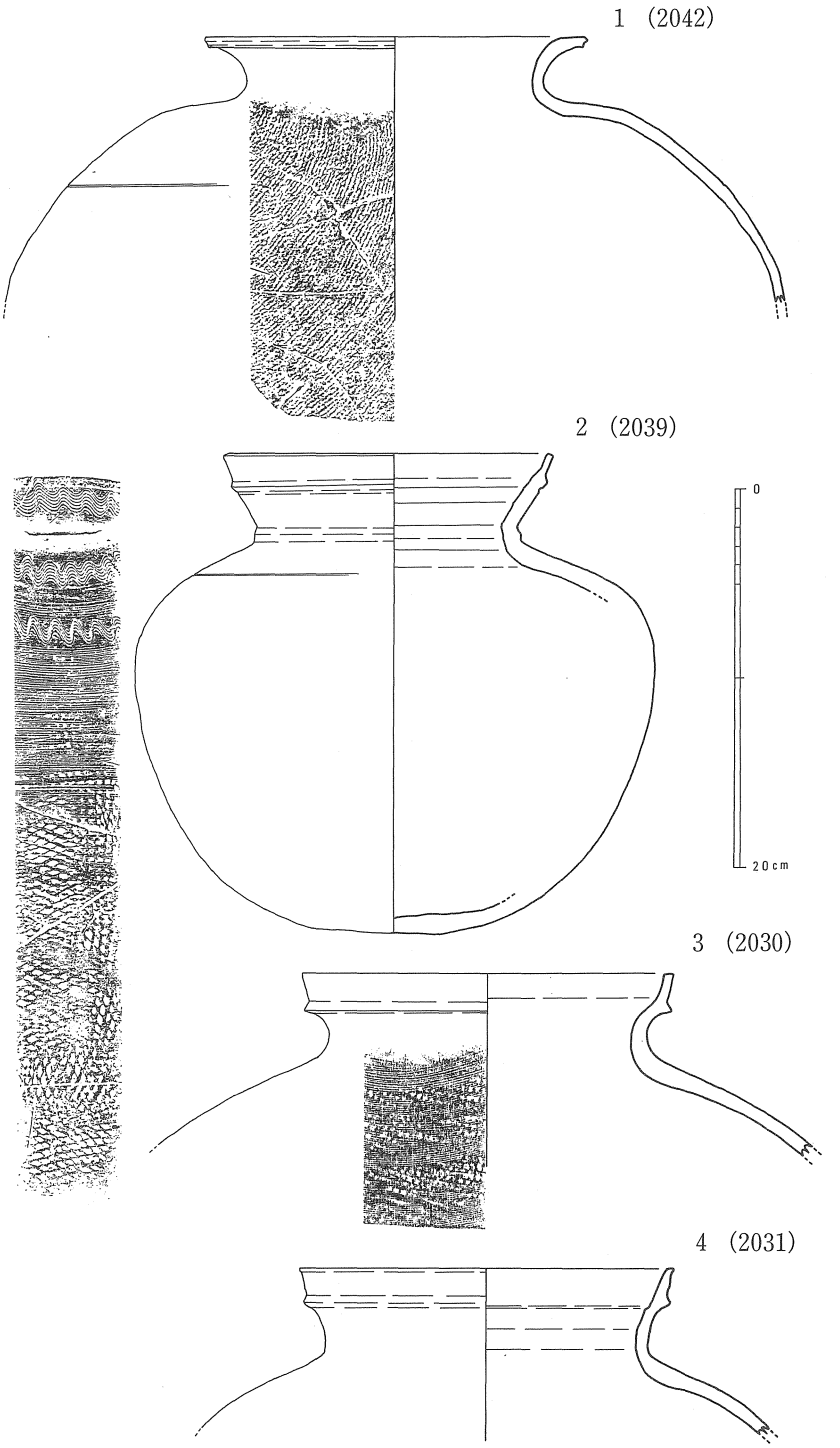



図88　出作遺跡出土の非陶邑系須恵器・陶質土器(2)

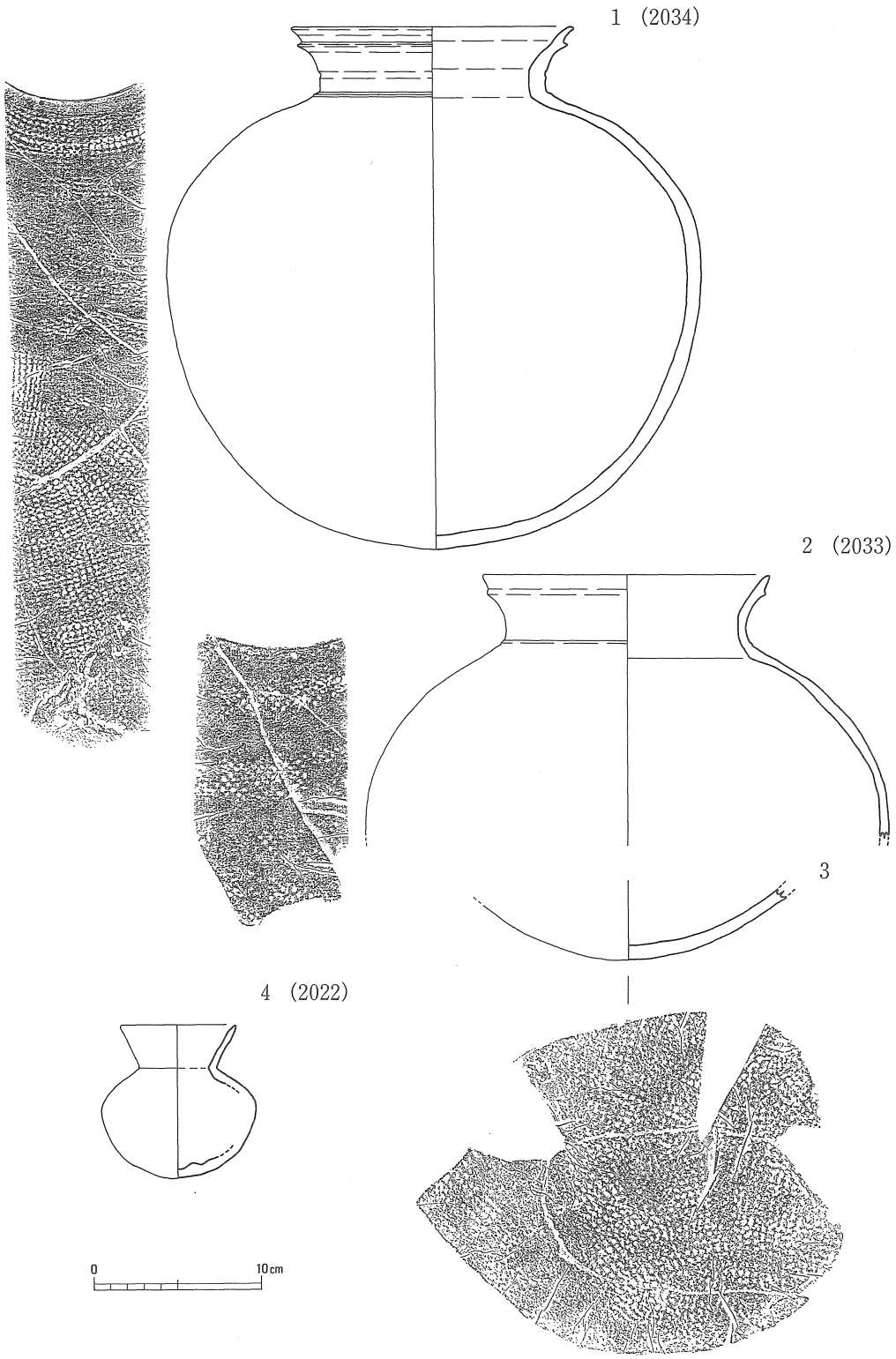



図89　出作遺跡出土の非陶邑系須恵器・陶質土器(3)

したがって非陶邑系と言うことができよう。最近、伊予市市場南組窯跡出土資料が公表され、類似の杯部片・脚部片と思われるものが出土している[7]ので、松山平野で生産されたものであろう。

有透孔高杯（図87－５）はやや軟質焼成の無蓋高杯で、小円孔を２個対称にあけている。脚部の類似例は陶邑TK85に見られ[8]、また杯部の屈曲はTK73に類例[9]を求めうる。口縁端部の類似例はON265に求められ[10]、対馬恵比須山２号石棺・トウトゴ山遺跡表採・コフノ遺跡などの陶質土器[11]にも求められる。陶邑系としても良いかもしれないが、やはり非陶邑系と考えておく。

小形器台（図87－６）は杯底部に斜格子タタキが残り、脚部に透孔がない。杯底部をタタキ調整するのは大形器台によくみられるが、小形器台にもみられるもので、韓国の例では忠南大博物館所蔵品[12]に見られる。全体の形態は伝晋州付近発見品[13]に近いと思われるが、ただ晋州発見品は法量不明であり脚部に透孔があることが異なっている。これも非陶邑系と考えた方がよい。なお、東野お茶屋台９号墳では復元器高約28cmの器台が出土していて、これの杯底部に格子タタキが見られる[14]。

甕（図88－１）は頸部が大きく外反し、体部に非常に細かな縄目タタキが施されている。四国では香川県観音寺市村黒遺跡の甕にも細かな縄目タタキのものがある[15]。蛍光Ｘ線胎土分析では朝鮮半島産の可能性があると判定がでていて、その細かなタタキから見て陶質土器の可能性が高いと思われる。

壺には特異な形態のものが３種見られる。その一は、頸部中間に突帯を巡らしその下に波状文を施し、肩部はカキメ調整の上に２条の波状文を施して、体部下半に斜格子タタキと格子タタキとを残し、口縁端部が平坦面をなす壺（図88－２）である。これに酷似のものは松山市東野お茶屋台９号墳出土品[16]と松山市東山古墳群[17]に見られ、タタキは前者が斜格子のみ、後者が格子のみであるが、他の製作手法・法量はほぼ同一なので同じ窯で同じ工人が製作したかのようである。他地域に類似のものを求めてみると、滋賀県安曇川町南市東遺跡に若干異なるが、近いと言えば近い形態のものが見られる[18]。韓国での類似例として松本敏三氏は釜山堂甘洞９号墳出土のものを挙げ[19]、亀田修一氏は陜川鳳溪里63号墳、苧浦里Ｂ１号土壙墓のものを挙げている[20]が、ただ感覚的には釜山周辺にそのルーツがありそうな壺である。松山平野の狭い範囲で酷似のものが分布することから見て、非陶邑系と考えられる。

その二は、口縁端部が平坦面で、頸部中間に突帯を巡らしそこで若干屈曲する壺（図88－３・４）がある。二重口縁のものは陶邑ではTK305などに若干見られる[21]が、それらとはかなり異なっている。非陶邑系と考えられ、類例は伊予市市場南組窯跡出土のものに見られる[22]ので、当地で生産されたものと思われる。

その三は、器高32cm前後、口径17cm前後の大形の短頸壺である。図89―１は全形を復元実測できたもので、図89－２・３（同一個体と思われる）は、摩滅が甚だしいが、基本的には

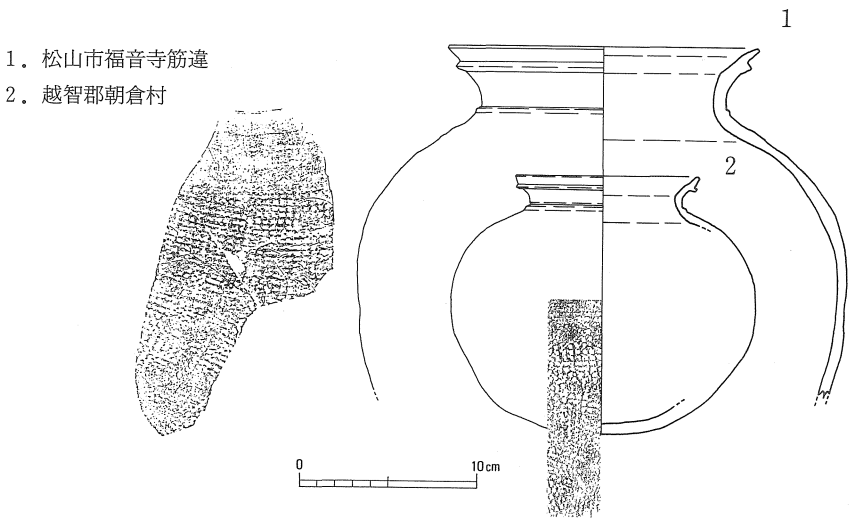



図90　愛媛県出土の非陶邑系須恵器・陶質土器

前者とほぼ同形態・同質のものである。この壺の形態的な特徴は口縁部より約１cmほど下に突帯を巡らすことと、頸部と肩部との間に突帯を巡らしていることである。松山市福音寺筋違遺跡からも同様な形態のもの（図90－１）が出土している[23]。出作遺跡と福音寺遺跡の短頸壺は同一工人が製作した可能性もある。形態的には陶邑には見られないものである。

韓国では陜川玉田Ｍ３号墳に器高が40cmと大きく、凸帯が口縁部直下に巡るという違いはあるものの、形態的に近いものが認められる[24]。一方、この種の壺で舶載品の可能性が高いものとしては、愛媛県内では朝倉村出土品[25]（図90－２）、宇和町伊勢山大塚出土品[26]があるが、器高がこれの１／２以下の小形のものである。また、管見によれば、福岡県糸島郡二丈町鎮懐石八幡宮裏古墳[27]と福岡市羽根戸古墳群Ｎ群第７号墳[28]とに器高42cm前後、香川県香川郡直島町荒神島遺跡[29]に器高48cmの大きなものがあり、口縁部形態が類似するが、関連性を云々するのには無理があろう。この種の壺も松山平野の狭い範囲で出土しているので、非陶邑系と考えられ、伊予市市場南組窯跡で実際に同様のものが出土している[30]ので、当地で生産されたものと考えられる。

私自身が実見したうちで、当初陶質土器ではなかろうかと思われたものは小壺（図89－４）であった。焼成や胎土が他の須恵器と若干異なっていたので、陶質土器ではないかと考えた。この種の小形丸底ないしは平底の壺は韓国でも出土しており、その類例や系統などに関しては武末純一氏が考察している[31]。しかし、堺市小阪遺跡で類似のものが見られ[32]、形態的には土師器の小壺の写しとも考えることができるので、非陶邑系の可能性が高い。とはいうものの、陶質土器の可能性も今しばらく残しておきたいと思っている。

以上で見てきたように、朝鮮半島産の陶質土器（搬入品）と断定できるものはほとんどなく、また陶邑系須恵器とも異なることから、松本敏三氏[33]や森毅氏[34]が指摘しているように当地でこれらの非陶邑系須恵器を製作していた可能性が極めて高かった訳であるが、実際に

上述してきた伊予市市場南組窯跡から出作遺跡出土の非陶邑系須恵器と類似のものが出土しているので、松山平野での生産がほぼ確定的になったと言える。その場合、次に問題となるのは韓国の陶質土器のどの系統を引くのか、すなわちどの地域の陶質土器に結び付いていくのかであろう。しかし、今のところ伽耶系陶質土器の系統と考えておける[35]が、具体的に伽耶のどの地域なのかを特定することは難しいと言わざるをえない。なお、特異な壺の三番目の大形の丸底短頸壺に関しては年代的に6世紀に下る可能性もある。

ところで、愛媛県内での陶質土器ないしは陶質土器と考えられるものは、『遺跡』誌上[36]や市町村史など[37]にいくつか紹介されていて、亀田修一氏[38]によって集成もされている。その系統を見てみると、伽耶系統のものが多い。一方、伊予国・宇和国における渡来系氏族などに関して若干の考察を見ることができ、これらによると出作遺跡より時期的に下ることではあるが、例えば「正倉院文書」に見られる秦勝庭の本貫が現在の松山市立花地区に比定されていてそこでは“ハタ”氏関係の地名が多くみられること、などが指摘されている[39]。

ともあれ、とりあえず松山平野および周辺に範囲を限って、非陶邑系須恵器ないしは陶質土器と思われるものの類例集成、そして出作遺跡出土のものとそれらとの対比検討を行ってみる必要があろう。さらには香川県宮山窯跡・三谷三郎池西岸窯跡[40]と同様に、当地域における5世紀代の初期須恵器窯である市場南組窯跡の存在が判明したわけなので、今後、市場南組窯跡の詳しい調査の必要性を覚える。

**註**

① 松本敏三「四国地方の須恵器窯」『考古学ジャーナル』No.259　1986.
相田則美「古墳中期の祭祀遺跡－愛媛県出作遺跡－」『季刊考古学』第2号　雄山閣　1983.
私自身は発掘担当者の相田則美氏から種々の教示を得た。

② 1991年、陶邑大庭寺遺跡で初期須恵器窯が検出され、従来の陶邑系統と異なる形態の須恵器が出土した。この陶邑周辺に未知の初期須恵器窯が他に存在する可能性も十分考えられる。大庭寺を従来の陶邑の範疇に入れて考えるのかどうかの問題はこれからの課題として、小文では、大庭寺を除いた従来のTK73以降の一連のものを陶邑系と考え、その範疇に収まらないものを非陶邑系とする。そして非陶邑系はその地域に在地の窯を想定しておく。

③ 中村浩・田代克巳『陶邑Ⅲ』大阪府教育委員会1978. 図版23－10.

④ ③前掲書、図版28－23.

⑤ 村上年生・三宮昌弘ほか『小阪遺跡（その3）－調査の概要－』大阪文化財センター　1987.40頁、図35－60.

⑥ 慶星大学校の申敬澈氏の御教示によると、韓国でも高杯の杯底部調整にタタキを用いるものは稀であるとのことであった。ただ、管見によれば、忠清南道論山郡陽村地方出土高杯（国立扶余博物館蔵）の杯底部には写真でみると、格子タタキが認められる。　百済文化開発研究院『百済土器図録』1984. 116頁, 89.
類例は少ないが、百済地域にタタキ調整が見られることは、出作遺跡の無蓋高杯を考える場合、留意しておいても良かろう。

⑦ 長井数秋「松山平野の須恵器編年」『愛媛考古学』第12集　1992．16・17頁．第３図－１，２，４．
第３図－１，２は蓋として表現されているが、口径が他のものより大きいので、形態的には出作遺跡のように無蓋高杯のたちあがり部になると考えられる。

⑧ ③前掲書、図版23－18．

⑨ ③前掲書、図版28－22・24．

⑩ ③前掲書、６頁，第４図－15．

⑪ 坂田邦洋・永留史彦『恵比須山遺跡発掘調査報告』長崎県教育委員会　1974．
坂田邦洋『対馬の遺跡』長崎県教育委員会　1975．
藤田和裕ほか『コフノ遺跡』上対馬町教育委員会　1984．
これらをまとめたものとして『弥生・古墳時代の大陸系土器の諸問題』第Ｉ分冊九州篇　埋蔵文化財研究会1987．があり、122頁，116頁－４・５、60頁－６・７を参照。

⑫ 尹武炳『忠南大学校博物館図録』1983．88頁－203．杯底部に平行タタキが認められる。

⑬ 『朝鮮古蹟圖譜三』朝鮮総督府　1916．292頁－876．

⑭ 阪本安光『東野遺跡埋蔵文化財調査報告書』愛媛県教育委員会　1979．26頁，第11図－28．

⑮ 岩橋孝「観音寺市村黒遺跡採集の土器」『瀬戸内歴史民俗資料館だより』第15号　1983．３頁，図２－８．

⑯ ⑭前掲書、23頁，第10図－11．

⑰ 松山市埋蔵文化財センター梅木謙一氏のご教示による。

⑱ 岩崎直也「地方窯の上限と系譜を求めて（II）－近江を中心に－」『滋賀考古学論叢』第３集　1986．34頁、第１図－13．頸部形態が異なるのと、ナデ調整が行われるのが異なる。岩崎氏は陶質土器と考えてもよいとしている。

⑲ ①前掲論文で、「器表の装飾原理、体部外面の叩き目成形痕まで一致する。」としている。肩部の張りがこれにはないのが異なる。釜山大学校博物館『釜山堂甘洞古墳群』　1983．43頁，図面22－④．なお、日本での類例としては「摂津の利倉西遺跡、大和の布留遺跡」を挙げられているが、具体的にどれを指されているのか確認できなかった。

⑳ 亀田修一「中国・四国地域」『陶質土器の国際交流』柏書房　1989．149頁，註65。形態的には近いが、これらは文様がないことと法量が異なる。
沈奉謹『陜川鳳溪里古墳群』東亜大学校博物館　1986．149頁，図面97－②．
朴東百・秋淵植『陜川苧浦里Ｂ古墳群』昌原大学博物館　1988．33頁、挿図７－2．

㉑ ③前掲書、図版第41－１・６参照．

㉒ ⑦前掲論文．16・17頁，第３図－５，６．

㉓ 松山市埋蔵文化財センターの梅木謙一、宮崎泰好氏（現砥部町教育委員会）の御厚意で実測することができた。

㉔ 趙榮濟・朴升圭『陜川玉田古墳群Ⅱ』慶尚大学校博物館　1990．204頁、図面109－②など３点出土していて、これより小形で頸部と肩部の間の突帯のないものが数点出土している。

㉕ 正岡睦夫「越智郡朝倉村中央公民館保管の陶質土器」『遺跡』第27号　1985．154頁、第１図．
定森秀夫「日本出土の“高霊タイプ”系陶質土器（１）」『朱雀』第２集　1989．28頁、第２図６．

㉖ 十亀幸雄「南予の陶質土器」『遺跡』第33号　1991．89頁，第２図３．

㉗ 橋口達也・中間研志ほか『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第７集　福岡県教育委員会　1982．68頁、第47図。

㉘ 横山邦継・田中寿夫『羽根戸遺跡』『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第180集　1980．Fig．56の00720．

㉙ 松本敏三「香川県」『弥生・古墳時代の大陸系土器の諸問題』第Ⅲ分冊　埋蔵文化財研究会　1987．　53頁－５

㉚ ⑦前掲論文，16・17頁，第３図－９．

㉛ 武末純一「小形丸底坩の軌跡－考古学から見た日朝交渉の－断面－」『古文化談叢』第20集（下）　1989．

㉜ ⑤前掲書、61頁、図53－160．

㉝ ①、松本論文。

㉞ 本報告書、森毅氏報告。

㉟ 高杯・器台の杯底部調整にタタキを用いる手法が、百済地域に一部認められることから、百済地域も一方の視野に残しておくことも必要と思われる。

㊱ 豊田正伸「今治平野出土の陶質土器」『遺跡』第25号　1984．

正岡睦夫「越智郡朝倉村中央公民館保管の陶質土器」『遺跡』第27号　1985．

常盤　茂「松山市久米採取の初期須恵器」、正岡睦夫「愛媛県今治市唐子台出土の陶質土器と古式須恵器」、

十亀幸雄「南予の陶質土器」『遺跡』第33号　1991．

㊲ 『松山市史料集』第１巻考古編　松山市　1980．門田正志『宇和の古墳』宇和町教育委員会　1973．

正岡睦夫・十亀幸雄『日本の古代遺跡　愛媛』保育社　1985．

㊳ ⑳前掲論文。

㊴ 堀井順次「伊予の秦氏族」『日本のなかの朝鮮文化』第42号　1979．45～48頁の“二、正史に残る伊予の秦氏”を参照。他に、堀井順次「宇和国は銅の国」『日本のなかの朝鮮文化』第49号　1981．

同「伊予の豪族秦氏の命運－朱砂を回転の軸として－」『伊予史談』第263号　1986．

松原弘宣『古代の地方豪族』吉川弘文館　1988．などを参照。

㊵ 松本敏三「香川県出土の古式須恵器－宮山窯址の須恵器－」『瀬戸内海歴史民俗資料館年報』第７号　1982．

同「宮山窯址の高坏」『瀬戸内海歴史民俗資料館だより』第15号　1983．

香川県教育委員会「三谷三郎池西岸窯跡」『香川県埋蔵文化財調査年報（昭和58年度）』1984．

出作遺跡出土のものは、これら香川県の窯のものとは明らかに異なる。

# 3　出作遺跡出土須恵器の産地推定

奈良教育大学　三　辻　利　一

## 1　はじめに

5～6世紀代の全国各地の古墳から大阪陶邑産の須恵器が検出されている。これがこれまでに得られている土器の胎土分析の研究の一つの結論である。5世紀代には地方窯は数えるほどしかないが、6世紀代に入ると少しずつ、その数は増える。しかし、6世紀代の地方窯の製品も、その周辺の古墳にしか検出されておらず、遠隔地の古墳からは全く検出されていない。一方的に大阪陶邑産の製品が各地の古墳へ供給されていたのである。大阪陶邑窯群は倭王の配下で須恵器生産を行ったと推定される。これまでに得られたデータから、5～6世紀代の大阪陶邑産の須恵器は倭王のもつ政治的なポテンシャルのもとで伝播したと考えられる。

このようなこれまでの研究背景から、出作遺跡にも大阪陶邑産の須恵器が検出されることは十分期待できる。

本報告では、出作遺跡出土須恵器の蛍光X線分析のデータから、地元、谷田窯産か、それとも、大阪陶邑からの搬入品かという2群間判別分析法によってその産地を推定した結果について報告する。

## 2　分析方法

すべての試料片は表面を研磨してのち、タングステンカーバイド製乳鉢の中で100メッシュ以下に粉砕された。粉末試料は塩化ビニール製リングを枠として、約15トンの圧力を加えてプレスし内径20㎜、厚さ3～5㎜の錠剤試料を作成した。

蛍光X線分析には理学電機製の波長分散型のスペクトロメーター、3270型機が使用された。試料の各元素の蛍光X線強度は岩石標準試料JG－1の対応する元素の蛍光X線強度を使って標準化された。したがって、分析値はJG－1による標準化値で表示された。

## 3　分析結果

9点の試料の分析値は表17に示されている。また、これらの試料のRb－Sr分布図は図91に示されている。Rb－Sr分布図は各地の窯跡出土須恵器の分析データによって、有効に地域差を表示することが知られている。図91には大阪陶邑産の須恵器が分布する領域とともに、地元、谷田窯群の須恵器の分布領域を示してある。また、これまでのところ、砥部町には6世紀代の窯は見つけられていないが、その発見の可能性も考慮に入れて、8世紀代の窯跡出土須恵器を使って砥部領域を示してある。同じ地域内の窯跡出土須恵器の化学特性が年代に関係なく類似していることは、これまでの全国各地の窯跡出土須恵器の分析データの示すところである。このことは地元産の粘土を終始一貫して須恵器素材として使用していたことを

物語る。図91に示した分布領域はこれらの母集団の試料のほとんどを包含するようにして描いてあるが、定性的な意味しかもたないことを断っておく。定性的な分布領域であるとはいえ、他の地域の須恵器の化学特性と比較したり、判別分析による産地推定の結果を再確認したりする上に有用である。これらの分布領域より、愛媛県内の窯跡出土須恵器の長石類因子による化学特性は大阪陶邑産の須恵器と類似していることを示している。とくに、谷田領域は大阪陶邑領域にすっぽりと入っており、この図では谷田窯群産か大阪陶邑産かの判断はつきにくい。

そこで、より定量的に母集団への帰属を決めるために、谷田群と大阪陶邑群の間で2群間判別分析が行われた。その結果を図92に示す。両軸にはK、Ca、Rb、Srの4因子を使って計算した両群の重心からのマハラノビスの汎距離の二乗値をとってある。もし、両群の化学特性が明確に異なり、完全に相互識別できる場合には、大阪陶邑群の試料は$D^2$（大阪陶邑群）≦10、$D^2$（谷田群）＞10の領域に分布し、谷田群の試料は$D^2$（谷田群）≦10、$D^2$（大阪陶邑群）＞10の領域に分布する。両群の化学特性が類似してくると、両群の試料はこの分布図上で次第に接近し、遂に、$D^2$（大阪陶邑群）≦10、$D^2$（谷田群）≦10の領域に混在し、相互識別は不可能になる。同一窯群内の2つの窯を任意にとり出してこの分布図を作成すると、このようなことが生じる。それで、$D^2$（1群）≦10、$D^2$（2群）≦10の領域のことを重複領域と名付ける。図92をみると、両群の試料の半数近くはこの領域に分布し、化学特性は比較的似ていることがわかる。とくに、谷田群の試料はほとんどが重複領域に分布する。しかし、大阪陶邑群の試料の多くは大阪陶邑領域に分布しており、両群はある程度の相互識別が可能であることを示している。

そこで、この分布図上に同じ手法で計算した出作遺跡の須恵器をプロットしてみた。その結果が図93である。No.1、2、3、5、9は大阪陶邑領域に分布しており、No.4は谷田領域に分布している。重複領域に分布した2点のうち、No.6は大阪陶邑領域に近く、また、No.7は谷田領域に近く分布している。No.8のみは両領域からずれて分布した。

そこで、これら9点の試料について、大阪陶邑群、谷田群、砥部群からのマハラノビスの汎距離の二乗値を計算した。その結果は分析値とともに表17にまとめてある。そして、判別分析の結果、母集団への帰属条件として$D^2$(X)≦10を採用し、産地推定を行った。(X)は母集団名である。大阪陶邑産と推定されたのはNo.1、2、3、5、9の5点であり、No.4、6、7は大阪陶邑産の可能性をもつと同時に、地元産の可能性があることを示した。No.8のみは図93からも予想されるように、どの母集団にも帰属せず、産地不明となった。

こうして、出作遺跡にも大阪陶邑産の可能性をもつ須恵器が検出された訳である。

表17　出作遺跡出土須恵器の分析データ

| 資　料 | K | Ca | Fe | Rb | Sr | Na | 陶邑群 | 谷田群 | 砥部群 | 推　定　産　地 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| No.1 | 0.398 | 0.135 | 2.87 | 0.449 | 0.358 | 0.228 | 5.6 | 15.0 | 8.1 | 大阪陶邑 |
| No.2 | 0.437 | 0.055 | 2.55 | 0.565 | 0.199 | 0.147 | 2.5 | 12.0 | 25.0 | 〃 |
| No.3 | 0.605 | 0.194 | 2.24 | 0.765 | 0.469 | 0.201 | 6.5 | 21.0 | 6.2 | 〃　～砥部 |
| No.4 | 0.423 | 0.232 | 2.02 | 0.570 | 0.367 | 0.277 | 11.0 | 7.4 | 6.0 | 砥部,谷田,大阪陶邑? |
| No.5 | 0.456 | 0.118 | 3.13 | 0.478 | 0.309 | 0.165 | 1.0 | 11.0 | 6.0 | 大阪陶邑 |
| No.6 | 0.350 | 0.120 | 2.39 | 0.401 | 0.280 | 0.155 | 5.1 | 8.8 | 9.2 | 〃 |
| No.7 | 0.417 | 0.188 | 2.37 | 0.529 | 0.325 | 0.210 | 5.8 | 4.1 | 3.7 | 砥部, 谷田, 大阪陶邑 |
| No.8 | 0.527 | 0.356 | 1.95 | 0.636 | 0.460 | 0.372 | 27.0 | 41.0 | 36.0 | 不明 |
| No.9 | 0.399 | 0.127 | 3.25 | 0.412 | 0.286 | 0.157 | 2.4 | 10.0 | 6.6 | 大阪陶邑 |

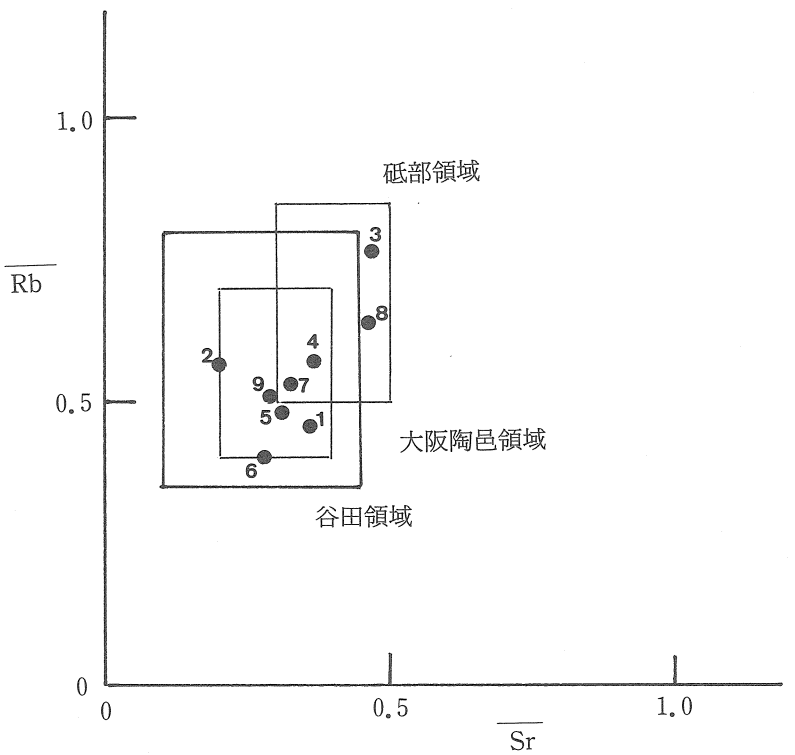



図91　Rb-Sr 分布図

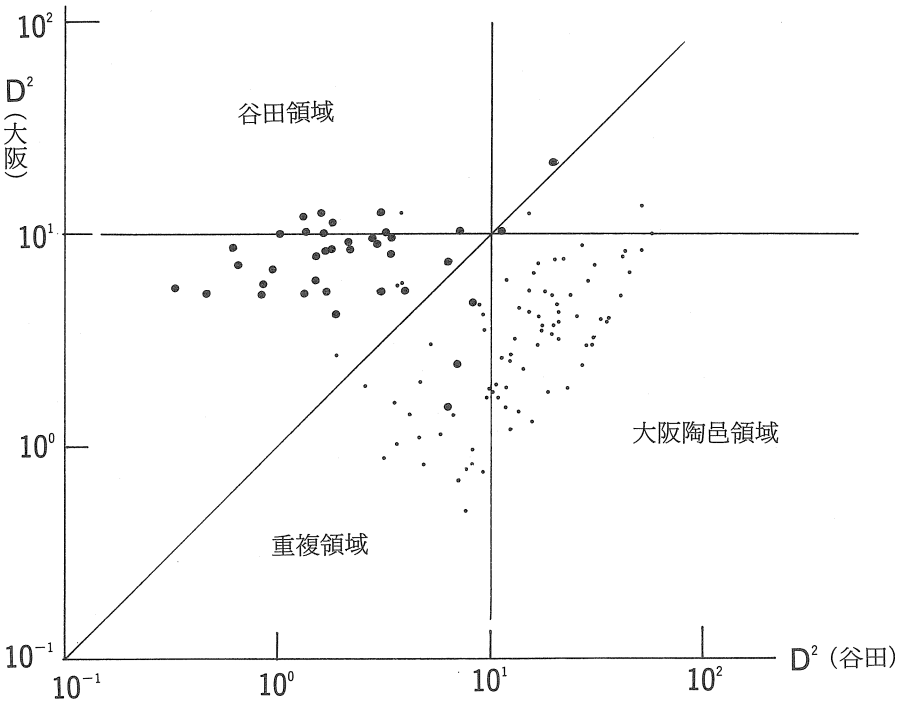



図92　大阪陶邑群の相互識別（K、Ca、Rb、Sr 因子使用）

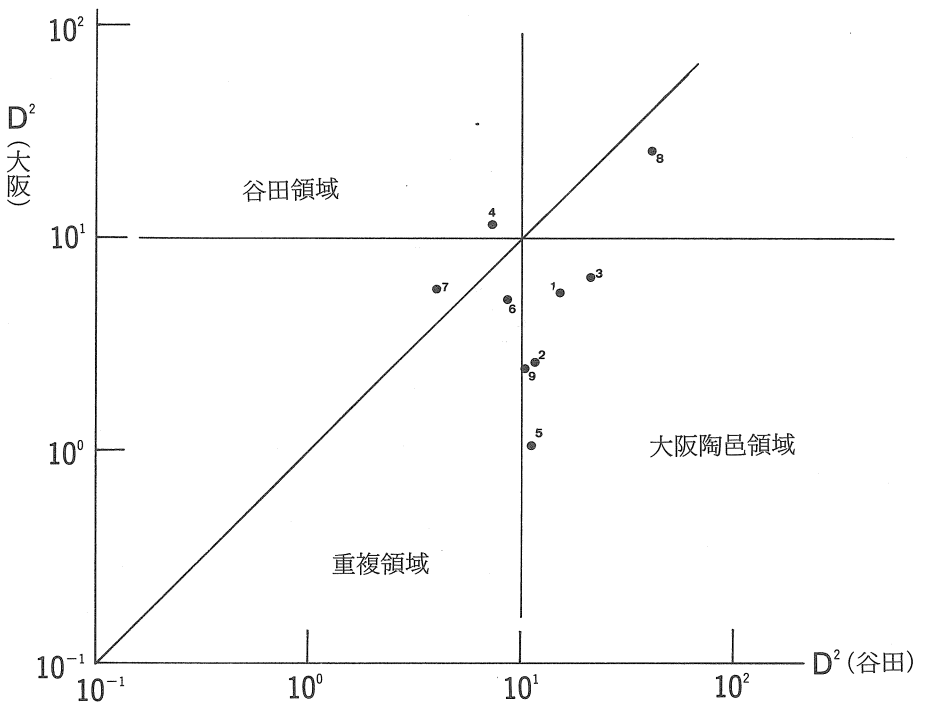



図93　出作遺跡出土須恵器の産地推定（K、Ca、Rb、Sr 因子使用）

# Ⅵ．結　　語

## 1．成果と課題

出作遺跡の調査によって、本書で述べたような数多くの成果を得ることができた。しかしながら発掘調査は短期間の応急的側面が強く、調査範囲内においても未発掘部分を多く残したものとなり、遺跡・遺物の追求に数多くの問題を残していることも事実である。さらに出作遺跡の規模・構造を考えると、今回の調査は、古墳時代中期の大規模な祭祀遺跡の一面を調査したにすぎないことは、調査以来強調してきたところでもある。

また、調査以来10数年を経過するなかで、想定的範囲内に農業用水路の新設や県道松山伊予線の拡幅工事などが実施されたが、事前調査が実施されていないなど、問題点を指摘することができる。

出作遺跡は松前町にとってだけではなく、古墳時代中期の祭祀遺跡として極めて重要な位置にあり、したがって、出作遺跡の本格的調査の開始は、これから調査に鍬を入れなければならないことである。開発に伴う事前調査は当然のこととして、祭祀遺跡研究のより本質を追求するためには、学術調査を継続して実施すべきことが望ましいことを強調しておきたい。そのこともあって、今回の発掘調査を第１次調査としたゆえんである。

出作遺跡の重要性が明らかになるにしたがって、松前町文化財保護委員会や松前町史談会から遺跡の保護と活用等についていくつかの意見が出され、調査者もいくつかの提案をした。遺跡の保護については、調査範囲内のほ場整備施工法を変更して、地下げを行わず、土地の区画のみをすることにしたのもその１例である。これらについては、地権者・工事関係者・整備委員会・町教育委員会・調査担当者の協議で合意に達することができた。そうした関係者の相互理解があってこそ、今、未調査部分の再調査への道が開かれているのである。

出作遺跡の出土遺物は、質量ともに祭祀遺跡の調査・研究のうえで卓抜した位置を占めるものである。それらの主要な遺物については今回報告したが、未整理に属するものがコンテナで30箱（62cm×37cm×26cm）あり、その調査・研究も今後の課題である。

発掘終了になり次第、松前町教育委員会の希望で、北伊予小学校・北伊予中学校・神崎公民館に展示公開し、また各種の展示会にも貸与してきた。しかしながらそれらは一部分にとどまり、出作遺跡の全体を、なによりもまず、町民公有の埋蔵文化財として公開できるまでには至っていない。その主要な原因が、整理が完了していなかったという点にあったとしても、問題として指摘される。松前町内には出作遺跡だけではなく、最近、松前城関連の埋蔵文化財を始め、歴史・民俗資料が増加しつつある。それらを収集・展示し、町民をはじめ研究者の利用・活用に供する歴史民俗博物館を早期に建設すべきことが切に望まれる。

出作遺跡の調査から整理まで、長期間を用した整理事務所は、北伊予小学校の空き教室を借用後、東公民館の一室、その後は松前町の中央公民館へと点々と移動した。その間、膨大な量の遺物整理は、その基礎的作業を町教育委員会の配慮で実施することができたが、それだけで十分でなかったことも事実である。本報告書関係者の個人的負担は実に大きな比重を占めている。それらの教訓から学ぶべきは、松前町教育委員会に埋蔵文化財の専門職員を配置することが将来への対応をも含めて最も求められることのように思われてならない。

## 2。おわりに

出作遺跡の報告を終えるにあたり、その内容については、担当者として反省すべき点が多々存在する。しかしながら長期間に渡って本書の刊行についてもさまざまな人々から実に多くのご援助を頂き心から感謝申し上げる次第である。

なかでも、祭祀遺跡としての全国的な検討の成果を本書に盛り込む企画が実現できなかったことは調査担当者として非常に心残りである。本書の刊行後は、然るべき機会をとらえて出作遺跡の解明にむけた努力を継続したいと考えている。

最後になったが、出作遺跡の整理・報告にあたり、終始懇切なご指導・ご援助を惜しまなかった重川家俊先生が昭和63年に亡くなられた。本書の完成をご霊前に捧げたい。

〔相田則美〕

（平成4年3月3日稿了）